
バカとAクラスと試験召喚

LEN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとAクラスと試験召喚

【Nコード】

N3115R

【作者名】

LEN

【あらすじ】

妖怪クソババアに頼まれ転入してきたもう一人の主人公 長谷川芳樹は明久の元親友。2学期の初め、芳樹はとある理由で明久をAクラスに入れる。そんな明久と芳樹とAクラスのメンバーを中心としたお話です。カップリングは明久×愛子&オリ×優子!? 最初の方、なんてマイナーなwww。ちなみにババアの頼んだ理由は後ほど……。(この作品では清涼祭と強化合宿を2学期にやるうと思っております。あらかじめご了承ください。) 現在、オリジナルストーリー

プロローグ

2学期の初め……

「失礼します、学園長」

高橋先生が学園長室へ入る

「なんだい？」

「彼に頼んだクラスを変える生徒のレポートを持ってきました。」

「どれどれ……なんだいこれは！？どうしてあのバカをAクラスに入れようとなんてするんだい！？」

「彼は「あいつは、本当に単純なバカだ。周りの雰囲気とかで普通に頭がよくなったり悪くなったりしやがる。だからAに入れれば少なくともBの上位成績ぐらいは取れるだろう」といておりました。」

「はあ、まあいいさ。坂本とも離してやれば少しは悪さも減るだろうしね……了解とでもいっておいて頂戴。」

「わかりました。それでは失礼します。」

「ふう、さて2学期はどうなるかね。」

妖怪（学園長）はニヤツと何かを楽しみにしてるようにそうつた。

第一話〜2学期の始まり〜

明久Side

「はあ、今日から二学期かあ。補修やら何やらあつたけどみんなで海に行ったりできて楽しかったな〜夏休み。」

そう、今日から文月学園は夏休みが終わり2学期を迎えるのであつた。

校舎に向かう途中の坂道にある、春に新入生を迎えるための桜は青々と生い茂っている。

明久が校舎に行こうとすると春のときと変わらずあの人が立っていた。

「吉井、遅刻だぞ。」

ドスの効いたその声で明久を呼び止める。

「あつ西・・・鉄人先生おはようございます。」

「・・・まったくお前は春から成長しとらんのか。遅刻の謝罪もせず・・・」

ため息混じりに鉄人はつぶやいた

「すみません」

「まあいい、ほれ」

鉄人は明久に封筒を渡す

「あれ？振り分けは1年に一回ですよね？」

「ああ、なぜか学園長がお前が来たら渡せと。まあ早く教室に行け！」

「はい」

そうして明久はFクラスへ向かう。その封筒が何かを知らずに・

第一話〜2学期の始まり〜（後書き）

初投稿です！学生なので更新はバラバラになるとおもいますが、よろしく願いします。

第二話〜朝っぱらから……（前書き）

バカテストはオリキャラが出てきたら書くことと思っています。

第二話〜朝っぱらから・・・

明久が教室に入ると、そこには見知った顔があつた。

「おはようじゃ明久」

よくつるむバカ仲間の一人、木下秀吉であつた。

「おはよう秀吉」

「ん？何じゃその封筒は？」

「さつき鉄人から渡されたんだ。中身はまだ見てないけど。そこに」

「よう明久、朝っぱらから秀吉をナンパか？」

「何だと！！」

Fクラス代表の坂本雄二とFFF団が現れた。さらに

「アキ・・・一体いつになったら懲りてくれるの・・・」

「明久君、いいかげんにしましょうね」

般若と鬼神となっていた島田美波と姫路瑞希が現れた。

「みんな誤解だつて！秀吉からもなんか言つてよ！」

「そうじゃ、誤解じゃ」

明久と秀吉はみんなを説得しようとするが

「問答無用！」

そうして、朝から惨劇が起きた。

・・・数分後

「うっうっ、みんなひどいや」

教室で倒れ付している明久に秀吉達が寄ってきていた。

「大丈夫かの？明久」

「ありがとう秀吉。僕の味方は秀吉だけだよ。」

「そういえば、さっきの封筒は何じゃったのじゃ？」

「封筒？何だそれは」

「・・・気になる」

雄二、ムツツリー二、美波、瑞希が寄ってくる

「朝鉄人から渡されたんだ、なんだろう？」

「停学処分だったりしてな」

「確かにありえるわね。」

「明久君、今度は何をやらかしたんですか？」

「停学になるようなことなんてしてないってば！」

そう言いながら明久はビリビリと破き中の紙を出して見てみる。

そこには

『吉井明久・・・Aクラスに昇格する』と、書いてあった。

「「「「「「ええええええ！？」」「」「」「」」」

その場にいた全員が驚く

「授業始めるぞ、吉井まだいたのか、さっさと行け」

「どっどっとして僕がAクラスに！？」

「そっだ！神童の俺とかならともかく！」

「よくわからないがな、学園長直々の命令だ。早く行けっ！」

こうして明久はAクラスに行くこととなった。

第二話〜朝っぱらから・・・（後書き）

オリキャラが中々出せません・・・
次か次の次ぐらいに出そうと思います。

第三話くAクラスへーく

鉄人に追い出された？明久は仕方ないのでAクラスに向かうことにした。

「それにしても、どうして僕何だろう？雄二や姫路さんならともかく・・・あつ着いた。」

中に入ろうとすると、中から

「……………吉井？」

雄二の婚約者、霧島翔子が出てきた。

「何だ、霧島さんが」

「……………どうしたの？」

「なんか突然、Aクラスに配属されちゃって」
翔子は何か思い出したような顔をする

「わかった。着いてきて」
と言つて中へ入る。それに着いてくように吉井も入る。中で

「これから、Fクラスの吉井君がAクラスとして入ってきます。仲良くしてあげてください」

『なんであいつが？』

『なんでだろうな』

「何だつて！？吉井君が！？
色々質問があげられる中、

「えっと、元Fクラスの吉井明久です。よろしくお願いします。」
そういつて指定された席に着いた。

LHR後・・・

明久はFクラスのとくによく話していた人たちと話していた。
「まさか本当に吉井君を連れてくるなんてね」

「本当、思ってもみなかったわ」
優子と愛子はまるで話を聞いていたかのような口調だった

「僕はとてもうれしい」

「雄二・・・」
そして久保はすすり泣き、翔子は旦那のことで頭がいっぱいだった

「へっ？みんな僕が来た理由がわかるの？」

「ええ、彼から聞いたからね」

「彼って誰？」

「誰だろうね」
愛子がもつたいぶる

「いいじゃん、教えてよ」

「・・・あの人」

すると翔子が指を刺し、優子が連れてくる。

「よう、アキ。久しぶりだな」

これが親友との再会であった。

第三話〜Aクラスへ〜（後書き）

今日中にオリキャラを出して、紹介しようと思います

第四話〜再開〜

「芳樹イイイイ!!」

バキイ!という音が鳴る。明久は昔の親友、長谷川芳樹を見ると一目散に駆け出しそして芳樹の頬を思いつきりぶん殴った。

「ちょ、ちょっといきなり何を吉井く」どうして今まで連絡しなかった!」えっ?」

優子が明久を注意しようとするが明久の言葉に驚く。

「あの事件の後、いきなりいなくなって僕がどれだけ心配したと思ってるんだ!」

明久の本気の怒りに

「・・・すまなかった。だがお前だけはその事に関わらせたくなかった!それに、心配させたくなかったんだ・・・」と答える。

「ふざけるな!!心配させなくなかったならどうして相談してくれなかったんだ!いつも一緒にいた親友がいきなりいなくなって心配しないとも思うか!?それともお前は僕をそんな風に見ていたのか!?」

「俺は・・・もうお前の前から勝手にいなくなったりしないだから・・・ここに来た」

「本当にもう勝手にいなくなったりしない?」

「・・・ああ」

「分かった。またこれからよろしく。それとさつきはごめん・・・」
握手をした後、頭が冷えたのか、明久はさつき殴ったことについて謝った。

「気にするな。元は俺が悪いんだし」

「あのさ、二人ともちよつと水を差すようで悪いんだけど、あそこ
の二人が色々変なこと考えてるからそういうのは教室ではやめてお
いたほうがいいよ。」

あそこの二人、優子はそれぞれ変な妄想を頭の中で繰り広げ、久
保は芳樹を敵対視するかのようにならみつけていた。

「そうだね・・・つとそうだ芳樹、僕がAクラスってどういうこと
？」

「それはな、俺がお前をAクラスに入れたんだ。」

「どついうこと？余計に意味がわからないよ」

「俺はな、1学期の終わりごろ転入してきたんだが、そんな時に学園
長から『特別観察者』っていう肩書きをもらってな。これがあると
長期休み明けに、数人の生徒のクラスを変えられるんだ。」

「ふう〜ん、ぼくの観察処分者みたいなもんか」

「役割とか条件はまったく正反対だけだな」

「そんな役割初めて聞いたよ。もしかして幼馴染だから吉井君をA
クラスに入れた？」

愛子はニヤニヤしながら聞いてくる

「いや、明久を入れたのには3つ理由がある。1つ目はこいつの学力向上のためだ」

「どうして吉井君に限るの？」

妄想から帰ってきた優子が尋ねる

「特別観察者はそいつの最も適したクラスに持っていくのが仕事だ。アキは本当に単純なバカだからな、いつも一緒にいる人とかで頭がよくなったり悪くなったりするからな。Aクラスにいればかなりの成績を取れると思ったからだ。当然他のクラスの奴も数人異動している。」

「大きなお世話だよ」

芳樹の言い様に明久は反論する

「2つ目の理由はこれも仕事の1環でな、不登校者を減らすことだ。なるべくそいつを苛めたりするような所には入れないというのを見極める必要がある。話を聞く限りこいつの味方はFクラスには優子の弟しかいないらしい。だから、この2つをクリアするのはアキにとってはAクラスだ、ということだ。」

「ちょっと待って、1つ目はともかく2つ目は吉井君の自業自得じゃないかしら？」

「それは誤解だよ。今日の朝だって少し秀吉と話をしただけでFF F団に異端審問をかけられた後美波と姫路さんに拷問をされてきたんだから」

…… Aクラス全体がしーんとなる

「・・・ごめんなさいね吉井君、あたしずっと勘違いをしていたわ。」

「もしFクラスに戻ることがあったりしたらすぐに相談してね」

「安心しろ、それは絶対にさせない」

優子と愛子から同情の目で見られ、芳樹はもう変えさせないという

「ありがとうみんな、Aクラスに入れて僕は幸せだよ。」

明久は思わず胸がジーンとなる

「それで話がそれたが3つ目の理由は・・・これは日がたてばいやでも分かると思う、今は教えられない」

「追求はしないよ・・・そういえば空ちゃんは元気？」

「ああ、今はこの近くのマンションで2人で暮らしてる。」

「そう、よかった」

「あれ、芳樹君、両親はどうしたの」

愛子は疑問を尋ねる

「芳樹の両親は前に事件に巻き込まれて死んじゃったんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・再びAクラス全体がしーんとなる

「あっえ、えつとごめんね」

「気にするな、知らなかったんだからしょうがない」

「そういわれるとホッとするよ・・・」

「・・・みんな、授業が始まるから席に付いて」

気にするなと言われ、胸を撫で下ろす愛子、そこに先生のところに行っていた翔子が帰ってくる

「じゃあまた後で」

そういつて明久は席に戻り授業の準備をした・・・

第四話〜再開〜（後書き）

まあさん、こんな駄文に感想をありがとうございました。
後今日は芳樹とその妹の紹介を書いて終わろうと思います。

オリキャラ紹介

はせがわ よしき
長谷川 芳樹

明久の小学生のときの親友 昔は明久と色々なことをしていた
1学期の終わりがごろ転入してきて、過去の経歴をきっかけに『特別
処分者』を任せられる

成績は都合上、中の上ぐらいに抑えている 得意分野は理系
ある事件により両親が亡くなり小学生のとき、妹と共に親戚の孤児
院に入れられる

現在は妹と二人暮らし 基本万能

容姿は上の中から上の中ぐらい 髪は赤茶のストレートで長さはベ
リーショート

上手くワックスをつけられないのが最近の悩み

召喚獣

容姿・・・芳樹を小さくした物

装備・・・明久と同じ改造学ランに木刀

腕輪・・・装備変換 特定の点数を払うことで好きなものに装備を
変えられる

はせがわ そら
長谷川 空

芳樹の妹 現在中学3年生 兄と二人暮らし 運動は得意 勉学は

ベリミー

容姿はかなり良く、告白される回数も多いが明久一筋のためすべて振っている

髪は兄と同じ赤茶で長さは美波ぐらいのポニーテール

(芳樹が明久の好みを教えていてそれに合わせている)

オリキャラ紹介（後書き）

今のところ、こんな感じですよ。空の方は葉月と同じくらい出しにくくなりそうです。事件については後に分かると思うので今は伏せて起きます。（実はあんまり考えていないなんていえぬwww）

第五話〜抗議〜（前書き）

今回は芳樹をFクラスのメンバーに会わせてみようとします。

第五話　抗議

・・・放課後

「では、今日はこれで終わります。後長谷川君、学園長が呼んでるので至急学園長室へ」

高橋先生の号令で今日の授業は終わる

「ハイハイ、と」

そういつて芳樹はAクラスから出ていく。

「どうしたんだろう。また特別観察者についてかな？」

「多分そうよ。それより吉井君、授業の方は大丈夫だった？」

「ああ、それなら授業前に芳樹からもらった要点のまとまってるプリントをがあるから大丈夫だったよ。」

「あはは・・・長谷川君って吉井君にはホントに甘いね」
ガラッ　旦那を迎えにいった翔子が帰ってくる。

「……………雄二がいない」

「へ？おかしいなあ、いつもならみんなまで話してるのに・・・
いつもならいるのに、いないと言つことに疑問を抱く

「……………っ！ちよつと行ってくる」

いる場所が分かったのか、翔子は旦那を迎えに行く

「だっ代表！？……しょうがないわね、私は帰って秀吉にでも聞くとするわ。またね吉井君」

「じゃあ僕も帰ろうかな、じゃあね吉井君」

「また明日、木下さん工藤さん」

明久は昔話でもしながら帰ろうと芳樹を待つ。

……その頃学園長室

「どういふことだくそババア！どうして明久がAクラスに行くことになったんだ！」

「そつじゃ、なんでなんじゃ！」

「……………常連が減った」

「それにアキがAクラスに行ったって、頭が良くなるはずがないでしょー！」

「そうです！明久君にはFクラスがお似合いです！」

Fクラスのメンバーは、明久がAクラスに行ったことに対して講義している。最も美波と瑞希は罵倒を言っているようにしか聞こえないが……

「少しは落ち着いたらどうだいクソガキども」

廊下には芳樹がもう着いていた

(なんかやけに騒がしいな、まあいいか) 「入るぞババア」

「やっときたかね、ちょっとこのバカどもに説明してやってほしい
おくれ」

「説明ってアキのことか？ババア」

「それ以外に何があるんだい？」

「フーかちょっと待て、お前誰だ」

「1学期の終わりごろ転入してきた長谷川芳樹だ、よろしく。ついでに久しぶりだな姫路」

芳樹は雄二の後ろにいた桃色の髪の少女に気づく

「もしかして、長谷川君ですか？」

「知り合いなの、瑞希？」

「はい。小学校が一緒に明久君とすごく仲が良かった人で、いつも色んなことを明久君とやっていました」

「それでコイツ、アキの前だとすぐに緊張して俺がいないと話が成り立たなかったんだよな」

「はわわっ！？それは言わないでください！」
瑞希は顔が真っ赤になる

「なるほどな、つまりババアからなんか権利でももらって幼馴染の明久を優遇してやったってわけか」

「やり方正解理由はすれだ。さすが悪鬼羅刹に落ちただけはあるな、微妙すぎるぞ元神童」

「てめえ、ケンカ売ってんのかコラ」

「別に、それよりアキをAクラスに入れた理由だったな、そりゃあお前らにも原因はあるぞ」

「どついうことよそれ！」

原因が自分たちにもあるということに驚く一同、と若干予想の着く秀吉

「つまりな、かくがくしかじか……」

2つ目の理由を聞いたとき

「否定できんの……」

「なに言ってるのよ木下、あれはアキが悪いんじゃない！」

「そうですよ木下君！自信を持ってください！」

「いや、お前（お主）らは反省するべきだろ（じゃろ）……！」

美波と瑞希の堂々っぷりに芳樹と秀吉は驚く

「姫路までこうなるとは……Fクラスは一体どうなっている
木下弟」

「聞かんでおくれ……というかお主わしが男に見えるのか!？」

「優子に強く言われているからな、木下弟」

「わしのことは秀吉でいい、それよりわしの事を男として見てくれるのは姉上と雄二と鉄人とお主だけじゃ」

「先生にすら女に見られてるのかよ、苦労してるなお前……まあそれより3つ目の理由だが……これはババアとだけで話したい。他の奴等は出て行ってくれるか？」

「ここまで聞いて引き下がれるかよ、俺たちにも」……雄二
つて、おうあ!?! 翔子いつの間に!?!」

旦那を迎えに来た翔子がやってきた。

「……芳樹、早めに済ませてあげて……吉井がAクラスで待
ってる」

「……分かった」

芳樹がそう答えると翔子は雄二をズルズルと引きずって帰っていく

「お前らも早く出て行ってくれないか?早く出て行ってくれないと
鉄人呼んで無理やり補習室に……って早いな」

芳樹の言いたい事が分かったのか残った人たちは全員猛スピード
で出ていった

「さて、さつさと話しな」

「ああ、実はこの学園の存亡にも関わっている」

「どづいづことだい!？」

「詳しく説明するとだな……………」

説明し終えた後、芳樹はすぐに明久のもとへ向かった

第五話〜抗議〜（後書き）

どうだったでしょうか

バカテストはやるうとは思ってたんですけど、基本Aクラスは真面目ちゃんばかりで珍解答なんて出ないと思うんです。だから結局中止となりました。

い、いや別に何も思い浮かばないとかそういうんじゃないんですよ。まあとにかく感想をお持ちしております

第六話〜それぞれの夜〜（前書き）

ようたさん、エミさん、緒方桂馬さん感想ありがとうございました
それとこれからは書き方を変え一話ごとにタイトルをつけることに
しました

よろしく願います

第六話　それぞれの夜

明久Side・・・

「ただいま」

「お帰りなさいアキ君、ご機嫌のようですが何かあったのですか？
ちなみに、1学期の成績が悪かったため玲が帰ってきている

「姉さん聞いてよ、芳樹が帰ってきたんだ！！」

「芳樹というと・・・あの長谷川芳樹君ですか？」

玲は芳樹にも明久同様の思いを寄せているのでうれしがっている

「そつだよ！」

「そうですか・・・アキ君、何度も言うようですが不純同性交遊は
認めますからね」

「なに言ってるの！？僕と芳樹はそんな関係じゃないからね！？」
玲が頭の中で想像している芳樹との関係を明久は否定する

「それと空ちゃんとの不純異性交遊も認めます」

「どうしたの姉さん異性交遊を認めるなんて、それにどうして空ち
ゃんだけ？」

「同じ女の子同士の約束なので内緒です」

「なんか余計に気になるんだけど・・・まあいいか」

普通にご飯を食べ、普通に風呂に入った後、

明久と玲の熱い夜が始まる！（笑） 明久「始まらないよ!!」

芳樹Side・・・

「ただいま」

「お帰り兄ちゃん、アキ兄ちゃんはとうだった？」

「とうだったって言われても、あ、本気で怒られた。」

「だろっねえ、あの性格で今回のことに怒らないはずがないよ。それよりちゃんと撮ってきてくれた？」

「まあ一応、ほれ」

そういつて芳樹は携帯で撮った明久の写真を送る

「はあく相変わらずかっこいいなあ、アキ兄ちゃん」

「お前、あの玲さんがいるのによく諦めないな」

「もう玲さんは攻略済みだもっん」

「マジか!?!どうやって!?!」

「『私とアキ兄ちゃんの間係を認めてくれたら、うちの兄貴を渡します』って言ったら普通に認めてくれた」「ぶっ!?!」
その言葉に芳樹は吹く

「おおい！実の兄を勝手に差し出すな！」

「別にいいじゃん、減るもんじゃないし。早く会いたいな〜アキ兄ちゃん」

空は明久に会えるのを楽しみにしていた・・・

雄二Side・・・

「つくそ！何とかして明久を戻せないのか!?!」

雄二は突然出てきた明久の幼馴染に対して腹を立てていた。雄二にとっても明久がメンバーから抜けたのには戦略的にも日常的にも大きな痛手であった。

「・・・いや待てよ、1学期のときみたいにすれば・・・
・いける、これなら明久をFクラスに戻せる！Fクラスの奴等ならば協力してくれるはずだ」

何か思いついたのか思わず笑みがこぼれる

「待つてるよ・・・長谷川芳樹!?!」

第六話　それぞれの夜（後書き）

一人一人書いているときリがないのでこの3人にしました

玲と空、初出演おめでとう！・・・と、いいたいのですがまたしばらく出番がなさそうです・・・

感想お待ちしております

お知らせ

本当にすいません!!

実は話を進めていくのに1学期におこなつた試召戦争の設定を変えることになりました。Fクラスはアニメ版のEクラスの後のAクラスと戦つて負けた所までをやつた事にして明久抜きでD、Bと進ませAと戦わせようと思います。それで7話はFがDを倒したという知らせを昼休みに明久たちが聞くところから始めます。Dとの対戦は書くのが面倒

けほんけほん、明久が抜けたことにより原作やアニメの面白さが出せないと判断したためBとの対戦だけを書こうと思います。Bは悲劇のヒロイン、秀吉を中心に書こうと思います(笑)。開始早々こんな問題の起こるような駄文ですが、応援していただけると嬉しいです

では、次回 第七話〱Fクラスの逆襲〱 で会えたら会いましょう

第七話 Fクラスの逆襲（前書き）

貴雅さん、感想ありがとうございました。

後、これからは部活と塾の関係で更新が水曜日と土日一回ずつになっ
てしまつかもしれません。学校の授業中に考えがまとまったら他
の曜日にでも乗せられると思います（笑）

これからもよろしくおねがいします。

第七話　Fクラスの逆襲

・・・昼休み、Aクラス

午前の授業の終わった明久、芳樹、優子、愛子、翔子はお弁当を食べながら雑談をしている

「モグモグモグ・・・ゴクンツそういえば今日、FクラスとDクラス試召戦争をやったそうよ」

「へえ、そうなんだ。どっちが勝ったの？」

「何でも和平終結で決着がついたんだって」
優子のセリフに明久が問いかける。

「どうせFクラスが勝ったんだろ？坂本のことだから設備交換の代わりになんか条件出して和平終結にしてるんだろ」

「……………雄二が負けるはずない」

芳樹と翔子は結果が分かりきっているような顔をして話に入る

「なるほどね。でもさ、なんで和平終結にする必要があるの？別にそうしなくても設備交換代わりの条件は出せるでしょ？」

「分かってねーな愛子、勝敗つけたら負けた方は3ヶ月間宣戦布告できねーだろ。つまり負けたクラス相手にここに宣戦布告させて弱ったところを狙うのが向こうの作戦だろうな」

雄二の考えは分かりきっているかのように芳樹は言う

「そういえば1学期にEと戦ったときも設備交換しなかったしね」

「つまり、また坂本君はAクラスを狙っているわけね」

優子が言う

「そうだろうな。でも今回は設備狙いじゃない」

「どういうこと芳樹？雄二たちは設備狙いで戦争をやってるのに交換しないなんて」

「……………狙いは吉井」

「へっ？僕？どういうこと？」

ますます意味が分からなくなった明久

「本当にバカになったなアキ。つまり坂本はお前をFクラスに戻すことをたくらんでる。いつもつるんでいない奴らには『明久はAクラスの奴とイチャついている』とでも言えば動きそうだしな」

「……………Fクラスなら本当にそれだけで動きそうだから怖いね」

「みんなどうして僕を不幸に貶めたいんだろう、モブの人達なら間違いない嫉妬だろうけど美波や姫路さんには何もしてないと思うんだけどなあ」

思わず明久はため息をつく

「安心して吉井君、少なくとも秀吉はそうは思っていないわ。それにどんな作戦できたってここはAクラスよ、そう簡単に負けたりしないわ」

「それに多分、みんな吉井君を渡すくらいなら設備交換を選ぶだろうしね……久保君あたりが中心に」

愛子は明久に聞こえないくらいの声で後半部分は言った。

「みんなありがとう……FとAの差は設備や頭の良さだと思っ
てたけどやさしさまでここまで違うなんて思ってもみなかったよ」
明久は思わず泣く

「アキ……こんな事言うのもなんだが多分やさしさならFを除いてどこも同じくらいだと思っぞ……」

一同は何が明久をここまでさせたのかと思う。

昼休みが終わるとFクラスはBクラスと戦っていた

「試験サモン召喚じゃ！」

渡り廊下に翁言葉の音が響く

「Fクラス 木下秀吉 数学116点

VS

Bクラス モブA 数学142点

Bクラス モブB 数学163点

秀吉はBクラス二人を相手に戦っている。不利なように見えるが秀吉は敵の攻撃を次々かわし着実に攻撃する事を繰り返す。結果としてはノーダメージで勝ってしまった。現在Fクラスは美波の数学を中心に戦っている。しかし美波よりも秀吉の方が多くの敵と戦い、勝つていく。これには雄二も驚いた。

秀吉は不憫に思う明久に対して何かできないかと思い明久の観察処分者の手伝いをしていた。それプラス明久の戦い方を真似しているためこのような戦いをする事ができたのである。

「ちよつと木下、点数の方大丈夫？一度下がった方がいいんじゃない？」

「まだ大丈夫じゃ。後二人は倒していくぞい。」
強がるが秀吉にも連戦はきつく100点を超えていた点数もいつの間にか50点台にまで落ちていた。

（明久のためを思うならこのままでいいのじゃが、わしも明久と一緒ににいたいじゃ。こんなところで降りるわけにはいかぬ。）
この気持ちが秀吉をがんばらせていた。

「はああああ！」

秀吉が最後のモブ二人を倒すと道が開き、瑞希率いる中堅部隊が応援に来た。

「応援に来ました！ってどうしたんですか！？」
瑞希が驚く。それもそのはず、FとBの戦力差は明らかなのに渡り廊下はFクラスが占領していたのだから

「私たち前線部隊がほとんどを倒しちゃったのよ。と言っても半分以上木下だけだね。」

「木下君が・・・ですか」

瑞希は美波同様、秀吉のがんばる理由に気づいたためハツとする。

「すまんがわしはこれまでのようじゃ、後はよろしく頼む」
秀吉が瑞希たちにバトンを託す。

「分かりました、木下君は戻って休んでいてください。美波ちゃん行きましょう！」

「当然よ、前線ではいいとこ見せられなかったしね。木下に負けていられないわよ！ね、瑞希」

「はい！」

そうして二人を中心に前線、中堅部隊がBクラスへと向かう。それを後ろから眺める秀吉は

「・・・みなもの者、がんばっておくれ」

と願っていた。その後、雄二率いる大将部隊もBクラスに突っ込んでいく。

・・・Bクラス前

FクラスのメンバーはBクラスに集まりBクラスを圧倒的に押し

ていた。ここで雄二が挑発をする。

「どうした？軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？」

「はア？ギブアップするのはそつちだろ？負け組代表さんよあ」

「どうだか、この状況じゃあお前が負け組代表になりそうだなあ。そうだろ？そんな代表につく負け組の生徒さんたちよあ」

この言葉にBクラスの生徒はキレる。

「坂本おおお！！」

「今じゃ（よ）！」

「っ！？」

密かに迫っていた秀吉と美波が根本に突っ込む。

「行かせません！！」

近衛部隊がそれを防ぐ。

「お前らの作戦は失敗みたいだなあ、坂本」

「それはどうだか、おーいムツツリーニ」

根元がニヤつくと雄二はここにはいないアイツを呼ぶ。すると

「何だと！？」

「……………保健体育勝負、試験召喚^{サモン}」

「Fクラス 土屋康太 保体441点」

V S

Bクラス 根本恭二 保体203点

Dクラスとの条件で出した『室外機を壊す』事によりBクラスは窓が開けられていた。開けられた窓から教師とともにムツツリーニが進入してきた。召喚獣が小太刀を一閃し、一撃で敵を切り捨てる。

そしてFクラスはBクラスに勝利した。

第七話　Fクラスの逆襲（後書き）

いかがでしたでしょうか。

秀吉のがんばっているところを書いてみました。次回はAクラスVS Fクラスにしたいと思います。五対五の一騎打ちか、ちゃんとした戦争か悩んでいます。まあ多分一騎打ちになりそうです

第八話〜決戦！AクラスVS Fクラス 前編〜（前書き）

更新が遅くなりすいません。結果的に一騎打ち制になりました。

第八話 決戦！AクラスVS Fクラス 前編

Bクラスに勝利した雄二たちFクラスはAクラスに宣戦布告をしにきていた。

「一騎打ち？また？」

交渉に参加しているのはAクラスでは優子、明久、芳樹の三人でFクラスは雄二率いるいつものメンバーだった。

「ああ、けど今回は俺と翔子だけでやらせてもらう」

「それは無理だよ雄二、一学期のときは霧島さん勝ったけど今回は雄二もまともに勉強したんでしょ？」

「そりゃあそうだよ。じゃなきゃ一学期のときと同じ作戦でこようとなんてしないからな。」

一学期に戦ったときのことを知ってる明久と芳樹は反対する。

「……そうよね、じゃあそれなら一学期同様お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で先に三勝した方の勝ちにしないかしら。もちろんそっちに三回選択権は与えるわ。」

「まあ、それならいいだろう」

「じゃあ決定だな。ほら、交渉は終わったんだからFクラスにもどれ、チャイム鳴るぞ。」

「もちろんそのつもりだが時間を決めてないんでな。今日の午後からでいいか？」

「わかったわ」

優子が承諾すると雄二たちはすぐに出て行った。

・・・午後、AクラスSide

「ではこれより、Aクラス対Fクラスの試召戦争を開始します。両者出てきて下さい」

すると向こうからはムツツリー二が出てくる。

「それじゃあ、僕が出るよ。」

「工藤さん、気をつけてね。相手はムツツリー二だから」

「ムツツリー二君には借りがあるからね。今日こそ返すときだよ」
愛子は自信満々で出て行く。

「では、両者共準備は良いですか?」

「……………」

「大丈夫です」

「それではじめてください」

「サモンツ！」

「Fクラス 土屋康太 保健体育542点

VS

Aクラス 工藤愛子 保健体育603点」

「……何iiiiiiiiii!?!?!」

Fクラス全員が驚く。それもそのはず、保体最強のムツツリー二が点数で愛子に負けているのだから。

「凄いよ！工藤さん！」

「ありがとね〜吉井君」

「……………いつの間に」

点数を抜かれていたことにムツツリー二もショックを受けているようだ。

「そりゃあ勉強したもん。実技を吉井君相手にね」

「……吉井を殺せえええ！」

そう愛子が言った瞬間、FFF団は即時に吉井を貼り付けにする。

「ア〜キ〜、坂本が言ったのは本当のことだったのね」

「まさか本当に手を出しているなんて、覚悟してください！」

「そ、そんなの嘘に決まってるじゃないか！？やめてよ工藤さん、こつこつとときにふざけるの！」

愛子は腹をこらえて笑っている。その状況にAクラスだけでなく秀吉なども呆れていた

「あははっ、本当に面白いねFクラスって。軽く言った冗談をここまで本気にして襲うなんて普通ないよこんなクラス」

そんな声を聞かないFクラスは今までたまっていた鬱憤を晴らすかのように明久をボロボロにする。

「さて、はじめようかムツツリー二君。」

「……………そのつもり」

そう、言ったとたんムツツリー二は腕輪を光らせ愛子の召喚獣を切りつけにかかる。が、愛子の召喚獣はそれを斧で受け止め、腕輪を光らせる。

「っ！？」

「そうだ、言ってなかったけど僕的能力はね、『雷電』って言って斧に触れてるものに電気を流せられるんだ」

その瞬間斧から小太刀へ、小太刀からムツツリー二の召喚獣に電気が流れる。ムツツリー二の召喚獣は焼け焦げそのまま消えていった。

「勝者、Aクラス工藤愛子！」

高橋先生の声にAクラスが盛り上がる。

「凄いよ工藤さん！あのムツッリーニに保健体育で勝っちゃうなんて！」

「よくがんばったわね、愛子」

「……………まずは一勝」

「そ、そうかな・・ありがとっ、みんな！」
愛子は思わず照れる。

「では次のかたどうぞ」

高橋先生の指示で2回戦が始まる。

「では僕が行こう」

久保が立ち上がり前へ進む。相手は瑞希のようだ。それを知った芳樹は久保を呼びかけ耳打ちで

「いいか、これはお前と姫路どちらの方がアキをより愛してるかが鍵になる。がんばってアキにいいところを見せて来い」

と言って、久保の背中をたたく。久保は前よりもやる気になったようだ。

「それでは、始めてください」

「「サモンツ！」」

「Fクラス 姫路瑞希 総合科目4409点

VS

Aクラス 久保利光 総合科目4266点」

わずかに瑞希が優勢だった。

「早めに終わらせませす！えいっ！」

瑞希は腕輪を光らし熱線で攻撃。久保に直撃する。

「やりましたっ！つてええ！？」

熱線に直撃したにもかかわらず久保はほとんど傷を負っていなかった。

「僕の能力は『鉄壁』、その名のとおりダメージをかなり軽減できる。そのかわり使ってる間は動けなくなるけどね。いくよっ！」

解除したとたん、点数どおりの速さで姫路に接近する。攻撃を瑞希は大剣で受け止める。

「私だって、負けられないんですっ！」

その状態から瑞希は熱線を発射する。

「しまった！」

能力を使う前に熱線が当たり久保の召喚獣は消えていった。

「勝者、Fクラス姫路瑞希！」

高橋先生の声が響く。

「すまない、また負けてしまった。」

「気にしないでいいよ。まだ始まったばかりだし」

「アキの言うとおりだ。心配すんな、後は任しておけ」
明久と芳樹が久保を励ます。

「それより、次は誰がでるの？」

「……………私」

翔子が名乗り出る。

「このタイミングで霧島さんが出るの？」

「…そう。きっと私は雄二に勝てない。だから先に負けておく。そういつて前へ出る。相手はもちろん雄二だった。」

「科目は何にしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は100点満点の上限ありだ！」

「分かりました。二人は視聴覚室で待っていてください。」

そして視聴覚室

「不正行為などは即失格になります。それでは始めてください」

結果は

「Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 100点」となった。

「……………ごめん、やっぱり勝てなかった」
戻ってくると翔子はみんなに謝る。

「しょうがねえさ。ま、その代わりと言っちゃあなんだがその思い
出、大切にしろよ。」

「……………ありがとう、…長谷川はいい人。」
芳樹の言葉に翔子は機嫌を取り戻す

こうして3回戦までの結果は1対2となった。

FクラスSide……

（ムツツリー二の負けには驚いたがそれでも俺と姫路で2点取れた。
まだ秘密兵器もあるし勝てそうだな。これで明久を取り戻せる。け
どこそのままでもいいのか？何か引つかかる。）

雄二は作戦の上手くいきように逆に不安を感じていた。

「ちょっと坂本、どうしたのよ？」

「ん？ああすまねえ、ちょっとな。それより次は多分あの長谷川つて奴だ。気をつけるよ」

「分かってるって。じゃあ言ってくるわね」

そういつて前へ出る。雄二たちはそれを見送る。

（何で俺はこんなにあせっている。たとえ島田が負けたってあいつがいるんだ。きっと勝てるだろう）

そう頭で決めつけ雄二は応援に集中しようとした。

第八話〜決戦！AクラスVS Fクラス 前編〜（後書き）

いかがでしたでしょうか。相変わらずぐだぐだですがwww

大体オ리지ナルの話の構成も出来て来ました。まあその前に清涼祭や強化合宿を入れないといけないんですが。後、明久と芳樹を誰とくっつけようか悩んでいます。誰か希望があつたらお願いします。

第九話 決戦！AクラスVS Fクラス 後編 (前書き)

エミさん感想ありがとうございました

第九話 決戦！AクラスVSFクラス 後編

AクラスSide・・・Side in 明久

「それでは始めてください」

「サモンツ！」

高橋先生の合図に四回戦が始まる。教科は数学で相手は美波だ。こちらからは芳樹が出ている。芳樹がどのくらい頭がいいのかは分からないけどきつと勝てるはずだ。

「Aクラス 長谷川芳樹 数学712点

VS

Fクラス 島田美波 数学328点」

「。。。ええ！？」

Fクラスの人だけでなくAクラスの人たちも驚いている。当たり前だ、何せ点数が高橋先生クラスだからだ。どんな装備になって、あれ？

「何で装備が僕と同じ木刀に改造学ランなの？」

「ああ、それはいきなりの転入だったからあのクソ妖怪が用意してねえとか言いやがってな。訴えにいったら学年で一番バカだったお前と同じ装備にされた。」

「へえ」

あのクソババアならやりそうだね。

「さーてやるとしますか。」

「ちょ、ちょっと待ってあんた、何なのよあの点数は」

「何なのといわれてもアレは俺の点数だ。悪いな、理数系は得意なんだ」

「対戦相手の島田だっけ・・・、に変な質問を出される。これだから本気出すのは好きじゃねーんだよな」

「得意と言っても限度ってものがあるでしょ」

「得意不得意に限度なんてねーよ。それよりなんでお前はアキをFクラスに戻したがる？」

「一番気になってたことだ。仲がいいならともかく普段拷問ばかりするような奴等だからな。秀吉以外は理解できん。」

「そっそれは・・・アキが普段変なことをしないように見張るためよー!」

「瞬間が赤くなつたがもしかしてこいつ、アキのことが好きなのか。ならばなおさらだな。」

「どうしてお前に見張る権利がある、アキはアキだ。勝手にお前の都合なんかで振り回してんじゃねーよ!それともお前はアキの事を自分の所有物だとも思ってたのかよおい」

「……………」

口ごもっている。思い当たる節があるよーだな。

「自分の思いも伝えられねえくせにでしゃばんじゃねーよ！いいか、お前があちこち引つ張りまわしてそれがデートだと思ひ込んでいてもな、相手からしたらただつき合わされてるだけとしか思わねーんだよ！自分の思いに気づいてほしかったらまずはその腐った性根から直しやがれ！」

「……………」

「さて言いたいことも言えたし、さつさと終わらせるぞ。」
狙いを定めて一気に木刀を突き刺す。美波の召喚獣は抵抗も何もせずに消えていった。

「しよ、勝者Aクラス」
このとき、誰も歓声をあげようとはしなかった。まあ当たり前か

「アキ、ちよつと機嫌がわりいから外にでてくる。後は任せたぞ」

「う、うん」

それだけ言つて俺は教室から出る。

Side out 芳樹 & Side in 明久

さつきは驚いたな芳樹があんなふうにしれたのってあの時以来だな……

「最後の人は早く出てきて下さい」
あつ、いかなくつちや

「相手は誰かなって秀吉!？」

「そうじゃ、わしが最後じゃ」

確かにでてなかったけどまさか僕と当たることになるなんて・・・

「こういつ時じゃないとおぬしとは戦えんからの。本気でいいぞい。」

「・・・・・・・・分かった。先生日本史でお願いします。」

「分かりました。では始めてください。」

「「サモンツ!」」

「Fクラス 木下秀吉 日本史122点

VS

Aクラス 吉井明久 日本史267点」

「ここ数日で思いつき上がったの、明久」

「まあ、ここまで上がったのはこれだけだけどね・・・いくよ秀吉
「!」

「こい明久!」

僕と秀吉は互いに迫っていく。薙刀の攻撃をかわし攻める。

「もらった!」

「まだじゃ」

突き刺そうとするとそれにあわせ薙刀でそらしてきた。カウンタ―が来る前に距離をとる

「操作上手くなつたね、秀吉」

「お主の仕事をいつも手伝っていたからの」

「そういえばそうだね。あの時はありがとっ」

そういつて僕と秀吉は互いに攻撃をかわしダメージを与える。それを繰り返す。

「・・・はあはあ、まるで自分と戦ってるみたいだ」

「それもそうじゃお主の戦い方をまねているからの」

向こうはぜんぜん疲れてないみたいだ。フィードバックがない分ミラーマツチなら向こうが有利だ

「それでも負けるわけにはいかないんだああ!!」
突進させる。

「それはこっちのセリフじゃ、明久よ」

それを秀吉はかわし横から一閃

「ぐああ・・・はあはあ秀吉、秀吉もそんなに僕を不幸に貶めたいの!?!」

「そんなわけないじゃろうが!」

秀吉のセリフに驚く。

「わしはな、ずっとお主と一緒に居たいんじゃない！」

「え？」

「明久のことを考えるならここで負けたほうがいいかもしれん。じやがな、明久のことを考えるよりも明久と一緒にいたいという気持ちの方が強いんじゃない！ここで負けたら明久と一緒にいられる時間が無いも等しくなってしまう！だから負けられん！行くぞ明久！」
涙を流しながら秀吉は攻めてくる。そうか秀吉は僕のことをそんな風に思ってたのか。嬉しいな。でも僕だって、

「僕のためにここまでしてくれたAクラスのみんなにためにも負けられない！行くよ秀吉！」

「うおおおおおお！！！」

ヒュンと一瞬すれ違ったとき、お互いのすべてをぶつけた。次の瞬間秀吉の召喚獣は倒れ消えていった。

「Fクラス 木下秀吉 日本史0点

VS

Aクラス 吉井明久 日本史1点」

「勝者Aクラス、よってこの戦い3対2でAクラスの勝利です。」

「よっしやああああ！！！」

Aクラスから歓声上がる。明久は秀吉のもとに駆け寄り手を伸ばす。

「秀吉！」

「明久……」

「さっきの試合、秀吉が言ってくれたこと本当に嬉しかったよ」

「明久、明久……うああああん!!」

秀吉は泣きながら僕に抱きついてくる。僕はそつと頭をなでる

「嫌じゃ、嫌じゃ。どうして明久と離れなくちゃいけないんじゃない!」

「秀吉……」

「頼む。もう少し、もう少しだけこのままでもいいさせておくれ。」

「……分かった。」

このとき周りからは暖かくやさしい目線と冷たく嫉妬心のような目線がひしひしと伝わってきた。

その後、芳樹が帰ってきて秀吉が落ち着いたころ戦後対談が始まった。

「まさかあそこまで明久が成長してるとはな。驚いたぞ。」

雄二は優子がでると思っていたらしく、そこに秀吉を当てようとしたという

「前にも言ったたる坂本、あいつはバカだって」

対談には芳樹が出ている。

「それもそうだな」

「さて戦後のことだが、3ヶ月戦争禁止にはしてもらうが別に俺たちAクラスはお前たちを設備を落とそうとはしない。」

「?どういうことだ?」

「その代わりに条件付きで週に数回、Aクラスにきてもらい授業を受けてもらう。そうすれば、アキとも少しは触れ合えるだろ。元は勝手にアキを移動させた俺が悪いんだからな。」

「そういうことが。それで条件はなんだ?」

「授業を真面目に受けることともう1つ、アキに対する暴力を一切行わないということだ。元からそのための移動だったからな。この二つのどちらかを破った奴は今後一切Aクラスに入れさせずアキとの関係も断ってもらう。ちなみに来る来ないは自由だ。」

「わかった。クラスの奴等に伝えておく。秀吉あたりは喜ぶだろうな。」

「そりゃあそうだろ。なんせみんなの前で見せ付けたそうだし。そうだ坂本、お前に伝えておきたいことがあるんだ。」

耳打ちで雄二に話す

「っ!?アイツがそんなことを!?!」

アイツの名前が出てきて顔が変わる雄二。

「そうだ。これを伝えるためにお前と俺だけの対談にした。」

「だが、それだとこの学園危くないか？」

「そのためにアキをAクラスにした。」

「この言葉に雄二は気づく。」

「そういうことか。つまりお前は明久と俺と姫路をそのための戦力にしようとしてるんだな。」

「そうだが、ここで思いもよらぬ戦力が出てきた。」

「秀吉のことか」

「まあ、秀吉がどうなるかは楽しみにしているよ。それよりこのことは絶対誰にも話すな。」

「分かってるって」

「そういつて雄二は部屋を後にした。」

第九話〜決戦！AクラスVS Fクラス 後編〜（後書き）

いかがでしたでしょうか。
感想お待ちしております。

第十話 清涼祭準備中 (前書き)

この間の地震は凄かったですね。

私も学校で百人一首の大会があつたから驚きました。(クソッ！せ
つかく勝つたのにこれじゃペアだ！)

・・・コホンッ、失礼、それじゃ始めます。

第十話 清涼祭準備中

・・・あれから数日後

明久たちは近日おこなわれる清涼祭の準備をしている。

「そつえばさあ、僕たちって出し物何やるの？」

「話してなかったね。僕たちはメイド喫茶をやるんだよ。」

「メイド喫茶・・・!?!？」

驚きの内容に思わず唾を飲む明久。

「何考えてるか大体分かるがお前は客じゃなくて接客だからなアキ。」

「わ、わかってるよ！」

「まあメイド喫茶と言っても女性客用に男子のウエイターも出ずから、料理が出来なくてもそんなに関係ないわよ。よかったわね吉井君、長谷川君。」

「は？何言ってるんだ優子。言っとくが俺もアキもたいていの料理なら出来るぞ。」

「そつなの？じゃあ明日にでも何かお菓子でも作ってきてもらえるかしら。」

「何でそつという話になるんだ！」

優子は2人は料理できないと思っていろいろ試そうとするが芳樹は反対する。

「だって、もし美味しかったら清涼祭で出せるメニューが増えるでしょ。」

「なるほど。確かにメニューは多い方がいいもんね。何かシュークリームでも作って来るよ」

「シュークリーム!? 食べたい食べたい!」

優子はシュークリームに反応して明久に強く迫る。そのまま2人はその話に夢中になりどこかへ行ってしまった

「おいおい、あまり本気出すなよ。女子がやる気をなくしたら困るからな。」

「・・・ねえ長谷川君、吉井君ってそんなに料理が上手なの?」

「いや、アキは家事全般なんでも出来るぞ。」

「どうして?」

優子は明久に家事が務まることに疑問を抱いてるようだ。

「アキの家は女性のほうが権限が強くてな。いつつも料理や洗濯、掃除なんかをやらされてた。それに料理が不味かったら作り直させてその分の費用はそん時のお小遣いから引かれてたらしい。」

「・・・鬼のような母親ね。」

「実際のところ、母親より姉の方が怖いぞ。なんせ常識はずれのブ

「ラコンで毎日のように貞操を奪おうとしてたからな。」

「よく耐えられたわね。なんかFクラスがかわいく思えちゃうわ。」

「Fクラスというと、この間の戦争はやばかったよね。」
「明久と愛子が入ってくる。」

「まあたしかにあそこで負けてたら今ここにいないものね。」

「そう考えると、今ここにいられるのはアキのおかげだよな。」

「僕は運がよくて何とか勝てただけだよ。そういえば芳樹、どうしてあそこで僕を出したの？木下さんとか他の人の方が勝てたんじゃない？」

「いや秀吉の場合、お前じゃないと勝てなかった。雄二に聞いてみたらあいつ、Bクラス戦の時にほとんど一人で前線部隊を壊滅させたらしいぞ。」

「そうだったんだ……吉井君を取り戻したくて頑張ってたんだね。」

「愛子は秀吉に同情をする。」

「他の奴が出てたら操作技術でやられちまうからな。だから秀吉にアキを当てた。結果として俺たちが勝ったが秀吉たちにはあの後しつかりお詫びはしてやっただろ？」

「あの交渉ね……まさか1日で残り3人になるなんて思いもしなかったよ。」

「芳樹の出したFクラスとの交流は開始早々クラスの9割以上が破

り、残っているのは雄二、秀吉、ムツツリー二の3人になってしまった。

「Aクラスに入った途端吉井君を殴りにきた人がいるくらいだったからね。どうかしてるよ。」

「アキ……お前Fクラスで何されてきたんだ？」

「えっと、とりあえず毎日異端審問会からのジャーマンスープレックスや紐無しバンジー、それから美波の関節技数種類を数十回×姫路さんからの拷問、それから雄二に鉄人を仕掛けられたり、それからってみんなどうしたの？」

平然と答える明久に恐怖を抱く3人。

「よく不登校にならなかったね……。」

「だって学校行きたくないなんて言ったら姉さんに何をされるか。」

「なんだって！？おい、アキッ！玲さんってアメリカに行ったんじやなかったのか！」

芳樹は玲がいるということに驚く。それもそのはず、なにせ（第六話を読んでね）なのだから

「1学期の成績がひどくて、夏休みに入る前ぐらいから2人暮らしだよ。」

「なんてことだ……アキ、どうすれば玲さんはアメリカに帰るかわかるか？」

「たぶん成績が悪くて住み着いてるから良くなればもしかしたら……」

・ていうかどうしたの？そんなに慌てて」

「空が玲さんに（第六話を読んでね）なんていったんだよ！こうなったら一日でも早くお前の成績を上げてアメリカに戻してやる！」
芳樹は明久の成績を上げること執念をかける事を決意する。

「ああ、だから姉さんは空ちゃんだけでは不純異性交友を認めるなんていったのか・・・」
ここに話についていけない人が二人。

「あのさ、二人とも嘆いてないで準備しようよ。」
愛子が二人を落ち着かせようとし優子が水を持ってくる。

「ん？ああ、すまん。」

「まあとにかく、二人とも明日はお菓子を作ってくること。わかった。」

「吉井君はシュークリームね。」
優子が結論だけ済ませ愛子が吉井にだけ要求する。

「しょうがねえな。じゃあ俺はクッキーあたりでいいか？」

「もちろん。あっそれと数はクラスの人数分だからね。」

「えっ！」

「何言ってるの当然でしょ、クラスのみんなに評価してもらうんだから。」

「まあそうだけど・・・それでシュークリームはちょっときついんじゃないあ・・・」

明久はそれだと時間的にも予算的にもきついと言う。

「・・・そうね。じゃあ一口サイズのシュークリームならどうかしら？」

「・・・うーん、それなら出来そうだから明日持ってくるよ。」

「じゃあよろしくね二人とも。」

ガラスと音を立て高橋先生が入ってくる。

「皆さん、清涼祭の準備ははかどりましたか。それと長谷川君、学園長が呼んでます。至急学園長室へ行ってください。」

「はあく、ったくしょうがねえ。じゃあちよっくら行ってくるわ。そういつて芳樹はクラスを出る。」

「……………優子、ちよっところちに来て」

「分かったわ、じゃあ私も呼ばれてるから、またね吉井君、愛子。」「翔子が優子を呼ぶ。」

「さーて、僕もシュークリームの準備があるから帰るとしますか。」

「ちよっとまって吉井君。」

愛子が明久を呼び止める。

「どづしたの工藤さん？」

「あのさ、え、えつと一緒に帰らない？」

愛子は顔が赤くなりながら言う。

「別に良いけど、どうして？」

「い、いや別に、そう言うんじゃないかとどんなシュークリームにするかとか話しながら帰るのもいいかなあって思って」

「そうだね。どんなのにするかとかも決めてないし。そうだ、買い物に付き合ってよ。」

「付っ付き合っつ！?!？」

その言葉に驚く。

「うん。でも買い物まで付きあわせたらさすがに迷惑かな？」

「いっいや別に問題ないよ！」

「じゃあ決定だね。卵のタイムサービス終わっちゃうし早く行こう。」

「うっうん。」

二人はそういつて教室を出る。

(吉井君やつぱり忘れちゃってるのかな、僕の事……まあここまで変わっちゃったんだから無理もないけどね……でもやつぱり悲しいなあ)

こんな悩みを抱えてるなんて隣にいる吉井は知るよしも無かった。

翌日・・・

「木下さん、約束通りもってきたよ。」

「俺もだ」

二人はそれぞれ作ってきたシュークリームとクッキーを差し出す。

「じゃあ、早速みんなで食べるとしましょう。」

そういつて1人1つずつ口へ運ぶ。

「ど、どうかな・・・作るの久々だったから少し手間がかかったけど」と、男子からは「美味しい」「もう一個」と聞こえてきた。好評だったようだ。しかしほとんどの女子は無言のまま感想も聞こえてこない。

「これは・・・本当に女性のやる気をなくさせる味ね。」
優子がつぶやく。

結局、シュークリームとクッキーは採用された。そして女子のほとんどのやる気をなくしていた。

「あ、そつだ工藤さんこれ。」

明久は愛子に一個、普通の大きさのシュークリームを差し出す。

「昨日、材料選びとか色々手伝わせたしね。元々シユークリムも工藤さんが提案してくれたものだし。それのお礼って事で。」

「ありがとつ。とつても嬉しいな。」

愛子はその場で大きな口をして食べる。周りのクラスメイトはうらやましそうに見ていた。

「つとそうだ、アキ」

芳樹は明久に話しかける。

「どうしたの芳樹？」

「俺と一緒に召喚大会に出ないか？」

「召喚大会？なにそれ」

「清涼祭のときにやる召喚獣の大会でな。それで優勝すれば、玲さんも心配要らないと思って帰ってくれるかもしれない。」

「オツケーやるよ」

玲のことが出ると明久は即答で答えた。

こうして明久は芳樹とともに召喚大会に出ることになった・・・

第十話〜清涼祭準備中〜（後書き）

愛子とのフラグを立ててみました（笑）。秀吉でもいいかなあと思っただんですが、Fクラスと関わるのが少ないためAクラスの誰かにしようと思った結果、愛子になりました。ちなみに芳樹は優子のつもりでいます。

感想お待ちしております

第十一話 清涼祭スタート (前書き)

ここ最近地震騒動で凄いですね。

計画停電で一度内容が全部消えてしまいました(泣)

今回から清涼祭が始まります。基本Aクラスですが本編での出来事も上手く混ぜていこうと思うのでよろしく願います。

まあさん、エミさん、シユレ猫さん感想ありがとうございます。それでは始めます。

第十一話 清涼祭スタート

清涼祭当日……

『お帰りなさいませ、ご主人様。』

Aクラスでは優子の言ったとおりメイド喫茶をおこなっている。始まったばかりだが凄く盛況のようだ。

「ふえー、凄い客だね。」

現在、明久は芳樹とともに厨房で働いている。この間採用されたもの以外の物も作らされているようだ。

「そりゃあそうなる。Aクラスは清涼祭のパンフの1ページを丸々使ってたんだから、どんなところなのか見に来ようとするのは当たり前だ。それに美人も多いしな。」

芳樹は手を動かしながら説明する。

『12番テーブル、プチシュークリームセット2人前よろしく』

『こつち17番テーブル、ふわふわシフォンケーキ追加よろしくな。』

「はいはい、っとそうだアキ。もうすぐ大会の時間だ。これ作り終わったら行くぞ。」

「了解つと。プチシュークリームセット2人前出来ましたー、持つ

ていって下さい。」

どんどん注文が来る中、2人は仕事を終え大会会場に向かう。

「そういえば、僕ら以外にも出る人っているの？」

「プログラムによると、Aクラスだと俺とアキ、翔子と優子、その他モブが出る。Fクラスだと雄二と秀吉、姫路と島田が出るみたいだ。まあ俺たち以外全部向こう側のトーナメントだけだな。」

明久が聞くと、芳樹が淡々と答える。芳樹は明久にプログラムを渡す。

「ふーん、なんか仕組みれてそうだね。雄二あたりに。」

「実際そうだろうな。この間ババアに呼ばれたとき雄二と秀吉がいたから、多分そんなときにも何か交渉でもしたんだろうな。」
そんな話をしているうちに会場へ着く。

大会一回戦目は数学であり、芳樹の得意な理数系の科目である。

「それでは始めてください」

立会人の教師の掛け声を合図に4人の声が響く。

「『『サモンツ!』』』」

「2年Aクラス 吉井明久&長谷川芳樹 数学216点&523点

VS

2年Bクラス モブ男君&モブ美ちゃん 数学182点&149

点」

モブ達が芳樹の点数に驚いている間に2人は木刀で相手を貫く。
一瞬で決着がついたようだ。」

「勝者、吉井、長谷川ペア。」

教師により勝者が告げられ、明久と芳樹は戻っていく。

「なんか楽勝だったね。」

「それにしてもお前、点数上がるの早くないか？」

「あれから家でもしつかり勉強してるからね。おかげで姉さんからの仕打ちもあんまりないし。」

実のところまだ二期は一カ月半も経っていない。明久は家で勉強しているところを玲に見せているせい、ゲームをしてもそんなに叱られなくなった。

「なるほどな。そろそろAクラスに戻ろうぜ。ん？優子からメールだ。」

「木下優子：そっちも多分勝ったでしょ、お疲れ様。私達はAクラスに戻ってきたんだけど、そしたらあんたの妹と吉井君のお姉さんが来たわ。どうせ会いたくないんでしょ。代表に許可は取ったから

2人が帰るまで他のクラスでもうろついてきたら?』

このメールに2人は背筋が凍る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・危なかったな。」

「そうみたいだね。それより空ちゃんとはかく姉さん仕事でこれなかったはずじゃあ・・・・・・・・。木下さんに感謝しないとね。」

「そうだな。これからどうする? Fクラスでも見に行くか?」

「そうしよっか。雄二に大会の事聞きたいし。」

「決まりだな。」

2人はFクラスに向かっていった。

第十一話 清涼祭スタート (後書き)

一話一話が短くなったり長くなったりしてすみません。
これも作者に文才が無いからなのですが……………
感想お待ちしております。

第十二話〜姉妹登場〜（前書き）

今回の部分は2回戦の後だというのに1回戦が終わったところを出してしまいました。思い出した頃には戻りたくないところまで書いていたので少し修正して出すことにしました。よろしくお願いします。

第十二話　姉妹登場

優子からのメールにより難を逃れた明久と芳樹はFクラスに遊びに来ていた。

「ねえ、芳樹。Fクラスの出し物って何やってんの？」

「パンフによると中華喫茶らしいぞ。つとここだ。」
その看板には『中華喫茶　ヨーロッパ』と書かれていた。

「……………どっちなんだろうね。」

「……………さあな。まあ、とにかく入ろうぜ。」
ネーミングセンスに唾然とする明久と芳樹。中に入ると、

「いらっしやいませー、つて明久と芳樹ではないか。」
秀吉がきた。店内は客が全くいなかった。

「やっぱり秀吉は接客なんだね。どうしたの、この状況？」

「最初の方は順調だったんじやが、途中から客が来なくなったんじや。」

「雄二たちは？」

「さっきまでわしと大会に出ているの。雄二はトイレに行くと先ほど出て行ったばかりじや。」

明久が質問している中、芳樹は考え事していた。

「……なあ、これは予測なんだが途中で妨害をされなかったか？」

芳樹は口を開くとそう質問した。

「確かに一度3年生の2人組に妨害されたが、どうして分かったのじゃ？」

「やっぱりな。順調だったのにいきなり客足が落ちることなんて無いだろ？だからFクラスに妨害でもしにきた奴らが今度は外で悪い噂を立ててるんじゃないかと思つてな。」

そんな話をしていると外の方から

『お、坂本。妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、5年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』
と、そんな声が聞こえてきた。

「雄二が帰ってきたみたいだね。おい、雄二」
明久が雄二を呼ぶ。すると

「あつ！バカなおにいちゃんです！」

雄二の隣にいた小さい女の子が明久に向かって飛びついてきた。

「ぐほっ！」

飛びついてきたため明久の鳩尾に少女の頭がクリーンヒットした。

「よく来たな明久、芳樹。ってか明久、お前モテないからって遂に」

「何を考えてるんだバカ雄二!! ……えっと、君は？僕に小学生の知り合いはいないはずだけど？」
すると少女は涙目になりながら

「バカにお兄ちゃんのバカ！結婚の約束をした相手を忘れるなんてひどいです！」

「へっ？」

記憶に無い相手にそんなことを言われて驚く明久。そこに、

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「殺るわよ!!」

「ぐはあ!!」

美波と瑞希が帰ってきた。帰ってくると同時に拷問を開始する。

「明久くん、小学生相手に何をやっているんですかあ？」

「アキツ！あんたいつの間に葉月に手を出したの!? 姉として許さないわ！」

「ぎゃあああああ!!」

そうしてるうちに芳樹は

「えっと、葉月ちゃんだっけ？あのバカなお兄ちゃんとはどこであったの？」

「バカなお兄ちゃんとは去年の4月ごろに近くの公園で会いました。」

「よく覚えてるねー、よしよし。だ、そうだぞ明久。」
芳樹は葉月の頭をなでながら明久に言う。

「……………あの時の子か！」
明久も思い出したようだ。

「明久君？まだお話は終わってませんよ？」

「えっ、ぎゃああああああ」

……………拷問終了後

「雄二、いまFクラスがどんな状況にいるか教えてくれ。」

「……………まあお前と明久になら教えても問題ないか。実はな……………」

雄二は明久と芳樹に事情を説明した。

「なるほどな。で今はその常夏コンビとやらがどこで悪評を巻いてるか知りたいってことだな。」

「理解が早くて助かる。」

「手伝つてやるよ。一応姫路も小学校からの仲だしな。ん？優子からメールだ。」

『優子：今2人がFクラスに向かっていったわ。早く戻ってきて働きなさい。』

明久と芳樹は背筋が凍る。

「どうした、2人とも？」

「わりい雄二、俺達Aクラスに戻らなくちゃいけなくなった。」

「早く行こう芳樹！」

二人が来る前に逃げようとする二人。

『アキ兄ちゃん！』

「……遅かったようだ。」

叫びながら向かってくる少女、空は明久を見つけると駆け寄り抱きついてきた。

「そ、空ちゃん!？」

「アキ兄ちゃん、私ねえずっと会えなくて寂しかったんだよ。Aクラスに行ってもいないし。死にそうだったんだよ。」

そっぴいながら明久の体を押し倒す。

「まったく、空。なにしようとしてるんだお前。」

「ん？不足してるアキ兄ちゃんの成分を補給してるんだよ。」

「だよ じゃねえよ全く……」

「芳樹、明久を押し倒しているあの娘は誰だ？」
雄二が芳樹に質問する。

「俺の妹だ。ちなみに、あっちに行く前からあんなだからな」

「……そうか。」

「ちょっと空ちゃん、なにズボン降ろそうとしてるの!?!」
上手く倒されていて明久は身動きが取れない。

「このくらいなら問題ないって玲姉さんが言ってたから……」

「あの人の言う事は聞いちゃだめだってば!」

「空ちゃん、そういうことは公衆の面前ではやってはいけませんよ。
家に帰ってからゆっくりやりなさい。」

「……はい。」

玲が遅れて登場し、しぶしぶ空は明久から離れる。この後明久が
FFF団と美波と瑞希に処刑されたのは言うまでもない。

「それにしてもここがFクラスですか……すいません、ゴマ
団子とウーロン茶を2人分。」

「あっ、はい。かしこまりました。しばらくお待ちください。」
秀吉は注文を受け厨房に向かう。

「玲さん、どうしたんですか？わざわざFクラスに来るなんて。」
処刑側に回っていない雄二と芳樹が尋ねる。

「あら坂本君、芳樹君久しぶりですね。ただAクラスでここの悪評をたたいている2人組がいたので……。坂本君がわざわざそんな事するとも思えないですし気になったので来てみました。」
この言葉に2人は反応する。

「それは本当ですか、玲さん。……芳樹」

「分かってる、早く行こうぜ。玲さん、すぐ戻ってくるのでゴマ団子でも食べてゆっくりしてください。それと空をよろしくお願いします。」

「明久、島田、姫路。Aクラスに行くぞ。」

「どうしたのよいきなり。」
いきなり呼ばれた三人は尋ねる。

「常夏の奴らがAクラスにいるみたいだからな。ぶちのめしに行く。」

そういった後、5人はAクラスに向かっていった……

第十二話 姉妹登場 (後書き)

タイトルの姉妹というのは明久の姉、芳樹の妹という意味でつなげました

感想お待ちしております。

第十三話 悪さには制裁をー (前書き)

更新遅くなっています。昨日投稿するつもりだったのですが、計画停電+兄の占領+塾という私にとって最悪な三つがそろってしまいました。(泣)

シンさん、シュレ猫さん感想ありがとうございました。
それではじまります

第十三話 悪さには制裁を――

Aクラス前……

「それじゃあ、代表から許可もらってくるから待ってる。」

Aクラスに付いた途端、芳樹は雄二たちに待ってるという。

「何で翔子の許可がないとは入れないんだ？」

「そりゃあ、姫路と島田はAクラス入室禁止だからな。それに常夏について話してくる。」

瑞希と美波は明久への暴力現行犯によりAクラスには禁止になっている。

「お姉ちゃんたち何かやっただんですか？」

「ちよつとね……」

「後、俺とアキは接客の方に回らないといけないから上手くやってくれ。それじゃあ後で。」

そういつて2人は教室に入る。

Aクラス内……

「ちよつと2人とも遅いじゃない。なにしてたのよ。」

「わりいわりい、Fクラスにいたら空と玲さんに見つかってな。俺は大丈夫だったがアキが空に貞操を奪われそうになった挙句、Fク

ラスの連中に処刑された。それはそうと翔子はどこだ？」

「……………そう。代表ならあそこよ。さっさと要件済ませて接客に回ってちょうだい。」

遅くなったことに二人をしかる優子だったが、理由を聞いた途端明久に同情の目を向ける。

「わかった。ありがとう木下さん。おーい、霧島さん。」

「……………何？」

「実は、かくかくしかじか……………ということなんだ」

「……………ちょうどあの客には困ってたところ」

「雄二たちを呼んであるからそっちに行ってくれ。あと島田と姫路の入室許可もよろしく。」

「……………わかった。」

翔子は入り口で待つ雄二たちのところに行く。

「これでよし、と。さっそく働きますか、アキ。」

「そうだね。抜けてた分しっかり働かないと。」

2人は服を着替え、接客に回る。

Fクラスメンバー Side……………

翔子がこっちに来るのが見え、教室に入る四人。先に女子三人が

入り、後から入る雄二。

「…………お帰りなさいませお嬢様。」

「わあっ、きれい…………」

三人は翔子の姿に見蕩れる

「…………お帰りなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン。
雄二に対する言葉は斬新なアレンジがされていた。」

「霧島さん大胆です…………！」

「ウチも見習わないとね…………」

「お姉さん、夜の間ずっと遊ぶのかな？」

「三人ともやめてくれ。翔子、芳樹たちから聞いたか？」

「…………うん。とりあえずこちらへどうぞ。」

翔子は四人を席へ連れていく。

「…………では、メニューをどうぞ。」

「うちは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれが良いです。」

「葉月もー！」

「それじゃ俺は…………」

「…………ご注文を繰り返します。『ふわふわシフォンケーキ』を3つ、『メイドとの婚姻届』を1つ、以上でよろしいでしょうか？」

「全然よろしくねえぞ！」

「…………では、食器をご用意いたします。」

女子3人の所にはフォークが、雄二の前には、実印と朱肉が用意された。

「しよ、翔子！ これ本当にうちの実印だぞ！ どうやって手に入れたんだ！？」

「…………では、メイドとの新婚生活を想像しながら、おまちください。」

「はあ…………。それより翔子、あいつらでいいんだよな。」

「…………そう。」

雄二は奥の方に座る常夏コンビを指さすと、翔子はうなずく。

「それにしても、この喫茶店は綺麗でいいな」

「そうだな。さっき言った2・Fの中華喫茶は酷かったからな！」

「テーブルは腐った箱だったし、虫もわいていたもんな！」

嫌でも聞こえるようなわる大きな声で喋っている。とくにAクラスは客足も多いため、当然悪評は広まっていくだろう。

「……さつきからずっとあそこで話してる。内容も同じようなことばかり。」

「そうか。……翔子、メイド服と明久を貸してくれ。」
何か考え付いたのか雄二は翔子にメイド服と明久を貸してほしいという。

「……メイド服はともかく、吉井は出来ない。」

「?、どうしてだ。接客してる所を連れてくればいいだろ。」

「……あれ。」

翔子は出口の方に指をさす。そこには「メイド（執事）と記念写真」のコーナーがあり、明久は女性の客と写真を撮っていた。

「……意外に人気。」

「瑞希」

「美波ちゃん」

「殺りましょう」

「落ち着けお前ら。じゃないと本当にアキとの関係断つぞ。」

美波と姫路はいつものように処刑を実行しようとするが、やってきた芳樹に止められる。

「どうした芳樹、お前は行かなくていいのか？」

「嫌味か雄二。俺はアキみたいに呼ばれてないからな。普通に接客

してるだけだ。」

「……………（こいつでも行けるか？）……………翔子、明久はいいから代わりに芳樹を貸してくれ。」

「……………わかった。後これ。」

翔子は持ってきたメイド服を雄二に渡す。

「おう、サンキュー！。そうだ島田に姫路、櫛を持ってないか？」

「持つてはいますけど……………」

「ちょっと貸してくれ。他にも身だしなみ用のものがあれば全部。」
美波と瑞希はそれらの詰まったポーチを雄二に渡す。

「おい、ちょっと待て雄二。嫌な予感しかしないんだが。」

「大正解だ。これを着てお前があいつらをぶっ飛ばしてこい。」
明久の変わりに芳樹を女装させるつもりらしい。

「誰が女装なんかするかポケット！」

「長谷川君、大丈夫ですよ。きっと小学校のときみたいに似合ってますから」

「その話を今するな！」

「ん？姫路、もしかしてこいつ前にやったことあるのか？」

「はい、小学校の頃……………」

「やめてくれえええええ！」

昔の黒歴史を根掘り葉掘り聞かれそうになる芳樹。

数分後……

「これでいいんだろっ！これで」

「ああ、予想以上の出来栄だ。」

「かなり似合ってるわね。」

「明久君とのツーショットとか良さそうですね。」

「絶対しねえぞ、そんなもん」

結局、メイド服を着せられる芳樹。

「じゃあ頼んだぞ、ヨシコちゃん」

「変な名前をつけるな！……あいつらに地獄を見せてくる。こんな事させられるのも全部あいつらのせいだからな。」
溜まった怒りを全部常夏にぶつけるようだ。

『……お客様』

「なんだ？こんな子もいたのか？」

「結構かわいいな」

『足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか。』

「掃除？早くしてくれよ。」

『ありがとうございます。それでは』

「くたばりやがれえ！」

「ぐはあ！？」

怒りのこもった右ストレートが坊主頭の方の鳩尾に入る。

「てめえ、いきなり何しやがる！・・・というかお前男か？」

「きゃあああ！こ、この人、今私の胸を触りました！」

「ちょっと待て！そっちがいきなり　ぐはあ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

坊主頭はいきなりのパンチに気絶し、殴った本人の雄二は痴漢退治という大儀名分を得て登場する。

「な、何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこっちだろ！」

「黙れ！たった今、コイツはこのウェイトレスの胸を揉みしだいていただろうが！俺の目を節穴ではないぞ！」

節穴じゃなかったら、ビー玉かなんかであろう

「ウェイトレス。そっちで倒れている男は任せたぞ」

「え？あ、はい。わかりました」

芳樹は坊主頭に瞬間接着剤で頭にブラをつける

「さて。痴漢行為の取調べの為、ちょっと来てもらおうか。」

「じよ、冗談じゃねえ。逃げるぞって、おい夏川！」

夏川という坊主頭は気絶中である。なのでもう一人の方が背負って逃げることになる。

「……あれって、変態だよな」

「少なくとも、お前もその仲間だぞ芳樹。」

「俺は違う！」

そんなやり取りをしながら二人は追いかけていく。

第十三話 悪人には制裁をー(後書き)

感想お待ちしております。

第十四話 召喚大会

Aクラス……

芳樹と雄二が常夏を制裁している間明久はというと……

「えーと、じゃあ明久君をお願いしまーす。」

「ご指名いただきありがとうございますお嬢様（結構、写真の相手してるけどこれって何なんだろ？芳樹も行けっというだけで教えてくれないし）」

帰り際に撮る写真の相手をしていた。奥の席でとある二人が負のオーラを出しているのは言うまでもない。

「じゃあ写真を撮る人よろしくってムッツリーニ！？どうしてAクラスに？」

「………バイト」

「ああ、そうなんだ。それよりFクラスの方は？」

「………今は人が来ないからこっちのほうで稼げそうだった」

「ムッツリーニ、気持ちはわかるけどあんまり」

「………（Aクラスのメイドも撮つといた）一枚百円」

「ニダース買おう　あんまりそういうのはやめたほうがいいと思っよ」

「アキ・・・注文してるぞ」

芳樹と雄二が帰ってくる。

「あれ？雄二と…芳樹？どつしたのその恰好」

「うるせえ！てめえのせいだ！」

「まあまあ、それよりお前らそろそろ試合じゃないか？」
雄二がなだめるついでに試合があると伝える。

「げっ！？やべえ、急ぐぞアキ！」

「えっ、う、うん」

二人は会場に駆け出す。…………一人はあの格好で。後ろから
見ている雄二は
ニヤニヤとしていた。

「さてと今回の相手はっど……………」

「芳樹、そんなことよりいいの？その格好」

「げっ!？」

やっと気付いたのか明久に言われハツとなる芳樹。

『それでは、選手は入場してください』

立ち合いの教師の声が聞こえる。これから着替えるのは多分無理そうだったので無理やり明久が芳樹を持っていく形になった。相手は三年だったが結果は言うまでもなく、明久と芳樹は勝利した。

「とりあえず着替えないとな」

「そうしたら一度Fクラスに戻るんだよね？」

「ああ、玲さんを待たせてるからな」

着替えてから二人はFクラスに向かう

Fクラス・・・

「おい、姐さん

ぐはぁ!」

「アキ、さっきは随分と楽しそうだったわね」

「明久君？しつかり話し合いましたよね」

「……吉井を殺せえ！」

Fクラスに来た途端、明久はクラスの大半に囲まれ公開処刑が開始される。

「はあ、アキも散々だな」

「あら芳樹君、もうメイドの格好はしてないんですか？残念です」

「さすがにしませんよ。対戦相手にも変な目で見られましたし」

「それでは、私も仕事があるのでそろそろ帰りますね。行きますよ空ちゃん」

「はい。アキ兄ちゃんまた今度ね」

空は明久に別れのセリフを言うがきつと届いていないだろう。

「アキそろそろAクラスに戻るぞ」

「待つて！この状況をどうにかして！」

結局戻ろうとする頃には三回戦が始まるころでそのまま会場に向かったが三回戦の相手が腹痛で不戦勝となった。

第十四話 召喚大会 (後書き)

最近 g d g d ですいません。次話はもう少しまとまな文を書けるよ
うな状況で書こうと思います。
感想お待ちしております

第十五話 誘拐騒動！?? (前書き)

誤字の報告ありがとうございました。訂正しておきました。

それでははじめます

第十五話 誘拐騒動!??

Aクラス……

「「たっだいまー。」」

「遅いじゃない2人も。ほら、さっさと仕事について」

「俺はいいがアキはちよつと休ませてやってくれ。実は……
ということがあつたんでな」

仕事につけという優子に芳樹が事情を説明する。

「……はあ、あの2人も懲りないわね。……愛子の
方に支障が出ないといいけど」

「確かにな。やっとアキにもまともな恋愛が出来そうなんだけどな」

「ん？芳樹、今呼んだ？」

「「いいや（え）。というかこっちに来るな（いで）」」

「ひどっ!」

ちなみに愛子が明久に惚れていることは芳樹は明久の好みを聞か
れて、優子と翔子は相談相手として知っている。

「愛子には悪いけど、吉井君は人気あるからなるべく早く復帰して
くれるとありがたいんだけど。」

「分かった。アキにもすぐに機能してもらおうように言っとく。っー

かそれは俺に対する嫌味か？」

「別にどうとつてくれても構わないわ。……………私としては好都合だけど」

「なんか言っただか？」

「なっ何でもないわよ！それより働くならさっさと働いて頂戴！」

「はいはい。」

そういつて厨房の方に向かう芳樹。その後ろにはプクつと顔の膨れた優子がいた。

Aクラス……………Side in 明久

「はあ。（全く嫌になっちゃうよなあ。みんな訳の分からないような事で処刑してこようとしてくるし。それに比べると本当にAクラスはいいよなあ。痛い目にあうこともないし）ってうわ！」

なんだ！？突然暗くなっただけど……………

「だ〜れだ」

そんな声が後ろから聞こえてくる。なんだ目隠しされただけか……………驚いた。

えーと、この声は……………

「工藤さんかな？」

「あつたり〜。三回戦突破おめでと〜」

やっぱり工藤さんだった。他の人と同様メイド服を着ている。

「ありがと〜、わざわざ。それよりいいの？仕事の方に回らなくて」

「女子は替えが結構いるからね〜。暇になるときが多いんだよ」

「そうか、Aクラスは女子の方が多いいんだっけ。でも木下さんとか霧島さんとかはずっといるよね」

「だって優子は女子の方のリーダーだし、代表も結構人気があるからね〜」

木下さんは統率力もあるし、霧島さんも凄く似合ってたもんなあ

「それよりさあ」

「何？工藤さん」

「その・・・如月グランドパークは誰と行くの？」
如月グランドパーク？

「何それ」

「えっ！それが目当てで大会に出たんじゃないの!？」

工藤さんが驚いている。目当てって事はもしかして大会の副賞でチケットでももらえるのかな？

「一応、腕輪と姉さんに心配させないように出たつもりだったんだけど・・・」

「そっか、（これはチャンス！？）。優勝すると副賞で如月グランドパークのプレオープンペアチケットが貰えるんだけど、行ってみたくないって思ってたから良かったら連れて行ってくれない？」
なるほど。でもそういうことなら……

「それなら、チケットあげようか？ほらそつした方が友達といけるし」

「そ、それはさすがに悪いよ！（それじゃ意味が無いし）それに……」

「それに？」

「……と、とにかく優勝したら連れてってね。約束だよ！」

顔を真っ赤にしながらそう言って向こうに行ってしまった。僕何かしたかなあ？

早めに仕事に戻らないと木下さんに怒られるからなあ……よしっ、早めに復帰しよう！

明久はそれから五分後ぐらいに接客の方に戻った。

数十分後……

「そろそろ時間だな、行こうぜアキ」

「そうだね。それにしても木下さんたち遅いなあ、」
今、雄二&秀吉VS霧島さん&木下さんのペアが戦っていて、僕は2人が帰ってきてから行こうとしている。

「おっ優子からメールだ。・・・アキ、あいつらは今Fクラスにいるらしいぞ。何でも翔子が雄二を待ってるとか言ってるのが遅くなっているらしい。」

「それなら問題ないね。行こう」

「次の相手はつと・・・なんだまたモブかよ」

芳樹はここまで来ても相手はモブという事に正直いららしていた。

僕は四回戦をさつさと終わらせ、Aクラスに戻ろうとしていた。
そんな時・・・

「おう、雄二に秀吉それにムツツリーニ。そんなに慌ててどうした？」

「芳樹と明久か！お前達も協力してほしい。実はFクラスで誘拐騒動がおきた！」

「えっ！何があつたの!？」

誘拐なんて警察沙汰じゃないか！

「詳しい事は後で説明する。攫われたのは姫路、島田姉妹、翔子、

木下優子と工藤愛子の計六人だ。」

プツンッ

工藤さんの名前が挙がった時、僕の中の何かが切れた。

「ねえ、雄二。霧島さんたちはともかく何で工藤さんも巻き込まれたの？」

「ん？ビクッ！ ああ、あいつはメールで木下姉が呼んできた。」
「なんか雄二の反応が気になったけどまあいいや。それにとりなりで芳樹が震えている。誰の名前が挙がったときは分からなかったけど良かった。僕と同じ気持ちみたいだ。」

「ムツツリーニ、そいつらがいる場所、分かるよね？」

「………近くのカラオケボックス。」

「ありがとう。それじゃあ行こうか、芳樹」

「………ああ」

僕と芳樹は走ってそのカラオケボックスまで向かった。後ろで雄二が何かいってたけど気にしない。

………Side in 雄二

「ありがとう。それじゃあ行こうか、芳樹」

「………ああ」

「おい、待て！お前ら・・・ったく」

折角いい作戦を思いついたのにアレじゃペアだ、クソッ。それにしても明久が出してたあの気はなんだ？

「・・・のう雄二」

「なんだ、秀吉？」

「あれは、本当に明久だったのじゃろうか。今まであんな明久は見
た事無いのじゃ」

確かにあそこまで切れた明久は見た事がない。それに芳樹もいつ
もと違ってなんか明久を怖がるような・・・まさかあいつらが・
・

「雄二？」

「んっ。わりいわりいつい考え事をな。それよりお前ら、俺達も早
く行くぞ」

俺、秀吉、ムツツリーニの三人は明久たちを追うように向かった。

第十五話 誘拐騒動！?? (後書き)

春休み中はもしかしたらこれが最後の更新になるかもしれません。

出すとしたら明日出るかどうかです

感想お待ちしております。

第十六話 二人の過去

カラオケボックス・・・Side in 明久

僕は今、芳樹と一緒にカラオケボックス内のある一室の前にいる。ムツリーニが言うにはこらしいけれど、もしもの為に耳打ちしてなかの会話を聞く。

『さてどうする？坂本と木下、長谷川それと 吉井だったか？
そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『いやまて、坂本ってあの悪鬼羅刹の坂本か？』

『それだとまずい。中学時代に相当腕を鳴らしてたって聞くぜ』

『長谷川と吉井ってどっかで聞いたことのある気が・・・』

『とにかく気を付けるのは坂本だ。他の奴らはどうとでもなる』

『依頼はその4人を動けないようにすることなんだろう？特に気にすることもないだろ』

間違いない、こいつらだ。数は少なくとも6人。一応、雄二たちを待ってたほうがいいかな？ そう思っ僕はまた耳打ちをする

『で、このオネーチャンたちどうする？ヤっちゃっていいの？』

『だったら俺はこの巨乳チャンがいいなー!』

『あっ!ズリー!それなら俺二番ね!』

『それにしても笑えたよな。とくにこの黄緑の髪の毛の奴とか散々注意してきたくせに軽く一発殴っただけで気絶しちまったんだぜ』

『他の奴もそうだったろ、ハハッ』

『ごめん雄二、待てそうにないや』

ドガッ、僕と芳樹はドアを蹴り破って中に入る。意外に9人もいた。

「「おっじゃましまーす!」」

『ハア?お前ら誰よ?』

そう言っただけで近づいてくる男が一人。ちょうどいいや

「それでは、失礼して……死にくされやあっ!」

『ゴフッ!』

『てっ、てめえ!ヤスオに何しやがる!ツグハア!』

なんだ、こいつだって一発で倒れんじゃん。人のこと言えないなあ全く

向こうのほうに攫われたみんなが見える。殴られた人もいるみたいだ。

「テメエら、よくもあいつらに手を挙げてくれたな!全員ぶち殺してやる!」

『コイツら、吉井と長谷川って野郎だ!』

『どうしてここが!?!』

『とにかく来ているなら丁度いい!ぶち殺せ!』

『たった2人で調子こいてんじゃねえよ!』

『舐めてんのか!』

一人だったら危なかったかもしれないけどね・・・でも

「テメエらなんか束になったって屁でもねえんだよ!屑どもが!」

『グハア!』 『グホツ』 『グワツ!』

『な、なんだコイツら。たった二人で』

『吉井と長谷川ってもしかして『長月の双頭』か!』

『あの善行から悪行まで二人でできることは何でもやったっていうあの!?!』

『小学生二人で高校生何人がボッコボコにしたらしいぞ』

『坂本よりやばいんじゃない?!』

なんか懐かしい呼び名をしている人たちがいるなあ。まあ今更へこへこしたって許す気はないけどね。

数分後……

僕らの目の前には無数の人たちが転がっていた。久々にいい運動したなあ

「じゃあ、みんなが起きないうちに運ぼうか」

「そうだな」

そんなこといつしていると向こうから三人が駆けつけてくる。

「おせえよ、お前ら。ほら運ぶの手伝ってくれ」

「お主ら……本当に二人でこれ全員相手をしたのか!？」

「当たり前だろ、つつかそんな手応えなかったぜ」

「それにしてもお前らがまさか『長月の双頭』だったとはな。」

「その呼ばれ方は好きじゃないんだ、やめてくれ」

今秀吉たちの相手を芳樹がしている。良かった僕のほうに回らないで……

「こつなつた以上はあのババアをみっちりメてやらないとな」

「ババアって学園長?」

「そうだ。多分今回のことも常夏の邪魔もババアが原因だ」

雄二がそんなことを言っている……ってええ!

「落ち着けアキ、詳しいことは帰ってから教えてやるから」

僕は芳樹になだめられてみんなで一度学園に戻ることにした。

あのババア、ぶっ飛ばす！

第十六話 二人の過去 (後書き)

今回はかなり短めでした。

感想お待ちしております

第十七話 真相 (前書き)

本当に申し訳ございません！

最近、塾があつたり色々とあつて2週間更新できませんでした。

そんな事はともかく徐々にアクセス解析見たらなんと

PVアクセス60000、ユニークアクセス9000 を突破して
ていました！

こんな駄文を呼んでくれた皆様、本当にありがとうございます！
それでははじめます

第十七話 真相

Fクラス……

「遅いなあ、あのババア」

誘拐された女子達を助け出した明久たちはFクラスで学園長を待っていた。芳樹が明久を見ると手が震えている。明久は学園長が黒幕だと思っっているらしく来た途端に殴ろうとしているらしい。

「落ち着け、アキ」ボカッ！

「痛っ！いきなり何するんだよ、芳樹」

この瞬間、芳樹は心の奥でホツとする。自分の呼び方が戻っていたからだ。

「お前、ババアを殴ろうとしてたけど別にあのババアがなんかした訳じゃないぞ」

「まあ、俺達に何か隠してる事は間違いないけどな。なあ芳樹」

そういつて雄二は芳樹をギロリと睨む。雄二は芳樹にも関係あると踏んでいるようだ。するとガラッと音を立ててババアが入ってきた。

「待たせたね、ガキ共」

「早速だが聞かせてもらっぞババア、……真相をな」

「ふむ……やれやれ、賢い奴だとは思っていたけど、まさか

アタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に取り引を持ち掛けられた時からおかしいとは思っていたんだ。あの話だったら、何も俺たちに頼む必要はない。もっと高得点をとれる明久と芳樹みたいな優勝候補を使えば良いからな」

「確かにそうだよな。他にも優勝者と準優勝者に、後から事情を話して譲って貰うとかの手段も取れた筈だし」

雄二と学園長の話の間に明久が入る

「なのに、俺達を擁立するなんて効率が悪すぎる。それとババア、お前に1つの提案をしたのを、覚えているか？」

「科目を決めさせるってヤツかい？ 成程ね、あれでアタシを試したってわけかい？」

「めぼしい参加者全員に同じような提案をしている可能性を考えてな。まあ、この話は芳樹に聞かれたがな」

「じゃあ、芳樹は常夏と関わる前からこの事を知ってたの？」
明久は芳樹に尋ねる

「ああ。けど俺もババアの魂胆は分からずじまいだったけどな。そんなことよりババア、こっちはお前のその魂胆のせいで色々被害にあったんだ。そろそろ話せ」

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったのか……すまなかつたね」

そういつて学園長は頭を下げる。その姿に、明久達も驚きを見せる。

「はあっ……アタシの無能をさらすような話だから、出来れば伏せておきたかったんだけどね……実は優勝商品である『白金の腕輪』に欠陥が見つかったのさ。」

「欠陥？つまりそれは俺や秀吉にだと問題ないって事か」

「そうだよ。仮にこっちの2人が優勝しちまったら腕輪の暴走が起こつちまう」

「低得点者にしか仕えないってことか」

「ちなみに準優勝の商品の『黒金の腕輪』にはそんなことが起こらなかつた。基盤は同じなのに変な事が起こるもんだねえ」

「でもだつたら、誰が優勝してもそんな替わらないんじゃない？起動させなきゃいいんだし」

「久々にアキがバカなこと言ったな。いいかアキ、新技術は使つて見せてナンボだ。デモンストレーションもなしに回収なんてしたら、新技術の存在自体疑われるだろうから、このババアにしてみれば避けた方がいいことだ」

「つまり『優勝の可能性を持つ低得点者』のペアとして雄二と秀吉のペアが最適だつたって事だね。」

「『白金の腕輪』の欠陥は片方からしか見つからなかつたから片方が頭良くてもう片方がバカだつたら問題ないから、別にあんたらでも代わりやしないさ」

「なんだと、ババア!!」

「まあとにかく次の試合も勝って俺たちどちらかのペアが優勝すれば問題ないわけだな。それと今回の営業妨害、誘拐についてはアイツが絡んでる可能性が高い」

芳樹がそういうと学園長と雄二は反応する。

「一体そりゃあ、どういうことだい？」

「ババア、さっき言ったよな『白金の腕輪』と『黒金の腕輪』の基盤は同じって。それも欠陥があったのは片方の片方だけ。こうは考えられないか、アイツが腕輪のプログラムをクラックして暴走を企んだって……」

「ねえ芳樹、アイツって誰？」

「お前は黙つとけアキ。「ひどっ!」そう考えるとこの計画に乗ろうと思うのは一人……ババアを失脚させて乗っ取るうと企んでる……」

「教頭って訳だな」

「一見、芳樹のこの考えは穴だらけだがアイツを知る人にとっては完全な答えだろう(アイツの正体はお楽しみに)」

「じゃあ、教頭先生がみんなをあんな目に遭わせたってことだよな」

「そういう事だ。それとアキ、準決勝の相手は常夏コンビだ。あいつらは教頭側の奴らだからアイツの思惑通り暴走させようと企んでるだろう。だからこそ、絶対勝つぞ!」

「？なんだかよくわからなくなってきたけど頑張るよ！（アイツが誰かわからないけどみんなを酷い目に合わせたのは確かなんだ！絶対勝ってやる！」

そうして召喚大会準決勝が始まる・・・

第十七話 真相 (後書き)

いかがでしたでしょうか

とにかく更新については頑張りますのでよろしくお願ひします！

第十八話 全力勝負！ (前書き)

タイトルが……

第十八話 全力勝負！

大会会場……

『これより召喚大会、準決勝をおこないます。選手は入場してください』ワーワー

立会いの教師の声が響き、選手が入場する。片方からは常夏コンビ、もう片方からは明久と芳樹

「いやー、お前らここまで来るとはな」

「公衆の面前で恥をかかないように、という優しい配慮だったんだがな」

と常夏コンビはけらけら笑いながら話しかけてくる。

「まあ、俺達がAクラスだからあんな小汚いような真似しかしてこなかったって言うなら納得できますね。つーか年下に怖がるとかWWW」

「テメエっ、先輩に向かってなんだその態度は？」

「散々やっておいて先輩面する気ですかこの人たちは。先輩なら先輩らしくしましょうよ、ねえ坊主頭の変態さんWWW」

「ああっ!？」

と、芳樹と坊主の言い合ってる間に明久が常川に話しかける。

「……先輩方、教頭先生に協力した理由はなんですか」

「そうか。事情は分かってるんだな。・・・進学だよ、うまくやれば推薦状を書いてくれるらしいからな。そうすりゃ受験勉強とはおさらばだ」

「WWW評判落ちたとこの推薦状なんて意味ねえだろWWW」

もう芳樹は落ちるとこまで落ちているのは気になさらず、戦いまでは戻っているの（BY作者）

「そうですか。そっちの　常村先輩も同じ理由ですか？」

「まあな」

「・・・そうですか」

『それでは試合に入りましょう！』

「」「」「^{サモン}試獣召喚！」「」「」

『3年Aクラス　常村勇作&夏川俊平　科学412点&408点』

「どうした？俺たちの点数を見て腰が引けたか？」

「科学は得意なんだな。Aクラスでもお目にかかれないうような点数だぜ」

点数が出された途端常夏は舞い上がる。点数などどうでもいいよ
うな顔をしている奴らにここまでいえるのはきつとこいつ等だけだ
ろう。と、ここで明久の口が開く

「……………前に」

「あん？」

「前に、大切な友達が教えてくれた」

「なんだ？晒し者にされた時の逃げ方でも教えてくれたのか？」

「『好きな人の為なら頑張れる』って」

「ハア？コイツ何言ってるんだか」

「僕も最近、心からそう思った」

「2年Aクラス 吉井明久&長谷川芳樹 科学413点&666点」

「「なあ！？」」

「「お前らは全力でブツ倒してやる！」」

「……………」

「アキ、お前よくそこまで上げられたな」

「理数系の科目でほんと助かったよ。もし暗記科目だったら半分も

いってないかも。・・・腕輪はぶつつけ本番だけど早速使わせてもらいますよ先輩方！」

そして明久の腕輪が光る。その光はとどまることなく当たり一面を真っ白に染めた。

「っ！　　へっ？」

「こけおどしかよ！そっちがこないならこっちから行くぜ！」

周りが見えるようになって明久は確認してみても特に変わった様子はなかった。驚いているその隙を付こうと常夏は腕輪を使おうとする。しかし・・・

「何だよ！なんで腕輪が使えねえ！」

「クソッ！こつちもだ。てめえなにをした！」

「・・・もしかしてこれが能力か」

芳樹は確認のため自分も腕輪を使おうとするがやはり反応しない。

「へっ？どういうこと？」

「つまり、お前の腕輪は他の奴の腕輪の効果を消す事が出来るってことだ。制限が範囲か時間は分からないけどな。　　そろそろ行くぞっアキ」

「もちろん！」

「ちっ」

2人はコンビネーションで片方が上手く交わしてもう片方が攻撃など、普通では考えられないほどの操作技術で常夏すら圧倒してい

た。

「どうしてこいつら攻撃があたらねえ！」

常夏もコンビネーションは良く攻撃と回避を2人で行うが、以前『長月の双頭』と呼ばれた二人には無駄な足掻きとしか言いようがなかった。

「これで終わりだ！」

2人がいつせいに木刀を叩き込み相手の召喚獣が消えていった

『勝者、吉井、長谷川ペア！』

ここに決勝に進めるペアが決まった・・・

第十八話 全力勝負！ (後書き)

いかがでしたでしょうか

明久の腕輪、かなりチート級ですよ。操作技術が上手いのを腕輪に組み合わせられないかと考えていたら、思いつきました。本編で出せなかった情報を載せておこうと思います

明久の腕輪の能力・・・

高得点者の証である腕輪を使えなくする。

範囲はそのフィールド内全域。

発動している間は一秒間に二点ずつ減らされていく。いつでも解除できる。

明久は使わないだろうが鬼畜な使い方として相手が使おうとした瞬間に起動しすぐに解除する、という事も出来る

こんな感じでしょうか。芳樹の方はまた腕輪を使いませんでした。これは作者がどんな武器を使わせようか考えていなかったからです (マジすいません!) 使わせたい武器があればジャンジャン言ってください。待ってます!

第十九話くAクラス 一日目終了く(前書き)

最近、更新が一定して来ました。塾のない水曜と土日どちらかの週二回ペースで以降と思います。

第十九話 Aクラス 一日目終了

Aクラス……

常夏を倒した二人はAクラスに戻ってきた。毎回の様に優子にさつさと仕事に付けと命じられ明久はウエイターとして、芳樹は自ら厨房に行つて仕事をしている（アキとの差を気にしているわけじゃない！：本人談）。そんなこんなで……

『ただいまの時刻を持つて、清涼祭の一般公開を終了しました。各クラス、明日に備え今日以上に盛り上げましょう』

一日目終了の放送が流れる。一般の人々が帰り、各クラスが準備をしている中Aクラスでは……

「これより、『清涼祭1日目Aクラス人気投票ランキング』の結果を発表するぞオ！覚悟はいいかお前らア！」

『イエーーーーー！』 パフパフパフ

「なんかノリいいね。つて1学期に想像してたAクラスと全く違うんだけど！どういこと芳樹！」

「ああ、俺がAクラスに入ってきたとき何か雰囲気好ましくなくてな。こういうときぐらい楽しめ、みたいなこと言ったら大体の奴が吹っ切れた。」

『勉強なんてやってられかあ！』

「何かとてつもない事いつてる人もいるね」

「ああ、徹のことだな。あいつ色々抱えてたらしく発散できるところが出来て完全に吹っ切れた」

「メニューについてはここまでだア。次、人気のあつたウエイター、ウエイトレスのランキングいくぞオ！まずウエイターからだ。10位」

「何かこれだけ見てるとFクラスを思い出すよ」

「実際、Fクラスじゃなくてもこのくらいならやると思うけどな。アキ、今のうちにいろんな奴と話しかけたらどうだ？仲良くなれるかもしれないぞ」

「そつだね。早速話しかけて」

「第3位、吉井明久ア！話も掛け易く笑顔がたまらないと評判だったそつだア」『うおおおお！』

「・・・何か呼ばれたけどいった方がいいのかな？」

「うるせえ！さっさと行って友達でも彼女でも作ってこいよ！そんなでもう帰ってくんない！」

「ひどっ！どうしたのいきなり」

そのときの芳樹の目はかすかに潤んでいた：明久談
友達に裏切られた：芳樹談

『そして念願の第1位は

久保利光ウウー！理性にあふれる

姿に女子はみんなメロメロだア！次ウエイトレス行くぞオ！」

『うおおおおお！！』

そんなこんなで数十分後……

明久Side……

「はぁー、つつかれた。」

でも、いろんな人と仲良くなれたしいい1日だったな。明日も頑張らないと。それにしてもあの誘拐騒動とかなんだつたんだろ。芳樹も『日が経てば分かる』とかいってしか教えてくれな「吉井君、吉井君」いし。まあ今は自分にできる事をしよう！「ねえ、聞いているの？」大会も僕達が優勝しても大して代わらないって言うし、頑張つて雄二たちに勝つてやる！

「ねえってば！」

「うわっ！びっくりした。驚かせないでよ工藤さん」

「さつきからずっと呼んでただけど」

工藤さんがムスっとした顔をしてこっちを見ている。

「ごめんごめん、で僕に何か用？」

「……Fクラスで怖い人たちに攫われた時、助けてくれたの吉井君達なんですよ。だからお礼がしたくて」

そういうことが。確かに助けに行っただけど……

「お礼なんていいよ。芳樹がいたからできた事みたいなものだし。それにその時頭に血が上ってたみたいであんまり覚えていないんだ」

「そうなんだ。じゃあ『俺の工藤によくも手を出してくれたな、ぶつ飛ばしてやる!』って言ったのも覚えてないの?」

「ええ!? 僕そんなこといったの!？」

みんなに聞かれてたら恥ずかしくてもうあわせられる顔がない!

「あはは、冗談だよ冗談。本当にからかいがあるね吉井君は。それより明日優勝したら絶対連れて行ってねグランドパーク」

「なんだからかわれただけだったのか・・・良かった。それよりグランドパークって・・・ああ!

「ごめん工藤さん! 実は　　っていう事があった」

「ふ、ふーん。そうなんだノノじゃあしょうがないね。チケットはどうするの?」

「チケットはね・・・ごによごによ」

「つぷ、あはは。それいいね。だ、だったら上げる分は長谷川君たちに任せてそれ使って監視しない?ノノ」

「と、そんな事をいつてきた。なるほど確かにそれなら監視できるし工藤さんも遊べるし一石二鳥だし」

「そうしよっか。そうすれば一石二鳥だし」ニコッ

「ノノノノじゃ、じゃあ決定って言う事で。そ、それじゃばいばい」といって、そそくさ行ってしまった。どうしたんだろう?」

「まあ、いっか」

第十九話　Aクラス　一日目終了（後書き）

AクラスがAクラスとは思えないところを出してみました。今回名前の出た徹も他のオリキャラと一緒に登場させますので（強化合宿あたりで）少々お待ちを。あ、ちなみにアイツとは関係ないので司会はAクラスの悪党、一方通行君ひとがたみちゆきに頼みましたwww出る機会はまた司会としてでしょう

後、明久と愛子の場面。明久は一石二鳥とっていましたが愛子にとっては一石三鳥だったりします。　たちの監視、遊び、それと明久とのウエディング体験、とまあ明久は気づいてないようですが。

感想お待ちしております

第二十話 清涼祭 二日目 (前書き)

どーもー。何とか書きあげました。いつも荒削りな内容になりがち(ほとんど)になってすいません。後今回はバトルシーンの前までになります。

それでははじめます

第二十話 清涼祭 二日目

明久Side……

「ふわぁーあ、なんか眠いや」

僕は今朝早くから学校に来てテストを受けていた。今日が大会の決勝戦だからいつも以上に張り切ってそんなに寝てないんだっけ。そういえばさつき雄二たちが見えた。雄二がにやついてたけど決勝戦で何かされるのかなぁ、……なんか鳥肌立ってきた。テストを受け終わりAクラスに戻るともうみんな来ていて準備を始めていた。芳樹が向こうで木下さんたちと話している。行ってみよう。

「おーい、芳樹！」

「なっ、アキ!? どうして学校に！」

「何でって、今日の大会のためにテストを受けにきたに決まってるじゃん。それより木下さん達、朝大丈夫だった？」

「私は、秀吉と一緒に登校してきたけど特に問題なかったわ。それに何かあっても秀吉が守ってくれるだろうし」

「僕は途中でムツツリー二君たちとあって一緒にきたよ。なんか島田さんを護衛してるようで結構面白かった」

「……何があっても雄二が守ってくれる」

三者三様の答えが返ってきた。みんなあんな事があったのに強いんだなぁ

「それなら良かった。」ニコッ

「アキ、隈凄いいけどしっかり寝てきたのか？」

「いやー、頑張つて勉強してたらいつの間にか朝で……テスト受けたかったしそのまま来ちゃった」

意外そうな顔でみんながこっちを見ている。確かに前の僕だったらそんな事絶対しないと思うから無理もないけどね……

「アキ、向こうにベッドがあるから大会まで寝てきたらどうだ。」

「それだと、みんなに迷惑かかるんじゃない？接客とか任せっぱなしになっちゃうよ」

「そのぐらいなら問題ないだろ。つーか逆に接客ならそんな不衛生な顔じゃ無理だ」

「……それもそうだね。じゃあ、大会の始まる一時間前に起こしてくれない？少しは手伝いたいから」

「わかった」

「じゃあお休み……」

そうして僕は眠りについた……

芳樹Side……

「やっと眠ってくれたか」

「ねえ、吉井君の体を心配してるようだけどアンタは大丈夫なの？」
現在、俺は優子と2人で準備をしながら話している。翔子は先生と話していて愛子はアキの寝顔を見に行った。

「俺は体調管理はしつかりしているからな。あいつは単純だからな、今日寝てこないで来るのは想定していた。それに寝ていてくれた方が何かと都合がいい。」

「そうだ。康太に頼んでアキの寝顔を撮ってもらうか。なんか癪だけど売れそうだし」

「そのことじゃなくてテストの事よ。大会の」

「なんだそつちか。決勝戦は物理だぜ、俺の一番得意な教科だ。とくに戦争があつたわけでもないし700から800ぐらいはあるんじゃないか」

「ぐらいですむ点数じゃないでしょそれ……ただ相手が坂本君だから気になつただけよ」

「そうか……心配してくれてありがとな」ニコッ

「 / / / さ、さつさと手を動かさない!」

「うおっ!なんだいきなり」

「(あーもう、なんでこういうことしかいえないのよ、私!)」

Side Out

その後……

「アキ、準備はいいな」

「もちろん。やれるところまではやってみるよ」

「腕輪の事だけどな、ババアがカバーを取り替えればいいだけの話だから勝ってもいいってさ」

「なんだ、あの時馬鹿にしてたんじゃなくてそういうことだっただね」

『さて皆様、長らくお待たせ致しました！ これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

「よし、始まるぞ」

『出場選手の入場です！』

アナウンスが流れて明久たちは対戦フィールドに向かう。向こうからは雄二と秀吉が出てくる。

盛大な拍手が、4人を出迎える。

『2年Fクラス所属、坂本雄二君と、同じく2年Fクラス所属・木下秀吉君です。なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！ これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれません！』

(あの司会良い事言ってくれるな)

(これなら姫路さんの転校の話もなくなるんじゃない?)

『そして対する選手は、2年Aクラス所属、長谷川芳樹君と、2年Aクラス所属、吉井明久君です。こちらも多くは三年生を抑え勝ち上がってきました！今年の2年生は上も下もいいのでしょうか！』

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは……知り尽くしている事なので明久たちはスルーし雄二たちと話す。』

「雄二たちが敵になるなんてね……まあ試召戦争のときの戦ったけどさ」

「それにしても随分余裕そうだな雄二。俺、物理は一番得意なんだぜ」

「いずれわかるさ。それよりババアから話は聞いてるな？」

「もちろん！全力でいくよ雄二、秀吉！」

「まあそうあわてるな明久よ。逃げるわけないのじゃから、落ち着くのじゃ。」

「相手を心配してどうするんだ？なんか秘策でもあるのか？」

「もちろんあるのじゃ。とっておきの……」

気味の悪い笑みをする秀吉。見た事もない表情に明久たちは驚く

『それでは始めます。科目は物理！……だったのですが先生の不在により急遽日本史になります！』

「なにー！」

二人はいつせいに驚く。それもそのはず、芳樹は物理なら700
〜800とれているし明久も寝る時間を惜しんで（わすれてただけ
なのだが）勉強したのだから。この瞬間に科目が変えられるなんて
思ってもみなかった

「やられた！雄二、てめえのしわざか！」

「俺が学園長に科目の選択権利をもらったのを忘れてたのか。芳樹
は理系が得意って言ってたし明久も全部覚えなくちゃならない日本
史とかより、いくつかの公式を覚えればすむ数学とかの方が得意と
踏んだからな。正直賭けだったんだぜ、明久のほうは」

「悪いの、こっちにも譲れない理由があるんじゃ。そのためなら汚
い手でも使うのじゃ」

「くっ、まあいい。一方的に勝つのももう飽きてきたところだしな」

「ハンデとしてはちょうどいいかもね」

「はっ、抜かせ」

『それでは始めてください！』

「「「「サモン試獣召喚！」「」」」」

『2年Fクラス 坂本雄二&木下秀吉 日本史293点&188点

VS

2年Aクラス 長谷川芳樹&吉井明久 日本史293点&278

『点

「雄二のやつ、ここまで上げたのか」

「当たり前だ。伊達に神童やってたわけじゃねえんだよ」

「秀吉も50点くらい上がってる。結構きついな」

「前に演劇でやったところが出たからの。あとちょっとで200に
いけたのじゃがな」

「まあ、そんな話は後にして……」

「……いくぞ!」「」「」

今ここに、鬨いの火蓋が切って落とされた

第二十話 清涼祭 二日目 (後書き)

感想お待ちしております

第二十一話 召喚大会 決勝戦！前編（前書き）

更新遅くなりました。

今回のSideは心情は出さずに試合の流れを説明するのに使うのであらかじめご了承ください。

第二十一話 召喚大会 決勝戦！前編

「……いくぞっ！」「……」

四人がそう叫んだと同時に明久と芳樹は動く。一丸で攻めてくる二人に対し、雄二は少し芳樹側にずれると秀吉が二人に突っ込み明久と芳樹の間を一線。バランスの崩れた明久と芳樹はすぐ戻ろうとするが雄二が芳樹を、秀吉が明久を邪魔する。こうすることで雄二達は雄二VS芳樹、明久VS秀吉の状況を作り出した。

芳樹Side……

「最初の動きが不自然だったのはこういうことか」

「ああそつだ。お前らは二人でいるとかなり厄介だからな。芳樹、こつからは明久と組もうなんて考えないで手っ取り早く1on1の殴り合いでいこうぜ！」

「乗った！」

二人は接近し互いに攻撃、防御、回避し合う。両者共が高得点のためか完全に防御しても余波の影響でダメージを受ける

『日本史 坂本雄二232点VS長谷川芳樹241点』

「やるじゃねえか」

「お前こそな。いつの間にそんな操作技術を身につけた」
芳樹は雄二に尋ねる。

「……1学期だよ。明久の持っていた『黒金の腕輪』。途中で

壊れちまってしばらくは操作なんて全くしてなかったけどな。この大会のおかげで結構思い出せたぜ。」

「そうか。……ああ、もうまだるっこい！」

そういうと芳樹は召喚獣の持っている木刀を遠くに投げた。

「？、何のつもりだ」

「俺はあーいう獲物を使うより拳の方が得意だからな。それにお前言ったら、殴り合いつて。お望み道理木刀なんか使わないで拳で挑んでやるよ！」

「ハッ、いつでもかかってきやがれ！」

再び召喚獣は交差しあう。しかしこの時、雄二は気づいていなかった。芳樹が投げた木刀の向かった先の事を……

明久Side……

「へえ、僕と芳樹を離してからそれぞれで戦うのか。」

「お主と芳樹はそのコンビネーションである常夏コンビも倒したから。こうでもせんとまともに戦えん」

「でも、秀吉。秀吉の相手が僕でよかったの？」

「当たり前じゃ。雄二には悪いが雄二じゃ明久は倒せんからの。それにわしにとってこれはあの時のリベンジマッチじゃ。今日こそ勝たせてもらっぞい！」

「そつか。でもこつちだつて負けるわけにはいかないんだ！全力でいくよ、秀吉！」

「こちら実力は互角で攻撃、防御、回避のやりあいが続く。そんな時……」

「っ！しまった！」

「もらった！」

秀吉の召喚獣が薙刀から手を離す。その隙を明久が見逃すはずがなく木刀を大きく振るが……

「……なんての。今じゃ！」

「えっ！？ぐわっ！」

秀吉はさつきより短く薙刀を持ち直し、木刀が振り切られる前に明久の召喚獣を先端で切りつける。秀吉の点数も決して低くないため明久の点数は一気に削られた。

『日本史 木下秀吉153点VS吉井明久137点』

「一気に形成逆転じゃの。明久、さつき武器から手を離れたのはただの演技じゃ」

「……はあ……はあ……凄いな秀吉、もうそこまで……使いこなせるように……はあ……はあ……なってるなんて。」

「っ！明久、大丈夫か！」

相手である秀吉が驚いているのも無理はない。なぜなら、秀吉が攻撃したところが出血しているのだから。原因は明久の召喚獣のフールドバックである。今までの戦いでは瞬殺される事が多かったた

め痛みもすぐに消えていったのだが、高得点をとった事により大きいダメージを負ってもダメージを負ったままの状態として生き残るようになってしまった。観察処分者は召喚獣とリンクしているため召喚獣がダメージを負ったままでいると、それが人体の方にも移ってくるのだ（これはこの作品での仕様です。原作や他作品とは無関係なので気をつけてください）

『よ、吉井選手、大丈夫ですか！？』
立会いの教師やアナウンスの人が心配で駆けつけてくる。

「だ、大丈夫ですこのくらい、ぐっ！ひ、秀吉、早く決着をつけよう！」

教師達の手を跳ね除け明久はボロボロになりながらも構えなおす。

「……分かったのじゃ。いくぞ明久！」

これ以上攻撃したくないと思っっている秀吉だが、次で決める事が明久の為になるならと心を押し殺して止めを刺すことを決意した。

「うおおおおおおお！」
二人の召喚獣は急接近する。

Side Out・・・

グサツ、と1つの音が響いた。しかしそれは秀吉の薙刀が明久に刺さった音ではない。明久の木刀が秀吉に刺さった音でもない。それは……

少し前、芳樹の投げた木刀が二人に刺さった音だった。

『日本史 木下秀吉0点VS吉井明久0点』

「なっ!？」

「ごめんね秀吉、ぐっ!。騙すようなことをして」

召喚フィールドはとてもなくその隅と隅で戦っているようなものだったから互いの戦いが干渉されるとは思っても見なかっただろう。

「芳樹、後は任せたよ」バタツ

『大変だ!早く救急車を呼べ!』

明久が倒れて、本来なら大会どころの騒ぎではないのだが・・・

『緊急事態が発生したため試合は一時中「おい、糞アナウンス」止・・・え?』

「アキは・・・この会場に来て観戦してくれている人達に心配かけたくないが為に最後まで戦ったんだぞ。生徒を大事に思う教師ならアキの気持ちを考えて、黙ってみてろ!！」

「・・・雄二、悪かったな決勝なのにこんな形になって」

「お前が謝ることじゃないだろ。明久のことを考えてなかったあのクソババアの責任だ」

「ハッ、それもそうだな。後でしっかり訴えにいくか」

「じゃあ、最終ラウンド・・・」

「いくぞっ！」「」

第二十一話 召喚大会 決勝戦！前編（後書き）

なぜかこんな形になってしまいました。

明久はしっかり復活させますのでご安心ください

続きはGW中に書き終えたいと思います。

それでは

第二十二話 召喚大会 決勝戦！後編（前書き）

結局GW中には間に合いませんでした、すみません

第二十二話 召喚大会 決勝戦！後編

「いくぞっ！！」

二人の召喚獣が再度、接近する。先ほどと違うのは芳樹が木刀を持っていない事だ。簡単に言えばただの殴り合いなのだが簡単だからお互いの操作技術が試される。たった一、二発食らっただけで決着が付いてしまったため普通は回避を優先するのだが、どちらも後を引かず攻撃しあう。拳で拳を受け止める事でダメージを下げるため集中力が先に切れた方が負けになるだろう。

「くっ！」

ここで芳樹が後ろに下がる。

「どうした？こっちのほうが得意なんじゃねえのか、おい。折角メリケンサックも外してやってんのによ」

「うるせえよ、ただあのまんまじゃギリ貧になるだけだからな。・・・折角の召喚獣なんだ、もつと派手に闘ろうぜ雄二！」

ここで芳樹の召喚獣が雄二の召喚獣に向かって飛び上がる。雄二もそれに乗るかのように飛び上がり二つの拳がぶつかり合う。つまり空中戦だ。ぶつかった反動で二人の召喚獣は飛ぶが空中でまた接近しあう（バカテスOVA 祭り下巻の決勝戦みたいな感じです）。何回かぶつかり合った後、召喚獣はボロボロの状態で地上に戻る。

『日本史 坂本雄二38点VS長谷川芳樹41点』

「次で決めるぞ！芳樹！」

「ああ！全力で来い！」

「うおおおおおおお！」
二人の召喚獣は急接近しお互いがお互いの頬を思いっきり殴る。
一瞬眩しい閃光が、などのベタな展開は一切なく、フィールドが沈着する。その後片方の召喚獣が倒れる。

『日本史 坂本雄二0点VS長谷川芳樹1点』

「勝者、2年Aクラス長谷川芳樹！吉井明久！」

立会人の教師がそう宣言し会場からワアアア！という歓声が響く。

「よっしやああああああ！」

「クソ、後ちよつとだったのにな」

芳樹は声を張り上げ、雄二は悔しがりながらもその表情は何か嬉しげな表情であった……

明久Side……

現在明久は保健室で寝ている。担架で運ばれる途中、学園長に『召喚システムの影響による怪我だから』という事で一度学園長室の奥にある研究室で手当てを受けた。今では傷跡も残っていない状態

なのだが疲れが相当溜まつてる状態だったので保健室で休ませる事にしたのだ。看病しているのはもちろん愛子である。

「・・・・・・・・・・・・・・・・う、うーん」

「気が付いた？吉井君」

「・・・・・・・・工藤さん？それにここは・・・」

「保健室だよ。吉井君、決勝戦で無理しちゃって倒れたんだよ。体の方は大丈夫？」

「そっか・・・・・・・・、ありがとう。今まで看病してくれて。大会はどうなったの？」

「うん、長谷川君が坂本君を倒して優勝だよ！優勝！」
愛子は顔を赤くしながら子供のようにはしゃいで、はしゃいではしゃぎまくる。

「どうしたのいきなり？」

「行く約束したじゃん！グラウンドパーク！」

（つまり、ウエディング体験できるってことだよなああ明久君とノノノ）

（そんなに楽しみなんだ。グラウンドパークで遊ぶ事が）
その後、なんて事ない話をしていると

「失礼するよ、糞ガキ」

「ほ、本当に失礼ですね学園長」

学園長が入ってくる。突っ込んだのは愛子である。

「どうしたんですか、クソババア」

「いや、そろそろ表彰式を行いたいからね。呼びにきたのさ。それと・・・さつきはすまなかったね。私の不注意で・・・観察処分者の称号は取り消しにさせてもらったよ。あんたにはもう必要なさそうだしね」

学園長が頭を下げる。まあ今回のことを考えれば当然だろうが

「・・・そうですか、わざわざありがとうございます。もう体も大丈夫ですしすぐに行きます」

「わかった。早く来るんだよ」

そういつと学園長は部屋から出て行った・・・

第二十二話 召喚大会 決勝戦！後編（後書き）

明久が観察処分者じゃなくなった!？

はい、自分でも驚いている作者です。まあすぐにまた学園長に頼んでつけてもらうので心配なさらず。

第二十三話 表彰式と新システム (前書き)

PVアクセス100000、ユニークアクセス14000 突破!

これには書いている自分でも驚きです。

これからもよろしく願います。

それでははじめます。

第二十三話 表彰式と新システム

大会会場……

今表彰式が行われている。ババアの話とかは軽く飛ばし明久、芳樹、雄二、秀吉の四人は舞台の上上がる。

「まずはあんた等からだね。準優勝おめでとう、これが賞状と賞品の『黒金の腕輪』さ。まず、坂本のは『召喚フィールド形成型』、発動キーはアウェイクン。一学期にあのバカに渡したと違って教材は選んでも召喚できなくなるから気をつけな。それとどんなに点数が上がっても故障することはないから安心しな。木下の方は『追加点数型』、発動キーはアレイション。これはこれから全校生徒に話すポイントの分だけ点数を上げられる。ただ最大は250点だから気をつけな……故障しちまうからね」

適当に言ってから賞状と雄二、秀吉に一学期明久がつけていたのと同じ腕輪を渡す。渡されるとき周りからは拍手が送られている。最後のは他の生徒に聞かれなように4人にだけ聞こえるように話す。

「一学期の時も結構役に立ったからな。こいつは嬉しい」

「『追加点数型』か。難しい事は特になさそうじゃが、ポイントとは何じゃ?」

雄二は賞品に満足していて、秀吉はポイントについて考え込む。

「次はあんたらだね。……はあ、まさかまたこのバカが腕輪を持つ事になるとはね。」

「大きなお世話だ！」

「まあいいさ、それだけ実力があるならアレも問題なさそうだからね。はい、これが賞状と賞品の『白金の腕輪』さ。長谷川の方は坂本のと同じ『召喚フィールド形成型』で発動キーも同じアウェイクン。ただ坂本のは違って召喚も出来るし教科も選択できる。それとフィールドの広さが黒金の腕輪より大きい、そんなところだね。馬鹿よしいの方は『召喚獣増加型』発動キーはデイヴィジョン。これは自分の操作する召喚獣の数を増やす。数は選択できるけど増やす分、一体一体の点数も少なくなるし、操作もかなり難しくなるからそこから辺を考えて使っただね。」

「なるほど、こういうところで白金と黒金の差をつけるんだな」

「ねえ、今バカって書いて吉井って読まなかった!？」

芳樹は腕輪の評価をし、明久は突っ込み続ける。

「さて、表彰も終わった事だし・・・学園祭で楽しんでるガキ共!よく聞きな！」

表彰が終わった途端、学園長は学校全体の生徒を呼びかける。

「たった今、召喚大会の準優勝者、優勝者が決まって腕輪を持つ奴が決定した!だが、それだと試召戦争の時そのクラスだけ腕輪を使えるなんて事になっちまって不公平だろう?だから腕輪をゲットできるチャンスをくれてやる!」

『まじか!?!』

『と、学園長太っ腹!』

周りがガヤガヤしてくる。生徒の気を引き付ける事は成功したよ

うだ。と、ここで学園長のもとに何か持ち込まれる。

「今、ここにあるのはお前さんたちの新しい学生手帳さ。この手帳には新しいシステムが搭載されている。その名も『善良学生養成システム』！」

「『善良学生養成システム』？なんだそれは。」

「名前は今適当に決めたんだがね。これはその生徒がどれだけこの学校の良い評判、雰囲気作りに貢献しているかが把握できるシステムで、貢献しているほどポイントが加算される。テストの自己目標の達成や地域の清掃とかが良い例だね。その貯まったポイントに応じた腕輪と交換できる。腕輪以外のものを用意するから競争に興味のない奴もどんどん貯めておいで。ただし、当然悪さをすればポイントはマイナスされる。最悪の場合それで観察処分者になる事もあるから気をつけな。ちなみに拒否権はない！！」

学園長は言い切る。

「なるほど、景品で釣った生徒達で風評回復作戦って事か」

「そりゃあ今まであんた達にこれでもかというほど落とされたからね。」

「学園長、質問じゃがわしの貰った腕輪の効果を使うとその分ポイントは下げられるのか？」

「いや、それはないさね。あとこれからデモンストラーションを行う時一時的にポイントを送るからそれだけ頼んだよ」

「分かったのじゃ」

雄二にあっさり内心を見抜かれ、秀吉の質問に答える学園長

「じゃあ、四人共デモンストレーション頼んだよ」

「……はい！」「……」

「まず俺と雄二だな「アウエイクン！」」

二人を中心に召喚フィールドが展開される。二人はかなり離れているので干渉はしない

「じゃあ召喚するよ」「サモン試獣召喚！」「……」

「デイヴィジョン！」「アデイション！」

キーと唱えると明久の召喚獣が一気に5体に増える。秀吉の方はディスプレイに表示されている点数が100増える

『2年Aクラス 吉井明久 47×5点

2年Fクラス 木下秀吉 89 189点』

パチパチパチと拍手が鳴りデモンストレーションは見事成功した。

第二十三話 表彰式と新システム (後書き)

最近内容が浅いですがやっと次回で清涼祭編が終了できそうです

感想待ってます

第二十四話へ決着、そして打ち上げ（前書き）

愛子の設定を変えることになったので、今までの話をいくつか修正しました。読んでくれた皆様、すいません。ただ突発的に愛子が恋愛関連のことに興味を持つのはおかしいなと思い変えることにしました。

詳しい内情は強化合宿までの間に書く事にします。これからもこの作品をよろしくお願いします。

それでははじめます。

第二十四話　決着、そして打ち上げ

Aクラス……

「優勝おめでとう吉井君、でもあんまり無理はしちやだめよ。あなたが無理をする事で悲しむ人もいるんだから」

「ありがとう木下さん。これからは気をつけるよ」

表彰式の後、Aクラスに戻ってきた明久と芳樹はAクラスから祝杯を受けていた。ただそれぞれに近づいてくるのが明久は女子（思いを寄せるor昨日できた友達）中心、芳樹は男子（友達）中心だったので芳樹はヤケに奥の方にズカズカと歩いていき暴れまわっている。そんな芳樹を見て優子たちは「あはは……」と苦笑いを浮かべるしかなかった。

「そういえば、打ち上げってどこでやる？大会の優勝者もいることだし豪勢なところでやりたいんだけど……」

「それなら……」によ「こによ「こによ「しない？ここからも結構近いしなにより霧島さんが……」

「つぶ、アハハ！それいいわね。ちょうどアレを誘ういいタイミングにもなりそうだし」

「じゃあ決定だね。僕と芳樹は後から行くよ」

「どうして？」

「なんかね、芳樹がやり残した仕事があってそれを手伝うんだ」

「ふーん、まあいいわ。とりあえず遅れないようにね」
わかったよ、とだけ言って明久は芳樹のところに行き我に返させると二人でAクラスから出て行った

「……吉井君と長谷川君でもいけるわね……」
出て行く姿を見て優子+腐メンバーはそう思った……

明久&芳樹Side……

明久と芳樹は今教頭室の前にいる。理由はもちろん決着をつけるためだ。といっても事件の全貌やアイツについて知らない明久は部屋の前で待つだけであった。

「じゃあアキ、ここで待っていてくれ」

「ん、わかった。」

ガチャ、

「失礼します。」

なかにはパソコンと向き合っている男が一人。

「一体なんのようだね。私は今忙しいんだ、後にしてくれ。」
尋ねに来た生徒など興味ないと言うような口調で芳樹に言う。しかし

「……………失敗した、不良を使った誘拐の件の事ですよ。分か
ります。」

と芳樹が言うと教頭は急に目つきが鋭くなる

「それをどこで知った。言え！」

「知るも何も俺達がその不良を倒した張本人だからですよ。……………
何故あなたはアイツの中での優先順位なんかにこだわるんですか？」

「あの方はもう神童なんかではない。この世に舞い降りてきた神そ
のものだ。神に好かれようとして何が悪い。」

「本当の神様だったら優先順位なんかつけませんよ。そもそも人間
の手では届かないからこそ神様なんじゃないですか。そんな神気取
りな奴に従っていて悲しくないんですか？」

「……………うるさい。うるさいうるさいうるさいうるさいうるさ
いうるさああああい！……………神童ですらないような糞ガキが
あの方を侮辱するなああああ！」

緒が切れたのか手元にあつた鋭利な鋏を持って芳樹に襲い掛かっ
てくる。しかし……………

「そこまでだよ！！」

パンツと大きな音を立てて入ってきたのは学園長である。後ろの
方にいるのは明久と数人に警官だった

「残念だったねえ竹村。この部屋には監視カメラと盗聴器両方が付
いていてねえ。あんたが今ここでやろうとした事はすべて丸わかり
だったさ。大丈夫だよ、あんたのいない間に今までやってきたまだ
見つかってない悪事の証拠とか全部みつけてやるからねえ。ま、そ

うしたらもうここには戻ってもこれなそうだけどね」

それだけ言うと学園長は出ていく。両側から警官に取り押さえられている竹村の顔は死んだ魚のようだった。警官が連れて行くところするとき

「……教頭先生」

明久が竹村に話しかける

「……誰だね君は」

「2年Aクラス、吉井明久です」

「そうか、君が吉井明久君か……もういいだろう、私はいく」

そう竹村が言い警官が連れて行くところ

バキィ！！

と言う音があたりに響く。明久が竹村を殴ったのだ。

「ふざけんじゃねえよ！楽しくなるはずだった清涼祭をてめえ一人なんかの都合でみんなは、工藤さんは、傷ついたんだぞ！分かってんのかよ！」

「……」

「分かってんのかって聞いてんだよ！」

無言の竹中にさらにいらついた明久はもう一発殴ろうとするが・

『落ち着け、君！』『やめろアキ！』

それは手のあいた警察官と芳樹によって止められた

「教頭！お前みたいに他人のことを考えないで行動するやつはなあ、なにやったつて神様には選ばれねえんだよ！覚えとけ、糞野郎！」
明久はわめく。この状態のままでは打ち上げに連れて行けないと考えた芳樹は一度学園長室に戻って落ち着かせる事にした。

学園長室

「はあ、早速問題をやらかしたね」

「す、すいません」

すっかり元の状態に戻った明久は学園長に平謝りをする

「まあいいさ。こつちも人手が足りなくなつて困つてたんだよ。と
いうことでこれさね」

？を浮かべた明久は学園長から渡された紙を見る。

『2年Aクラス 吉井明久 このものを観察処分者と認定する』

「ええっ！？ど、どうしてですか！？」

「当たり前前の処置さね。それといなくなった教頭の代わりはお前の姉さんに任せる事にしたからね。アイツ関連のことで有能な人材がいなくなったんだ。それならアイツを知っている奴に任せるのが適任だろう？」

「俺もそれには賛成だ。いざと言うときに使えない奴は困るからな。俺からも頼んでおくよ」

「そつといえばみんな言ってますけどアイツって誰ですか？」

「それは時期が来ればわかるさね、楽しみにしておき。それよりいいのかい？時間は」

「えっ、や、やばい！？早く行こう芳樹！」

「お、おう」

それを最後に二人は部屋から出て行く。

「全く……あの二人にこの学園を任せていいのかね」
ババアはつぶやく

近くの公園……

もうみんな集まっている、FクラスとAクラスの人たちだ。明久と芳樹も途中から合流しさらに盛り上がったのだが……

「あ、明久くうくんどうして最近Fクラスに遊びに来てくれないんですかあ」

「アッキー、あ、暑いから上脱いでいい？」

「姫路さんも工藤さんもいい加減にしてよ！ていうか工藤さん何言

「つてるの!？」

明久は瑞希と愛子にダル絡みされていた。遠くから美波が羨ましそうに、妬ましそうに見ている。

瑞希は酒を間違えて飲んでしまったのだが、愛子は明久にアタックするために自ら飲んだ。次の日二日酔いになっても自業自得である。周りはAクラスとFクラスが混ざって話し合ったりFクラスの男がAクラスの女子にアタックして撃沈していたり、芳樹が優子相手に明久と同じような事になってたり雄二が翔子に追いかけられていたりとなんとも愉快な光景だった。

（なんか、アッキーって懐かしいな。昔、よく遊んでた女の子からそう言われてて確か名前は・・・・・・・・・・・・・・・・つ!）

明久は思わず横を見る。そこには自分に抱きついている幼馴染の女の子二人の寝顔があった・・・・・・

第二十四話、決着、そして打ち上げ（後書き）

はい、ということと愛子につけた新しい設定は明久の幼馴染でした。別にいいよねこの位！というかここまでかいて新しく設定を付け足す自分って・・・orz。まあ明久が気づけなかったのは次回書くという事で。

感想お待ちしております

第二十五話 余談その1 ? 僕と愛ちゃんと工藤さん

打ち上げ後、明久宅……

「……おつ、あつたあつた」

明久は自分の部屋で探し物をしていた。昔のアルバムである。見つけたそれはあまり見ていないためか、周りも中の写真もきれいなままだった。パラパラと捲っていくと写真の中には幼い頃の明久らしき少年と女の子が写っていた。

(……やっぱり気のせいなのかなあ)

その女の子は、髪が長くおとなしそうで今でいう翔子のような感じの子であった。

「アキ君、なにをしているんですか？」

「あ、姉さん。……昔のアルバムを見てたんだよ。姉さんは愛ちゃんって覚えてる？」

「高瀬愛子ちゃんですか、覚えてはいますがその愛ちゃんがどうかしたんですか？」

高瀬^{たかせ}愛子^{あいこ}、それが写真の女の子の名前だった。

そして明久の叶わなかった初恋の相手……明久本人もあまり思い出したくはないだろう。

「ちょっとね……なんか急に思い出したんだよ。二年生ぐらいのときに引越しちゃったんだっけ」

「正確に言うと二年生に入る前です。母さんから昔聞いた話による

と確か親が離婚してここを離れる事になったとか」

「っ!?!、姉さんそれ本当!?!」

知らなかった話を聞いた明久は玲に詰め寄る。明久が引つ越した理由を知らなかったのは両親が教えていなかったからだ、まだ幼ない明久にそのような話はずらいと思つてのことだろう。

「ええ。お母さんと一緒に実家の方に戻ったとか」

「それで!?!その苗字は!」

「そこまでは知りませんよ。それよりなんですかいきなり、姉さんは学校から頼まれた教頭の事で忙しいんですよ。また後でご飯のときにでも話しましょう」

そういつて玲は明久の部屋から出て行く。出て行つた後も明久は考えていた

(.....工藤さんなのかな、だとしても僕はそんなに替わつてないし向こうからなにか言つてきてくれると思つただけだなあ。明日試しに.....でもしてみようかな)

次の日.....

登校中、明久は愛子を見かけたので早速接近する

「あ、おはよう吉井君」

「おはよう、愛ちゃん」

「へっ……ええっ!? / / /」

愛子は顔を赤くしながら驚く。赤くしている時点で気づけるはずなのだが鈍感なので

(この対応からすると愛ちゃんじゃないのかな……)

としか思えなかった。明久が「ごめんね、工藤さん」と言ってから二人はそのまま歩いていく。

「……ねえ吉井君、もしかして思い出してくれたの? 僕のこと」

「へっ? じゃ、じゃあもしかして本当に愛ちゃんなの……?」

疑い半分で明久は尋ねてみる。

「そうだよ! ってもしかしてまだ気づいてなかったの?」

「う、うん。昨日……色々あって、アルバムとか見たけどそれでも実感わかなくて……」

昨日あった事を1から説明していく。その途中

「……でね。それでっでどうしたの工藤さん?」

「(き、昨日の事が思い出せないと思ってたならそんなことしてたの僕!?) / / / いやなんでもないよ。そ、それよりさあもうお互いの事分かってるんだし昔みたいに呼び合わない?(きゃああああ!、何言ってるの僕)」

もう頭がすっかり回らないのか思考と行動が一致しない愛子

「ノノじゃ、じゃあ愛ちゃんて……」

二人は赤くなりまた黙る。……この光景を影で見ているのが一人。

「……明久。俺はな、お前の幸せが許せねんだよ。だからな……楽しみにしとけよ」

その少年もそのまま学校へ向かっていった……

第二十五話く余談その1 ? 僕と愛ちゃんと工藤さんく(後書き)

閑話休題に入りました!

最後の人、皆さんなら分かりますよね?そうなんです、この再開からあの騒動に話をもっていくつもりです。愛子には悪いですが・・・

「作者ああ!」

ん?あ、明ひゲフツ! ゴホツ!

か、感想をおまち・・・ガクツ、チーン

第二十六話 余談その1 ? 僕と愛ちゃんとFFF団

Aクラス・・・ Side in 明久

「おはよ」

「あら、おはよう。愛子、珍しいわね吉井君と一緒にだなんて（顔が嬉しそうだけどなんかあった？）」

僕たちが教室に入ると木下さんはもう学校に来ていて、机に座っていて本を読んでいたみたいだ。かなり早く来たつもりだったんだけどなあ・・・本にはカバーが掛かっていたのでどんな本なのかは分からないけど少し薄めの本だった。朝早く来て本を読んでいるなんて、木下さんは本が好きなんだなあ・・・

「うん、途中であつたから昨日の事とか話しながら来たんだ（えへへ ちよつとね）」

「昨日といえば、打ち上げくらいの時からの記憶がないのよね・・・
・吉井君、何か分かる？」

「い、いや、僕もそんな覚えてないなあ」
「言えない。木下さんもお酒で酔っ払っちゃって芳樹にダルがらみしていただなんて・・・」

「そう、吉井君もあまり覚えてないのね。まあいいわ、愛子詳しく聞かせなさい」

愛ちゃんが木下さんのほうへ向かうとなにやらひそひそ話している。「・・・で、どこまで？」と、少しだけけど声が聞こえてくる。いけない、これはよく言う乙女のトップシークレットという

奴だ。気になるけどそつとしておこつ。

「よしっ！苦手な分野でも勉強しようかな」

数十分後……

「おーす、ってアキが早く来て勉強してるなんて珍しいな」

芳樹が入ってくる。失礼な、けど確かに昔の僕だったら絶対こんなことやらないだろうからね

「おはよう長谷川君、もうHRが始まるから早く席に着きなさい」

「げっ！優子!？」

「人の顔見て何驚いてんのよ!」

「ぎゃあああああああ!」ポキンッ!

………なんか久し振りに見たな、関節技ってかなり痛いんだよね。まあ慣れれば曲がってもすぐに直せるんだけどね（熟練者）。そついえば最近関節技って受けてないなあ、もしかしたらもう戻せないかも。そつだったらごめん、芳樹

ポキンッ!

おお、木下さんも戻せるのか。良かったね芳樹、HRまでに直せて

ガラッ「それではHRを始めま」殺しに行くぞー!」『おおー!』………今のは何だったんでしょか」

遠くから聞こえた声に、ゾワリと寒気を感じた。なんだ、これが

ら僕に何が起こるんだ？高橋先生が教卓に付く

「それでは、HRを始め……」

ドンツ 『吉井明久はいるかあ！』

「どうした、お前らは立ち入り禁止だろ？さっさと帰れ」

ドアが勢い良く開かれるとそこには怪しい覆面をした、集団がいた。そうFFF団だ。僕を呼んでみたいだけどはつきり言っていない。芳樹が軽く足払ってくれるはず！

『長谷川芳樹、ここを通せ。さもなければ学校中にこれをばら撒く。』

「っ！そ、それは……すまんアキ。俺には無理だ、今回ばかりは協力できない」

芳樹が交渉で負けるなんて！あの写真みたいなものは一体……、まさか

『 罪状を読み上げたまえ』

『はっ。えー、被告、吉井明久（以下、この者を甲とする）は我らが教理に反した疑いがあります。本日の朝、甲は同Aクラスの女子生徒である工藤愛子と共に顔を赤くしながら登校していたと、証拠である写真と共にFFF団全員に連絡がありました。写真を見る限り甲と工藤愛子の関係は』

『御託はいい。結論だけいえ』

『出来立てホヤホヤカップルのような行動が羨ましいであります』

『うむ。実にわかりやすい報告だ』

で、出来立てホヤホヤカップルって別に僕と愛ちゃんはそんな関係じゃないよ／＼／＼向こうでは今の話を聞いたAクラスの女子達とFFF団と共に来た姫路さんと美波が愛ちゃんに詰め寄っている。向こうは向こうで危なそうだ。なぜそう思うかというとはつきり言っ
て今、愛ちゃんが泣き目の状態だからだ。昔から愛ちゃんは訳の分からないまま、攻められるとすぐに泣いてしまっていた。

「と、とりあえず、逃げよう愛ちゃん！」

「ふえ、あつ／＼／＼」

僕は愛ちゃんの手を引つ張って教室を飛び出し逃げる

『絶対に逃がすな！』

『おおー！』

「あ、待ちなさいアキッ！」

「明久君、せめて話だけでも！」

絶対逃げ切つてやる！

Side out 明久 & Side in 芳樹……

はあ、こんなことするのはあいつしかいないな。あの野郎、この俺を脅すとはいい度胸じゃねえか

「翔子、行くぞ」

「……………」

「この騒ぎの元凶のところだ。なんだ？旦那さんの調教を俺なんかに任せていいのか？」

「……っ！……わかった、行く。」

さすが翔子、物わかりがいいな

「先生、俺達も抜けませんがHRは勝手にやっちゃっててください。それとアキが被害者だということを忘れなく」

それだけ行つて俺は翔子と一緒にあいつ……もうごまかさなくていいな。雄二のところに向かった……

第二十六話、余談その1 ? 僕と愛ちゃんとFFF団 (後書き)

感想お待ちしております

S i d eの書き方を変えましたがこれからはS i d eの後ろにi n
o u tがあつたらそのキャラの心情を書き、S i d eだけだとそ
のキャラを中心に進めて心情を書かないということになりました。

第二十七話、余談その1 ? 僕達と暴徒達と逃走中!?? (前書き)

今日中に終わらせませす

・・・ラブレターと内容が違うのでどう終らせようかかなり悩み
ました

第二十七話、余談その1 ？ 僕達と暴徒達と逃走中！？

逃走中・・・Side in 明久

「はあ、はあ・・・と、とりあえず撒けたみたいだね、大丈夫？愛ちゃん」

「う、うん。何とか・・・／＼」

今、僕と愛ちゃんはAクラスを抜け、曲がり角や階段を使って追ってくるFFF団（+姫路さん、美波）から逃げている。今頃Fクラスでは、秀吉が一人で鉄人の愚痴を聞いているか自習をしているだろう。愛ちゃんはずっと走ってきたせいか顔が赤い。

「さてと、これからどうしようか・・・。でも話を聞いてもらえない限りどうしようもないんだよなあ」

「・・・あ、あの、アッキー、その・・・手／＼」

「へっ？・・・あつ、ごめん／＼」

そういつて僕は愛ちゃんから手を離す。そうだ、愛ちゃんを連れ出すのに手を握ってたんだけ。とっさの行動とはいえみんなの目の前だったからかなり恥ずかしい・・・

「（・・・き、気まずい）」

シュッ！

「危なっ！もう追いついて・・・ムッツリーニ」

飛んできたかったカッターをギリギリで交わし、飛んできた方向

を見るとそこにはムツツリーニが両手にカッターを持ってそこにいた。

「……………絶対に逃がさない」

ムツツリーニからは他の人とは格の違う殺気が出ている。そうだ、ムツツリーニって愛ちゃんのことか……………でもこんな所でしかも本人もいるのにそんな事を言うのは流石に可哀想だし、なんとか誤魔化しながら話さない……………

「ムツツリーニ、先に言うけど僕と愛ちゃんはただの幼馴染で、別にそんな恋人同士とかそういうのじゃないから。それと、もし逃がしてくれるなら……………」

「……………なんだ」

「姉さんの手から逃れられた至高の本を五冊」

「……………その言葉に嘘はないな」

多分両方の意味で聞いているんだろう。

「もちろん、愛ちゃんのこと事実だし本も渡す」

それだけいって、僕はムツツリーニと握手を交わす。愛ちゃんはその光景を見て何か考え事をしていた。

(やっぱり、アッキーも持ってるんだそういう本。でもこれでその本が減ってくれるならいいのかな。)

それから僕達は、行く当てもなく逃げている。とにかく距離をとらないと。

『いたぞっ!』

見つかった。目の前にいるということとは、さっきムツツリー二に足止めされていたときに向こうの方が先に進んでいたんだろう

「や、やばい! えーと、どこかいい場所は………そうだ!、愛ちゃん着いてきて」

「う、うん。でもどこに行くの?」

「Fクラスだよ。多分、今教室にいるのは秀吉だけだから問題ないはず。それに相手の意表もつけるし、秀吉なら話も聞いてくれる!」
走りながらそれだけ説明して、僕と愛ちゃんはFクラスに向かった……

Side out 明久 & 屋上……芳樹Side

明久たちが逃げまわっている間に芳樹と翔子は、雄二のいる場所、屋上にいた。

「おいてめえ、HRの邪魔した上、俺を脅そうとはいい度胸じゃねえか」

「……お仕置が必要」

「ま、待てお前ら。そういうお前らだって明久と工藤の関係、はっきりさせておきたいだろう?」

「生憎、俺も翔子も工藤からアキについて相談されてる身なんぞな。これ以上、知る必要は……アキの奴、愛子のことを愛ちゃんと呼んでたな。……まあ、今回だけだ。お前の方につくのは」

「感謝する、お前が着けば百人力だ。それよりどうして俺がここだと分かった？」

「……私もいる」

「バカとなんとかは高いところが好きって言うからな。アキがいずれここにくると思っただけ待機してるお前が容易に想像ついた。」

「そうか。それでこの後の事なんだが……」

「……私のことを無視するのは許さない」メキメキ

「ぎゃあああああー!!」

「さてと、……面白くなりそうだな」

芳樹はアイアンクローざれている雄二を無視し（元からそれだけのために翔子を連れてきたのだが）雲ひとつない青空を見てニヤリと笑った。

Fクラス……Side in 明久

「ふう、何とか着いたね。ここなら、つてええ!？」

「さあ、もう逃がさないわよアキ」ニコッ

「たっぷり話を聞かせてもらいますよ明久君」ニコッ

驚くのも無理はない。さっきまでFFF団と共に僕達を追いかけていた美波と姫路さんがFクラスの教室にいたのだから。ちなみに二人の背中には般若と鬼神が見えているため、愛ちゃんは怖がって僕の背中に引っ付いている。

「ど、どうしてここに!？」

「決まってるじゃないですか、明久君のことだからここに来ると思っ
って先に来て待機していたんですよ」

「それより、なんでAクラスの工藤が、そんなにアキにくっついて
いるのよ!」

「ひゃっ!・・・こ、怖いよおアッキー。」

「よしよし、大丈夫だからね。・・・そりゃあ美波たちが怖がらせる
からだよ。愛ちゃんは攻められるのは苦手なんだから。まともに話
も聞いてくれないで、追い回される事になったんだから当然だよ」

僕は後ろに張り付いていた愛ちゃんを前の方に持つてきて、頭を
撫でてあげながら説明する。愛ちゃんも少し落ち着いてきたみたい
だ。

「(・・・う、羨ましい!)」

「二人とも、僕と愛ちゃんは昔の幼馴染でそのことについて知った
のが今日の朝、いつも話してた相手が幼馴染だって気づかなかった

事に恥ずかしくなつて赤くなつただけだからね。」

僕は虚実を上手く混ぜながら説明する。ちなみに、写真の方はムツリーニが見せてくれた。・・・アレは確かに第三者から見たらカップルぽかったなあ・・・／／

「あれ、でも工藤さんなんて小学校の頃いなかったと思うんですけど・・・」

「愛ちゃんの親が離婚しちゃって二年生になる前に遠くに転校したんだよ。僕とはそれより前から会ってる。ちなみにそのときの苗字は高瀬、高瀬愛子なら覚えてる？」

「うーん・・・あつ、あの大人しそうな子ですか!？」

「うん、まあそういうこと。誤解は解けてもらえたかな?それと、あの写真を送った人を教えてほしいんだけど・・・」

ちなみに、ムツリーニは教えてくれなかった。まあ大体予想はつくんだけどね、せめてもの確認を・・・

「坂本(君です)よ」

「ありがとう。それじゃあもう行くね」

やっぱりあいつか、あいつに人としての良心はあるのだろうか。

いや多分僕限定だろう。

どこにいるか考えているとピリリと携帯に着信が入る。・・・

雄二からだ

『雄二:その部屋の盗聴をして、大方話は聞かせてもらった。屋上にいる、さっさと来い』

「・・・挑戦状か、面白いことしてくれるじゃないか」
あの野郎、ぶっ飛ばす！！

第二十七話、余談その1 ? 僕達と暴徒達と逃走中! ? (後書き)

このまま、続けて書きます。

第二十八話 余談その1 ? 僕と雄二と大乱闘！

屋上……

明久が着くと、奥には雄二がいた。周りには翔子、ムツツリー二がいる。盗聴に関してはムツツリー二任していたようだ。明久が雄二に向かう、それに愛子が後ろから着いていく。

「……………雄二、今日はよくもやってくれたね」

「明久、俺は1つだけお前に言いたい事がある」

「なに？早く済ませたいからさっさと行ってくれない」

「俺は……俺はな……………お前の幸せがこの世で一番気に食わないんだ！」

「それが友達に対して言うセリフか!？」

明久が、そつちに気を取られてるうちに後ろから……………

「きゃっ!だ、誰って長谷川君!？」

芳樹が近づいて、愛子を明久から引き離す。

「芳樹!?!なにやってんの!……………さっきもそうだったけどもしかして雄二たちに脅されてる?」

「そのとおりだアキ。すまねえな、こんな事いつもならやりたくねえんだけど、雄二にな……………」

そういつて、芳樹は愛子の服に手を伸ばそうとする。

ちなみにこれは、芳樹が悪ふざけで行っているものである。雄二が『明久が愛子の為にどこまでするかがみたいから、方法は任せる』という事で思いついたのがこれというわけだ。

「ひっ！・・・や・・・やめて」

思わず愛子は泣いてしまふ。これまで何かされても涙目で留まっていたのだが、さすがに限界がきたらしい。思わず目をつぶる。そのとき、バキッ！と音が鳴り、芳樹の手が離れ他の違う人に支えられているのに気づく。目を開けるとそこには自分を支えている明久が見えた。

「ア、アッキー・・・」

「・・・たとえば芳樹でも、愛ちゃんを泣かせるなら許さないよ」
明久はそう言うと、愛子を翔子のところに連れて行き、翔子に「これからの事を見させないで」と、ムツツリーに耳栓を付けさせるように言って愛子を渡し、明久は芳樹に近づいていく。明久が近づくと芳樹は遠ざかる。

「さあ、覚悟は出来てる？」

「（あれ？これ、俺死ぬんじゃない？）い、いやまで、俺は雄二に脅されて仕方なく（すまん、雄二！墓参りにはちゃんと行ってやる）」

「・・・そう。でもね、手を出そうとした事には代わりないんだよ？だから・・・」

明久はサツと近づき、先ほどのとは比べ物にならないくらいのパンチで思いつきりぶん殴る。軽く3mは飛んだだろう

「ガハッ！（雄二、先に行ってる。それと、ごめん・・・）」

「これだけで許してあげる。．．さてと、人の友達を脅したあげくその友達を使って愛ちゃんに手を出さすなんて．．．I k ill you OK?」

「ノ、ノーぎゃあああああああああああああああああああ！
！」

屋上で起こった悲劇の悲鳴は学園中に響き渡った．．．

数分後．．．

「．．．．．ふう、霧島さんなんか、やらせたい事ある？」

「．．．．．い、いやいい」

あれだけやったのにまだやろうとするところに翔子でさえ身震いした。愛子はアイマスク+高級耳栓を装備しているため？を頭に浮かべる。ムツツリーニは隅で震えている。

「じゃあ、他にはつと．．．」

『吉井覚悟！ってなんだこの状況は!?!』

「あつちようど良かった。君達も、愛ちゃんを怖がらせたよね？だから．．．」

『『『ひっ、ぎゃあああああああ!?!?!』』』

悲劇は再度、屋上で起こった・・・

第二十八話〜余談その1 ? 僕と雄二と大乱闘!〜 (後書き)

はい、明久無双です。

別にいいですよ、このくらい。原作や他の作品だともっと酷い事やられてるのもありますし……

次回は如月グランドパークではなく、その前にAクラスの日常的なことがアキちゃん、ヨシコちゃん関連の話を書こうと思います。

感想お待ちしております

第二十九話〈余談その2〉? 過去と決意と惨劇後(前書き)

日常といっても、いつものメンバーでの話とAクラスのキャラを2、3人出す程度ですが……

それと、〜と〜と、というタイトルのつけ方は閑話休題が終わったら終

わると思います

よろしく願います

第二十九話く余談その2ー？ 過去と決意と惨劇後く

Aクラス……

あの悲劇の後、明久、愛子、翔子はAクラスに、ムッツリーニはFクラスに戻っていった。Aクラスでは明久と愛子が、クラスの女子達に問い詰められ、Fクラスでは秀吉、ムッツリーニ、美波、姫路のたつた四人で授業を受ける事になった。……書かれなかつた者たちは保健室、もしくはまだ屋上で放置である(23話で付ける事になったポイントが減つたのは言うまでもない)。……そんなこんなで昼休み。

「長谷川君はまだ戻ってこないの？」

「うん。僕が殴つた後に地面に思いつきり頭を打ち付けたらしくて、あれからずっと保健室で寝てる」

「……ちなみに雄二も」

明久、優子、翔子の3人で昼ご飯を食べている。明久と愛子の関係(幼馴染)を知つた(明久思い)の女子達が一緒に食べようと誘つてきたのだが、なぜ明久が愛子に対してそこまでするのか知りたくなつた優子と翔子が取ってしまった。その女子達は今度は愛子に迫り過去にあつた話を話すことになり今は話さない。

「モグモグ……ゴクン。吉井君そろそろ聞きたいんだけど」

「ん？なにを」

「愛子の事よ。どうして吉井君は愛子の事になると相手が長谷川君

でも殴れるの？もしかして愛子の事が昔から好きだったの？」

「うーんとなんていうのかな……ちよつと長くなるけどいい？」

「別にいいわよ。ね、代表」

「……うん」

「じゃあ話すよ。……愛ちゃんとは本当に古い頃からの友達でね、気づいたら毎日のように愛ちゃんと遊んでたんだ。僕、ヒーローとかそういうのが小さい頃大好きでさ、愛ちゃんをそのヒーローみたいにかっこよく守れたらなあとかずっと思ってたさ。そんな楽しい日が続いてあの日……遠くに転校する事が決まったとき愛ちゃんはさ……泣いてたんだよ、ずつとね……。そのときに自分の無力さを知ったよ。アニメみたいにみんなは守れなくても、一人だけ……愛ちゃんだけなら守れるって思ってたのに、悩みも聞いてあげられないで……。そのときの自分は本当にバカだったよ」

「で、でも愛子の転校って親の離婚の所為なわけで、吉井君はぜんぜん関係なかったんでしょ」

「それでもだよ。まあとにかくそんなことがあって思ったんだ。自分に守れるだけ力がなかったから愛ちゃんを助けてあげられなかったって。手紙のやり取りとかしてる度にまた会いたって何回も思ったよ。でもその時に会えたって、また前みたいに守れないでそんな悲しい別れ方をして終わってしまう。だから、決意として神様に頼んだんだ。愛ちゃんと会えるときまでに強くなるから、強くなつたその時にもう一度愛ちゃんに会わせて下さいって。それで今、自

分に愛ちゃんを守れるだけの力があるかどうかは分からないけど、たとえ世界中の人を敵に回しても、自分が死んでも愛ちゃんだけは守るってさつき逃げてるとき改めて誓ったんだ。まあ愛ちゃんからしたらただのお節介だとしてもね。・・・これで全部かな」

「そう、ありがとうね吉井君。きっと愛子も喜ぶわ。でもね、自分が死んでもとかそんな悲しい事は言わないで。前にも言ったけどあなたが傷つく事で悲しむ人がいるんだから。」

「・・・うん。わかった」

明久は全部打ち明け少しホツとする。それと同時に翔子が立ち上がってどこかに行こうとする

「代表？どこに行くの」

「・・・雄二のところ、もう起きてると思うから・・・吉井」

「なあに、霧島さん」

「・・・あなたも、早く思いを伝えて私達みたいになるといい」

「ぶっ！？何言ってるのさ！それにこれは僕の一方的な・・・」

ここまで言いかけると二人はあきれた顔で明久を見る

「・・・はあ」

「なに、僕の知らないところで何が起ってるの！？というか良いの木下さん、霧島さんに着いて行かなくて」

「私が何で、代表に着いて行かなくちゃならないのよ」

「えっ、だって保健室には芳樹もいるんだから……」

「ちょ、ちょっとなんで貴方がそれを……」

「いつも話してる時の態度とかを見ててそうかなあとは思っていたけど、まさか本当だとは……」

「　　っ！／＼／＼よくも私を嵌めたわね！」

明久は優子にカマをかけたのだ。愛子のときもそうだったが明久はそういうのは上手い。恥ずかしくなった優子は明久のうでを持ち、間接を逆に曲げようとす。

「えっ、これはもしかや普段芳樹にやってる（ポキンッ！）ぎゃあああああああ！　　よっと（ポキンッ！）、まあ僕も美波にやられなれてるからね、このくらいは」

「……私のに気づくくらいなら愛子のに気づいてあげなさいって……」

「愛ちゃん？どうしてここで愛ちゃんが出てくるの？」

「もういい！さっさと行くわよ！」

そういつて、明久を引っ張って翔子に着いて行く。……途中で愛子を拾うのを忘れずに……

「うーん、はっ！」

優子が芳樹に近づくと芳樹は急に目を覚ました。周りを見るとこは保健室。となりのベットもついさっきまで使ってたようだ。

「良かった、気がついた？長谷川君」

「……優子か」

「一体誰だと思ったのよ」

「いや、寝込みを襲いにきたアキかと……」

まだ明久に対する、恐怖が少し残っているらしい

「別に、吉井君ももう怒ってなかったわよ。さっさと顔出してきた

ら

「……いや、いい。今回の事は俺が全面的に悪いんだし……」

「・

「どうして？坂本君に脅されてやったんじゃないの？」

「いや、確かに雄二に頼まれてやったんだが、あのやり方は俺が決めたんだ。……アキの愛子と会ったときの話は聞いたか？」

「ええ。それがどうかしたの？」

「俺は知ってたんだ、どれだけアキがその愛子を思っていたかを。小学校の頃、アキが話してくれたとき、俺は怖くなったよ。どうしてこいつはその1つにここまで出来るんだってな。……アキの言ってる強さって何か分かるか？」

「知らないわよそんなの……腕力や知恵とか？」

「違う。あいつが求めてたのは『人間性』だ。腕力、知恵もある意味含まれるがそれだけじゃない。前に話したる？アキは家事全般得意だつて。後に玲さんから聞いたんだがあれも全部アキが自分からやってたみたいでな。あいつは、自分の抱える負担も愛子の抱える負担も全部一人で背負う気だったんだ。だから……あの時あいつは……アキは本気で死にかけた」

「つええ！死にかけたつて吉井君が！？あの時つていつの事よ」

「すまん、それは俺とアキだけの秘密なんだ、絶対に教えられない。話を戻すが、俺は……アキの事なんて全然分かつちやいなかったんだ。ただ、話を聞いただけで理解していい気になった。……それだけだ。」

沈黙が続く中、優子が声に出す

「……あんたも、あんまり一人で背負うとするんじゃないわよ。」

「はあ？お前話を聞いてたか俺はだ……」

「あんただつて吉井君に罪悪感を感じてる。ただ、吉井君が怖くて謝りにいけない。そうでしょ。」

「うつ……」

「だったら私や愛子、Aクラスのみんなも頼んなさい。出来る限りフォローだつてしてあげるし、殴られそうになったら止めだつて

いける。確かに吉井君が怒るのも無理はないけど、そういうことを
しっかり受け止めあって初めて友達なんじゃないか」
芳樹の背中をポンポンと優子はたたく。

「……………優子」

「なあに？ってひゃ／＼／」

芳樹は後ろから優子に抱きつく。優子も嫌そうな顔はしてないが
流石に急だったので驚いたようだ

「……………もう少しこのままでいいか」

「……………うん／＼／」

少し甘い空気が保健室に漂った……………

第二十九話〈余談その2〉？ 過去と決意と惨劇後（後書き）

芳樹×優子を全く出してないなあと思って書きました。

この作品の優子、少し他人を諭す感じが強いですね。まあ、上手く芳樹×優子になってくれればいいのですが……

次回は、明久×愛子、雄二×翔子を出して、出来たらAクラスのキヤラも出そうかなと思います。

これからもよろしく願います。

第三十話 余談その2ー？ 芳樹と木下さんと保健室（前書き）

雄二×翔子、明久×愛子無しにして先に進め、Aクラスのキャラを出す事にしました（Aキャラの方は次になります）どうせ雄二×翔子、明久×愛子なんて如月グランドパーク編で嫌でも見られますしね

アニメでは如月グランドパーク、原作では如月ハイランド。これって何か違いはあるのでしょうか。

第三十話 余談その2ー？ 芳樹と木下さんと保健室

保健室付近……

ここでは雄二を含む明久達が中での状況を見ていた。そもそも芳樹の所に優子が一人で行ったのは翔子、愛子、明久が勧めたからである。保健室に行ったとき、すでに雄二は起きていて明久とはいっものようにすぐに和解した。……ある意味での恐怖を植えつけられた事には変わりはないのだが。今回の事から雄二は明久を弄る時はなるべく愛子を巻き込まない事を決心したという。そんなこんなで

「おおー、芳樹の奴やるな」

「……優子の方もなんとなく嬉しそう」

「嬉しさ半分、恥ずかしさ半分ってところかな」

「ねえ、僕にも見せてよ！」

それぞれが芳樹が優子に抱きついたところで感想を上げる。……最も明久は見れてないようだが。明久は見るために頑張って雄二をどかさうとする。がそれが仇となり……

「……うわ（きゃあ）っ！！」「……」

四人はいつせいに転んでしまう。軽くトリップしていたがその音に気づいて優子はさっと芳樹をどかし、音のなった方向を見る

「あっちゃー、ばれちゃった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「テメエの所為だ明久」

「雄二がさつさとどいてくれなかったのが悪いんじゃないか」

「っ！／＼／＼・・・・・・・・・・あ、あんたたちいつから見えたのよ！
！／＼／」

優子はさつきより顔が赤くなり、明久達に問う

「・・・・・・・・・・最初から・・・・・・・・・・雄二もしてほしい？」

「いや、全力でお断りだ。ガシツ お、おいだからなお前そんな事
でぎゃあああああ！！」

「僕は何にも見れなかったけどね」

「（まあ、良かったんじゃない。ヨッシーの方からあんな事させて
もらえるなんて）」

翔子たちはそこでしゃべるが、愛子は優子の方に近寄り優子にだ
け聞こえるように話す。優子は顔がさらに赤くなるが、冷静さを取
り戻し

「（愛子だって吉井君にしてもらいたいんですよ。て言うかヨッシ
ーって何よ）」
と言り返す。

「（そ、そりゃあ違うといたら嘘になるかな・・・・・・・・・・ヨッシ
ーって言うのはアッキーに気づいてもらえてからアッキーにだけア
ッキーってあだ名で呼ぶのはおかしいなと思って考えたんだ。）」

「（ふうん、なんか緑の恐竜を思い浮かべるけど……。とにかく本人に了承は貰っておきなさいよ）」

「？、二人ともなに話してるの？」

「な、なんでもないよ！！／／」 「なんでもないわ」

「……俺を無視するな」

「あ、芳樹。そろそろ昼休みも終わるから早めに戻ろう」

「おう、そうだな。……アキ、すまなかった」

「いいよもう、過ぎた事だし。ってなに？なんでそんなため息ついてるの」

「はぁー、（何であんなに考えてたんだろう俺）」

優子に言われ、明久に向き合って謝罪をした芳樹だったが、あっさりと許してくれたため逆にバカらしくなった

「まあ、いいや。とっとと行こうぜ。雄二、また後で」

「ああ。そうだ翔子」

「……何？」

「（明久の話を録音したやつ、後で渡せよ）」

「（……わかってる）」

ちなみに、一話前に話した明久についての事は雄二が先に渡して
いて録音済みである

「じゃあ行こつ アッキー」

「ちょ、ちょっと愛ちゃん、あまり手を引つ張らないでよ
明久達はAクラスに戻っていった・・・」

第三十話 余談その2-1? 芳樹と木下さんと保健室 (後書き)

後ろから怪電波を流す兄の所為でかなりggdgd + 極短めになりました。すみません

残りは明日? 書きます

感想お待ちしております

第三十一話 余談その2ー？ 僕とAクラスと新キャラ紹介

Aクラス……

「ふう、全くひでえめに遭ったぜ」

「ホントに反省とかしないのね、Fクラスの人たちって」

芳樹と優子は明久たちより先にAクラスに戻ってきていた。それと言つのもあの後、いつの間にか復帰していたFクラスの異端審問会に見つかり、手を繋いでいた明久と愛子に巻き込まれるような形でこの二人も追いかけていた。途中で明久たちと別れ戻ってきたのである。ちなみに翔子はドサクサに紛れ雄二のところに行ってしまった。……どれだけ旦那思いなのだろうか

「多分ああなつて来ると姫路と島田も参加するだろうな」

「あの二人がいる限り、愛子の恋も叶わないのね。……それにしても、何で吉井君ってあんなにやられてるのに、縁を切るとかそういうことをしないのかしら。私だったら即そうするわ」

「逆らえないだけだろ、きつと」

二人で苦笑いしていると奥の方から三人、芳樹たちに寄ってくる

「おっす、久しぶりだな芳樹」

「それにしても、お前が木下と二人でいるのは珍しいな」

「もしかして……どうだった優ちゃん。愛しの芳樹君との時間は？」

三人、二人は男子で一人は女子だ。

「おつ聡、お前体はもう大丈夫なのか」「ちょ、ちょっと何言ってるのよ美由／＼」

「おう、流石にこれ以上休んでたら次の大会に間に合わないな。」「その顔は何かあったって顔だね」。詳しく聞かせなさいっ」

「……俺を無視しないでくれ」

ちなみに、この無視された男子は徹という（19話に出てきました）。優子は美由に指摘されると先ほどのことを思い出し顔が赤くなる。しばらくすると、明久と愛子が帰ってくる。愛子は先ほど女子に質問されまくっていたところを優子に連れて行かれ、さらに戻ってきたときに手を繋いでいたため、再度女子達に連れて行かれた。……

「ただいまー、って芳樹、一緒にいるのは……宮野さんと江崎さんと……誰？」

あまり話さなくても一応Aクラスの人全員覚えているのだが一人だけ見た事のない人がいた。

「戻ってきたかアキ。こいつは河野聡。夏休みに部活で足を怪我しなくて入院してたんだ」

「河野聡だ。よろしく、お前は吉井明久でいいんだよな」

「えっ、なんで僕の事知ってるの？」

「そりゃあ、学園一のバカって評判じゃんお前」

「失礼な、確かに自覚はあるけどさ。……とりあえずよろしくね河野君」

「俺の事は聡でいい。俺も明久って呼ぶから」

「うん、わかった」

「……俺を無視しないでくれえ」

「うわっ！ 徹、お前いつからここにいた!？」

ここで先ほどから無視され続けてきた徹が声を出す。芳樹は本当に気づいてなかったかのように声を上げる

「いたよ最初っから。……改めて自己紹介する。俺は宮野徹、俺の事も名前がいい。よろしくな明久」

「うん、よろしくね徹」

「あゝ、聡も徹もなに私のいない間に自己紹介済ませちゃってんの」
「ここで、少し離れていた美由と優子が戻ってくる。」

「わりいな、先に済ませちゃった。って言うかお前と徹は一応自己紹介はしといてあるんだろ？」

「あるけどさゝ、詳しい事は聡が戻ってきたらと思ってたんだもん……えゝと改めて、江崎美由です。部活はこの二人と同じ陸上部で好きなことはお菓子作りだよ。家が隣町で喫茶店やってるか
らよかつたらきてね。」

「うん、今度行かしてもらおうよ。よろしくね江崎さん」
一通り自己紹介をし終わると、美由はじつと、品定めするような目で明久を見る

(・・・顔もルツクスも上々、性格も温和で基本的に悪いとこはない・・・か、愛ちゃんも大変だねえ)

「?、どうかしたの江崎さん」

「なんでもないよ。それより愛ちゃんは?」

「向こうの方で、なんか色々僕との関係について聞いてるみたい。女子ってそういう話が好きだね。別に付き合ってるとかそんなわけじゃないのに」

(・・・駄目だこの人、色恋沙汰に関しては全くといったの唐変木だ)

愛子が戻ってきてみんなと話をしようとする、昼休み終了のチャイムが鳴る

「もう昼休みも終わりか、じゃあみんなまた後で」

「oooooooooooo」

「・・・・・・・・ええ、そんなのないよ」グスンッ

そそくさと席に戻るみんなに対し、一人悲しくなってくる愛子であつた・・・

第三十一話、余談その2-1？ 僕とAクラスと新キャラ紹介（後書き）

こんな感じで、その2は終わりにさせていただきます

三人の紹介だけ済ましたら、次はいよいよ如月グランドパーク編です。ここにはこの三人は出てきません・・・何の為に出したのだろうか

感想よろしくお願いします

オリキャラ紹介その2（前書き）

前回紹介した三人+とある一人について詳しく説明します

オリキャラ紹介その2

河野 聡

2年Aクラス所属 陸上部 好きな事は走る事

夏休みの部活の練習中に怪我をして今の今まで病院に入院していた。同じ新キャラの宮野徹とは中学からの幼馴染。ちなみに部活ではエース。

成績はAクラスの真ん中ぐらい、実技の体育ではトップクラス（筆記では基本的に保健の内容の方が多いので保体としては上の中）イメージとしてはペルソナ3の早瀬護（主人公の星のコミュ）・・・かな

髪の色、形も早瀬のような感じ。

腕輪は康太の『加速』に似た足腰中心の『肉体強化』

宮野 徹

2年Aクラス所属 陸上部 好きな事は兄弟（妹）や友達と遊ぶ事
基本的に影が薄い。同じ新キャラの河野聡とは幼馴染。

成績は、Aクラスでは底辺に近い。Aクラスに入れたのは聡と美由のおかげ

部活でもそこまですごい結果は残せていない。

それというのも、家が母子家庭で下の兄弟（妹）が3人いるので、部活にも殆ど出ないでアルバイトをしている。文月学園に入ってきたのも学費が安いからという理由。よくAクラスで貰えるお菓子を

兄弟のために持ち帰ったりしている（先生には秘密だが、友達には同情を受ける）。バイトや勉強で疲労が溜まりすぎると、19話の様に思いつきり本音をぶちまける。

イメージとしてはペルソナ3の友近健二（男主人公の魔術師のコミコ）・・・かな

髪の色、形も友近のような感じ

江崎 美由

2年Aクラス所属 陸上部 好きな事はお菓子作り（あくまでも自分の手で）

の二人とは陸上部で会う。木下姉弟とは中学校からの仲、特に優子とは同じ仲間（腐）としてかなり仲が良い。（秀吉については悪戯目的で女子と見ている）

成績はトップレベル、10位以内には入れるが5位以内には入った事がない。

先日の清涼祭のとき、明久と芳樹のお菓子を食べて撃沈すると同時にその味を乗り越えると決意を固める。家は隣町で喫茶店をやっている、清水父のような変態ではないのでアルバイトや弟子入りする人も多い（ほどの味）・・・二人をBL関係で見ているのは内緒

イメージは・・・なんたる、ISの鈴からツンを抜いてのほほんさんを足した感じ？髪はそこまで違和感のないオレンジで女子としては少し短め

ひとかた
みちゆき
一方 通行

2年Aクラス所属 出した理由はネタ。

現在、とあるなどのラノベは出ている設定なのでこの後どうしようかと悩んでいる

この作品には司会として出る事が多い（もしかしたら、他のところでも出る）。

腕輪は皆さんお分かりのように『反射』（ベクトル変換はずるい）

オリキャラ紹介その2（後書き）

とりあえずこんなところでしょうか。徹と美由の腕輪はまだ決まっていますませんが、強化合宿では出す予定なので……お楽しみに
ダッ

これからもよろしく願います

第三十二話 余談その3 I Side 雄二？ とある不幸なオレの朝 (前書き)

とうとう、タイトルにもネタが尽き、元に戻ってしまいました・・・

・・・ここからは雄二と明久で分けるつもりだったので別にいいですよ (開き直し)

第三十二話 余談その3 Side 雄二？ とある不幸なオレの朝

坂本家・・・Side in 雄二

とある休日の朝。カーテンの隙間から差し込む陽の光と雀の鳴き声で目を覚ますと、

「・・・雄二、おはよう」

俺のベットの脇に翔子がいた。

「・・・今日はいい天気」

「ん？ああ、そうみたいだな」

強い光に目を細めながら、まじまじと幼なじみの姿を見る。今日は休日だからか、さすがにいつもの制服姿ではないようだ。上は白い長袖のガーディガンで、その下に薄いピンクのカットソーを着ている。下は薄手の膝上程度のスカートで、下着が透けないためのインナーが中に見える。ペチコートとかいうやつだったか？いつもはTシャツにジーンズやデニムのミニをあわせている格好なので、今日はこいつにしてはずいぶんと気合の入っている格好だと言えるだろう。なんて、柄にもなくファッション観察をしている自分に驚く。寝ぼけているのかもしれない。眠気を振り払うように頭を大きく振って、翔子に向き直る。

「あらためて、おはよう。翔子」

「・・・うん。おはよう雄二」

「よいしょ、っと」

布団を押し分け、ベットから出る。そういえば、どうして翔子が俺の部屋にいるんだ？今日はコイツと何かの約束をしていたっけ？寝起きのため本調子には程遠い頭で記憶を掘り返す。ダメだ。覚えがない。覚えがないのなら、約束ではないだろう。だとすると・・・。ほかの理由を考えて、一つの結論にたどり着く。そうか、そういうことか。

「悪い翔子。俺の携帯とつてくれ」

「・・・電話でもするの？」

「ああ、そうだ」

翔子が渡してくれた携帯を操作し、番号をプッシュする。コイツがここにいること。それは

「ああもしもし？警察ですか？」

不法侵入だ。

ドドドドドドドドドド！ ガチャッ！

「おふくろっ！ どういうことだっ！」

「あら雄二。おはよう」

キッチンに駆け込むと、おふくろは流しで洗い物をしながら朝の挨拶をしてきた。

「おはようじゃねえっ！ どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！ おかげで俺は警察のオツサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちゃっただろうが！」

幼なじみが無断で俺を起こしに部屋に入ってきた、と告げたときの相手の反応は俺の心に深い傷を残してくれた。寝ぼけていたとはいえ、一生の不覚だ。

「・・・え？」

俺の言葉をつけて、おふくろが何度か大きな瞳を瞬かせる。もうすぐ四十歳になるうかというのに、その仕草は子供っぽかった。持ち前の童顔もあるせいか、おふくろは実際の年齢よりも若く見られる。『よく女子大生に間違えられちゃうんだから！』というのは本人の談。さすがに女子大生は無理があるだろ。

「翔子ちゃんが・・・・・・？」

おふくろが頬に手を当てて困ったような顔する。この態度、もしや翔子単独の行動か？ おふくろの手引きじゃないのか？ もしそうだとしたら、いきなり朝から怒鳴るのは少々浅慮だったかもしれない。

「ああいや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に上げたものだと」

「もう、翔子ちゃんってば奥手ねえ。折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんて勿体な　　あら雄二。どうしてお母さんの顔を驚掴みにするのかしら？」

「やっぱり、アンタのせいか・・・！」

この母親には一度きっかり常識を教えてやるべきだろう。

「・・・・・・・・雄二。お義母さんを虐めちゃダメ」

「止めるな翔子。俺は息子としてこの母親の再教育をしないとけないんだ」

遅れて現れた翔子が俺の腕を掴んで邪魔してくる。なんとなく、翔子の言う『お母さん』の発言が普通と違うような気がするが、そこはツッコまないほうが安全だろう。

「・・・・・・・・言うことを聞かないと、この本をお義母さんと一緒に読む」

「ま、待てっ！それは女子共の読むものじゃない！早くこっちに寄越すんだ！」

翔子を取り出したのはA4サイズの冊子。くっ、よりもよつてあの本か！ムツツリーニですら唸らせた至高の一冊が見つかるなんて最悪の事態だ！っていかどうやって見つけ出したんだ！？一緒に暮らしているおふくろでさえわからないような場所に隠したはずだぞ！？

「あら翔子ちゃん。それは雄二が世界史の資料集の表紙をかぶせて机の三番目の引き出しの二重底の下に隠してある秘密の本じゃない？」

「わ、わかった。おふくろは開放しよう」
言われた通りアイアンクローを取りやめる。なんて汚い脅迫なんだ。

「……そう。それなら、この本は
くそつ。取り返したら今度こそ絶対に見つからないように隠して
やる。いつそのこと鍵でもつけて嚴重に

「燃やすだけで許してあげる」

「すまん翔子。どう考えてもそれは許された時の対応じゃない」
普通は許してくれたのならその本を返してくれるはずだ。

「……じゃあ、この本を燃やしても許さない」

「燃やさないという選択肢はないのか!？」

「ふふつ。相変わらず二人は仲良しねえ」

小学校からの付き合つになるが、たまにコイツの考えについていけなくなる。解放したおふくろはおふくろで特に慌てた様子もなく、最後の洗い物を終えてエプロンで手を吹いていた。なんともマイペースな母親だ。

「俺にはこれが仲の良い光景とは全然おもえないんだが……」

「あら、そつかしら?」

「やれやれ……。んで、どうして翔子が来てるんだ？」

「……………約束」

「約束？今日俺となにか約束をしていたか？」

そんなもの俺はした覚えがないんだが

「……………うん」

いつもの調子で頷いてポケットから小さな紙切れを取り出す翔子。どうやら何かのチケットのようだ。え〜っと……………

「あら。如月グランドパークのオープンチケット？しかもプレミアムって書いてあるから特別なチケットなんじゃないの？凄いわ翔子ちゃん、よくこんなもの手に入ったわね〜」

「……………優しい人がくれた」

「そう。良かったわね〜。あら、雄二？どこに電話してるの？」

「ちよつとガス野郎に用ができたんだ」

携帯電話の番号通知をOFFにして明久の番号を呼び出す。数票の呼び出し音の後、怨敵は軽快な声で電話に出た。

『はいもしもし？どちらさまですか？』

「……………キサマヲコロス」

『えっ！？なにになに！？本当に誰！？メチャクチャ怖』

電話の向こうで狼狽する声を聞きながら通話を切ると、少しだけ

気分が晴れた。

「……………雄二、行くろう？」

「絶対に嫌だ」

翔子が俺の手をそつと握ってくる。これが普通のアマチュアズメン
トパーク程度なら考えても良かったのだが、これは如月グループの
企みが裏に存在する危険な企画だ。そんなものに翔子と参加なんて
言ったら、そのままなし崩しで結婚まで持ち込まれてしまうだろう。
なんとしてもそれだけは避けなければ！

「あら。どうしてそんなに嫌がるの？翔子ちゃんと一緒に行つてき
たらいいじゃない」

「色々と事情があるんだ」

「……………私は、雄二と一緒に行きたい」

とはいえ、いい加減ビシツと断っておかないといけないな。よし、
こうなつた以上は仕方ない。今日こそはつきりと『翔子、俺のこ
とは諦めてくれ』と言ってやるう。大きく息を吸って

「翔子」

「……………イヤ」

「俺のこと……………」

早い！早すぎる！まだ名前の部分しか言っていないというのに！

「だ、だがな、翔子」

「……………どうしても行きたくないなら
俺の言葉を遮り、翔子はトートバックから何かの冊子を取り出し
た。それは

「 選んで」

結婚式場案内のパンフだった。

「すまん。話の流れがさっぱりわからない」

「……………約束を破ったら即拳式って誓ってくれた」
「なんか契約の内容が変わっていないか？」

「お母さんはハワイとかの海外がいいな」

「おふくろ。アンタはどうしてそんなにマイペースなんだ」

「……………雄二。早く選んで。予約するから」

「あつ。ヨーロッパもいいわね。雄二、どこがいいかしらね？」

「く……………っ!!」

どちらを選んでも結婚の話がチラつくという恐ろしいこの状況。
だが、この程度の困難に屈する俺ではない！なんとかして脱出を

第三十二話〜余談その3ーSide雄二ー？ とある不幸なオレの朝〜（後書き

本文の丸写しになってしまいました。

必要のなさそうなところは省いたんですが……

今日中に明久のほうも書く予定なのでよろしくお願いします

第三十三話 余談その3 Side 明久？ とある休日の僕の朝

吉井家・・・Side in 明久

「アキ君、起きて下さい」

そんな姉さんの声で僕は起きる。姉さんがカーテンを開け、そこから強い光が差し込んでくる。うーん、いい天気だ。

「ふわぁ、おはよう姉さん」

「おはようございます、アキ君。朝ごはんが出来ているので早くきてくださいね」

「うん、わかった」

姉さんはそれだけ言って部屋を出て行く。・・・さてと、僕も準備しますか。

今日は愛ちゃんと如月グランドパークに行く事になっている。約束したのが愛ちゃんだと気づく前だったからなあ。今はちよつと恥ずかしい。・・・そうだ、行く前に電話しておかないと

ブルルルツ「はい、あのすいません。今日プレミアムチケットでそちらに向かう者なんですが・・・ええ、はい。・・・それで結婚までのプロデュースの事なんですが・・・あ、そうなんですか。じゃあそれをお願いします。それともうひとつのグループも今日そちらに向かうみたいなんでそっちは思いっきりやっちゃってください。それでは。」

ふう。これであの話の方は大丈夫そうだ。・・・まあ全部を対処できたわけじゃないけど。愛ちゃんの目的だってアトラクションで遊ぶ事だし、そういうことはしたくないんだけどなあ。電話を置

いて着替えていると電話がかかってくる。非通知？誰だろ

「はいもしもし？どちらさまですか？」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

『・・・・・・・・・・・・・・・・キサマヲコロス』

「えっ！？なにに！？本当に誰！？メチャクチャ怖いんだけど！
？美波！？姫路さん！？ねえ、誰なの！？・・あっ切れてる」

今から起こる僕の幸せに対する嫌がらせだろうか。それにしてもチャクチャタイミングが良すぎる。あれ、でもなんでその後思いついた名前が美波と姫路さんだったんだろ。声の低さからして絶対ありえないのに。

「早く着替えてリビングに行こう・・」プルルツ「えっ！？また！？」

恐る恐る、電話を取るとそこには『長谷川 芳樹』とあった。・・
・・良かった

「もしもし、芳樹？」

『お、もう起きてるな。今日、翔子のために一肌脱ごうと思ってるんだがお前も来るか？』

きっと、グランドパークの事だろう。確か、バイト募集してたからそこでの事かな。どうせ芳樹も行くんなら、言っても問題はないはず

「ごめん、実は今日・・・・・・・・」

『そうか。だから俺のを翔子に渡してくれて頼んだのか。だった

「らしょうがねえな」

「ごめんね、芳樹。芳樹も木下さんと行きたかっただろうけど」

『優子？何で今あいつの名前が出て来るんだ？』

「……木下さん、あなたの心は芳樹に届いていません」

「……芳樹、もっと恋愛に関して鋭くなった方がいいよ……」

『それは、お前が言えるセリフじゃない。それはともかくアキ、しっかりエスコートしてやれよ』

「もちろん！じゃあ、芳樹後で」

『おう。……愛子がここまで積極的とはな、優子にも伝えておくか』

それだけいって電話を切った。さてと、ご飯食べに行くか

「……アキ君」

「モグモグ、……なあに、姉さん」

「ご飯を食べている途中、姉さんが話しかけてくる。ちなみに今食べているご飯は姉さんが作ったものだ。夏休みの間、ずっと練習していて今は玉子焼きやサラダくらいなら作れるようになってる。……壊滅的なあの料理を夏休み中ずっと食べられられた僕は軽いときでも腹痛、重いと一日中寝込んでいるということもしばしばあった。ご飯は昨日のよる僕が砥いだのを朝、姉さんがボタンを押し ていただいたものだ。今でもたまに酷くなるからなあ……」

「先ほどの電話で、結婚がどうかとか言っていましたがあれはどういう事ですか？もしかしてアキ君は……」

「ぶほっ！？そ、それは、ほら雄二の婚約者の霧島さんっているじゃない。でその霧島さんのために僕と芳樹で結婚の準備をね……
・アハハ」

「ごめん雄二、霧島さん、誤魔化す為に君達の幸せを使わせてもらったよ。」

「……はあ、アキ君もう時間ですよ。いなくていいんですか」

「えっ？あ、ホントだって、やばっ！もうこんな時間！？それじゃあ行ってくるね、姉さん」

「……行ってらっしゃい、アキ君」

僕は急いで靴を履いて外に出る。あれ？どうして姉さんがこの事を知ってたんだろ。と、とにかく時間がやばい！

「………露払いもそろそろ潮時なのでしょうか」
後ろからそんな声が聞こえた気がした。

第三十三話 余談その3 I Side 明久 I ? とある休日の僕の朝 (後書き)

これで、雄二と明久の朝は終了です

次は先に、明久と愛子の待ち合わせから入っていこうと思います

これからもよろしく願います。

第三十四話、余談その3ーSide明久ー？ 待ち合わせ、それは時に不幸を

タイトル……もうわかりますよね、なにが言いたいのかは

第三十四話、余談その3 I Side 明久 I ?

待ち合わせ、それは時に不幸を呼

駅・・・Side in 明久

僕は今駅に向かつて全力で走っている。それというのも愛ちゃんとの待ち合わせの時間に間に合いそうにないからだ。愛ちゃんとの待ち合わせの時間は駅に9時、そして今、携帯を確認してみると8時半、やばい！って

「あれ？まだ八時半？」

どういうことだろう。確か家で時計を見たときは8時50分、それで全力で走りながら確認してみるとまだ8時半。家の時計がずれてたのかな？なんか時間の感覚が狂ってる。途中コンビニの中の時計を覗くとやっぱりまだ8時半。・・・はあ、危なかったー、流石に遅刻だなんて恥ずかしいよね。学校ですら最近しなくなったのに。今から家に戻っても仕方ないのでそのまま駅に向かつて歩く事にした。・・・流石にまだいるとは思えないけどね。たまには待つてみるのもいいかな。・・・そうこうしてるうちに

「もう駅までついちゃったなー。まだ時間は8時40分か、流石にまだ来てないよねって、ええ！？」

遠くの方を見ると、愛ちゃんが見える。もう来てたの？やっぱり女子ってこういうことになると動きが早いなーって思う。・・・ん？よくみると愛ちゃんは誰かに話しかけられている。知らない男の人達のグループだけどさあ愛ちゃんが困ってるのはよくわかる。・・・アイツラ、ナニヤツテンノ？

僕は無我夢中で走って、愛ちゃんに手を伸ばそうとした男の伸ばした手をとり、引っ張って前に倒れてきたところを思いっきりぶん殴る。

「ヤ、ヤスオ！大丈夫か！？……てめえよくも……ってひい
！」
ヤスオ？それになんか僕をただけで怯えるし……ああ、
思い出した。こいつら清涼祭のとき愛ちゃん達を攫ったあのグルー
プか。とりあえず、僕は愛ちゃんの前にかばうように立つ

「……今なら、見逃してもいいけど？」

「ひい、すみませんでした！！」

「……改めて思ったけどあの人達本当に弱いね。ま
あいいや

「愛ちゃん、大丈夫？なにもされてない？」

「ふえ、グスツ、怖かったよアッキー」

「よしよし」

「やっぱり怖かったよね。そりゃあそうだよ、あの中に殴られた
相手も……処刑するの忘れてた

「ところで……何時から来てたの？」

「……7時半」

「7時半！？……さ、流石に早すぎない」

「これまた驚いた。前に美波と姫路さんに買い物に付き合わされた
ときあの二人は1時間前だった。それすらを超えるだなんて

「だ、だって楽しみで……つい、」

まあ、しょうがないか。愛ちゃんもそれだけ楽しみだったって事だし、悪い気はしない。…………ハッ殺気！？気のせいだね。

「少しぐらい早く行っても問題ないだろうし、行こつ、愛ちゃん」
僕は手を差し伸べてそういう。ってなにやってんだぁー！／＼／＼確かにエスコートはするって言ったけどさ。芳樹だってこういう意味で言ったんじゃないよね。…………きつと

「う、うん／＼／／」

僕はこのとき思っても見なかった。これから起こる事が楽しく、辛くそして悲しくなるなんて…………

「…………チラリと見えたチケットから如月グランドパークと思われます。…………後は頼みます」

Side out 明久 & Side in 芳樹

参った。まさかこんな事になるなんて、

「ねえ、ちよつとどうしたのよ、長谷川君」

「…………優子、あっちをしてみる」

「えっ？・・・そういうことね」

俺たちが向いているほうには、Fクラスのメンバー、ムッツリー二、秀吉、美波、瑞希がいる。変装して準備は万全といったところだ。多分、雄二の方の応援で来たみたいだ。はあ、とにかくアキが愛子と来る事だけは絶対に知らせないようにしないと・・・

「・・・長谷川」

「うぬ、芳樹と・・・姉上！？どうしてここに！？」

「別に俺達も翔子と雄二の応援に来ただけだよ。な、優子（優子、絶対にバラすなよ）」

「え、ええ。秀吉、あんた達も代表たちのこと出来たんでしょ（もちろん分かってるわ）」

「そうじゃ、・・・ところで明久たちはどこじゃ？」

ドキッと、俺と優子の心臓が同じタイミングで大きく跳ねる。・・・いきなりだったから驚いたじゃねえかよ

「アキはなんか来れないみたいだった。ずっと前からの約束があるっていつてそっちに行っただ。・・・アキにしては珍しいよな。こんな面白・・・ゲフンゲフン、大切な友達の大事な日にこないなんてな」
一応間違っではないよな。愛子との約束は、清涼祭のときからだったし。優子は向こうで姫路たちと話をしてる

「お主、今絶対に面白そうと言おうとしたじゃろ・・・」

「まあ、そんな事より早く行くこつぜ。待たせちゃ悪いからな」

「・・・・・・・・・・まで」

「どうした？ムツツリー」

携帯電話？確かこいつ、非常時になると困るとか言って持ってなかったんじゃないけ

「・・・・・・・・・・わかった。・・・・・・・・・・明久殺す」

「ちょ、いきなりどうした？」

「・・・・・・・・・・今、仲間から電話があった。・・・・・・・・・・明久は工藤と一緒にここに来るらしい」

しまった！、向こうの事を忘れていた。やばい、周りの空気がどんどん悪くなっていく。つて秀吉、お前まで、姫路たちの仲間になる気か！？Fクラス唯一の良心はどうした！？

「アキ・・・・・・・・・・工藤を誘うなんていい度胸してるじゃない」

「明久君、来てからはずっとお楽しみですね」

「明久・・・・・・・・・・まさか工藤ともうっぎゃあああああああああ
あ！！」

おお凄い。流石優子だ。お得意の関節技で二人はともかく、秀吉はノックアウトだ。いつの間にか二人はどこかに行ってしまった。・・・・・・・・・・あいつらはもうアキの相手としては大気圏外としてみなしていいだろうか。あれならまだ、そこまで認識のないAクラスの女子の方が成功するだろ

・・・・・・・・・・アキ、親友からの唯一の願いだ。ここ（地獄）から無事に生きて帰れよ・・・・・・・・・・

第三十四話、余談その3ーSide明久ー？ 待ち合わせ、それは時に不幸を

はい、今回はここまでです。

深夜投稿はきつい……、眠さに負けそうになった時が何回かありました

さかさまテルテルさん、『4分の1エロチャイナ』の仕様許可、真にありがとうございます。この如月グランドパーク編が終わったら、閑話休題の最後として出そうと思います

これからもよろしく願います

第三十五話 余談その3 Side 雄二? すぐム力つく冷やかす奴ら

Side in 雄二

「……俺は……無力だ……」

電車とバスで二時間ほどかけ、俺と翔子は如月グランドパークの前にいた。

こ、これは仕方がなかったんだ！翔子一人だけならともかく、おふくるまで面白がって結婚の話を進めだしたのが悪いんだ！あの妙な雰囲気から逃れるために出かけてしまった俺を誰が責められようか！

「……やっとなつた」

嬉しそうにアミューズメントパークを見ている翔子。

……ふむ。そんな姿を見ると、少しは遠くまで連れてきた甲斐もあるかもしれないな。うんうん。

「よし。それじゃ、翔子」

「……うん」

「帰ろう」

ミシッ。

「……ダメ。絶対に入る」

「はっはっは。翔子、俺の肘関節はそっち側に曲がらないぞ?」

肘を極めてきた翔子に脂汗を流しながら笑いかける。

まずい。指先の感覚がなくなってきた。

「……………恋人同士は皆こうしてる」

「待て翔子！お前は腕を組むという仲睦まじい行為とサブミッシヨンを同様に考えてないか！？」

「……………??？」

素で疑問符を浮かべているとは、なんて恐ろしい女だ。きっとコイツには、世の中の恋人同士は相手を逃さない為に肘関節を取り合ってるように見えているのだろう。そんな話をしていると、後ろから声をかけられる。なんだ？妙に聞いた事のある声だなんて……………

「あれ？雄二、どうしたの？そんな入り口前で」

「代表たちも来てたんだ、ってなにやってるの代表！？」

そこには、明久とAクラスの工藤がいた。工藤のセリフからするにこいつらはどうやら客としてきたようだ。……………だとしたら、翔子にチケットを渡したのは芳樹か。……………あの野郎、ただじゃおかねえ。人質として取られていた俺の左腕は、工藤が翔子を向こうに連れて行き、やり方を教えている。……………なんだ？翔子が口を開くたびに工藤がテンパってるが……………そういうことか

「明久、お前も工藤と一緒に来たのか（話を結婚まで確か進められるんだろ、こいつと来てよかったのか）」

「うん、愛ちゃんに頼まれてね。チケットあげようかとも言ったんだけどそれじゃ申し訳ないって言うから二人できたんだ（うん。そっちの話は大丈夫。先に電話して伝えておいたから）」

しまった、その手があったか！……………俺と翔子はこんなだ

し、こいつ等の方がいい宣伝になりそうなんだがな。工藤からのレクチャーが終わったのか翔子は俺の隣に戻ってくる。……良かった、今度は普通に手を組んでいる。……まあ少し恥ずかしいがな／／

「うん、似合ってる似合ってる。あれ、坂本君どうしたの顔赤くして、もしかして照れちゃった？」

工藤が冷やかしてくる、それに明久の野郎も後ろの方でニヤニヤしてるし。……こいつら

「なんだ、お前らはやらなくていいのか？お前、翔子をうらやましそうに見てるが……」

「ふえっ！／／い、いやその僕達はそんな関係じゃないし／／」
工藤は俺の言葉に驚いていて、明久も動揺している。いい気味だ。ちなみに、翔子は工藤に対して踏ん返り返っている。こういうときに合わせてくれるのは翔子のいいところだな。

「じゃあな明久、工藤。俺達は先に行ってる。」

「……中であたえたら、よろしく」

俺と翔子はそれだけ行つて、入場口のほうへ向かう。プレオープンという限定的な期間であるため、特に待つ事もなく入り口の方へ行けた。

「いらっしやいませ！如月グランドパークへようこそ！」

その男は日本人ではないのか、若干訛りの混じった口調で俺たちに笑顔を振りまいた。顔立ちはアジア系っぽいので日本人かどうかはよくわからないが。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか？」

「……はい」

翔子がポケットから例のチケットを取り出す。

「拝見しマース」

係員はそのチケットを受け取って俺たちの顔を見ると、笑顔のまま一瞬固まった。翔子がそんな係員の様子を見て不安そうに表情を曇らせる。

「……そのチケット、使えないの……？」

「イエイエ、そんなコトないデスよ？デスが、ちょっとお待ちください」

係員はポケットから携帯電話を取り出し、俺たちに背を向けてどこかに電話を始めた。

「私だ。例の連中が来た。声が違うから多分こつちだ。ウエディングシフトの用意を始める。確実に仕留める」

「おいコラ。なんだその不穏当な会話は」

この係員、急に目の色が変わりやがったぞ。まさか例のジnkクスを作るための作業員か？つーか、明久の野郎、はなから俺達の方だけジnkクスを押しやるつもりでいたな？よーし、絶対仕返ししてやる。

「……ウエディングシフト？」

翔子が首をかしげている。如月グランドパークの企みを知らないコイツにはよくよくわからない単語だろう。

「気にしないデくだサーイ。コツチの話デース」

「アンタ、さつき流暢に日本語話してなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカリませーン」

取り繕ったように元の雰囲気に戻る係員。あからさまに怪しい。それになんかこいつムカつく。

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ。入場だけさせてくれたらあとは放っておいてくれていい」

もはや潔いとも言えるネーミングのおかげで向こうのやるうとしていることはよくわかった。だが、そんなものに乗る気はない！そうしないと、俺の人生がっ！

「そんなコト言わずニ、お世話させてくだサーイ。トツテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタの実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！そんなことされたら我が家は食中毒で大変なことにな

っつてしまっ！」

あの母親は間違はなく伊勢海老だと勘違いして食卓にあげるだろう。なんて恐ろしい脅迫をしてくれんだ、この似非外国人め……！

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ？」

「……記念写真？」

「ハイ。サイコーにお似合いのお二人の愛のメモリーを残しマース」

「……雄二と、お似合い……（ポツ）」

翔子は似非外国人の言葉に仄かに頬を赤らめていた。今は俺の身を案じるだけで手一杯だ……！

「お待たせしました。カメラです」

そこに帽子を目深にかぶったスタッフがカメラを片手に現れた。

うん？なんだか見覚えのあるヤツだな。帽子で顔を隠しているのが怪しいが……

「アナタが持つてきてクレたのデスカ。わざわざありがとうございます
マズ。助かりマース」

似非野郎が礼を言いながらカメラを受け取る。やはり妙だ。そこらのコンビニならともかく、こういった場所のスタッフが客の前で同僚に丁寧な礼を言うだろうか？

ふむ。少し試してみるか。

「悪いがちょっと電話させてくれ」

「わかりまシタ」

携帯を取り出し、番号非通知で『長谷川 芳樹』という名のところに電話をかける。

プルルルツ、プルルルツと鳴るがその男は電話を取ろうとしない

「電話鳴ってますよ、出ないでいいんですか？」

「そりゃあ、こんなタイミングでかけようとするお前の電話なんて……しまった」

ビンゴだ。わかってはいてもつい口に出てしまったんだろう

ダッ！

「あっコラ！逃げるなテメエ！ええい、放せこの似非外国人！」

「彼はココのスタッフのエリザベート・ハナコ（三十五歳）、通称ステイーヴでース。あなたの言う長谷川ナント力さんではありませんーン」

「黙れ！人種性別年齢氏名全てにおいて堂々と嘘をつくな！しかもどう考えてもその名前で通称ステイーヴはないだろ！ついでに俺はあいつの名前は一言もいってない！」

似非外国人に絡まれてるうちに芳樹の姿が見えなくなった。あの野郎、絶対に俺をハメる気だ……！俺の人生をなんだと思つてやがる！……とにかく、芳樹がいたんだ。他の木下姉ともいるだろう。

いや、Aクラスだけとは限らない。

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ」

「………???」

きよとんとしている翔子のスカートを掴み、軽く捲り上げる。下着が見えるか見えないかというギリギリの高さまでスカートが持ち上がった。

「……………っ！！（ギラッ）」

その瞬間、視界の隅で懐に手を伸ばした人影があった。人影というか、キツネの着ぐるみだが。

「咄嗟に懐にあるデジカメに手を伸ばすあの動き……………。やはりムツツリーニも来ていたか」

俺が視線を向けると着ぐるみは脱兎の如くその場から消え失せた。芳樹とムツツリーニがいるなら、木下姉弟や、姫路もどこかにいるのだろう。どいつもこいつも人の不幸を乐しげに……………！！

「……………雄二、えっち」

処刑法を考えていると、翔子が少し怒ったような顔で俺を見ていた。

「なっ！？ち、違っぞ翔子！俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ！」

「……………それはそれで、困る」

「ぐああああっ！理不尽だあっ！」

翔子の握力で俺の頭蓋が軋む音が聞こえてきた。

「でハ、写真を撮りマース。はい、チーズ」

近くでフラッシュが焚かれ、ピピツという電子音が聞こえてきた。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてください」

「……わかった。このまま待ってる」

「ぐあああつ！このままだと俺の頭蓋がつ！」
律儀にも、翔子は握力を緩めることなくそのままの状態を保っている。コイツ、本当に俺のことが好きなのか……？

「はい、どうぞ」

ほどなくして似非野郎が写真を持ってきた。それと同時に開放される俺。翔子は嬉しそうに写真を受け取った。

「……ありがとう。……雄二、見て。私たちの思い出」

咳き込む俺に翔子が写真を突きつける。

「……なんだ、この写真は」

写っているのは翔子の後頭部と撮関に悶える俺。そして

「サービスで加工も入れておきまシタ」

その二人と囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字。アイアンクローをかましている女とそれに苦しむ男の周りを、未来を祝福する天使が飛び回っている。余人が見ればどういった経緯で結婚に至ったのか気になるところだろう。……どう見てもこの二人に幸せは訪れそうにない。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正気か！？コレを飾ることでここになんのメリットがあるというんだ！」

見に来る客はドン引き間違いなしだ。

「……雄二、照れてる？」

「すまない。どこからどう見てもこの写真に照れる要素が見当たらない」

なんて、印刷された写真を見ると、

『あぁっ！写真撮影してる！アタシらも撮ってもらおうよ！』

『オレたちの結婚の記念に、か？そうだな。おい係員。オレたちも写ってやんよ』

偉そうな態度でチャライカップルがやってきた。

「すみません。こちらは特別企画ですの……」
似非野郎が断ろうとする。どうやらあの写真撮影は例のウエディングシフトとやらの一環で、俺たちだけが対象なのだろう。

『あぁっ！？いいじゃねーか！オレたちやオキヤクサマだぞコルア』
『！』

『きゃーっ。リョータ、かつこいーっ！』

男が下から睨みつけるように似非野郎を威嚇し始める。絵に描いたようなチンピラだな。その姿を見て喜ぶ女もどうかと思うが。

『だいたいよお、あんなダッセジャリどもよりもオレたちを写した方がココの評判的にも良くねえ？』

『そうよっ！あんなアタマの悪そうなオトコよりもリョータの方が100倍カッコイイんだからあ！』

まあ、とりあえずチンピラカップルが係員の注意を引いている間に逃げるとするか。

「……………（ツカツカツカ）」

「っておい、翔子。どこに行くんだ」

急に勢いよく歩きだした翔子の腕を掴んで引き止める。

「……………あの二人、雄二のことを悪く言ったから」

「あのなあ……………。その程度のことではイチイチ目くじら立てていたらキリがないぞ?」

あのテの連中は下手に相手をする執拗に絡んでくることが多い。悪口程度で構ったりすると面倒事を抱え込むことにもなりかねないので、ここは無視という選択肢が一番楽だろう。あんな連中に何を言われても気にならないし、何より視界に入れておくだけでも不愉快だ。まあ、翔子怒ってくれた事に悪い気持ちはしなかったがな

「行くぞ、翔子」

「……………雄二がそう言うのなら」

翔子もその光景は嫌だったようで、促すと渋々ついてきた。

第三十五話、余談その3 | Side 雄二 | ? | すごくムカつく冷やかす奴ら

なんかどこで切ったらいいか分からず、ものすごく長くなってしまいました。読者の皆様、読みにくくなつてすみません。

さあ次は明久かな？雄二かな？お楽しみに

第三十六話、余談その3ーSide雄二ー? 「こいつらは今日暇なのか?」

と、いつこと? は雄二から始めることにしました。

……今回はなるべく「プレイヤー」にならないようにしたいです

第三十六話、余談その3ーSide雄二ー? 「こいつらは今日暇なのか?」

グランドパーク内・・・Side in 雄二

「さて。それじゃ、テキトーに回って帰るか」

「・・・楽しみ」

園内には前評判通りの最新アトラクションが沢山あった。3Dの体感アトラクションから絶叫マシン、コーヒーカープやメリーゴランドなど、知っているアトラクションは全て揃っているようだ。中には見た目だけでは想像もつかないようなものまである。

「映画館でもあれば楽なんだがな」

「・・・折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

翔子に却下されたので、仕方なく面倒が少なくて妙な雰囲気にならないようなアトラクションを探す。すると、そんな俺たちにヒョコヒョコと着ぐるみが近寄ってきた。前に明久が欲しがってたキツネのキーホルダーの着ぐるみだ。大きなリボンをしているところを見ると、こいつはきつとメスなのだろう。

「お兄さんたち、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ?」

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声。ボイスチェンジャーなどを搭載していないのか、その声は普通の人間の声だった。

「じゃあ、フィーとやら。お前のオススメを教えてくださいか?」

「あ。う、うんっ。フィーのオススメはねっ、向こうに見えるお化

け屋敷だよっ』

フィーとかいう狐の手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を示す。ふむ。廃病院を改造したとかいう例のアレか。

「そうか、ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子。お化け屋敷以外のアトラクションに行くぞ」

翔子の背中をおして歩き出す。すると、姫路が慌てたように俺の腕をつかんできた。

『ままま待って下さいっ！どうしてオススメ以外のところに行くんですか！？』

「どうしてもクソもあるか。お前もあの似非外国人の仲間だろう？ だったら、お化け屋敷には余計な仕掛けが施されているのは明白だ。わざわざそんなところに行く気はない」

『そ、そんなの困りますっ！お願いですからお化け屋敷に行ってください！』

「断る」

そのお願いとやらの為に残りの人生を捧げる気はない！断固として否定し、俺は自由を謳歌するんだ！……今更だが、なんか聞き覚えのある声だ。気のせいか、クラスメイトの優等生に思えてならない。こいつも確認しておくか。

「そういえば、明久が工藤と一緒にここに来ていたぞ」

「ええつ、明久君が！？それはどこで見たんですか！？
本当にこいつらは、揃いも揃って……。」

「おい姫路。アルバイトか？」

「そんな事より、明久君をどこで見たんですか！教えてください！
！」

姫路からはいつも以上の強い殺気が感じられる。まさか姫路までここまで墮ちるとは……。今後の試召戦争に支障が出ないか心配だな。おっと、上手いこと言ったつもりはないんだぜ、キリッ。そんな姫路の対応をしていると、姫路の方からブルブルと携帯の音が鳴る。

「もしもし、美波ちゃんですか。……。明久君が！？……。
はい、分かりました！すぐ行きます！」

こいつ等はまともに仕事をおこなう気はないのか！？姫路は電話を切るとすぐにこの場から消え去った。……。あいつ、確か運動苦手なんじゃなかったのか？

「ハイ、すいませーン。お待ちせしませタ。チョツと撮影ニ手間取
つてシマいました」

そうこうしていると、さらに面倒なヤツが現れた。さっきの似非
野郎だ。もう追いついてきたのか。ん？撮影？

「なんだ？さっきのバカカップルでも撮影したのか？」

「イエ。あノアと、もう一組みのプレミアムチケットの方たちがキ
テ、そちらの方々ヲ撮影しました」

「は？確か、あいつらはその件は断ったといっていたが」

「ハイ。電話でそう受け取ったのデスガ、彼女さんの方が撮ッテもらいタイと言ったので撮影しました」

なんだ。工藤にはその話をしていなかったのか。工藤も可哀想な奴だな。・・・きつと今回のこの事で少し動くんじゃないか？

「お話はソレで終わりですか？では坂本雄二サン、お化け屋敷に行つて下サイ」

「前後の文に脈絡がないからな。それにイヤだと言っているだろうが」

そんな危険地帯に自ら踏み込む気はない。

「断れば、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」

「やめろっ！そんなことされたら我が家の家事が全て滞ってしまう！」

あのおふくろは全ての梱包材を潰し終わるまで他のことは何もしないだろう。なんて地味かつ微妙な嫌がらせをしてくれるんだ・・・

「坂本翔子サン。お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題デスよ？」

「・・・雄二。お化け屋敷に行きたい」

「汚いぞキサマ、翔子を罫にハメようなんて！それと、勝手に翔子を入籍させるな！ソイツの苗字は霧島だ！」

「・・・大丈夫。すぐに変わるから」

油断している隙に翔子に肘関節を極められた。これじゃあ抵抗で

きない！

「では、こちらにサインして下サイイ」

似非野郎が取り出したのは何かの書類とボールペン。なんだコレは？

「ただの誓約書デース」

誓約書が必要なお化け屋敷ってなんだ。そんなに危険なのか？

「だがまあ、面白そうではあるな」

誓約書が必要ということとはそれほどまでにスリルに満ちているということでもあるだろう。それはそれで面白いかもしれない。少し楽しみになってので、ボールペンを受け取って書類に手をかける。

【誓約書】

1. 私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。
2. 婚礼の式場には如月グランドパークを利用することを誓います。
3. どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「……はい雄二。実印」

「朱肉はこちらデース」

「俺だけかつ！？俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

こいつらは全員正気じゃない。

「冗談です。誓約書はいいので中に入って下サイ」

「……うん。冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意しているくせに冗談と言い張るのか」

色々といつてやりたいことはあるが、この連中に常識を求めるのも酷というものだろう。

「それデハ、邪魔になりそうなノデその大きなカバンをお預かりしマース」

「……お願い」

翔子が似非野郎にバツクを渡す。そういえばヤケに荷物が大きいな。

「……零れちゃうから、横にしないで欲しい」

「このカバンをですか？わかりませタ。気をつけマース
零れる？あの鞆に何が入っているんだ？」

「デハ、行ってらっシャイマセ」

「……雄二、行こう」

「痛だだだっ！肘がねじ切れるっ！」

抵抗空しく、お化け屋敷の扉の前に立たされる。演出なのか、その扉は横開きの自動ドアでありながら電気が入っていないよう手で動で開けるようになっていた。

『私だ。お化け屋敷にターゲットが入った。あの人達考案の作戦を実行しろ』

あの人達と言うと、芳樹達のことか？いや、あいつはそういうところは正常だからきつとFクラスの島田や姫路たちだろう。俺と翔子の関係を見ていて羨ましがっていた奴らだからな。いったいどんなものになっているかはわからないが、あいつら如きの策に引っかかってたまるか！

お化け屋敷内……

薄暗い廊下を翔子と二人で歩く。カッン、カッンとリノリウムの廊下は足音を必要以上に大きく鳴らしているような気がした。

「さすがに廃病院を改造しただけのことはあるな。雰囲気満点だ」

「……ちょっと怖い」

「こづいつのにあまりビビらないお前が怖がるなんて、珍しいな」

「……そうかも」

時折、壁に貼られている《順路》というポスターに従って進んでいく。一階は特に何が起こるといっわけでもなく、二階に上がり、少し進んだ廊下で初めて何かの演出が顔を出した。

【 じの方が よりも 】

冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。ふむ。怨嗟の声の演出か？

「……この声、雄二……？」

「ん？そうなのか？」

どうやらこれは俺の声そっくりらしい。秀吉に声真似でもさせたのだろうか。確かに自分の声が聞こえてくるなんて怖いといえれば怖い、あいつらにしては普通の演出だと

【姫路の方が翔子より好みだな。胸も大きいし】

「……雄二。覚悟、できてる？」

「怖えっ！翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点の演出だ！」

なんて恐ろしいことを考えてるんだあいつら。まさか俺を生かしてここから出さないつもりか！？と言うか、今の翔子はこないだの明久並の迫力だぞ！？

なんてビビっていると、パンツと背中では何かの仕掛けが作動する音が聞こえた。

よっしゃ！ナイス演出！助かったぜ！

「翔子！何か出てきたぞ！」

音のしたほうに首を向けると、そこにはさっきまで何もなかったはずなのに、突如あるものが現れていた。それは

「……気が利いてる」

……釘バット？

「畜生っ！よりもよって処刑道具まで容姿してくるとは！全く趣旨は違つが最強に恐ろしいお化け屋敷だっ！」

「……雄二。逃がさない」

釘バットを持った幼なじみに追いかけられるという斬新なアトラクションを一时间あまり楽しむ羽目になった。しかし、あいつらはこれで俺と翔子がくつつくと思っっているのか・・・？それに、どうしてこんな事を企んだあいつらを芳樹は止めようとしなかったんだ・・・

第三十六話、余談その3ーSide雄二？ 「こいつらは今日暇なのか？」

はい、今回はこんな所です。相変わらず雄二の方は原作コピーです
みません……

次回は明久と工藤を出して、似非外国人、芳樹、美波と瑞希を交ぜ
ていこうと思います

感想お待ちしております

第三十七話、余談その3 | Side 明久 | ちよつとした恥ずかしさと・・・

はい明久パートです。

前回の雄二と少し被るところがあります。

タイトルは書いたとおり次回に続くので・・・でもあんまり気にしないで下さい。ただそれ以外が思いつかなかったので・・・

第三十七話　余談その3　Side 明久　　ちよつとした恥ずかしさと・・・

グランドパーク・・・Side in 明久

僕と愛ちゃんは電車に乗って今、目の前にある如月グランドパークに来ていた。ここに来るまでの電車の中は休日という事もあつてか凄くこんでいて、一応、はぐれない様に手を繋いでいた／＼。でも、さすがにその人たちもグランドパークが目的じゃなかったみたい。座れるぐらいにまで電車が空くと二人で並んで座った。座ってから数分後、隣にいた愛ちゃんが眠ってしまった。しかも、僕の方にのたれかかつて。きつと朝が早くて睡眠時間が足りてなかったんだなあと、思いながら愛ちゃんのほうを見てしまった。・・・あの寝顔は反則だ／＼／＼、思わず理性が切れそうだった。そんなこんなで二～三時間、僕はいろんな意味で危なかった。

「それにしても、ここが如月グランドパークか」

「凄い広いねー。早く行こ、アッキー」

といて、僕の腕を引つ張る。・・・こうやって中に早く入ろうとするとところとか、子供みたいというか無邪気で可愛いな。

「ん？アッキー、今失礼な事考えてなかった？」

「い、いや別に・・・ってあれ？」

向こうの方に男女のカップルが見える。男の人はツンツンの赤い髪で女の人は紫？色のきれいな髪をしていた。男の人の方が女の人にサブミッションをかけられている。あれって絶対・・・

「あれ？雄二、どうしたの？そんな入り口前で」

「代表たちも来てたんだ、ってなにやっってるの代表!？」

愛ちゃんは慌てて、霧島さんと向こうの方に行き、腕を組むということのやり方等を教えている。・・・相手は雄二なんだから別にそんな事教えなくていいのに。まあ霧島さんの為になるならいいんだけどね。

「明久、お前も工藤と一緒に来たのか（話を結婚まで確か進められるんだろ、こいつと来てよかったのか）」

「うん、愛ちゃんに頼まれてね。チケットあげようかとも言ったんだけどそれじゃ申し訳ないって言うから二人できたんだ（うん。そっちの話は大丈夫。先に電話して伝えておいたから）」

雄二が結婚まで進められるあの話について聞いてくる。そんなのただ電話で伝えればすむ話なのに、雄二はしまったという顔をしている。・・・愛ちゃんのレクチャーが終わった霧島さんが戻ってきて雄二の隣に行つて腕を組む。今度はちゃんとしている。クソッ!あの野郎、・・・と昔の僕ならすぐ思ってしまうと思うけどよく見ると雄二の顔が赤くなっている。そんな光景を見てるとついニヤニヤしてしまう。

「うん、似合ってる似合ってる。あれ、坂本君どうしたの顔赤くして、もしかして照れちゃった?」

「なんだ、お前らはやらなくていいのか?お前、翔子をうらやましそつに見てるが・・・」

「ふえっ! / / / い、いやその僕達はそんな関係じゃないし / / / /
な、なんて事を言うんだ雄二! そんなこと僕達は / / / / / / / /
/ それに羨ましい目で見てるのはそれをやりたい相手がいるって事

なんだよ。僕なんかとやりたいなんて思うわけが……

「じゃあな明久、工藤。俺達は先に行ってる。」

「……………中でまた会えたら、よろしく」

雄二と霧島さんはそれだけ行つて、入場口のほうへ向かう。今ここにいるのは、僕と愛ちゃんだけだ

(……………気まずい)

「ア、アッキー、僕達もそろそろ行かない？」

「う、うん。そうだね。……………っ！危ない！」

そういつて、動こうとするとどこからか殺気を感じた。僕は愛ちゃんを抱いてそこから離れる。投げられたものは……………カタ―だ。ということはこの殺気は……………

「……………ムツツリーニ」

「……………明久、話がある。こっちにこい」

話？なんだろう……………とにかく僕は愛ちゃんを置いてムツツリーニのところに行く。

「なにムツツリーニ、話つて」

「……………お前は工藤の事をどう思っている」

へ？こんなところでなにを聞いているの？

「・・・・・・・・・・とぼけても無駄だ」

そんな事を言って、ある機械を取り出す。なんだ？ボイスレコーダーかな？

「・・・・・・・・・・聞けばすぐに分かる」

『じゃあ話すよ。・・・愛ちゃんとは本当に古い頃からの友達でね、気づいたら毎日のように愛ちゃんと遊んでたんだ。僕、ヒーローとかそういうのが小さい頃大好きでさ、愛ちゃんをそのヒーローみたいにかつこよく守れたらなあとかずっと思ってるさ。そんな楽しい日が続いてあの日・・・遠くに転校する事が決まったとき愛ちゃんはさ・・・・・・・・泣いてたんだよ、ずっと』

これってまさか・・・・・・・・

「ちょっとムツツリーニ！？何でこれをもってるの！？？ていうかいつの間に録音してたの！？」

「・・・・・・・・雄二が霧島翔子に頼んで録音したもの。・・・・・・・・ちなみに聞いたのは雄二と俺だけ」

「雄二いいいいいいいい！あの野郎！」

「・・・・・・・・・・それより、お前は工藤が好きなのか？」

あれを聞かれてるのならもう答えるしかないじゃないか！

「ああ、好きだよ！！みんなと会わずと前から大好きだったよ！！」

言った、言ってしまった。心の奥に眠ってた思いをぶちまけてしまった。それを聞くとムツツリーニの顔は何故かスッキリしていた。

「……………そうか、ならいい……………俺は引く……………FFF団としてお前を倒しても工藤が悲しむだけだからな……………工藤を頼む」

それだけ言つてムツツリーニはどこかに行つてしまった……………。そうだ。感情的になつて忘れていたけど、ムツツリーニも愛ちゃんのことが好きだったんだ。好きな人が自分以外の男と一緒にこういう所に来てその男もその人が好きだったら……………。あれ？こういう話つてその好きな人がその男が好きじゃないと、話かなりたないんじゃないか？……………でもね、ムツツリーニ。もし愛ちゃんが僕の事が好きだったとしても、僕はきつと受け入れられない。だつて……………

「……………僕にそんな権利はないんだから……………ムツツリーニ、君が本当は隣にいるべきなんだ……………」

僕は愛ちゃんのところに戻る。この感情を隠して……………

「さてと、どこから回る？愛ちゃん」

園内には評判通りの最新アトラクションが沢山あった。3Dの体感アトラクションから絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴーランドなど、知っているアトラクションは全て揃っているようだ。中には見た目だけでは想像もつかないようなものまである。

「うーん、前から気になつてたのが幾つかあるからそれでいい？」

「もちろん……………」

芳樹……なんか僕がエスコートされてるみたい。

「それじゃいこっか」

と、言っつてそのアトラクションに行く前に外国人の男が近づいてくる。

「オオーウ、そのカップルさん？写真なんかどうですか」

はあ、だから僕は決してカップルなんかではありません！／／／

「写真だつて、記念だし撮ろうよアッキー」

「そ、そうだね。つて愛ちゃん！？／／／なにやつて」

「で八、撮りマース。はい、チーズ」

その瞬間、ピピツというシャッター音になる。撮つた写真をその場で見せてもらつたとそこには、腕を組んでその反対の手でカメラに向かつてピースしている愛ちゃんと突然腕を組まれて顔を赤くしながら戸惑つている僕だ。

「スグに印刷しマース。そのまま待つていてくだサイ」

外国人の男はどこかにいつてしまふ。あれを印刷するのか、……恥ずかしい／／。というか、もしあれが姫路さんや美波、姉さんの手に渡つたら……僕はその場で死ぬのかもしれない。写真撮影つて来た人達全員にやつてるのかな？そうとしか考えられないよね、だつて僕は結婚のあの事は断つてははずだし……

「お待たせしまシタ サービスで加工も入れておきまシタ」

どれどれと僕は写真を除きこむ。その写真に写っているのは先ほど説明した状態の二人とその二人と囲うようなハートマークと『私達、結婚します』という文字、それに未来を祝福する天使が飛び

回っている。・・・どうしてこうなった・・・orz

「あのすいません。結婚までのプロデュースはお断りしたはずですが」

その言葉に隣にいる愛ちゃんは驚き、少しへこんでいる。どうしたんだろ？遊ぶ事が目的で来たわけだからそんなのなくていいのに

「イエ。確か二電話でそう承ったのでスガ、アル人から『それは、ただ恥ずかしがってるだけだ。思う存分やってやれ』ト申した人がいたので。ですがお客様のイウ事八聞かないトイけナイので妥協案としてこの写真とアト、ウエディングドレス、タキシードを着てでの撮影をおこなう事にシマシタ。それと、この写真をパークの写真館に飾っても良いデスカ？」

雄二か芳樹だ。でも雄二は今、霧島さんといるから芳樹だろう。・・・こんな事させやがって。それにその写真を飾るだって？思いついてとっておくならともかく冗談じゃない

「やめてください。それとそのフレー「いいですよ。ただその回りのフレームは恥ずかしいので外してください」ってなにいつてるの！？愛ちゃ「あとそのフレームつきのを僕に、フレーム無しを隣のアッキーに一枚ずつ下さい」い、今なに言ってた!？」

ときどき、愛ちゃんの考えに付いていけなくなる

「OK、分かりました。ありがトウございマス。（芳樹さんの言うとおりでしたね、ニヤニヤ）それでは、ウエディング体験の方に移りタイト思うので、着いて来てクダサーい」

「はい（アッキーとウエディング アッキーとウエディング）」

「愛ちゃん……どうしたの？ちょっと浮かれてるみたいだけど」

「えっ！／＼い、いやなんでもないよ／＼」

それだけ言っつて僕の腕を引っ張りながら駆け足でさっきの人についていく

（……ごめんね、愛ちゃん）

第三十七話、余談その3 | Side 明久 | ちょっとした恥ずかしさと・・・

今回はこんな所で・・・終了とさせていただきます

次回は芳樹、瑞希、美波を出していくつもりです。

感想お待ちしております

第三十八話、余談その3、Side明久？・・・サポート？それと暴動、

糖分摂取魔さん、シユレ猫さん、まあさん、さかさまテルテルさん、
瑠威さん、感想ありがとうございます

前回に続けてのお話です

これ書いたら次は雄二Sideにはいると思います（あの・・・ほとんどの原文コピーの）

グランドパーク内 . . . Side in 明久

僕と愛ちゃんはグランドパークの中にあるパーティー会場のよう
な所に来ていた。その奥に更衣室、スタジオが設置されているよう
で、そこで僕はタキシードに着替えさせられている。今頃愛ちゃん
は愛ちゃんウエディングドレスに着替えさせられてるんだろくな
あ やばい、考えただけで鼻血が . . .

「?あの、大丈夫ですか?」

「ああ、すいません。ありがとうございます」

たまにスタッフとこんな感じで話す 流石にこの年で
着せられる、というのは恥ずかしいけどね。着方が分からないのだ
からしょうがない。そうこうしているうちに終わったみたいだ。

「とつてもお似合いですよ」

といってスタッフの一人が鏡を持ってきてくれる。そこに写って
いるのは純白のタキシードを着た僕 うーん、悪くは無い
と思うけどなんか服に着られてる感じがする。とりあえず、着させ
てくれたスタッフにお礼を言う。その中の一人に隣のスタジオに連
れて行かれる。まだ愛ちゃんは来ていなかったがカメラの方の準備
はいいみたいだ。

「それではここでお待ち下さい」

スタッフの人にそう言われ僕はここで待つ。待っている間にいろ
いろな事を考える。これからの事、雄二の事、芳樹への制裁の事、
ムツツリーニがいるということから美波たちも来ているということ、

・・・・・・・・・・・・・・・・ああ、もう考える事が多すぎて上手くまとまらない！

「あら、吉井君。もう着替え終わってたの？」

「あ、木下さん、丁度今来たところだよ。・・・・・・・・それよりどうしたの？ボーイの格好なんかして」

木下さんが奥の方からやってくる。・・・・・・・・驚かないのは芳樹がいたのだからきつと来ていると予測していたからだ。そんな事より1つ疑問が出てくる。・・・・・・・・どうしてボーイの格好をしているんだろう

「これね、本当は秀吉が着るはずだったんだけど、秀吉が気絶しちゃって。それで秀吉の変わりにこれを着て代表たちのところに行くのよ。と言つてもまだ時間はあるんだけどね」

と、木下さんは少し困った顔をして事情を説明してくれる。・・・

・・・・・・・・秀吉が気絶した理由は聞かないほうがよさそうだ・・・・・・・・

「あ、そうだ吉井君。今、愛子を見てきたけど羨ま・・・・・・・・コホンッ、可愛くなつてたわよー。（あまり見蕩れないようにね）それじゃあね。」

「ブツ！！？いきなり何言つてんの！？きのし「アッキー？」え？」

僕は後ろから聞こえてきた声に反応する。そこにいたのは・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・へ、変じゃないかなノノノノ」

そこには純白のドレスを着た愛ちゃんがいた。・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハッ！ぜ、全然変じゃない、むしろ似合ってるよ」

ふうー、危ない。・・・・・・・・いやもうアウトだよ、完全に見蕩れていたよ僕。

「ホント！？良かったー」

「ソレでは、とりマース。二人ともモット近づいてクダサーイ」

写真を撮るのは、先ほどここに案内したあの外国人らしい。・・・・どうもこの人すっかりした日本語話せそうなんだよなあ。・・・・外国人の人に言われ、僕達は少しくつつく。・・・・な、なんで愛ちゃんはこんな密着してくるの！？

「で八撮りマース。はい、チーズ。・・・・OKです。次は・・・・

・・・・新郎さん、新婦さんをお姫様抱っこしてクダサーイ」

ええ！？何でそこまでやるの！？確かに断ったよね。・・・・

・・・・芳樹、カクゴシテオイテネ

「ほら、アッキー、早くやってよ」

「つて、愛ちゃんはいいの！？」

僕なんかとこんな写真を撮って恥ずかしくないの？

「う、うん。ちょっと恥ずかしいけどね／＼」

「・・・・・・・・分かったよ。僕も男だ、覚悟を決める。・・・・

よっつと」

「ひゃあ／＼／＼．．．．ア、アッキー重くない？」

「うん。全然大丈夫」

そう言つと、愛ちゃんは僕の首に手を回してくる／＼／＼／＼．．．
やばい、恥ずかしさとか色々あつてこのまま倒れそう

「で八撮りマース。はい、チーズ．．．．OKでース。印刷
をしてるのでその間に着替えて置いてください」

それだけ言つて外国人はどこかに行つてしまふ。あれは流石に写真館に飾らないよね．．．。うん、そう願おう

「分かりました。それじゃ早く着替えよっか、愛ちゃん」

「うん、そうだね。」

その後、あの外国人に印刷した写真を見せてもらった。．．．．
．．．．．あれは本当に他人には見せられない／＼／＼／
／／／／／／／／／／／／／／／／。あの写真には流石に
愛ちゃんも顔が真っ赤になっていた。二人のポーズはさつき説明し
たとおり、ただ、あの外国人のつけた加工が．．．／／／ま
ず、背景がどこかの結婚式場になつていて、周りに白い紙吹雪？が
舞つていて、フレームは前と同じ。．．．．あれは、結

婚どころかそのままハネムーンに行きそうな感じの写真だった／＼／＼／＼。ちなみに今回撮った写真は全部、一枚ずつ僕と愛ちゃんに手渡された。………持って帰ったら、絶対に姉さんに見つからないところに保管しておかないと！！

「………早く行こっか、愛ちゃん」

「………そうだね」

今、二人とも顔が真っ赤になっている。………うう、気まずい。もしこんなところを雄二たちに見られたら「おお、アキたちじゃねえか、どうだった？写真撮影」からかわれる事間違いないだろう。とにかく、芳樹たちに見つからない「その様子だと………ある意味大成功って訳だな」うちに………って

「「^{ヨッシ}芳樹！？」」

「ったく、今頃気づいたのかよ。て言うかお前らタイミングもいいな」

愛ちゃんも芳樹がいたことに驚く。どうやら愛ちゃんも何か考え事をしていたようだ。とりあえず目の前の芳樹に思いっきり殺意をぶつける。

「芳樹、一体僕に何の恨みがあつてこんな事をやったのかな」

「いやー、アキのことだから断つてると思ってそれだと愛子がかわいそうだったからな。(で、どうだった写真は？俺にも見せてくれよ、って言うかあの外国人に頼んで見せてもらったんだけどな。ラブラブだねえ)」

「っ！？／／／／／／／／／／」

あの人が勝手に見せてるの！？芳樹に弱みを握られてしまったじゃないか！クツ、うかつに殴れない

「俺が今来た理由はな、襲いかかってくる奴らが来るだろうから、それからお前らを守るためにきたんだ。ああ、ちなみにあの写真は写真館に飾るってさ」

「なんだって！？それじゃあもしここに友達が来たときと「アキ？工藤とあんな写真を撮るなんて覚悟は出来てるわよね」もう来てるんですか」

あ、そうですね、ってよりによって美波！？……このままじゃ姫路さんもここに来て、この場で処刑されるのも時間の問題か！……何とか愛ちゃんだけでも逃がさないと！

「アキ、もう瑞希なら電話で連絡したわよ。……
・さあ、もういいかしら」

「待つてください美波ちゃん！……私にも殺らせてください！
あ、姫路さんまで来た。もう終わりだorz。……どうして僕はこんなにも二人に嫌われているんだろう、僕何かやったかな？

「くっ、もうきやがったか。仕方ない、アキ！愛子連れてここから逃げる！ここは俺が食い止める！」

「芳樹もいきなり何言ってるの！？これバトルものでもなんでもないよ！？それにバトルものだったらそのセリフ完全に死亡フラグだよね！？」

とは言え、確かにここは逃げないと僕には死しか訪れない。芳樹を見捨てるしかないのか！？

「・・・・・・・・安心しろ、俺もいる」

「ムツツリーニ！」

芳樹の隣にシュツとムツツリーニが現れた。

「・・・・・・・・・・愛子は任せた。だからいけ！明久！！」

「いくぞムツツリーニ！アウェイクン！選択、保健体育！」

「「試験召喚！」」

芳樹が『白金の腕輪』を起動し、二人は召喚獣を出す。僕達の為此ここまでしてくれるなんて・・・・・・・・僕はなんて良い友達を持ったんだ！・・・・・・・・ただ、これってこんな作品だったっけ？

「ありがとう、二人とも！・・・・・・・・愛ちゃん、逃げるよ！」

「う、うん」

僕は愛ちゃんの手を引っ張ってその場から逃げる。芳樹、ムツツリーニ、お願いだから無茶だけはしないでよ！

「アキたちも逃げたみたいだし、どうする？ 島田、姫路、ここは通さないぜ」

今ここに展開しているフィードの科目は保健体育。きっと鉄人ならどこにでも現れるだろうからここで倒せば、もう今日は邪魔できないだろ。……というか、アキの召喚獣と違って俺達のは物理干渉できないんだから、無視して行くと言う事はしないのだからうか。

「ど、どうして長谷川くんは、私達の邪魔をするんですか」

「そうよ！ 工藤の味方ばかりかして、それに土屋も！」

目の前の女子二人は抗議してくる。全くこいつらは……少しは自分達の行動からアキがどう思ってるかとか想像できないんだらうか

「俺はアキと工藤の過去を知ってるからな。アキの……昔叶えられなかった思いを叶えてやりたい。……それだけだ」

「……男として惚れた女の泣き顔なんか見たくない」
おっ、かつこいいねえ、ムツツリーニ。とにかくこの勝負でなら負ける気がしない。ムツツリーニは愛子と学園1、2位を争っているし、俺だってそこそこは取れている。島田を先に倒せばそのまま姫路にも2対1になるんだから勝てるだろう。

「……………どうしてもどかないのね、なら良いわ。試験召喚！」

「絶対に負けません！ 試験召喚！」

『2年A、Fクラス 長谷川芳樹&土屋康太 保健体育288点&649点

V S

2年F、Fクラス 姫路瑞希&島田美波 保健体育411点&8
4点[『]

姫路が腕輪持ちか、少し厄介だな。とりあえず俺が足止めしてる
うちにムツツリーニで島田を討ち取って、二人で攻める。・・・
これでいいか

第三十八話、余談その3 | Side 明久 | . . . サポート？それと暴動

なぜ、戦いにもっていった その理由は作者にも分かりません！

切り方が微妙

次の雄二 Side で最初にこの勝負だけ書きます（これで
・雄二 Side がコピー文じゃなくなる 場面は関係ない
ですが）

感想お待ちしております

第三十九話、余談その3ーSide雄二ー？ 戦闘と変装とウエディング体験？

ハイ、久しぶりの投稿です。

雄二の前に、芳樹&ムツツリーニ VS 美波&瑞希を書きます

ぜひ見ていってください

第三十九話〈余談その3〉Side 雄二？ 戦闘と変装とウエディング体験？

グランドパーク内・・・Side in 芳樹

「早速だけど頼むぜ！ムツツリー二！」

「・・・任された・・・加速！」

ムツツリー二の持つ腕輪が光る。これで、島田の方を倒せば2対1で姫路にも楽に勝てる。単純だが、単純だからこそ強い！！

「甘いわね、土屋！ウチだってその位はかわせるんだから！」

そういつて、島田はムツツリー二の召喚獣の攻撃をヒョイとかわした。何でだ！？あれを肉眼で捕らえられたとも言うのか！？・・・そうか、ムツツリー二の加速は速すぎて途中で曲がったりは出来ない。だからこそ腕輪の効果が反映されるギリギリで避ければ回避は出来るのか！

「隙有りです！」

「グツ、姫路！」

考え事をしていた所為で、姫路の攻撃を掠らせてしまった。まずい、掠らせただけでこんなにダメージになるなんて・・・。とにかく、攻撃を受け流してチャンスを待つしかない。

□ 2年A、Fクラス 長谷川芳樹&土屋康太 保健体育158点&597点

V S

2年F、Fクラス 姫路瑞希&島田美波 保健体育402点&84点

やばい！ムツツリーニは加速の使用で点数が減ってきてるし、俺もさっきの掠ったのが不味かった。だが姫路の事だ、チャンスがあればそこで熱線を使って決着を速く着けたがるだろう。そこを上手く付けば………まてよ、

「（ムツツリーニ、作戦がある。………してくれ！）」

「（………やってみる）」

やっぱりこういう時ってアイコンタクトって便利だよな。相手に何も知らせないで色々話せるんだもん。………とにかく、俺は姫路の攻撃をいなし続ける。………ムツツリーニが誘導してくれるまで。………今だ！！

「おっと、やべー!？」

「っ！チャンスです!」

よし、かかった!………ムツツリーニに誘導させていたもの、それは………

「………加速」

「え!？ちょ、ちょっと土屋ってきやあ!」

そう、島田の召喚獣だ。察しのいい人ならここまでの文で分かってくれると思うが、作戦はこうだ。まず、俺と姫路の召喚獣の直線状に島田の召喚獣を置く。その後、滑ったりして姫路にチャンスを見せかけて熱線を放させる。後はムツツリーニの加速で、俺の召喚獣をどければいいだけだ。熱線は島田の召喚獣に当たり戦死。姫路

は腕輪を使った事により点数を消耗。この後はもうムツツリー二の独壇場だ

「2年A、Fクラス 長谷川芳樹&土屋康太 保健体育113点&571点

VS

2年F、Fクラス 姫路瑞希&島田美波 保健体育349点&0点

「大丈夫ですか美波ちゃん!」
「加速」えっ、
きゃあ!

ムツツリー二の小太刀が姫路の召喚獣を切り裂いて戦死。この戦いは俺達の勝利に終わった

「戦死者は補習」

「「いーやー!」

「西村先...鉄人が現れた。前にアキが近くの銭湯で風呂場から出てきたと言っていたが、こっから文月学園までかなりの距離があるぞ?まさか本当にいたとは...あの人、学校にいないか?」

「...一件落着」

「そうだな...ムツツリー二、本当にいいのか?」

「...良いも何も俺が決める事じゃない...
・工藤が決める事だ」

「...こいつ...俺だってそんな立場にいたら

しばらくは立ち直れないぞ。

「・・・そうか。じゃあそろそろ、雄二の方も準備できてそうだが行くか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・もちろん。」

俺は、ムツツリー二と一緒に雄二の結婚式？の開かれるパーティー会場へ向かった。

・・・・・・・・・・・・・・・・別に完全な悪影響を受けてたわけじゃないんだな、アキも。

Side out 芳樹 & Side in 雄二

アレは秀吉の声真似だと逃げながら説明し、なんとか落ち着いた翔子を連れて俺はお化け屋敷を出た。

「お疲れサマでシタ。どうでシた力？結婚したくなりまシタか？」

「アレと結婚を結びつけて考えることが出来るのはお前と明久ぐらいだろうな・・・・・・・・」

絆どころか溝が深まった気分だ。

「オカしいデスね？危機的状況に陥った二人の男女八、強い絆で結ばれるという話なのデスが・・・・・・・・」

「まあ、襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなるかもしれないが・・・・・・・・」

この似非野郎、きつと前の明久となら同レベルのアレなヤツだろう。しかし、おかげで少し安心した部分もある。あいつらの作戦ということなら、ヤクザを使つての詐欺まがいのことはされそうにないからな。これなら死にも狂いで脱出するような真似はしなくてもよさそうだ。・・・面倒なので、できればすぐにでも帰りたいが。

「・・・そろそろ、お昼」

翔子が噴水の上の法を見ながら呟いた。そこにある大時計は午後一時過ぎを示していた。そろそろ昼飯か。

「・・・あの、私のバッグ」

「デハ、豪華なランチを用意してありますので、こちらにいらして下サイ」

似非野郎がスタスタと歩き出す。昼飯も用意してあるのか。さすがはプレミアムチケットだな。

「翔子、どうした？」

「・・・なんでも、ない」

「????」

一瞬寂しげな顔をしていたような・・・？

「・・・雄二。急がないとはくれる」

「お、おう」

俺たちがついてくるといふ自信があるのか、似非野郎の姿が随分と遠くに見える。まあ、豪華な昼飯と聞いたからにはご馳走になる

つもりではあるが。しばらく歩くと、小洒落たレストランが見えてきた。

「コチラでランチをお楽しみ下さい」

そう言っつて似非野郎が案内したのはパーティー会場のような広間だった。そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。この雰囲気、レストランというより

「…………クイズ会場？」

そう。一応丸テーブルの上には豪華な料理が用意されているが、TVでよく観るクイズ会場のような雰囲気になっていた。

「いらつしやいませ。坂本雄二様、翔子様」

ボーイが現れ、俺たちを席に案内する。…………コイツも見覚えのある面だな、オイ。

「秀吉。ボーイの真似事か？」

「秀吉？なんのことでしょうか？」

顔色一つ変えずに切り返してくるクラスメイト。こいつ、役者モードになってやがるな。こうなるとそう簡単に化けの皮は剥がせない。それならば、芳樹の時と同じように道具を使つとしよう。

「違つと言つなら、確認させてもらつぞ」

携帯電話を取り出し、アドレス帳から『木下秀吉』を呼び出す。着信音は……………ならない

「な、どういうことだ!？」

「ふっ甘いわね、坂本君。いくらボーイの格好をしてたって男とは限らないでしょう?」

この声、秀吉の姉の木下優子か!

「……………優子?」

「ええ、そうよ代表。全く秀吉が倒れたからって何で私がこんな役を……………」

なにやらぶつぶつ言っている、ん?倒れた?

「おい、木下姉。お前は芳樹たちみたいに誤魔化したりしないのか?それに、秀吉が倒れたってどういうことだ?」

「当たり前じゃない、長谷川君や姫路さんがばれているのにわざわざ隠す必要も無いわ。あらやだ、代表が隣にいるのに秀吉の事が気になるの?」

おい、やめてくれ。そんな言い方をしたら……………

「……………雄二……………浮気は許さない」

「おい待て翔子、誤解だ。友達として気にしぎゃああああああああああああ!!!」

日に日に、翔子のアイアンクローの締め付けが強くなっているのは気のせいなのだろうか……………

「代表、その辺にしておいて着いて来て頂戴。席に案内するわ」
案内人に連れられて会場の中を移動する。

「お客様は未成年だということなので、こちらを用意させて頂きました」

席に着くと、木下姉とは違うボーイがグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくる。ラベルが見えるように持っているあたり、そこら辺のバイト人という訳ではなさそうだ。優秀なソムリエでも雇っているのだろうか。

「オードブルでございます」

グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。豪華な、という前置きは間違いないようで、慣れない料理に苦笑しながらナイフとフォークを手に取るようになった。もっとも翔子はこういった席にはなれてるかもしれないが。

そしてデザートも食べ終え、ここには特に何の仕掛けもないのか、と安堵しかけたその時。

《皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！》

会場に大きくアナウンスの声が響き渡った。

《なんと、本日ですが、この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやっているのです！》

飲んだ水が少しだけ鼻から逆流した。

《そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させて頂きました！題して、【如月グランドパークウエディング体験】プレゼントクイズ！》

出入口を封鎖する重々しい音が聞こえてくる。退路を断つとは・・・あいつらめ。俺の行動パターンは予測済みということか・・・！！

《本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えを頂き、見事五問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験して頂けるというものです！もちろん、ご本人様の希望によってはそのまま入籍ということでも問題ありませんが》
大問題だバカ野郎。

《それでは、坂本雄二さん&翔子さん！前方のステージへとお進み下さい》

「ご丁寧にも司会が俺たちの席を示してくれたおかげで、レストランにいる観客が一斉にこちらへと目を向けた。」

「・・・ウエディング体験・・・頑張る・・・！」

「落ち着け翔子。そういったものはだな、きちんと双方の合意の下に痛だだだだっ！耳が干切れるっ！行く！行くから放してくれっ！」

ただの体験だと自分に言い聞かせ、渋々と壇上上がる。スタッフの誘導の下、俺と翔子は解答者席へと案内された。

第三十九話、余談その3ーSide雄二ー？ 戦闘と変装とウエディング体験？

ここで切らせていただきます。次もきつと雄二です。

感想お待ちしております……………眠い……………

第四十話、余談その3ーSide雄二？ 出来レースとバカッフルそしてスタ

すいません、今回が出来レースでした。前回のサブタイムも後で変更しておきます

それと、いつの間にか PVアクセス200000、ユニークアク
セス25000 突破！

呼んでくれた皆様、本当にありがとうございます

グランドパーク、会場内・・・Side in 雄二

《それでは【如月グランドパークウエディング】プレゼントクイズを始めます！》

俺と翔子の間大きなボタンが一つ設置されている。これをおし
てから解答するというオーソドックスなシステムのようだ。・・・
・・・正解したらプレゼント、ということは、間違え続けたら無効
になるのだろう。それなら俺が間違え続けるとするか。

《ではあ、第一問！》

ボタンに手を伸ばす用意をし、出題を待つ。さて、どんな問題が
来る・・・？

《坂本雄二さんと翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか？》

おかしい。問題文の意味がわからない。ピンポーン！
しまった。油断しているうちに翔子が勝手にボタンを！だが、いく
らコイツでも正解の存在しない問題に答えなんて

《はいっ！答えをどうぞっ！》

「・・・毎日が記念日」

「やめてくれ翔子！恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ！」

《お見事！正解です！》

しかも正解！？司会者を睨みつける。すると、司会者は観客に見
えない角度で、俺に向かって片目を瞑ってきた。さては・・・

出来レースかつ！そこまでして俺たちにウエディング体験とやらを
させたいのか！？いいだろう。それならば 俺は維持でも
間違えて見せよう！

《第二問！お二人の結婚式はどちらで挙げられるでしょうか？》

ピンポン！と素早くボタンを押し、マイクに口を寄せ
る。既に問題自体がクイズではなくて質問と貸しているような気が
するが問題ではない。不正解を出すなんて、造作もないこと！

《はいっ！答えをどうぞっ！》

「鯖の味噌煮！」

《正解です！》

「なにいつ！？」

馬鹿な！場所を聞かれたのに鯖の味噌煮が正解なのか！？

《お二人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名
【鯖の味噌煮】で行われる予定です！》

「待ていつ！絶対その別名はこの場で命名しただろ！強引にも程が
あるぞ！」

《第三問！お二人の出会いはどこでしょうか？》

ダメだ、聞いてねえ……！だが、向こうのやり口はわかっ
た。今度は確実に間違えてみせる。翔子が動くより早くボタンを押
し、間違った解答を

「……させない」

ブスッ

「ふおおおおっ!?目が、目があっ!」

ピンポーン!

《はい、解答をどうぞ!》

「……小学校」

《正解です!お二人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚までに至るといふ、なんとも仲睦まじい幼なじみなのです!》

今俺が目をつかれたのは見えてないのか!?どこをどう見たら仲睦まじいという言葉が出てくるんだ!問題を聞いてから動き出すようでは遅すぎるようだ。翔子の妨害が間に合わないタイミングで解答する必要がある。こうなったら

《第四問に参ります!》

ピンポーン!問題文が読み上げられるよりも先にボタンを押し、妨害が入る前に解答を済ませる!どんな問題が来るかはわからんが、【わかりません】と解答したら100%間違いになるはず!

「わかり」

《正解です!それでは最終問題です!》

うおっ!?俺の解答を無視したぞ!?問題を無視した仕返しか!もはや間違えることは不可能だ、と諦めそうになったその時、

『ちょっとおかしくな〜い?アタシらも結婚する予定なのに、どう

してそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜?」

不愉快な口調の救いの神が現れた。その場の全員が声の主を探ると、彼らは呼ばれてもいないのにステージのすぐ近くまで歩み寄ってきていた。

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか』

『あぁっ!?!?グダグダとうるせーんだよ!オレたちはオキヤクサマだぞコルア!』

茶髪で顔中にピアスをつけた男がスタッフを威嚇するように大声をだす。どこかで見た連中だと思ったら、入場口で似非野郎に絡んでいたチンピラどもか。

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど〜?』

『で、ですが』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア!オレたちもクイズに参加してやるって言うってんだボケがっ!』

『うんうんっ!じゃあ、こうしよーよ!アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで!』

慌てるスタッフをよそに、そのカップルはズカズカと壇上に上がり、設置してあるマイクの一つをひったくる。これはチャンスだ。あの司会者が相手なら間違えられなかったが、この連中が相手なら間違えられることができる。あとは翔子の妨害を邪魔しておけば・

・・・!

「……ゆ、雄二……?」

解答者席の陰で翔子の手を握る。これで目潰しは出来ない。あとは向こうの問題に間違えるだけだ!

『じゃあ、問題だ』

チンピラがわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言う。さて、どんな問題だ?安心してくれ、どんなに簡単な問題でも間違えて

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ!』

「……」

言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねえのか?』

確かにわからないと言えばわからない。俺の記憶では、ヨーロッパは国というカテゴリーに属していたことは一度もないのだから。その首都を答えるなんて不可能だ。

《……坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。》

【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいたします《

『おい待てよ!こいつら答えられなかっただろ!?オレたちの勝ちじゃねえかコルア!』

『マジありえない!?この司会バカなんじゃないの!?!』

バカツプルがぎゃあぎゃああと騒ぎ立てる中、ステージの幕が下りてくる。前の明久以上、もしくはFクラス以上のバカがいるとは、世界って広いもんだな……。

「おメデとうございマス。ウェディング体験が当たるなんて、ラッキーでスね」

「………凄く嬉しい」

レストランを出ると、未だに翔子の鞆を抱えている似非野郎がヒヨコヒヨコと近付いてきた。まったく、なにがラッキーだ。ハナから計画に入っていたくせに。

「そういえば翔子。お前の持ってきた鞆は何が入っているんだ？随分と大きいが」

「………別に、なんでも………」

翔子が少し困ったように答える。何かあるのだろうか？まあ、俺の実印すら持ち歩いているようなヤツだ。荷物が大きくても不思議はないが。

「翔子サン、ウェディング体験の準備があるノデ、このスタッフについていってもらえマスか？」

いきなり似非野郎の後ろから三十前後の女性のスタッフが歩み出て頭を下げる。いかにも業界人といった風貌の人だ。

「初めまして。貴方のドレスのコーディネートを担当させて頂きます。一生の思い出になるようなイベントにする為、お手伝いをさせていただきます。」

そう言っただけでスタッフは翔子に笑顔を向けた。おいおい、随分と本格

的だな。まさかスタイリストまでつけてくるとは。となると、如月ハイランドの狙いはアトラクションじゃなくて最初からこのウエディング体験だったってことか。どうやら今からの時間を目一杯使って結婚式の擬似体験をさせてくるようだ。

「ってことは、俺は長い時間待たされるのか？」

ドレスを着てメイクをするってことは数時間もかかるような大作業になるだろう。その間俺は何していればいいんだ？

「ご安心下さい。如月グループの誇る新しい技術を使うノデ、メイク等にアマリ時間は掛かりませーん。それに……………」

新技术？そんな物使って大丈夫なのか？……………やばい、新技术と言うとよく失敗するあのババアが浮かび上がる、いけないいけない。こういうところで使うのだから信用は出来るのだろう。だが、それに続く言葉はなんだ！？猛烈に嫌な予感がする。

「坂本雄二さんは逃亡を考えるだろうカラ、コレで気絶させてカラ着替えさせるように、と皆様からの指示デース」

そういつて野郎が取り出したのは、見覚えのあるスタンガン（二十万ボルト）。

「あ、あいつらああああああっ！！！」

「少しガマンして下サーイ」

首の後ろでバチンツと大きな音が響き、俺は意識を失った。

Side out 雄二 & 芳樹 Side

「あのバカカップル、本当に苛立つわね」

「おい、優子あまり目立つようなこと言うと雄二達やアキ達にはれる」

「……明久たちの方も少し雰囲気が悪そう」

優子、芳樹、ムツツリー二の三人はパーティー会場の席で、先ほどまでのクイズ等を見ていた。ちなみに明久たちも来ている（そっちは今度のSide明久で）

「それにしても、本当にこんな事で代表たちはくつつくの？」

「どうだろうな。だが、アキ達の方はなんだかんだで上手くいってるぞ。それもあのサポートがあまり無かったからだろうがな」

「全く……それなら代表達の方も断るよう頼めばよかったじゃない」

優子は呆れるようにため息をつく

「いや、向こうの狙いはあくまで結婚まで持つていく事だからな。両方をもって事は出来なかった。……あのバカップルのおかげで雄二達の方は面白い事になりそうだな」

芳樹は、ニヤッと笑みを浮かべてバカップルの方を見ていた。

第四十話、余談その3ーSide雄二？ 出来レースとバカカップルそしてスタ

変えられる所がもう無かった！すみません。

それと次回はまた雄二だと思います。そこでは原作と違った展開にさせる予定です

これからもよろしく願います

第四十一話、余談その3 | Side 雄二 | 追いかけてくるあいつと向き合

今回、雄二を書いたら少し戻って明久のほうを書くつもりです

グランドパーク、会場内・・・Side in 雄二

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》

園内全てに響き渡るのではないかと思える程の拍手が聞こえてきた。このうちの何割かはサクラだと思うが、周囲の熱気に圧されて一般入乗客も拍手をしているようだ。

「坂本雄二さん、お願いします」

舞台袖で似非野郎が耳打ちしてきた。コイツをブチのめして逃げてやるうか。

「抵抗すれば、海栗とタワシの活け作りをアナタの実家に送りマース」

くっ。そんな物を送られたら、あの母親はきつと全部海栗だと勘違いしてタワシにも手を出してしまう……！

「やれやれ・・・。。まあ、あくまでもただの体験だしな。適当に付き合ってさっさと終わらせるか・・・。」

油断を誘うため、似非野郎に聞こえるように諦めの言葉を呟く。

恐らくこいつらの狙いは、指輪交換から誓いのキスまでの一連のシーンだ。それらを大々的にメディアに発表することで、俺と翔子を世間的に結婚させるつもりだろう。確かに世間でそういった目で見られてしまえば、違うやつと歩いているだけで何を言われるかわかったもんじゃない。いやらしいが巧いやり方だ。勝手に映像を使われる 要するに肖像権云々についての知識はないのでわからないが、向こうは大企業だ。なんらかの方法があるのだろう・・・

・だがそれなら、俺は誓いの言葉に入るまでの間に脱走したらいい。好都合にも衆目の前だ。ちょっと大げさに仮病でも使ってやれば、相手側も式を断念せざるを得ないだろう。この場を逃れたらあとはどうとでもなる。

「さア、どうゾ」

「あいよ」

トントン、と小さな階段を昇る。そのままステージに上がると、その光景に一瞬眩暈がした。

「おいおい……。なんだよこのセット……」

数え切れないスポットライトにライブステージのような観客席。スモークの設備はおろかバルーンや花火の用意までしてあるように見える。向こうにある電飾なんていくらかかかってるか見当もつかん。

《それでは新郎のプロフィールの紹介を》

ん？俺のプロフィール紹介か。まるで本物の結婚式だな。目的のシーン以外の部分もきちんとしているようだ。さっきのクイズもそうだが、きつとあいつらや芳樹にでも聞いて細かく下調べを

《省略します》

手え抜きすぎだろ。

『ま、紹介なんていらねえよな』

『興味ナシ』

『ここがオレたちの結婚式に仕えるかどうかの問題だからな』

『だよね〜』

最前列に座っている連中からそんな声が聞こえてきた。声の主は・・・さつきクイズ会場で騒いでいたチンピラどもか。しかし、最前列に座っているのに大声で会話とは。外観に相応しいマナーの持ち主だな。

《・・・他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってるの〜?』

『間違えだろ。オレらはなんたってオキヤクサマだぜ?』

『だよね〜っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分がいいか悪いかってのが問題だろ?な、これ重要じゃない?』

『うんうん!リョータ、イイコト言っね!』

調子に乗って下卑た笑い声が一層大きく響きわたる。主催側のイベントの邪魔になる要因は排除したいだろうに やっぱりあれだけ騒ぐ連中だと手を出せないだろうな。宣伝目的でやっているのに悪評を流されたら意味がないから仕方ないな。

《 それでは、いよいよ新婦のご登場です!》

心なしか音量が上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。シモークが足元に立ちこめ、否応なしに雰囲気盛り上がる。・・・ははっ。コレで翔子に花嫁衣装が似合っていないければ興さめもいところだな。脱出はもう少し待つとしよう。折角来たんだ。翔子のドレス姿くらい見ておくのも一興だ。

そんなことを考えながら待っていると、目が暗がりになれるよりも早く、一条のスポットライトが点された。

《本イベントの主演、霧島翔子さんです！》

アナウンスト同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。暗闇から一転して輝き出す壇上に、思わず目を瞑ってしまう。そして、再び目を開けた時に飛び込んできた姿に

俺は一瞬、言葉を失った。幼い頃からの知り合いでありながらも今日この場で初めて出会ったような、そんな感覚を抱かせるほどの見違えた姿。彼女は花嫁と呼ぶに相応しくたおやかに佇んでいる。あれは……誰だ？

『……………綺麗』

静まり返った会場から溜息と共に洩れ出た、誰のものともわからない台詞。だが、その言葉は何にも阻まれることなく壇上の俺のところまで届いてきた。余程入念に制作したのか、純白のドレスは皺一つ浮かべることなく着こなされている。スカートの裾は床にすらない限界の長さに設定されているようで、アイツがステージの中央まで歩いてくる間、一度も床に触れることはなかった。

「……………雄二……………」

ヴェールの下に素顔を隠し、シルクの衣装に身を包む幼なじみが、どこか不安げにこちらを見上げている。胸元に掲げている小さなブーケが所在なげに揺れた。

「翔子、か……………」

「……………うん」

頭の中が真っ白になり、いわずもがなの質問が口をついて出た。あまりの変わりように、確認せずにはいられなかったのかもしれな

い。動揺する俺に、翔子は恥ずかしげに問いかける。

「……………どう……………？私、お嫁さんに、見えるかな……………？」

コイツが見知らぬ少女に見えたせいか、会場の雰囲気にも飲まれたのか、それとも何かの要因か。俺は考えを巡らせることもなく勢いで返事をしてしまった。

「ああ、大丈夫だ。似合ってるぞ、翔子」

先ほど頭に浮かんだ言葉なんて既にどこかへと飛んでいた。似合っている、なんて言葉を付け加えられただけでも上出来だと思う。

「……………雄二……………」

翔子は小さな声で俺の名を呼び、ブーケを抱え直した。そして、その場で動きを止める。

「お、おい。翔子……………？」

なんだ？様子がおかしい。俺の返事が何かマズかったか？駆け寄るべきか、一瞬迷う。すると、俺が迷ってる間に、翔子は再び言葉を紡いだ。

「……………嬉しい……………」

目の前で少女が俯き、ブーケに顔を伏せる。そして、それ以上は言葉を発することなく静かに震え出した。

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが……………？》

仕事を思い出したかのようにアナウンスが入る。泣いている？言われてみて初めて気づく。俯いて肩を震わせて
翔子は静かに泣いていた。

「お、おい。どうした……?」
ヴェールとブーケが邪魔で表情が見えない。なぜ急に泣き出したんだ?会場から静寂が消え、観客の間に少しづつざわめきが生まれ出す。そんな中、彼女は小さな、だがはつきりと聞き取れる声で呟いた。

「……ずっと夢だったから」
涙混じりのかすれた声。

《夢、ですか?》

「……小さな頃からずっと……夢だったから……私と雄二、二人で結婚式を挙げること……。私が雄二のお嫁さんになること……。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……」

口数の少ない翔子が懸命に紡ぐ言葉は、俺に形容し難い何かの感情を喚起した。幼い頃のある出来事がきっかけで抱かれた、コイツの俺への想い。それは罪悪感と責任感からくる勘違いなはずなのに
コイツはどうしてここまで強い気持ちを抱けるのだろうか。

「……だから……。本当に嬉しい……。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」
そこまで言って、あとは言葉にすることができずに翔子は静かに泣いた。

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか?》

どう応える?そんなものは決まっている。場所がどこであろうと、

時間がいつであるかと、俺がやるべきことはただ一つ。コイツの勘違いを正してやることだ。頭ではそう考えている。それなのに

不思議なことに俺の口はあの言葉を紡ぐことが出来ずにいた。

「翔子。俺は

」

『あーあ、つまんなーい!』

何かを言いかけたところで、観客から大きな声があがる。俺は慌てて口を噤んだ。よくわからないが、どこかでホッとしている自分がある。ということは、これは俺にとって天の助けなのか。

『マジつまないこのイベントおゝ。人のノロケなんてどうでもいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い?』

『だよな〜。お前らのことなんてどうでもいいっての』

どうやら俺の窮地を救ってくれたのは最前列に陣取る馬鹿二人組みのようだ。会場が静まり返っていたおかげで発音者がはっきりとわかる。

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ?なに?キヤラ作り?ここのスタッフの脚本?バカみてえ。ぶっちゃけキモいんだよ!』

『純愛ごっこでもやってんの?そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドおゝ。あのオンナ、マジでアタマおかしいんじゃない?ギャグにしかなえないんだケドお』

『そっか!コレってコントじゃねえ?あんなキモい夢、ずっと持ってるヤツなんていねえもんな!.....ゲフッ!、てめえ何しやがる!』

『リュ、リユータ、大丈夫！いきなり何すんによアンタ！』
口々に文句を言い、翔子を指さして笑い始める二人組み。すると、そこに男の方を殴りかかった奴が一人。それは俺が知ってる限り最も馬鹿なヤツ……明久だった

「……………に……………のか？」

『ああん？何言ってるんだよお前。』

「てめえらに霧島さんの夢を笑えるほどの夢があるのかって言うてんだよ！」

それだけ言つて、明久はもう一回起き上がった男を殴る

「霧島さんはな、この時をずっと待ってたんだぞ！あっちの馬鹿な新郎に心の中でずっと積もってた思いを打ち明ける日を！何年もかけて育つていった、その大切な夢をお前らが馬鹿にして霧島さんを傷つけたんだ！」

『ハッ、用はここが俺達に使えるかどうか、それさえ確認できりゃあそれで良いんだよ！あんな女の事情なんて知った事か！』

「なんだと！」

《お、お客様、落ち着いてください！》

「落ち着いて、アッキー！」

あの野郎……俺と翔子の間に何があつたかも知らないで……いや、あいつはきつと大まかな事はAクラスで翔子から聞いているはず。聞かない方がおかしいだろう、スタン

ガンなんて持つて男を追いかける女なんて翔子ぐらいだろうからな。
．．．．．あの時からだな、俺が変わったのは。ただ
学力だけがすべてじゃない．．．．それを証明するために俺は神
童から悪鬼羅刹になった。そんなことのために学力であるうが、地
位であるうが、．．．．翔子への気持ちであるうが俺はそれまでの
すべてを捨てた。．．．．なんだ、俺があいつから逃げているだ
けじゃないか。あいつは俺に気持ちを伝えたいために追いかけてく
る。それから逃げ続けているだけ、ろくに向き合ってやらないで。
そしてあいつは今、俺に気持ちを伝えた。だったら．．．．

《は、花嫁さん？花嫁さんはどちらに行かれたのですか？》
チンピラどもと明久が暴れている席から翔子の方に目を向ける。
だが、この短い時間の間に翔子は壇上から姿を消していた。さつき
まで立っていた場所にブーケとヴェールを残して。ヴェールを拾い
上げる。それは羽根のように軽いはずなのに、涙で湿って少し重く
なっていた。

「．．．．．俺が翔子に言わなくちゃならない事．．．．．
．．．．．そんなもん決まってる！」

第四十一話、余談その3、Side雄二？ 追いかけてくるあいつと向き合

少し最後の方が原作より暗くなりました。ちなみにあの時とは6・5のあれです。

次から明久のほうを書いて最後両方を書いて終わりたいと思います

これからもよろしく願います

第四十二話、余談その3 | Side 明久 | 写真とアトラクションとバカッ

久々の明久です。サブタイにバカップルをつけましたが直接的な関わりを持つわけではないので……

それではどうぞ

グランドパーク・・・Side in 明久

「・・・・・・・・・・ふう、ここまで来ればもう大丈夫かな。愛ちやん疲れてない？」

「う、うん何とか。」

芳樹たちが姫路さん達の足止めをしてくれたお陰で、なんとか僕達は逃げ切れた。芳樹とムツツリー二には本当に感謝するべきだよな

「とりあえず、芳樹の言ってた僕達のあの写真が飾られてるっていう写真館に行こうか」

「そ、そうだね・・・・・・・・・・（あの写真はさすがに他の人に見せたくないし）」

・・・・・・・・・・写真館に来て、スタッフさんにその写真が飾られてるところに連れて行くよう頼む・・・・・・・・・・はずだったのだがその必要は無かった。なぜなら・・・・・・・・・・

「ちよつと、なにこの大きさ！」

「これ、絶対に来た人の目に付くよね・・・・・・・・・・orz」

僕らのあの写真は、写真館の入り口にでっかくしたものを飾られ

「ねえ愛ちゃん、この辺で愛ちゃんが遊びたいって言ってたアトラクションある？」

「うーんと、ね。．．．．．あれ！」

僕は愛ちゃんの指差した方を見る。そこにあっただのは．．．．．

『怖くしたって　じゃないか！』

．．．．．どっかで見たとあるような名前だけど、絶叫系であることは間違いなさそうだ。

「このジェットコースターはね1回宙返りしてる間にはコースターが十回転するんだって。宙返りのところじゃなくてもコースターは回るんだけどね」

「ちょ、何その多さ！？気持ち悪くなる事間違いなしだよね！？」

普通の絶叫系なら乗れない事は無いけど、そんなものに乗れるはずが無い！

「早くいこ　アッキー」

「ま、まっつて、まだ神へのお祈りが」

愛ちゃんに無理やり引つ張られる形になってそのジェットコースターに乗る事になった。ただ、今日はプレオープンのために一日中遊べるわけではなく、そのアトラクションごとに動く時間が決まっているらしい。僕達はその時間にギリギリ間に合った。．．．．．やっぱり他の客もカップルばかりだ。こんな所において自分達もカップルだとは思われないだろうか。．．．．．それはないか、僕と愛ちゃんじゃどう考えたってつりあわないし．．．．．そんな

こと考えてるうちにコースターが動き出した。

「きゃアアアアア (ギャアアアアアア!?!?!?)」

愛子：やっぱりコースター自体が回るから、普通のより風が結構くるね。また後で乗れる時間に来たいな

明久：もう二度と乗りたくないorz

「アッキー、大丈夫？」

「……………な、何とか」

正直、あれはきつい。今の僕は体が白くなり何かが頭から飛び出していると思う。

「まだ、代表たちには時間あるしもう一つ何かやってかない？」

「……………今と同じような絶叫系を乗るのだけは勘弁してください」

「アッキーって意外と絶叫系駄目だったんだね……………折角二人で来たんだから二人で楽しまなきゃ意味ないし……………あ、だったらあれならどう？」

「……………流石に、男女二人でメリーゴーランドはどうかと」

この年で、男女二人で乗るって絶対カップルとかがする事だよね？それと、どうして愛ちゃんはこのなにも積極的なの？……………

・ばれたら、命の保障は出来ないな

「・・・まだ『センター・オブ・プロミネンス』とか色々あるんだけど？」

「メリーゴーランドがいいです、いやメリーゴーランドにしてくださいお願いします」

「じゃ、決定」

そういうことで、僕達はメリーゴーランドに乗る事になった。

メリーゴーランドの結果はある意味では最悪だった。なぜかというとメリーゴーランドは意外に人気で込んでいた、来るのはもちろんカップルばかり。そんな中、一匹の馬に僕と愛ちゃんは乗る事になり、ずっと愛ちゃんは僕の腰の辺りに手を回していた。・・・
・恥ずかしさというものを考えないならここまでではよいのだが、鉄人に担がれていた姫路さんと美波にその光景を見られてしまったのだ。多分明日に処刑が行われるだろうから、きっと明後日の朝日は見れないだろう。

「そろそろ昼時だし雄二達のウエディング体験、見に行こうか」

「うんっ！」

愛ちゃんは元気よくうなずいてくれる、本当にこの笑顔はかわいいな。・・・ん？なんか向こうの方で騒いでいる人たちがいる、どうしたんだろう？

『今このアトラクションに乗れないってのはどういうことだ！俺達オキヤクサマだぞ、なめてんのかコルア！』

『きゃーっ。リョータ、かつこいーっ！』

『で、ですから今日はプレオープンなので電力等の節約のためにも乗れる時間が決まっているんです！』

あのスタッフさん大変そうだなあ……あのカップル？はカップルで向こうの事情とか考えないのかな、きつと考えられないんだね。よし、あの二人はバカップルと呼ぶ事にしよう。

「ん？どうかしたアッキー？」

「いや、ちよつとね」

その場でバカップルのことを話し、僕たちは雄二たちがいるパーティー会場に向かった……

第四十二話、余談その3 | Side 明久 | 写真とアトラクションとバカッ

短めですみません。

今回のようなデートのシーンをを書けだなんて絶対無理ですって！
だってそのような付き合いをした事ないんですよ！……
自分で言っていて悲しくなったorz

今回は、ウエディング体験の明久Sideになると思います

これからもよろしく願います

第四十三話、余談その3 | Side 明久 | 何が何でも許せないもの

パーティー会場・・・Side in 明久

「ねえ、アッキー、会場つてここで良いんだよね？」

「うん、芳樹から聞いたんだけどここのはずだよ・・・多分」

「僕らが不思議そうにそこをみている・・・クイズ会場？でも、他のお客さんも来ているのでここで間違いはなさそうだ。」

「いらつしゃいませ、お二人様でよろしいでしょうか？席へご案内します」

「あ、はい」

僕と愛ちゃんは案内人に連れられて会場の中を移動する。

「お客様は見たところ未成年だと思いますので、こちらを用意させて頂きました」

席に着くと、ボーイがグラスにノンアルコールのシャンパンを注いでくれる。おお、しっかりラベルが見えるように持っている。姫路さん達のようなバイトの人ではないな、優秀なソムリエでも雇っているのかもしれない。

「オードブルでございます」

グラスを置くと、すかさず運ばれてくる料理。それは豪華絢爛という言葉にふさわしい物だった。ただナイフとかフォークってあんまり使い慣れてないんだよなあ。ちなみに愛ちゃんも苦戦していて

カチャカチャと音が鳴る、今度マナーとかもしっかり勉強しようかな

「うー、なんか食べにくいよお……………」

「しょうがないよ、僕達高校生でこういう場所には特に縁とかも無いんだしさ。でも霧島さんとかだったらなれてるかもね」

しばらく食べ続けていると……………」

『 にしぎゃあああああああああ

あ!!--!』

……………ん?

「今の声……………坂本君だよね……………」

「……………そうだね、きっと霧島さんが怒るような事でもやったんじゃない?目の前で秀吉の心配をするとか」

「アハハ……………そうかもね」

ふう、食べた食べた。周りをよく見てみると、さっきの外国人たち、アトラクションに乗っていたカップル、芳樹たちと色々な人たちが集まっていた……………FFF団に関わりの持つ人はいないみたいだ。よかつたあ、僕達だけならともかく霧島さんの邪魔なんて今回だけはさせたくないからね……………邪魔……………おっ始まるみたいだ。

《皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加いただき、誠にありがとうございます！なんと、本日ですが、この会場には結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルがいらっしやっています！》

「ようやく始まったね、愛ちゃん」

「うー、全くだよ。……………それにしても、坂本君がしどろもどろしてて面白いね」

雄二たちは、スタッフの人たちに誘導されて解答者の席のようなところに登った。

《 正解です！それでは最終問題です！》

「……………愛ちゃんどう思う？」

「……………うーん、これを考えた人は本当にこれで結びつくと思ってるのかな？」

はつきりいつて同感だ。今までの問題はすべて出来レースだろう、結婚式場が鯖の味噌煮って……………流石に雄二が不憫になってきた。そして最後の問題に移ろうとしたとき……………

『ちよつとおかしくな〜い？アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜？』

『あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか』

『ああっ！？グダグダとうるせーんだよ！オレたちはオキヤクサマだぞコルア！』

不愉快な口調のやつらがづかづかと、ステージに上がる。あの時のバカップルだ……

『アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？』

『で、ですが』

『ゴチャゴチャ抜かすなってんだコルア！オレたちもクイズに参加してやるって言ってんだボケがっ！』

「……あのバカップル……」

「お、落ち着いてアッキー」

「……分かったよ」

『うんうんっ！じゃあ、こうしよーよ！アタシらがあの二人に問題出すから、答えられたらあの二人の勝ち、間違えたらアタシらの勝ちってコトで！』

なんだか勝手に話をどんどん進めていってるバカップル。そもそも、お前らはそんなこと言える立場じゃねーだろうが。……おっと危ない、声にでそうだった

『じゃあ、問題だ』

バカップルの男の方がわざわざ巻き舌の聞き取りにくい発音で言

う。．．．．．雄二絶対間違えるんじゃないぞ！

『ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！』

「．．．．．」

言葉を、失った。

『オラ、答えろよ。わかんねえのか？』

いや、その解答は百人中百人がわからないだろう。なぜなら僕の記憶では、ヨーロッパは国というカテゴリーに属してはいないのである。その首都を答えろだなんて不可能だ。

《．．．．．坂本雄二さん、翔子さん。おめでとうございます。》

【如月グランドパークウエディング体験】をプレゼントいたします《

『おい待てよ！こいつら答えられなかっただろ！？オレたちの勝ちじゃねえかコルア！』

『マジありえない！？この司会バカなんじゃないの！？』

．．．．．やばいこの人たち、多分だけど昔の僕より馬鹿だ．
．．．．．

《それではいよいよ本日のメインイベント、ウエディング体験です！皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！》

そうアナウンスが言うと、周りの人たちのほとんどが拍手をしていた。多分サクラもいるんだろうけれど一般客もこの熱気に負けて

拍手しているだろう。少しして雄二が出てくる。……サイズは違うけど、僕が着ていたのと同じ物だ……。雄二には負けないと思っていたのに！……。馬子にも衣装とはこの事か

《それでは新郎のプロフィールの紹介を

》

「へえ、結構本格的なんだね。ヨッシーたちにも聞いたのかな？」

「多分そうだろうね。……どんな風に捏造されてるかは分からないけど……」

《省略します》

捏造以前の問題だった、手え抜きすぎでしょ。

「ま、紹介なんていらねえよな」

『興味ナシ』

『ここがオレたちの結婚式に仕えるかどうかの問題だからな』

『だよな』

前の方からこんな声が聞こえる。一応それにスタッフも注意は呼びかけているようだが……

《……他のお客様の迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮頂けるようお願い致します》

『コレ、アタシらのこと言ってんの？』

『間違えだろ。オレらはなんたってオキヤクサマだぜ?』

『だよね〜っ』

『ま、俺たちのことだとしても気にすんなよ。要は俺たちの気分がいいか悪いかってのが問題だろ? な、これ重要じゃない?』

『うんうん! リヨータ、イイコト言うね!』

反省とかする気は全くないみたいだ……あいつらっ! ……と、手に入れたとたんその手が愛ちゃんの手を押さえられる

「だ、駄目だよアッキー。……確かに僕も許せないけど、それで折角のイベントが中止になったら……」

「……そうだね」

僕は少し手を緩める、それと同時にアナウンスがなる。

《 それでは、いよいよ新婦のご登場です! 》

心なしか音量が上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。シモークが足元に立ちこめ、否応なしに雰囲気盛り上がる。……今思うと霧島さんって、ドレスも和服も似合いそうだな……。僕が思ってたって無意味だけどね。

《 本イベントの主演、霧島翔子さんです! 》

アナウンスと同時に更に幾筋ものスポットライトが壇上の一点のみを照らし出す。暗闇から一転して輝き出す壇上に、思わず目を瞑ってしまう。少しずつ目を開けるとその光の中央には花嫁と呼ぶに相応しい姿の霧島さんがいた。

「……綺麗」

隣にいる愛ちゃんの口から言葉が漏れる。霧島さんの来ているそのドレスは雄二のところに辿り着くまでの間、床に触れる事は無かった。……綺麗とか、麗しいとかぐらいじや言葉が足りないと、僕は思う。

《ど、どうしたのでしょうか？花嫁が泣いているように見えますが……？》

『お、おい。どうした……？』

霧島さんが涙を流した事に少々不安になる雄二。全くその涙が嬉し涙だつてことぐらいすぐ分かつてあげてよ。

『……ずっと夢だったから』

《夢、ですか？》

『……小さな頃からずっと……夢だったから……私と雄二、二人で結婚式を挙げること……。私が雄二のお嫁さんになること……。私一人だけじゃ、絶対に叶わない、小さな頃からの私の夢……。だから……。本当に嬉しい……。他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……』

《どうやら嬉し泣きのようですね。花嫁は相当に一途な方のようです。さて、花婿はこの告白にどう応えるのでしょうか？》

普段口数の少ない霧島さんが雄二に伝えるため言った事。それは、本人から見たらどう見えるのか。……雄二、ここで見せなきゃ男じゃないからな！

『翔子。俺は』

『あーあ、つまんなーい!』

この言葉が一瞬この場を止めた

『マジつままないこのイベントお。人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな〜い?』

『だよな〜。お前らのことなんてどうでもいいっての』

．．．．．なに?こいつらなに言ってるの?それじゃあお前らに映ってるのは霧島さんじゃなくて、最初から演出だけだったと。．．．．．調子に乗ってんじゃねえぞ、テメエラ?

「ア、アッキー、ちょ、ちょっと」

ガタツと、席から立ち上がり、その二人に近づいていく。愛ちゃん止めようとししないで、ワルイノハゼンブコイツラナンダカラ．．．

『ってか、お嫁さんが夢です、って。オマエいくつだよ?なに?キヤラ作り?ここのスタッフの脚本?バカみてえ。ぶっちゃけキモいんだよ!』

『純愛ごっこでもやってんの?そんなもん観るために貴重な時間割いてるんじゃないんだケドお。あのオンナ、マジでアタマおかしんじゃない?ギャグにししか思えないんだケドお』

『そっか!コレってコントじゃねえ?あんなキモい夢、ずっと持つてるヤツなんていねえもんな!．．．ゲフツ!、てめえ何しや

がる！』

『リュ、リユータ、大丈夫！いきなり何すんのよアンタ！』
いつまでたつても罵声をはき続けるこいつら。まずは男の方を殴る。

「……………に……………のか？」

『ああん？何言つてんだよお前。』

「てめえらに霧島さんの夢を笑えるほどの夢があるのかって言ってるんだよ！」
起き上がって近づいてきた男をさらにもう一発殴り飛ばす。

「霧島さんはな、この時をずっと待ってたんだぞ！あっちの馬鹿な新郎に心の中でずっと積もってた思いを打ち明ける日を！何年もかけて育つていった、その大切な夢をお前らが馬鹿にして霧島さんを傷つけたんだ！」

許せない、人が今からつかもつとしてる幸せを踏みにじり、貶すなんて！

『ハッ、用はここが俺達に使えるかどうか、それさえ確認できりゃあそれで良いんだよ！あんな女の事情なんて知った事か！』

「なんだと！」

僕はもう一回殴ろうとするけど、それはスタッフの人たち、愛ちゃんに止められる

《お、お客様、落ち着いてください！》

「落ち着いて、アッキー！」

「放してくれ！こいつら、こいつらだけは！
僕の意識はここで途絶えた。」

クペッ！」

「はぁ、全く。……少しは落ち着け、アキ」

第四十三話、余談その3 | Side 明久 | 何が何でも許せないもの (後書)

クソ長くなりました………、読みにくくなつてすみません。

そろそろグランドパークが終わりそうです。結末は雄二からで……

最近、ストライカーシグマ？、プロブレムブレイカー、シャイニン
グアンサーの鉛筆がマジでほしい……

これからもよろしく願います

第四十四話、余談その3ーSide雄二ー？ 俺の気持ち、あいつの気持ち、

前回切ったところを出さないで、雄二が殴るシーンから入ります

第四十四話、余談その3 Side 雄二？ 俺の気持ち、あいつの気持ち

グランドパーク・・・Side in 雄二

《霧島さん？霧島翔子さん！皆さん、花嫁を捜して下さい！》
スタッフがドタバタと駆け出す。ふむ。どうやらこのイベントは中止のようだ。ここまで大々的に用意しておきながら失敗とは、経営側のお偉方はきつと真っ青になっていることだろう。

「さ、坂本雄二さん！霧島さんを一緒に捜して下さい！」

スタッフが一人、息を切らせてこちらにやってくる。俺にアイツの行き先に心当たりがないか聞きたいのだろう。

「悪いが、パスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え？ちよ、ちよっと、坂本さん・・・！」

背を向けて歩き出す俺にスタッフが声をかけてくるが、無視の姿勢を崩さないでいると諦めたように去っていった。まったく、俺なんか頼るのなら最初から自分で探した方が早いだろう。そのまま退場していく客に混ざって会場を出ていく。五分もしないうちに目的地が見えてきた。あまり遠くでなくて助かった。

「・・・・・・・・クソオ、あのガキども・・・・・・・・」

「リョータ、大丈夫だってすごいとこ見つかるよ」

「ああ、そうだな。俺ならすぐにいいとこ見つかるよな」

さてさて。それじゃ、とっとと用を済ませるか。ゆっくりと歩み寄り、背後から声をかける。

「なあ、アンタら」

『ああ？あんだよ？』

二人組が真つ茶色な顔をこちらに向けてくる。男の方は軽い応急処置みたいなものがしてある。さつき明久が殴ったところだな。．．．この二人がさつき俺の窮地から救ってくれたんだ。きちんと礼をしておかないとな。

『リョータ。コイツ、さつきのオトコじゃない？』

『みてえだな。お前もさつきのガキどものお友達か？．．．．．んで、その新郎サマがオレたちになんか用か、ああ！？』

男の方が一步前に出て、威嚇するような仕草を見せた。

「いや。大したようじゃないんだが」

借り物上着を脱ぎ、タイを緩める。不思議なことに、身体は準備運動を必要としないほどに温まっていた。

「ちよつとそこまでツラあ貸せ」

「よつ。随分と待たせてくれたな」

「．．．．．雄二」

如月グランドパークの中にあるホテルの前で待つことしばし。玄関から翔子がトボトボと俯きがちに出てきた。

「さて。それじゃ、帰るとすつか」

似非野郎から受け取っておいた翔子の鞆を担ぎ直して、駅に向かって歩き出す。

「・・・・・・・・・・」

翔子はなにも言わず、静かに俺の少し後ろをついてきた。夕暮れの中、黙々と駅に続く道を歩く。どのくらいそうしていたのだろうか。如月グランドパークを出てあえて人気のない道を歩いていると、翔子が聞き取れるからどうかギリギリの小さな声で呟いた。

「・・・・・・・・雄二」

「ん、なんだ？」

「・・・・・・・・私の夢、変なの・・・・・・・・？」

例のバカツプルに笑われたことをずっと気にしているのだろう。翔子は足を止めていた。俯いているから表情は見えないが、長い付き合いだ。どんな顔をしてるかぐらい見なくてもわかる。

「まあ、あまり一般的ではないかもしれないな」

俺は少し言葉を選んでからそう答えた。

「・・・・・・・・・・」

再び黙り込む翔子。さっきの言葉を鵜呑みにするなら、こいつは決して短くない七年という時間をずっと、唯一つの揺るぎない夢を抱いて生きていたということになる。それがあんな大勢の前で笑われ、否定された。今の心情がどのようなものなのか、俺には想像もつかない。だが、どこにもコイツが傷つく必要なんてない。おかしいのはコイツの勘違いだけで、一人の人間を長い間想い続けるとい

う行為は胸を張れる誇らしいことのはずだ。だから、これくらいは伝えてやりたい。全てが間違いなのではなく、気持ちを抱く対象を間違っていただけで、夢自体はおかしなものではないということ

「けどな、俺は……俺はお前の夢を絶対に笑わない。お前の夢は、大きく胸を貼れる、誰にも負けない立派なものだ。

まあ、相手を間違えていなければの話だけだな？」

「……ゆう、じ……」

「翔子、よく聞け。お前の俺に対する気持ちは、過去の話に対する責任感を勘違いしたものだ。」

七年も前に起こった出来事。翔子が俺に好意と勘違いした気持ちを抱くようになったきっかけ。今でもずっと、あの時のことを後悔している。もつとうまくやれたんじゃないか、と。あんなことがあったせいで、コイツは俺のようなロクデナシに時間を費やすことになっちゃった。

「だからお前がそうだったその責任は俺にある」

「……雄二……?」

翔子が不思議そうにこちらを見上げる。そりゃあそうだ、俺がこんな事言うなんてあまりないからな。こいつはしっかり俺と向き合ってた本心を伝えてくれた。だったら俺も向き合ってたしっかり本心を伝えてやる。……それは俺が生涯こいつにしか言わない言葉!

「翔子！俺と付き合え！！俺はお前のことが好きだ！その責任をしっかりと取ってやる！」

俺の言葉に翔子は少し戸惑う。・・・そして翔子の口が開く

「・・・・・・・・ほ、本当？」

「ああ。これは一つも嘘の混じっていない俺の本心だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

翔子が黙る。あんな事が逢った後だから自分が傷つかないように言ってくれているとも思っているのだろうか。そう思われているとしたら心外だな。・・・・・・・・そうだこれを渡すのを忘れてた。

「っ！・・・・・・・・これ・・・・・・・・さっきのヴェール・・・・・・・・」

会場で拾っておいた物を俯く翔子に被せてやる。折角の体験だったんだ、これくらいの思い出は残しておいてやりたいよな。っとそうだった、もう一つ

「それと、翔子。弁当、旨かったぞ。ただ俺は良く食うからこれだけだとお前の分がなくなっちゃうからな、今度はもうちょっと多めに作ってくれ。」

「・・・・・・・・私のお弁当・・・・・・・・気付いて・・・・・・・・くれたんだ・・・・・・・・」

「さて。さっさと帰るぞ。遅くなると色々誤解されるからな」

俺はまた前を向いて歩き出す。・・・・・・・・今の顔はきつと真っ赤だろっ／／良くあんなセリフを言えたな、俺・・・・・・・・／／

「……………雄二」

「特におふくろの奴は、いくら言っても」

「雄二っ!」

「ここ最近では記憶にない翔子の大きな声を聞いて、思わず立ち止まってしまっ。」

「なんだ?」

「私、やっぱり何も間違っていなかった!」

「俺は顔が赤くなっただまま振り向く。すると、満面の笑みを浮かべる幼なじみが俺に抱きついてきた。」

第四十四話、余談その3、I Side 雄二、俺の気持ち、あいつの気持ち、

こんな感じでしょうか。設定が二学期だったので、そろそろ……
……という事で雄二を素直にさせてみました。

感想等を頂けるととても嬉しいです。

これからもよろしく願います

第四十五話、余談その3 | Side 明久 | 僕の気持ち、君の気持ち (前書)

テストも終わり、またやっついこうと思います

国語やってるとき、閑話休題の意味を調べていたら意味を取り違えていたので『余談』と言うような形に修正しました

ちなみに明久の最後は愛子目線でいきます

よろしくお願いします

第四十五話 余談その3 Side 明久？ 僕の気持ち、君の気持ち

会場内・・・Side in 芳樹

「はあ、全く。・・・少しは落ち着け、アキ」

こいつはもうちょっと頭を使うとかしないのか。こんなところで暴れたって意味ねえのに。

「ちょっと、ダレよ、アンタ」

「ヨ、ヨッシー。なにやってるの!?!」

「ん？この馬鹿が何の意味も無くそっちの男を殴ったからな。その制裁って事で」

といつても、こっちの馬鹿二人に手を貸すわけでもないからな。それだけは分かっていてほしい、読者の皆さん

「優子、愛子と明久を連れて先行っててくれ。俺はこいつらと話すから。・・・さてと、そっちの男。ここのプレオーブンのチケットって大企業とかじゃねえとかなかなか手に入らないんだろ？どっかいいところにも働いてんのか？」

ネットオークションでも出てないところを見ると、スポンサーとか信頼できる所にチケットは渡していないらしい。・・・あんな結婚まで持ってかれるって話はうちの学校だけ見ただけだったかな。それで、話を聞いたりしてみるとどうもある企業にだけ相当な量を渡しているらしい。

「はっ、俺はな天下の霧島財閥の元で働いてんだよ！いいか、お前らみたいながキじゃぜってえ入れねえところだ」

「そうよ、リユータはねえ霧島っ・・・・・・・・・・」
おっと、女の方は俺が言いたい事が分かったみたいだ。ある企業・・・・・・・・それは日本でも五本指に入る大企業・・・・・・・・霧島財閥

「ちなみにさっきの新婦さんはその霧島財閥の社長のお孫さんだぜ」

「「なっ!?!」」

「お前も残念だなあ。さっき注意してやったのに、お客様の迷惑になりますって・・・・・・・・。迷惑になるってあれ実はお前らの事だったんだぜ。ほらビデオ撮る人もいるぐらいだから音源なんてすぐ採取できるし。それを聞かせりゃあ、速達でクビの知らせが届くだろうな」

ふう、とりあえずこれでこの男ももう終わりだな。・・・・・・・・雄
二がもういなくなったことを考えると外で待ち伏せか。怖いねえ・・・・・・・・

「くっそあ・・・・・・・・」

男は地面を叩いてから、とぼとぼと出口に向かって歩いていく。
女の方もそれについていく・・・・・・・・。そっちは地獄の三丁目
ですぜあんたら

ホ？テ？ル？・・・Side in 愛子

ちよつと！なにやってるの作者！別にアッキーをここに寝かして
るだけで、そ、そんなド変態な作者が期待してるような展開なんか
無いんだからね！／／／

・・・コホンツ、えー、そんなわけで今僕はアッキーを寝か
せるためにホテルに來ています。一室でベットに横にさせたはいい
ものの、優子とムツツリー二君はすぐ帰っちゃうし、ヨツシーはメ
ールで先帰るって言って、もう言っちゃってるし全く・・・
・まあいつか。そのおかげでアッキーの寝顔見れてるわけだし。
・・・それにしても本当に可愛いなく、アッキーの寝顔。

「・・・う、うーん」

「アッキー、起きた？」

「・・・あ、愛ちゃん？・・・そうだ、
あいつら！」

さっきの事思い出したみたい・・・って早くとめないと！

「落ち着いて、もうヨツシーがやってくれたから、それにもう僕達
以外帰っちゃったよ」

プレオープンって言ってもやっぱり節電とかはしっかりやるみた
い。だからもうアトラクションは出来るものも無くてほとんどの人
は帰った・・・泊まっていく人以外は・・・／／
／／

「そっか・・・じゃあ、もう帰ろうか。いてもしょう
がないし」

「／／／／はっ！そ、そうだね帰るうか／／／／」
うう、ちよっとでも期待した僕が馬鹿だったよ。．．．．グスン

そんなこんなで、もう僕が絡まれたあの駅についていた。．．．．
．．．．中々チャンスが無かったけど今日こそは言うんだ、言うてやるんだ。

「それにしても色々あったね。」

「そうだね。．．．．雄二たち結局あの後どうなったんだろ？」

「明日聞いてみよつか。代表に」
．．．．しばらく沈黙が続く、辺りは良く見るともう真っ暗で歩いているのは僕達だけだ。僕が思わずアッキーの方を見るとアッキーの口が開く。

「．．．．愛ちゃんごめんね。．．．．今日は」
アッキーが申し訳なさそうに僕の顔を見る。．．．．なんだそんなこと気にしてたの？

「アッキー、謝らないで。僕だつてすごく楽しかったし、あんなのアッキーから見たら日常茶飯事なんですよ」
．．．．いける。このペースなら、．．．．いけ

る！

「だから、アツキーと一緒にいたいならあのぐらいなれないとねって最近思ってたんだ」

「……………愛ちゃん……………?」

不思議そうにこつちを見る。僕はちよつと速めに歩いて、アツキーの方に振り返る。……………言うんだ。十年以上、言えずにいたこの思いを……………

「アツキー、いえ吉井明久君……………僕は貴方の事が好きです……………付き合ってください!!」

思わず最後がとても声が大きくなり恥ずかしくなって目を閉じる。言った、言ってしまった。もう戻れない。でも、戻れなくても……………勇気を出して目を開ける。……………そこにいたのは……………
……………
……………すぐく悲しげな顔をしたアツキーだった。

「愛ちゃん……………」

「え?」

「僕は……………君のことが好きだ。でもそれは、それだけ受け入れられない。」

「なに、それってどういう意……………」

「ごめんっ!!」

それだけいってアッキーは走り去ってしまった。
なんだ、振られちゃったのかぁ。もう戻れないのかなぁ
. . .

「 ひっく グスツ
ひっく 」

僕はこの場所で、ただ泣き続ける事しか出来なかった。

. アッキーのバカ

第四十五話、余談その3 | Side 明久 | 僕の気持ち、君の気持ち (後書

こんな感じで、終わりにさせようと思います。

泣いてる感じが上手く書けない orz

次は強化合宿! の前にずっと前から話していたアレ
でもやるのかなと思っていなす。 知らない人
はお楽しみに

感想、お待ちしております

第四十六話〈余談その4ー？ 襲い掛かる恐怖？〉（前書き）

久々の投稿です

PVアクセス250000、ユーチューブアクセス300000 突破！

これからもよろしくお願いします

第四十六話 余談その4ー？ 襲い掛かる恐怖？

登校中・・・Side in 芳樹

「それにしても、昨日は結構面白かったな」

雄二たちの方はあの後、翔子から「雄二が「翔子！俺と付き合いえ！！俺はお前のことが好きだ！」って言うてくれた。嬉しい。』というメールが着たから、雄二が翔子に告白して付き合うことになったのは間違いないだろう。・・・もつと面白そうなのはアキの方だな。どつちからもメールがこなかったって事はもう一線を越えたのか・・・写真も含めてからかえる内容がさらに増えただぜ。・・・おっ！

「よう、アキ」

「おはよう、芳樹」

「アキ、昨日はどうだった？」

「・・・うん、色々あったけど遊園地自体は楽しかったよ」

「遊園地？それに楽しかったよって言う割には元気が・・・、そうか」

「アキ、すまねえな。玲さんがいるのに・・・」

「姉さん？姉さんがどうかしたの」

「？玲さんにいろいろやられて、元気が無いんじゃないのか？」

「違うよ……ちょっとね」
なんか様子がおかしいな。昨日の雰囲気からして、愛子と付き合い
うのは確実として、後はなにが起こったかだな。ま、愛子に聞きや
あ問題ないか。

Aクラス……

「……それと今日、具合が悪いとのことで工藤さんは欠
席です。……以上でHRを終わります。」
工藤が休み！？珍しいなあ。健康優良児が休みだなんて……
やっぱり、昨日何かあったんだな。

「優子、アキと愛子に何があったんだと思う？」

「……そうね。……っ!!////」

「おい、今何を思い浮かべた」
こいつは……すぐそういう妄想を思い浮かべるなよ……
俺も人のことは言えないけど

「・・・やっぱり、本人に聞くのが一番じゃない？」

「それもそうか。おーい、アキ」

俺は遠くで聡たちと話してたアキを呼び止める。

「ん、なに？芳樹」

「昨日あの後、何があった？愛子が休みだなんておかしいからな。昨日の夜、一緒にいたお前に聞くのが一番だと思って」

「おい、その前に明久が夜、工藤と一緒にいたって言うのはどういうことだ」

聡、徹、美由が興味深そうに聞いてくる。・・・説明しても良いが面倒くさそうだな

「昨日、プレオープンチケット使ってこいつと愛子はデートに行つたんだよ」

「ちよ、別にデートって訳じゃ／＼」

「」「ふーん（ニヤニヤ）」「（ニヤリニヤ）」「（ニヤニヤリ）」

何だこいつら、一人一人ニヤニヤしてる度合いが違ってなんかうざいな。

「で、愛子と何が合ったのよ吉井君」

「・・・昨日ね、みんな帰って2人で帰ってる途中で愛ちゃん、気分が悪いって言ったから送ったんだ。本当に悪そうだったから、もしかしたら今日休むかなって思ってたら当たっちゃった」

「ふーん、そう。ありがとね吉井君。」
優子たちはアキの説明で納得したみたいだ。．．．．．
．．．嘘だな。今のは納得のいく説明だったが昔っからの癖が直つて
ねえ。こいつ、嘘をつくときはすぐ左手でコメカミを触るんだよな。
．．．それにさっき工藤が休みつて聞いたときハツとしてた事から、
工藤の具合が悪くなった事を知らないんだろう。．．．．．後で
優子たちにも話すか。

「お、もう授業だ。席着こうぜ」
アキ、本当のことは後でしつかり吐いて貰うからな

「なんなんだろう、姉さん。こんな時間に呼び出したなんて」

「大方、愚痴か会いたってだけじゃねえか」
．．．．．時間が過ぎて今は放課後。いつもなら、少し色々話して
から帰るんだけどな。高橋先生に「長谷川君と吉井君は放課後、教
頭室に行ってください」と言われ仕方なく行くことにした。．．．
．．．アイツが動くにや少し早くねえか、と思いながら教頭室のドア
を開ける。

「よく来てくれました。アキ君、芳樹君」
玲さんはいつもの笑顔で教頭室の椅子に座っていた。．．．ん

あしはら.....?

第四十六話、余談その4ー？ 襲い掛かる恐怖？（後書き）

ここで区切ります。

今回回話が多かったですが、字の文と会話ってどっちの方が多いい方が多いんでしょうか？

玲と一緒にいる人物、分かりにくいと思いますが分かる人ならすぐ分かるでしょう。

それと宣伝になります。『バカとテストと隣人部！？』というのも書き始めました。今はまだ話数少ないですがも良かったら見てってください。

これからもよろしくお願いします。

第四十七話、余談その4ー？ ファッションショーと真実（前書き）

一日おきの更新です。

芳樹を加えたものは次の機会になってしまいました。すみません。

第四十七話、余談その4ー？ ファッションショーと真実

教頭室・・・Side in 芳樹

「よく来てくれました。アキ君、芳樹君」

玲さんはいつもの笑顔で教頭室の椅子に座っていた。・・・
数人、奥に隠れてやがる。

「・・・で、玲さん。用件はなんだ？まだアイツが動くには早い
と思うが」

「今回はその事ではありません。アキ君のことです」

「へっ？僕の？」

アキの奴、また悪さでもしたのか？全く俺を巻き込むなよ・・・
・・・待てよ昨日、

「アキ君が昨日女の子と遊んできて帰ってきたのも夜遅くだったの
です。それで制裁を下そうとしたいのですが・・・」

「じゃあ、その後ろにいる奴らは制裁役ってことか。とっくにバレ
てるぜ出てこいよ」

さっきこの部屋から感じ取った気配は玲さんを含め六人、二人は
気配を隠そうとしていたが残りの三人のお陰でしっかり感じ取る事
が出来た。

「・・・はあ全く、バレバレじゃねえか」

「まあ別に良いではないか、元からバラす予定じゃったし」

「……………芳樹は俺の気配まで読み取ってた」

「アキ、昨日の分のおしおき済んでるとは思ってないわよね」

「長谷川君ですよ、邪魔されましたし」

出てきた奴らは良く見知った顔の……………

「雄二に秀吉！？それにムツツリーニや美波達もどうしてここに！？」

「やっぱりお前らか……………で、おしおきって何をさせられるんだ？」

「あれですよ、今からアキ君と芳樹君にはここにある服全部を着てもらって写真撮影をしていただきます」

玲さんが、指を鳴らすといくつもの服がかかっているハンガーラックを秀吉たちが運んでくる。かかっている服はメイド服、ナース服など……………っておい

「なんでアキならともかく俺までやらなくちゃいけないんだ！！」

「そりゃあそうですよ。だって、芳樹君はアキ君とその女の子をくっつけようとしていたんでしょ？だから同罪ですよ。」

「クソッ！なんとしてでも逃げるぞ、アキ！」

俺はドアに向かって全力で走る……………っアキは？

「……………僕はいいよ……………それにこんなことだけを
するだけでもう関わってくれないって言うなら逆にありがたい」

「折角の逃げられるチャンスなのに……もつたいないことするわね、アキ」

島田がそんな事を言う。……逃がす気なんて無いくせに。それにしてもアキは何を言ってるんだ？

「別に。ただこれ以上、昨日のことを思い出したくない、関わってこないで欲しい……それだけだよ」

「……チツ、どうなつても知らねえぞ！」

俺はそれだけ言つて、教頭室から出る。意外にもすんなりとお出ることが出来た。俺はオマケつて事か。まあ、あんな物を着なくて済んでよかった……。それにしても……。アキの奴どうしたんだ？昨日の話をするたびに顔に元気が見られなくなるというか。昨日は、楽しい思い出にさせたはずなのにそれに愛子から……。……待てよ？アキは愛子と付き合うなんてこと今日一日の間、一回でも言つてたか？そうだ、俺も優子もアキならきつと受け入れるだろうと思つてあるところを見落としていた。……。アキが自分を卑下してみていることを。

とりあえず、Aクラスに戻りながら俺は優子に電話をする。

『どうしたの？長谷川君、あなたから電話なんて珍しいわね』

「優子、まだ学校にいるか？直接話したいことがある」

『ええ、まだ外に出ていないけど』

「そうか。アキと愛子のことなんだが……。あいつら、付き合つてなんかいない。アキは　　愛子を振つた」

『え？ちよ、それってどういう』

「詳しい事は会ってから話す。切るぞ」

・・・愛子も何か問題があつて来れなかつたんじやなつた、アキに振られて傷ついたから・・・。。。。。。アキの奴ふざけるんじやねえぞ。

その頃・・・

教頭室では明久のファッションショー（女性向け）が開かれていた。

「じゃあ、アキ。これなんてどう？知る人が知る『4分の1エロチヤイナ』よ。かわいいでしょう？」

美波がそういうと、明久は何のためらいもなしにその場で着替える。その足場にはこの時間の間、明久が着た様々な服が脱ぎ散らかっていた。嫌がつているところを見られないためか、雄二はイライラしている。他の者もいつものような雰囲気にも明久がさせていないためか、楽しそうにしているのもは独りもない。

ちなみに4分の1エロチヤイナとは作者がとある他の作者様から借りてきた名前の通り裾の部分の長さが足のつけ根から膝までの長さの半分の長さになっているチヤイナ服である。芳樹の分もあるのだが、それはまた別の機会に

「着替え終わったよ、ムッツリーニ」

着替えが終わるとムッツリーニを呼んで写真を撮らせる。先ほどからずっとこれの繰り返しである。ムッツリーニもいつもより撮っている枚数が少ない。

「（……………いつもの輝きが見られない。……………」

……………それに……………なにか変だ）」

ムッツリーニも明久の異変を感じ取っていた。

第四十八話、余談その4ー？ 騎士と王子と相手の幸せ（前書き）

ついに9・5巻が発売されましたね！

皆さんはもう読まれましたか？・・・・・・・・親の前で笑って引かれ
ました・・・・・・・・orz

それでははじめます

第四十八話 余談その4ー？ 騎士と王子と相手の幸せ

Side in 芳樹

「で、さっき言った愛子と吉井君が付き合っていないってどういうことよ」

「そのまんまの意味だ。明久が愛子の告白を受け入れなかった」

優子を探すところから始めようと思ったが幸い、優子はAクラスにいたのでその手間が省けた。美由と一緒にしゃべっていたらしい。聡は部活に、徹はすでにバイトに行ったそうだ。

「でもさ、芳樹君。確か明久君と愛ちゃんって両思いのはずだよね。だったらどうして振ったりなんかしたの？好きな人から告白されたら嬉しいじゃん」

「そうよね………っ！まさか」

「優子は気づいたみたいだな。というか江崎は明久のことはあんまり知らねえか」

「ここがあのからしいところであるんだがな。」

「吉井君は……自分が愛子と対等だと思っていない？」

「ビンゴ。それしかないだろ、アキが愛子を振るなんてことになる理由なんて」

「えー、でもそれぐらいのことで………」

江崎が若干、否定気味になる。まあ知らない奴から見れば普通は

そうだろうな

「だけど、そのぐらいのことがあのバカを成り立たせてるんだよ。実際一学期の時に島田か姫路かどちらかと付き合うことも出来たはずなのにしなかったしな。・・鈍感つてのもあるけどそんなこと関係なしに自分にはもつたいたい、その相手にはもつといい人に出会えるとも思ってるんじゃないのか、きつと」

島田たちの場合はどちらかと言うと嫌われてると思っっているから
だけどな・・・

「その考えに・・・例外なく愛子も入ったって訳ね」

「それだけじゃないぞ。それだと、アイツが自分の思いを塞ぎ切るのには足りてない」

優子が自分なりに考えをまとめるが・・・それだけだと不正解だ。

「?、どういうこと、芳樹くん」

「優子には前、アキが人として強くなるってことを話したと思うが・
・・昔アキは会えるかどうか分からない、そんなふざけた事のために死ぬかもしれないな。そんなになつてまで会いたかつた、好きだった奴を振るなんて相当な覚悟が要るはずだぜ。」

「もったいぶってないで早く、全部、ちゃっちやと教えなさいよ」
優子がせかしてくる・・・確かにこのままだと愛子のこと
るに行くのが遅くなるな。・・・さつさと終わらせるか

「ああ。つまりアキの考えはだな、愛子をお姫様に例えるとアキは
カップルとかそんな関係の王子様じゃなくて、ただ愛子を守るだけ

の騎士ナイトになりたかったってことだ。．．．あいつ、まだ引越しのときの事を悔やんでいるんだろ？だから．．．幸せになつてもらつてほしいから自分なんかじゃなくもつと将来に有望のあるよくなしつかりした人と一緒になつて欲しい．．．。そんなところじゃないのか？」

「．．．．．」

2人は黙る。．．．俺も好きな人が幸せになつて欲しいから自分には似合わないつて言うところは共感できるけどな。けど相手が自分を好きといつてくれるのなら俺は受け入れるだろう。自分を一緒にいることがその相手にとって幸せになると思つからな。

「それでなんだが．．．俺はあの2人を仲直りさせてやりたい。そこから恋愛関係につながるかは本人達しだいだからな。せめてこのまま終わつてしまふと言う事だけは防ぎたい。」

「．．．．．」

「だから手伝つてくれないか？アキはともかく愛子の方は男女の違いとかもあつていまいち説得しにくい。お前らが協力してくれれば今みたいなギクシャクした関係も直せる。だから．．．」

「ああ、もううるさいわね（よ）！！愛子を立ち直らせるアイデアが出ないじゃない！！」

突然怒鳴られる。．．．けど、こいつらも気持ちは俺と同じだったみたいだ。

「じゃあ、協力してくれるのか？」

「当たり前じゃない、愛子も吉井君も友達でしょ。こういうときに

助けてあげられないで何が友達よ。」

「それに、芳樹君にも明久君にも借りがあるからね。……明久君の方は大丈夫なの？一応聡たちもよぼっか？」

借りって何のことだ？……まあ今はそんなことよりこっちが優先だ。聡に徹か……確かに最近仲は良いが……

「大丈夫だ。今回はアキに一番説得してくれる奴がいる。だからまず、愛子の方から取り掛かるうぜ」

俺がそういうと2人とも、愛子に連絡を取ったり、代表にアレを譲ってもらおうとしている。

「俺達が愛子の方をやる。だから　アキの事は頼んだぜ、ムツリーニ」

俺は隠れていて他の奴には見つかる事も無いような盗聴器に向かってそういった。

第四十八話 余談その4ー？ 騎士と王子と相手の幸せ (後書き)

なんか短い……そしてbag bag。

まあいいか。

皆さん、こんな作者でございますがこれからもバカAをよろしくお願ひします

第四十九話〈余談その4〉? 説得とキャラとバカの本音〈前書き〉

糖分摂取魔さん、カトラスさん、シユレ猫さん、直井刹那さん感想
どうもありがとうございます

これで、余談が終わりとなって強化合宿の方に移ります!.....
・なんか余談の方が、清涼祭までより長い気が.....どうでも
いつか

それじゃあ始めます

第四十九話く余談その4ー？ 説得とキャラとバカの本音く

Side in 芳樹

とりあえず説得できる材料は整ったが………愛子自身来てくれないとな。

「愛子に連絡とれたか？それが出来ないと始まらない」

「今、かけてるんだけど中々………出た、もしもし愛子？」

『………何？優子』

「今から『ラ・ペデイス』に来なさい。話したいことが………」

「

『いいよもう！どうせアツキーとの事でしょ！振られたよ僕は！………』

「なんか優子に任せると、このまま穴と一緒に入っていきそうだな。………江崎に替わってもらおうか」

「もしもし美由に替わったよ。ごめんね愛ちゃん、優子がいきなり失礼なこと言っちゃって。でもね、愛ちゃんが吉井君のことでちょっと勘違いしていることがあってね。」

『………なに？』

「おっ、ちよっと食いついてきた。こいつのは優子より江崎に任したほうが効果的だな。」

「吉井君は愛ちゃんのことを好きだよ、でも」

『そんな事ぐらいは分かってるよ！だって、告白したとき好きって言ってくれたもん！……だから……だから悩んでるんだよ！』

なんだ、アキももう気持ちちは伝えていたのか。……だからだな、愛子が学園に来なかったのは。愛子は結構強いから振られても立ち直りは早い。けど、好きって言われながら振られたら誰だって混乱するだろう。俺は江崎に電話を替わるよう頼む

「もしもし、今度は芳樹だ。安心しろ、俺達がお前に教えたい事はアキの心情だ。どうして好きっていつときながら振った理由を教えやする。アキは今教頭室でファッションショーをやってるから、来るのは俺と優子と江崎だけだ。」

『………わかった』

それだけ言って向こうは電話を切る。まあ話し合いに来てくれるのと、愛子が休んだ理由が分かったから十分だな

「さてと、俺達も行くぞ。『ラ・ペデイス』に」

俺達が到着するとすでに愛子はいた。軽い化粧をしているが、よく見ると目の下には酷いクマと涙の後があった。……アキ、てめえ泣かせないっていつときながら、てめえが一番泣かせてるじやねえか

愛子のいる席に俺たち三人は座る。

『いらつしゃいませ。』注文は……』

「……」

「あ、じゃあ俺は普通のバニラと生クリームのクレープにコーヒーを」

「私はこの苺づくしグルメパフェで」

「……ってあんたたち何勝手に注文してるのよ！」

「いや、来た理由が話し合いだとしてもここはそういう店だろ。注文もなしに話し合っつてちゃあ店の人に迷惑だからな。な、江崎」

「そうだよね〜（ニヤニヤ）」

なぜか江崎とそうやって話していると、ものすごい視線で優子に睨まれた。……なんだろ

「くっ！（なに、美由も芳樹を狙ってたの！？）……まあいいわ。私はこのチョコパフェにコーヒーで」

「……僕はいいや」

『かしこまりました、少々お待ちください』

ウェイトレスが下がっていく。確かこの店ってDクラスの清水って奴のところの店だよな。江崎の家も喫茶店だし少しまずったか？

「さっさと本題に入ろうぜ。愛子、しっかり聞いとけよ。まずな

」

俺がさっき話し合っていたアキの事について話す。途中途中で頼んだものが来るが俺はそつちに手をつけなくて話し続ける。・・・
・・・これで、アキに対する誤解はなくなるとは思うがそれから愛子はどう出るんだ・・・？

「　　ということだ。結果としてはお前とアキの考えの食い違
いって事だな。」

「・・・・・・・・」

俺は頼んだコーヒーを飲む。話したといってもあまり長い時間ではなかったので冷めていなかった

「そうなんだ。・・・話してくれてありがとう。・・・でもさ、
この後どうすればいいの？」

「決まってるだろ。アキから告つて来るのを待つてれば良いんだ。
こういう時は騎士ナイトの方がその呪縛呪縛みたいなもんから抜けださないと
成功しないからな。時間はかかるかもしれないが、まあ待つていて
やってくれ」

後はもうアキの方にかけるしかないな。というか、前に録音した
やつ使うまでも無かったな。こんなところで流すのは流石に可哀想か

「まあそれまでの間に愛ちゃんを変わらなくちゃいけないけどね」

「へっ？」

「だから今言ったでしょ。吉井君は前にあなたを救えなかった？こ
とを悔やんでるんでしょ。だから前にどう思っていたかなんて考え
たり言ったりしちゃう駄目よ。」

「そつ、そつだね。」

「それに今のキャラ、愛子じゃないわ。もっと土屋君のときみたいに吉井君も弄くって見たら？」

「ぶっ！／＼／」

愛子が思わず噴出す。そんならしいしてやるのは当たり前じゃないのか？愛子としては

「芳樹君、悪いんだけどここから女の子だけで話をしたいから先に帰ってくれないかな？お金だけ払って」

と、江崎が言う。なんだ、俺は邪魔者なのか？

「い、いや待て。俺のクレープまだ出てきてすらいないぞ」

「それは愛子が食べるから問題ないわ。・・・じゃ、そういうことで」

「ち、ちくしょー！！」

俺は逃げるしかなかった。3対1という状況に加え、こういうとき玲さんとかの影響で逆らいにくい。男だってなあ甘いものは大好きなんだぞ！

その後女子三人が『ラ・ペディス』で閉店となる9時まで喋っていたのを俺は知らなかった。というか知らなくて良かった・・・制服のままだったしな。

Side out

その夜ムツリーニはいつものように、学園中に仕掛けた盗聴器、カメラを確認していた。これのおかげで、ムツリーニは学年一の情報握っているのだ。

「……………っ！……………今の」

『そのまんまの意味だ。明久が愛子の告白を受け入れなかった』
これは前回出したAクラスでの会話だった。ムツリーニはそれについて聞いたたびに怒りがこみ上げてくる

「……………明久……………っ！！」

思わず強く拳を握るムツリーニ。そんな彼が最後にその盗聴器から聞いた言葉は……………

『俺達が愛子の方をやる。だから　アキの事は頼んだぜ、ムツリーニ』

「……………任しておけ、芳樹。……………あいつを……………
……………正気に戻してやる！」

第四十九話、余談その4ー？ 説得とキャラとバカの本音（後書き）

こんなんでも余談は終わりとさせていただきます。

この後の進み具合としては強化合宿 オリジナル 体育祭かなんか
敵な感じで進めていこうと思います

雄二のキャラソンをキーを6あげて聞いたら、なんだこのシヨタは、
っと思いました（笑）持っている人は試してみてください。結構面
白いです

これからもよろしく願います

第五十話 } 強化合宿! まだ準備中 } (前書き)

祝五十話!

. それなのに更新が遅くなつてすみません

第五十話 強化合宿！……まだ準備中

Side in 明久

あれから数日、……の前に実はあの着せ替えショー？が
終わった後、愛ちゃんからメールが来た。何でも『昨日のアッキー
の返答はしっかり受け止めるよ。……だから、絶対に振り
向かせて見せるからね！』……ということらしい。何で僕なん
かに執着するのかなあ、愛ちゃんなら絶対に僕なんかより良い人見
つかると思うのに。次の日には愛ちゃんも学校に来て普通に話すこ
とが出来たし、今はそれでいいか

「最悪じゃあーっ！！」

「うおっ！？どうしたの、芳樹!？」

考え事をしていたらいきなり芳樹の叫び声が聞こえた。……
下駄箱で最悪な事って何!？

「い、いやな。中履き取るうとしたら中にこれが……」

「これって、ラブレター……?？」

「そうだと思って期待して開けたんだよ！中の手紙の文を見ても
！」

「……?よくわからないけど言われたとおり空いていると
ころから中の手紙を取り出す。そこには……」

『あなたの秘密を握っています』

「うわあ……」

なるほど、ラブレターだと思って期待して開けたら脅迫状だったのか。うん、それなら誰だろうと今みたいに叫ぶだろうね……
・で続きはっつと

「『あなたの傍にいる人、すべてにこれ以上近づかない事。これを聞き入れてくれなければ次のものを公表します』……か」

ん？よく見ると手紙のほかに写真が三枚ほど入っている。その写真を見ても見えるように持つ。一枚目は……

「清涼祭のときの芳樹のメイド姿の写真」

「グハア！」

「芳樹！？……二枚目は……芳樹のメイド姿の写真Verパンチラ（トランクス）」

「ガハア！……はあ……はあ。だ、大丈夫だ、さ、最後のを見せる」

「ねえ、本当に大丈夫？……三枚目……うっ」

これは……芳樹に見せたら精神が壊れそうだな……

「なんだ！？最後には何が写ってたんだ！？」

「……芳樹のメイド姿の写真Ver着替えされられ中の着崩れ状態」

「うわああああああああ！！！！……カク

ゴシロヨ、コノムシヤロウ!!」

なんか、芳樹が遊戯王のあの時のアテムさん状態になってる……
……って

「なんで、僕がやった事になってるの!？」

「うるさい黙れ!それを見た奴、全員をぶち殺してやる!」
そう言い切った瞬間、芳樹が飛び掛ってきた……。

とりあえず気絶状態となった、芳樹を背負ってAクラスに行く。
……芳樹の動きって単純なんだよね。小学校の時、僕と芳樹
が無理やり女装されたとき、女子すら手を出しそうだったから男子
を全員倒したところで今みたいに気絶させたんだっけ。……
今となつては黒歴史でしかないけどね……。

「おはよー、」

「おはよう、吉井君……ってどうしたの!？」

木下さんが声をかけてくる。……相変わらず来るのが早
いなあ……なにやってんだろ?ずっと勉強してるわけでもなさ
そうだし。

「いやね、さつき芳樹が怒り狂ったから気絶させたんだよ」

「……何があつたの?」

木下さんには話した方が良さそうだな。後、霧島さんや愛ちゃん

にも。

「実はね……」

芳樹を芳樹の席において、木下さんに写真を見せながら事情を話す。……芳樹には悪いけど相談しておいた方が良さそうかな。

「ふうん、それでこれがその写真ね……」

「うん、なんとかできないかな？」

「そうね……」

「なーにやってんの 僕も混ぜて」

と、いつもの軽い感じでやってきたのは愛ちゃんだった。

「あら、愛子。おはよう」

「おはよう、愛ちゃん」

「おはよー2人とも。……うわっ！何その写真!？」

愛ちゃんも芳樹の変わり果てた写真を見て引いている。……
・というか、これを見て引かない人っているのかなあ……
とりあえず芳樹の起きないうちに愛ちゃんにも話しておくか。

「……あのね、愛ちゃん。これはね、芳樹の趣味じゃ……」

「オイ、アキ。ナニヲハナソウトシテイル？」

殺気!?

「いや、もう木下さんにも見せたいし愛ちゃんにだけ教えないのもあれかなーって」

芳樹としては木下さんの方に見られてほしくなかったんだろうってね

「くっ、……………もういい。」

『HR 始めますよ。その四人は早く席に着いてください。』

「あつ、はい。すみません」

もうそんな時間か、結局愛ちゃんには説明できなかったな。まあいいや、後で

『それでは明日の強化合宿の確認ですが……………』

このあと、愛ちゃんに説明するとき聡や徹、それに江崎さんにも聞かれ、僕は芳樹にマジで殺されそうになった。ちなみに、3人が爆笑したのは言うまでもない

第五十話〈強化合宿！・・・まだ準備中〉（後書き）

まあ前日ですしこんな感じでしょうか。

強化合宿編では、一日を朝と夜で分けながら書くつもりです

これからもよろしく願います

第五十一話 強化合宿！一日目・昼！

リムジンバス内・・・Side in 明久

「このバス本当に乗り心地がいいね」

「Aクラスに所属していなかったらこんなバス、一生に一度乗れるかどうかだもんね」

僕達Aクラスは特別なリムジンバスで合宿所に移動していた・・・
・・・Fクラスのままだったら、どんな感じで移動するんだろう。
流石に合宿なんだから現地集合なんて事はないよね。

「そういえば秀吉に聞いたんだけどFクラスって現地集合らしいわよ。」

「あいつらもこういうところで結構大変な目に遭うよな」

「まあ、姫路さんとかならともかく大半は自業自得じゃない？」
「はは、そうだな・・・と、隣で芳樹と木下さんが話していた・・・本当にそういう格差に糸目をつけないよね、あのババア・・・それにしても」

「暇だなあ、何か持ってくれば良かったよ。」

トランプとかUNOぐらいなら持って来ても特に言われないよね、ゲームとかならともかく・・・あ、ゲームと言えば今度新しいソフトが出るんだっけ。姉さんを何とか説得しないとな

「ん？愛子、何読んでるの？」

「来る前に100円ショップで買った心理テストの本んだけど、結構当たってる場所もあって面白いんだ」

「へえ、面白そうじゃない。どれどれ……吉井君」

「何？」

「次の色でイメージする異性を挙げてみて、？緑　？オレンジ　？青」

木下さんが隣で愛ちゃんの本を見てると急に僕に質問してきた。緑、オレンジ、青かあ……

「緑は木下さんと美波でオレンジは江崎さん、秀吉、愛ちゃん。青は……こう考えてみると中々青ってイメージの人はあんまりいないね」

姫路さんはピンクだし、霧島さんは高貴な紫って感じがするかな。……結果としてはなんなんだろう？

「ふーん、愛子も頑張らないとね。それと吉井君、秀吉は男だから。……長谷川君は？」

「俺か？あんまりそういうのは好きじゃないんだけどな。……緑が愛子、オレンジが江崎、青が前の学校にいた奴だな。」

「……前の学校にいた奴って誰よ？」

木下さんが少し不機嫌そうになった。……あ、もしかして青であげた人って好きな人を指すんじゃない。……順番を考えてみると緑はただの友達って言う関係として、オレンジはその中間だから……その人といると元気になるって感じかな？

「お前らに言ったって分からないだろ。それに今のも適当に髪の色で答えたからな。そいつの髪が青かったからそう挙げただけだ」

「そう、まあいいわ。それじゃあ次に三人に質問。1から10で好きな数字を順番に二つ挙げてみて？」

「愛ちゃんの本のはずなのにいつの間にか木下さんが仕切っていた。……あ、よく見ると愛ちゃんは少し悲しげな感じだった。」

「僕は1、4かな」

「俺は5、6で」

「僕は7と2で」

「私は8と3ね。どれどれ最初の数字は次の数字と掛け合わせることでいつもまわりに見せているあなたの顔だった」

と僕、芳樹、愛ちゃん、木下さん。結果は……

僕 誰にでも優しい人

芳 樹 死んでしまえ

愛 ちゃん 明るく色香のある人

木 下 さん 外交的で統率力のある人

「愛ちゃんって元はそういうキャラだよな」

「確かに優子は清涼祭のときも仕切ってたもんね」

「おい、今罵倒されなかったか俺」

「そんな事はおいといて、えーと……次の数字に最初の数

字を掛け合わせることであまり見せないあなたの顔だっ

僕 誰にでも怒れる人

芳 樹 惨たらしく死んでしまえ

愛ちゃん 寂しがり屋な几帳面

木下さん 表裏が激しい人

「おい、さらに罵倒が激しくなったぞ！」

「吉井君は長谷川君にでもキレた時があったわね」

「これはつい最近までの愛ちゃんだね。」

「几帳面かぁ……当たってるかも。」

「俺は無視なのか！ そうなのか！ …もういい！ 徹たちのところに行ってくる！」

芳樹は駆け出して前の方の座席にいる徹たちの方へ行ってしまった。まさか、ここまで傷つくとは思っても見なかったな。

「ねえねえアッキー」

「ん？ 何、愛ちゃん？」

「さっき几帳面って出たけど、実はね……ブラを……をね、それで代わりに……ゴニョゴニョ」

「ぶっ！？ / / / / 何いきなりそんなこと言ってるの！？」

「え、だってさっき几帳面って出たからさぁ。それでね……」

「ゴニョゴニョ」

「じつじつって女子同士で話すようなことじゃないの!?!?!
／．．．．．もう．．．．．限界だ

ブシヤアアアアア!!

「よ、吉井君!?!?!?!愛子! 一体何を吉井君に吹き込んだのよ
!」

「アハハ、ちょっとやりすぎちゃったかな」

「ちょっとどころじゃないわよ! 大体あなたはこういうところで限
度が分からないから．．．．．」

やばい、もう意識が．．．．．ガクッ

この日、僕はあの事件が起ころるまで目が覚める事はなかった．．．

．．

第五十一話 強化合宿！一日目・昼！ (後書き)

最近、まともにパソコンに触れなく更新も感想も感想への返信も中々出来ません

そんな状況ですがなるべく出来るところでしっかりやっていこうと思つのでこれからもよろしくお願いします

第五十二話〈強化合宿！一日目・夜！〉（前書き）

PVアクセス300000、ユニークアクセス35000 突破！

これも皆様のおかげです。ありがとうございます！

これからもよろしくお願いします！

それではごっご！

第五十二話 強化合宿！一日目・夜！

Side in 明久

「……………うーん。あれ、ここは？」

僕は目が覚めると、見たことのない部屋の布団で寝ていた。……
……何してたんだっけ僕？

「おっ、やっと目が覚めたかアキ。ここは合宿所の俺達の寝室だ」

「ここがそうなんだ。へえ……………グラッ」
なんだ？頭がクラクラする。

「おっと……………まあまだ寝とけ。お前、バスの中であれだけ鼻
血出したんだから貧血ぐらいなってもおかしくないだろ」

「これからの予定は？」

「他のクラスとの合同自習だよ。自習だしサボってたって問題ない
さ」

ふーん、他のクラスとの合同で自習か。そういえば今回の合宿の
趣旨って学習に対するモチベーションの向上だっけ。

「ありがとう芳樹。それじゃあ、もう少し寝てるよ」

「そうしとけ、俺はもう行くから」
芳樹が出て行くのを確認して、僕はもう一度横になって眠りに着
いた

『Fクラスのバカどもを懲らしめに行くわよ!!』

『『『おおーっ!!』』』

女子の凄い大きな声で僕は起きてしまった。な、何だ？

「吉井君起きなさい！」

「あ、木下さん。今一体何がおきてるの!？」

「女子のお風呂の方にカメラが仕掛けられてたの!それほとんど
の女子がFクラスの仕業って思い込んで……………」

「ええっ!どうしてそんなことに!？」

「とにかく急いで説得の方に回って!今は代表や長谷川君が向かっ
ているわ!」

「わかった!」

雄二たちは確かにやる事は卑劣だけど、人の傷つくようなことは
絶対やらない。それは僕自身がFクラスにいた時からわかっている
ことだ。……………僕は急いでFクラスのほうの部屋に向かった

Side out 明久 & Side in 芳樹

「はあ、何で俺がこんなことをやらなくちゃならねえんだ。今は翔子と説得に向かうところで……おっ、あれか？」

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい、ちよつと待とうか」……
「って誰よあなた！」

「こいつは確か、Cクラス代表の小山だったわけ。……いつもこいつも話を聞かないのは変わらないな。ある意味この学校の特徴じゃねえか？俺が話してる間に翔子は部屋の中に入ってた。」

「2年Aクラスの長谷川芳樹だ。お前ら、Fクラスがやったという証拠はあるか？」

「はあ、いきなりやってきてなに言ってるの！？証拠なんかなくてコイツ等以外の誰がやるっていうのよ！」

「それじゃあ問題外だな。とつとと帰れ……一応聞くがこの中でFクラスの土屋康太のカメラがークラスにどれぐらいいつているか知ってる奴いるか？」

「え？……そんなの知るはずないでしょ！」

「ークラスにつき約20〜25個だ。いまだに先生にも見つからなかったところ、もいないところにそんなに仕掛けられる奴がこんな馬鹿げたミスをするか？」

嘘だけだな。実際は10〜12個ぐらいと本人から聞いた。

『』……『』

「それじゃ、一体こんな事誰がやるっていうのよ……」

今黙ってた奴は多分だがムツツリ商会を使ってるな。小山だけが反抗してくるが別に問題ない

「案外女子だったりするんじゃないか」

「はあ？何で女子が女子を撮る必要があるのよ」

「たまにいるじゃん、そういう映像とって男子に売りつける最低な野郎や……同性愛者とかな」

「っ!？」

小山たちを説得していると、ガチャツと奥の方の扉が開く。

「なんだお前ら？」

「出てくるのがおせえよ雄二。実はな……」

アイアンクローの後が見られる雄二が部屋から出てくる。俺は雄二に説明すると……

「なるほどな、それで俺達のとこに来たわけか。……残念だが俺達はいさつきここに到着したばっかなんだ。数人遅れた奴がいてな。連帯責任で鉄人に全員叱られた」

「そ、そんな……」

小山がガクツと落ちる。こんなことでここまで落ち込むか？普通

「そうだ、芳樹。この後ちょっと面貸せ。話したいことがある」

「ん？……ああ、わかった。お前もなんか厄介な事になってそうだからな」

「も？て言うことはお前も……………」

「それはまたこの後でつてことで……………」
「俺は雄二たちと部屋に入っつていった……………」

芳樹Side……………」

「それで、俺を呼んだ理由はなんなんだ？」

「いや、ちよつとな……………」

雄二は奥にある自分の荷物から手紙のようなものとmp3プレイヤーを取り出す。

「えーと、『あなたの秘密を握つています。あなたの傍にいる人、すべてにこれ以上近づかない事。これを聞き入れてくれなければ同封されている音声を2年Aクラス代表霧島翔子に渡します……………」
・か。大体俺のと一緒だな」

ちなみに、このプレイヤーの内容は原作と同じです。書きませんでした
が雄二&秀吉ペアが勝つた理由はこれなので……………」
b
y
作者

「なに？お前も似たような手紙を送られたのか？」

「そうだ、ちよつと待つてろ。すぐ取つてくるから」
「そういつと芳樹は部屋を出て自分達の部屋へ向かう。

……………その数分後

「遅かったな。」

「悪いな。ここから俺達の部屋まで結構あるんだよ。・・・そこでこれが言ったものだ」

芳樹は持ってきた手紙を雄二達に見せる。

「・・・ふーん、それで？お前に送られた脅迫のネタはなんだ？」

雄二はその事にしつかり気づいたようで芳樹に尋ねる。芳樹が持ってきたのは手紙だけだったので脅迫のネタはわからないのだ

「ちっ・・・お前に着せられたメイド姿の写真だよ。なぜかトランクスでのパンチラの状態や着替えてる時のもあった。」

「そうか・・・すまなかった」

「・・・この手紙、どちらも同じ男が書いた物」

「どうして男だとわかるのじゃ？」

突然ムツリー二と秀吉が声を出す。

「・・・筆跡」

「それにこういうのって普通は好きな人の近くにいる奴を対象に送るんだろ。俺達が大体一緒にいる、女子のグループの誰かが好きで俺達に送ったって事だろ」

ムツリー二の言葉に芳樹が付け足す。と、ここでトントンとドアが開く

「失礼、ちょっといいかしら」

「ん？……何だ小山か。どうした？犯人でもわかったのか？」

「ええ、その通りよ。だから謝りにきたの、ごめんなさいね疑った
りしちゃって」

小山のこの言葉に全員が驚き芳樹と雄二は立ち上がって小山の方
へ向かう

「いや、いつも疑われるようなことをしてる訳だから謝らなくてい
い。それより犯人って……」

「ええ、向こうから自首して来てくれたわ。……Aクラスの
吉井君よ」

「……っ！？」

「『僕が悪いのにそれが全部Fクラスの所為になるなんて……
・』みたいな感じで悔やんでいたわ。今は西村先生のところに行っ
たみたい……それじゃ、伝えたい事も伝えたいし帰るわ」
そういつて小山は、開いたままのドアから部屋を出て行く。

「……明久が犯人？」

「バカか、そんなわけねーだろ。ただでさえ貧血で寝てたっつーの
に」

「まあ、あやつがバスで鼻血出して倒れた事はほとんどの者が知っ
てる事じゃからな」

雄二、芳樹、秀吉は暗い雰囲気です。ムツツリー二だけは、情

報収集をいつも通り行っている

「っ！・・・・・・・・・・覗きの犯人はお尻に火傷の痕がある女生徒
！」

「ムツツリーニ、お前は何を調べてるんだ」

芳樹、雄二からの適切な突っ込み

「・・・・・・・・これを聞けばわかる」

三人はムツツリーニの持つイヤホンから音を拾う。女性の声と男性の声の両方が聞こえる

「・・・・・・・・なるほど、つまりお前のムツツリ商会みたいなものを他にもやってる女子がいてそいつから脅迫者が買ったって事か」

「・・・・・・・・（コクンッ）」

「だったら、脅迫者だけじゃなくてそっちの奴も見つけなきゃ解決しないじゃねえか！クソッ」

「雄二、落ち着くのじゃ」

雄二は犯人だけ捕まえても意味がないことに少々腹が立つが、それを秀吉がなだめる

「なら脅迫者よりもそっちの女子を捕まえた方が手っ取り早いな」

「・・・・・・・・脅迫者の方はまだ情報が少ない」

「だがどうする？お尻の火傷の痕なんてどうやって探すんだ？」

芳樹はその情報だけでどうやって見つけるのか疑問を抱く。

「ふっ、まだまだ甘いな芳樹……そんなの」

「「覗くに決まってるだろ（じゃろ）！！」「」

「……バカだろこいつら。……つーか秀吉、お前までノってどうすんだよ」

「最近完全に女子からも女扱いされる事が多いからの。わしは男だと主張するのはいい機会じゃ」

「はぁ……まあアキの事もあるし手伝ってやるよ。……秀吉も完全にFクラスに汚染されてるな。優子のことを考えてねえ」

こうして、四人は覗きに行く事を決意した。……原作のように簡単に捕まってしまったことは言うまでもない

明久Side……

「それで、本当にお前がやったのか？吉井」

「……はい」

今、明久は自分が犯人だと小山に伝え自分から鉄人のところにやってきていた。理由はもちろん自首するためだ。

「……はぁ、長谷川が来てお前がAクラスに入ってからま

ともになったと思っていたんだがな……」

「……………」

「それに、これからの成績や態度によれば観察処分者の件だって取り消す事は出来たんだぞ？」

「……………すみません」

明久は最低限の会話をするだけでまともに自分からは話しかけようとはしない。鉄人もそれに呆れてため息をつく。……………そんな時

「西村先生、大変です！」

「どうかしましたか？高橋先生」

「たった今、Fクラスの坂本雄二君、土屋康太君、木下秀吉君それと私のクラスの長谷川君が覗きを……………」

高橋先生のその言葉に明久はハッと振り向く

「高橋先生！それ本当ですか！？……………どうして」

「はあ……………あのバカ共は……………坂本にしる長谷川にしる神童にはあんなのしか……………分かりました。朝まできっちり面倒見ますよ」

鉄人は明久の時よりもさらに深いため息をつく。……………4人に補習を受けさせるために部屋を出ようとする時

「吉井、少なくともお前は犯人が見つかるまでここで監禁だ。学習意欲など上がる事などないかもしれんがしっかりやっておくように」

「……わかりました。芳樹たちの補習の方、頑張ってください
い」

鉄人はフツと笑い部屋を後にした

第五十二話 強化合宿！一日目・夜！ (後書き)

これからもよろしくお願いします

第五十三話 強化合宿！二日目・昼！ (前書き)

連続更新です

第五十三話 強化合宿！二日目・昼！

Side in 芳樹

「……………雄二。一緒に勉強できてうれしい」

「待て翔子、当然の様に俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

雄二も一度素直になっただから、そのままでもいいのに。……………まあそんなわけで今はFクラスと一緒に自習を行っている。俺はいつもの……………じゃなかったな。優子と愛子、坂本夫妻、ムツリー二と秀吉の7人でやっている。姫路と島田は多分アキを探してどっかに行っただろう。

「ねえねえ、ヨッシー」

「ん？どうした愛子、物理とかで分からない部分でもあるのか？」

「違うよ……………アッキーが女子のお風呂にカメラを仕掛けて捕まったって本当？」

……………そのことか。と言うよりもう学年全体に広まっているだろうな

「……………ああ、捕まってるよ。けど昨日の夜、西村先生にはアキが犯人じゃないって伝えておいたから多分停学とかもないだろ。」

「真犯人が見つからない限りはな。それも合宿が終わるまでに」

俺の言葉に雄二が付け足す。そう、アキは雄二たちの保身のために自分から自首しに行ったから、戻るときまでに見つけないとその

ままアキが犯人だったということまで話が終わってしまう。そうしたら学校にアキの居場所はなくなるだろう

「……そうなんだ。僕達も出来る事があつたら協力するから何でも言つてね。そうだ秀吉君、ちよつと着てくれない？」

「む？まあ別に構わぬが……」

愛子は秀吉を連れて、席から離れる。何をやる気だ？

「ところでさ……あなた達昨日の夜何やってたの？ずいぶんと騒がしかったけど」

「……ギクツ！？」

俺、雄二、ムツツリー二がつい反応してしまう。……やばい、ムツツリー二はともかく俺は優子に雄二は翔子に制裁が下されるだろう。

「い、いや別に何でもねえぞ……なあ雄二？」

「お、おう。だよなあ……芳樹」

「ふうん……あら、愛子お帰り。何してきたの？」

ナイスタイミングだ愛子！……席に着いた秀吉がなんとなくだが顔が赤くなっているのは気のせいかな？

「ちよつとね。優子と代表、よく聞いててね」

《芳樹！》 《今この上なく》 《ドキドキしているんだ》 《ヤラナイカ？》

《もちろんだ、雄二!》

愛子を取り出したスピーカーから聞こえてきたのは、秀吉が声真似をしたであろう俺達の声………っっておいつ!?

「愛子!お前秀吉つかって変なことするんじゃないやねえ!」

「だって、これ本当はアッキーにやろうと思ってたんだけどいいいし。持ってきた意味なくなったなって思ったたら閃いたんだ」

「閃いたんだ じゃねえええええええ!」

これ漫研とかが聞いてたら作られるの確定だぞ!?俺は普通に女子が好きなのに!?!?!?!?! orz

「………雄二、覚悟は出来てる?」

「おい、まて翔子。あれは秀吉の……ぎゃああああ!」

雄二はきつちり翔子にお置きされたみたいだ………さーて、そろそろこっちも

「長谷川君、そんなに男子がいいのかなあ?」

「ちょっと待て優子!一瞬トリップしてたお前に殴られる理由なんてないぞ。あれは秀吉の声真似だし第一俺が好きなのは………」

「好きなのは?」

愛子が入ってくる。ええい、説得が効きそうなのに邪魔をするな!

「愛子!お前は黙っていてくれ!」

《俺が好きなのは》 《秀吉!》 《優子》 《お前は黙っていてくれ!》

向こうでムッツリーニが愛子と同じように録音機をいじっていた。
……あの野郎！

「ムッツリーニ！お前まで変な事をしてるんじゃないねえ！」

「……………へえ、長谷川君まで秀吉の方がいいのね」

「あ、姉上。どうしてわしの腕までつかむのじゃ!？」

「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」」「ポキンッ、
ポキンッ

俺と秀吉（元凶+まきぞい）は優子に片手ずつ、腕の関節をはずされたと同時に気を失った。

「あはは……………ちょっとやりすぎちゃったかな？」

「……………特に問題なし」

ちなみに周りから聞いた話によるとFクラスの面子より俺たちの方が騒がしかったとの事

ムッツリーニSide……………

「……………西村先生」

「ん？どうした土屋、お前から声をかけてくるなんて珍しいな」

あの惨事後、気絶しているものどもを放っておいてムッツリー

二は鉄人のところに来ていた。

「・・・・・・・・・・お願いがあります。・・・・・・・・・・明久に会わせてください」

「残念だがそれは無理だ。今、あいつには他の生徒との接触を一切禁止している。」

「・・・・・・・・・・自分が学校に仕掛けた盗聴器全て外します。・・・・・・・・・・それに商会を二度と開きません」

ムツツリー二の仕掛けた盗聴器やムツツリ商会はまだ先生に見つかった事はない。それがなくなるといふのなら、学校側としては困っていた事が1つ解決できる

「お前がそこまで言うとは・・・・・・・・・・坂本たちは何を企んでいる？」

「・・・・・・・・・・雄二たちは関係ない。・・・・・・・・・・俺はあのバカに言わなくちゃいけないことがあるんです」

ムツツリー二はギリギリと拳を握る。明久の事を思い出したのだらう

「・・・・・・・・・・お願いします」

「・・・・・・・・・・今日の夜ただぞ。ただし戻ったら仕掛けたカメラ盗聴器は全て学校側に提出するように。・・・・・・・・・・それでいいのなら」

「そんなの構わない」

ムツツリー二はいつものようにためず、はつきりと答えを出す。

第五十三話 強化合宿！二日目・昼―（後書き）

昼の出来事ですしこんな感じでいいですよね

感想お待ちしております

第五十四話 強化合宿！二日目・夜！ (前書き)

遅くなりました！

第五十四話 強化合宿！二日目・夜！

Side in 芳樹

そんなこんなで時間も過ぎていき、今はもう女子の入浴時間だ。雄二たちの部屋に集まったのは雄二、ムッツリーニ、秀吉、俺、聡、徹の計六人だ。

「芳樹。そっちの2人は誰だ？」

「ああ、そういえばまともに顔を逢わせるのは初めてか？こっちのいかにも体育会系の奴が河野聡。そんでこっちの影の薄い奴が宮野徹だ」

「河野聡だ。よろしく」

「芳樹はいちいちそこを主張するな！……宮野徹だ、これからよろしく」

「ご丁寧にもどうも。俺がFクラス代表の坂本雄二で、右から土屋康太ことムッツリーニ、木下秀吉だ。」

「……よろしく」

「よろしく頼むのじゃ」

聡たちから先に自己紹介を簡単に済ませる。ちなみに俺がこいつらを呼んだのはこれから人が必要になるからと、単なる道連れだ。優子たちに見つかったとき俺だけ処刑されるなんて嫌だからな。明久のためという事で話は通しておいた。

「……………で、今日はどうするんだ？雄二。とりあえず俺達の保身のための奴を2人連れてきたが」

「？、どういうことだ芳樹。変な事企んでると協力しないぞ」

「落ち着け河野。こいつが言ったことは俺も考えていた事だ。……
……………そろそろ来ると思っただが」

雄二は時計を見て時間を確認する。と、ここで扉がガチャツと開く。入ってきたのは覆面を被っていないFクラスの奴らだ

『坂本、俺達に話って何だ？』

「よく来てくれた。実はみんなに提案がある」

雄二は来た奴らの代表の須川……………だっけ？そいつにだけでなく入りきらずに廊下にいる奴らにも聞こえるように話す。

『提案？』

『今度はなんだよ？ 正直疲れて何もやりたくないんだけど』

『早く部屋に戻ってダラダラしてえな』

全員が全員ダルそうにしている。そりゃあそうだ、自習とはいえ監督がいる中でおわるまでずっとやってなければならぬ……………俺は途中で気絶してしまったが優子たちでさえクツクツになったと言う事なのだからFクラスのやつらから見れば地獄も同然だろう……………ここで雄二が一言

「皆、女子風呂の覗きに興味はないか？」

『『『詳しく聞かせろ!』』』』

「……………見事に声が一致した。こいつら、この団結力をもつと他の事に生かせりゃあ少しはモテるんじゃないのか？」

「まあそういうことだ、聡に徹。実は覗きに行くまでに教師達や風呂に入っていない女子が邪魔してくるからな。教師達は俺達Aクラスや雄二で固まれば対処できるし、他の女子達もなんとかなる。」

雄二はむこうで説得している。……………さっきの反応からして説得なんて必要ないと思うんだが……………。と、ここでムツツリーニが声を上げる。

「……………今からちよつと用事がある。参加できない。」

「なんだと?おい、ちよつとまでムツツリーニ!？」

雄二の制止しようとする声も聞かずにスタスタと出口に歩いていく。その途中、俺にしか聞こえないような声で俺に伝えてきた。

「……………明久のことは任せろ。……………なんとかしても正気に戻す」

「っ!?!？」

……………こいつ、もしかして鉄人から許可がもらえたのか?……………だとすると……………うん、鉄人をも許可させる材料……………まさか!

「おいつ!まで、ムツツリーニ」

気づいた頃にはすでにムツツリーニの姿はなかった

「……………まあ飛んだイレギュラーもあるが、これなら多分大丈夫だ。全員気合入れる!Fクラス、出るぞ!!」

Aクラス長谷川芳樹

科学 784点

……俺の得意分野だ！

「……は？な、なんなんですか長谷川君、その点数は！」

「悪いけど、さっさと終わらせてもらうぜ！装備変換！」

俺がそう叫ぶと、木刀が光に包まれ中で再構築されていく。その中から出てきたものは……召喚フィールドの半径はある大きさの巨大な剣

「つて、大きすぎでしょ！？」

「いつけえええええ！」

その剣を円を描くかのように横へ一気になぎ払う。この武器を作るための点数が点数なので防御など一切効かず、その場にいた奴らを一蹴した。

「……さて、次へ行くぞ」

「その前にちょっと待て！？なんだ、お前の点数とあの馬鹿でかい武器は！？」

「前にも言ったが、俺は理数系科目は得意なんだ。剣は俺の腕輪の能力で消費する点数に応じて、大きさや種類なんかを変えられる。ちなみにあの武器の名前は斬馬刀で650点分だ」

雄二が迫ってきた。……時間が無いというのに、全く。

俺はそれだけ説明すると、後ろでポカンとしている奴等なんて気にしないで廊下を走っていく。

「長谷川くうくん？何しているのかしら？」

「……雄二、浮気は許さない」

「それにしてもね、芳樹君だけならともかく、聡と徹もとはねえ」
「……俺達は今、人生最大のピンチを迎えていた。Fクラ
スの奴らは途中途中で倒れていつて今いるのは俺と雄二、聡と徹だ
け。……そして相手が相手なだけにマジで危ない」

「しよ、翔子！？……お前ら、今入浴の時間じゃ……」

「……私と優子と美由だけ頼まれたの」

「優子？すでに召喚獣を使おうという気は……」

「ないに決まってるでしょ。そもそも先生もいないのにどうやって
戦うのよ」

翔子と優子は俺達に危害を加える気100%らしい。美由の方は

「へえ、やっぱり聡たちも男なんだねえ。よし、帰ったら部活の
みんなと徹の弟達に報告だねえ」

「何でも言う事聞きますからそれだけは！」
「……あれ？なんだか徐々に気が……」

・・そうか。優子お前はもう関節技を極めたんだな。痛みも感じない。

それが気絶しているからだと言う事は俺は知らなかった。

ムツツリーニSide・・・

「ここだ、・・・入るぞ、吉井」

鉄人がムツツリーニを連れてきたのは、合宿所の地下にある一室だ。鉄人が扉を開ける、そこにあるのは机と布団が一セットずつだけで外からの光など感じられない。ここだけが同じ合宿所でも同じ地下でも違う異様な雰囲気にもツツリーニは一瞬おびえる。

「全く・・・お前だけだぞ？この部屋に閉じ込められて今なお正気でいられる奴なんて」

「・・・ムツツリーニ？」

こつちに振り向いた明久に対してムツツリーニは身震いを起こした。顔が酷くなっていたわけでもない、声がおかしくなっていたわけでもない。・・・変わった姿の見られない普段の明久だったからだ。ムツツリーニは気が動転しそうになるが、気力で立ち直る。・・・あの言葉を伝えるまで

「ここは俺でも耐えられないんだ。・・・土屋、話し終わったら呼べ」

「・・・コクンッ」

鉄人は部屋から出る。……沈黙が続くがここでムツツリ
ーニが口を開く。

「……………明久」

「なに、ムツツリーニ？」

「俺がここに来たのはお前にやらなくちゃならない事があるからだ」

「え？それって……………ゲフツ！……………いきなり何する
のさムツツリーニ」

ムツツリーニは明久の腹を思いっきり殴るが、明久は受け止める
だけで抵抗などはしない

「……………もう一度聞く。お前は本当に工藤が好きなのか
？」

「えっ！？……………す、好きだよ、もちろん」

いきなりの質問に明久は戸惑う。

「……………だったらどうして……………どうして工藤を悲
しませるような事をした！」

「ガハッ！」

また、ムツツリーニは殴るが今度は腹ではなく顔だ。明久はふっ
飛ばされて起き上がるうとするがそこにムツツリーニが乗っかり首
を掴む

「俺からも言ってる！お前と工藤は確かに釣り合わない！お前は
何をするにしても相方って言う存在がいないと何も出来ない奴だ！

「……………」
ムツツリー二の罵倒が続く。耐えられなくなったのか明久も口が開く

「そつだよ！ムツツリー二の言つとおりだ！僕みたいな奴と愛ちやんが釣り合つはずなんて……………」

「それでも、工藤はお前が良かったんだ！」

「っ！？」

「ずっとずっと前から、工藤はお前に惹かれてたんだ！……………お前が工藤の事をどんな風に見てるかなんかどうでもいい！ただ、あいつが勇気を出して言つた言葉を、過去の事を言い訳にして逃げようとなんてするな！……………」

ムツツリー二は今までではありえないくらいの声量で明久を怒鳴る。

「過去なんか気にするな！男として正面から向き合え！今のおまえ自身が工藤を男としてどう思ってるかだけ考えろ！わかつたか！」
言いたかつた事を言い終わりハア、ハアと息を荒げる。そして鉄人を呼びその部屋から出て行った。無言で倒れている明久に鉄人も出て行くこととするが

「……………吉井。お前と土屋それと工藤の間に何があつたかは知らんから口は挟まないが、土屋はあれをお前に伝えるためだけに今までの生き方を捨てた……………それだけは覚えておけ」
そして、ドアを閉める。部屋の中には壁に寄りかかっている男が一人いた。

第五十四話〈強化合宿！二日目・夜！〉（後書き）

今回はかなり長めにありました。読みにくくすみません

シユレ猫さん、武器のアンケートありがとうございました。凄く長引いてさらにイメージとは替わったものになったと思います。それに関しては何ーコメで……

芳樹の武器に関してのアンケートに締め切りはないので、どんどんアイデアを持ってきてください！お願いします（全てが全て、出せるかどうかは分かりませんが）

これからもよろしくお願いします

第五十五話 強化合宿！三日目・昼！ (前書き)

更新遅れてすみません。疲労が溜まっていますつい寝てしまいました

それではどうぞ

第五十五話 強化合宿！三日目・昼！

Side in 芳樹……

『芳樹、良いのか？』

ん？ここはどこだ？ベッドの上……？……一緒にいるのは……
……雄二！？

『ああ、お前とが良いんだ』

はあ！？何言ってるんだ俺！？クソツ、体が言う事をきかねえ！

『そうか……なら、一緒に大人の階段昇ろうぜ』

『ああ！……雄二、来い！』

「昇ったら駄目なあ！？」

……夢でよかった。愛子の野郎、まさか夢の中にまで
侵食してくるとは……。……それで本当にここ
は？……補習室か。どうやら補習が終わった後、疲れて部
屋に戻らずここで寝てしまったらしい。この部屋にいるのは俺と聡
と徹だけのようだ。Fクラスはここから部屋まで近いからな。羨ま
しいもんだ

「う、うーん、はっ!?!?.....夢でよかった.....ん?芳樹、起きてたのか?」

「おっ聡、起きたか。史上最悪の悪夢を見て目が覚めたんだ.....」

「そうか、お前もか.....」

聡の周りに哀愁が漂う。.....叫ばずに魘されてたつてことは昨日の江崎が言ってたことが夢にでもなったのか?

「そういう話は置いといて.....」

「「徹!起きろ!」」

「グハア!?!?.....お、お前ら.....いきなり何すんだ.....」

俺は座って寝ている徹の腰に回し蹴り、聡は上から背中に踵落としを繰り出す。理由は簡単、俺達は悪夢に魘されてたというのに!いつだけ幸せそうな顔で寝てたからだ。

「さっさと部屋に戻るぞ、後で色々面倒くさくなるからな。」

「おっ、そうだな」

「.....ま、待ってくれ.....」

俺と聡は背中や腰をさする徹を放っておいて部屋を出た.....

「それで、今日はどうするんだ？」

「もうEクラスとDクラスには仲間を作っておいた。」

強化合宿では2時間単位で一緒に自習するクラスが変わる。正直言ってAクラスから見ればどのクラスとやっても変わりはないのだが、下のクラスから見れば目標になるんだろう。それで今はFクラスと自習をしている。

「仲間つてのは覗きのつて事だよな。一体どうやって？」

「両クラスとも、ムッツリーニの写真で買収したのじゃ。……Dクラス代表の平賀とか乗り気でない奴はこの騒動の仲で参加してない奴は同性愛趣味だと思われるぞ、と軽く脅したのじゃが」

「酷いな、お前ら……。つて芳樹、何雄二を睨んでるんだ？」

そういう話を出すな秀吉、自然と雄二を睨みつけてしまう

「いや、ちょっとな。こつちもCクラスには話をつけたが、Bクラスとうちのクラスは駄目だった。Bクラスのほうはムッツリーニの写真で頼む」

「なーに話してるのかな？」

「げっ！？愛子に江崎！？」

「ちょっと女の子見てげってなによ。また昨日の事について話

してたの？」

その言葉に場が静まり返る。女子どもにはまる分かりだったようだ。

「懲りないねー全く。あ、そうだ、上からの命令でAクラス男子は覗きの防衛につけてさ」

「「なにに!?」「」」

「何でも昨日の話を聞いた久保君が言い出したんだって。社会のルールを守ろうとしないも者には制裁が必要だとかいって」

「ふざけんな、久保の野郎!……待てよ」

俺と雄二に送られた脅迫文、書いたのは男。俺と雄二、この2人の人間関係での共通点……アキ。覗きが成功せずアキが犯人とになってしまったら?……そして何より久保はアキの事が好きだった。

「ん?どうしたのヨッシー」

「いや、何でも。」

「はっ!……坂本、今思ったんだが」

聡が愛子たちを見ながら何かを雄二に伝えようとする。

「なんだ?」

「こいつらや代表、Fクラスの姫路たちに事情を話せば覗きをする必要なかったんじゃないのか?」

「「「「あ．．．．．」「」「」」」」
俺、徹、雄二、秀吉、ムツツリー二は自然と口が開く。．．．．
．．．盲点だった

「何々？教えてくれない、聡」

「ああ、実はな．．．．．」

聡が江崎たちに俺達が今まで覗きをしていた事情を説明する。聡が一通り説明すると、江崎と愛子は少し驚きながらも納得してくれた。

「．．．．．つまり、今アッキーが犯人として扱われているカメラについての犯人はお尻に火傷の後のある女の子で」

「それが誰かを知るためにみんなは女子のお風呂を覗こうとしていたと」

「簡単に言えばそういうことだな。」

「しかしどうする？もうFEDCのクラスは覗く気満々だぞ。今から中止にも出来ないし．．．．．」

雄二がもう手遅れだという事を話す。．．．．．もう、そんなんだよな。いくら写真で買収したからとはいえ、ここで中止なんていったらどのクラスからも反感が来るだろう。

「じゃあ、ここにいるみんなだけは補習室に連れていかないよう西村先生に頼んでおくよ。他の純粹に覗きたいって言う人達は別だけどね」

「そうしてもらえると助かる。それと、怪しい女子の対象としては

同性愛者の奴だ」

「分かった。シミちゃんみたいな人だね」

江崎が答える。・・・・・・シミちゃんって言うのは、島田の事が好きな清水という事で良いのか？

「・・・・・・・・・・工藤、話がある。ちょっと来い」

「えっ、何々？」

ムツツリーニが工藤を連れてどこかへ行く。アキとの事だろうか

「それじゃあ頼むぞ。・・・・・・でだ芳樹、犯人の見当がついたみたいだが誰なんだ？」

やっぱり雄二には誤魔化せなかったか。けどこれは

「犯人は教えてやるが、制裁は俺だけにやらせてくれ。あいつには叩き込まなくちゃいけない事があるからな」

ムツツリーニSide・・・・・・

教室内全員と離れたところで2人は会話をする

「ムッツリー二君、話って何なのかな？」

「………これ」

ムッツリー二は愛子に小さな紙切れを渡す。

「なあに、それ？」

「………明久の監禁場所が書いてある。今日の夜にでも行つてやれ」

「えっ!？」

「………明久に俺が伝えないといけない事はもう伝えた。後は明久がどう取るかだけだ」

「そうなんだ。」

「………それと、明久のいる場所は凄く危ない雰囲気があるから気をつける」

「わかった。………ありがとね、ムッツリー二君」

愛子はそういつてその場から戻ろうとする。……と、一回だけムッツリー二の方を振りむいて

「もし、アッキーがいなかったらムッツリー二君のことを好きになつてたかも」

といった。当然ムッツリー二の反応は

「……………ブシャアアアアア!」

「わ！大丈夫？ムツツリーニ君！？」

部屋の片隅でこんなことが行われていたことは芳樹たちは知らなかった

第五十五話 強化合宿！三日目・昼！ (後書き)

最後のムツツリーと愛子の会話のところがぐだぐだになってしまいました。

さあ、犯人は誰なのか！？・・・・・・大体の人は分かったと思いますが次回をお楽しみに

第五十六話 強化合宿！三日目・夜 1！

Side in 芳樹……

そんなこんなで、恒例の出撃前ブリーフィング

「お前ら、よく聞いてくれ。この三人以外のAクラスの男子が向こうに着いた。こっちだってAとB以外だがそれでも100人以上の集団だ！臆する事はない！補習にビビらず進んで行け！そうすれば必ず理想郷アガルタの光景を見ることが出来る！以上だ！」

『『『うおおおおおおおっ！！』『』』』

いつにない団結力。エロもここまで極めると凄いもんだな

「雄二、正直勝てる見込みは？」

「ゼロに近い」

はつきり言いやがったよ、こいつ

「そもそも、俺たちの本当の目的は済んだんだ。といつてもここで俺たちが抜けると巻き込んでしまった奴らが可哀想だからな。協力はするぞ」

「本音は？」

「万が一の確立で翔子の裸が見られたとき、そいつをこの世からなくす為だ。」

彼女思いだねえ。翔子なら今夜あたりに何か仕掛けてきそうだな。そんな事はともかく

「・・・・・・・・雄二」

「ん？なんだ」

「今回、俺の独断行動を許してほしい」

「別にお前は一人でもやられそうにないからいいが・・・・・・・・なん
でだ？」

「脅迫犯と決着をつける。二階は俺一人に任せてくれ」

「・・・・・・・・まあ、いいだろう。長谷川につく予定だった班！
お前らは俺の班と共に一階の突破を目指す！分かったか！」

雄二のおかげで俺はあいつと一対一でやる事が出来る。感謝しな
いと

「全員気合を入れる・・・・・・・・出るぞ！」

『つおおおおお！！』

「俺の予想だとこの階であつてると思つんだが・・・・・・・・いた
た」

えーと、Aクラスの男子ほとんど、先生は・・・・・・・・西村先生！？

『いたぞ！長谷川一人だ！』

『一人だけで来るなんて随分となめてやがる！』

『Aクラスの恥め！！覚悟しろ！』

おいおい、色々な事言ってくれるじゃねえか。否定は出来ないけどな……

「Aクラス長谷川芳樹！ここにいるAクラス全員に申し込みます！
試獣召喚^{サモン}」

「Aクラス 男子×17 総合科目 平均3200点×17

VS

Aクラス 長谷川芳樹 総合科目 7527点」

ここで負けるわけにはいかないんだよ！

『はあ！？あいつどれだけ点数を持ってるんだ！？』

『代表以上の点数だぞ！？』

『教師でも中々とれない点数だぞ！』

「……お前らを相手する暇なんざねえんだよ！装備変換！」
俺の木刀が光り、その中で形を変えていく。光はどんどん大きくなりやがて手から足の方へ移り形が出来上がっていく。光の中から姿を見せたのは……鈍い光りを放つ1つの戦車、

『『『はあああああ！？』』』

「爆ぜろ！……」

ドーンと一発、砲弾が撃たれる。……良かった、敵は今の一発で戦死したみたいだ

「……確かに、お前の腕輪は点数さえ消費すればどんな物でも創り出せるが……ここまで大きな戦車を出せるなんぞ初めて聞いたぞ」

「そういうのはどうでもいいんで、早くこいつらを連れて行ってください。」

ちなみに出した戦車はT-34-85っていう、第二次世界大戦で活躍したソ連の戦車だ。

「そんな事をしたら、お前がこの先へ行ってしまっただろうが。それにAクラスなら逃げ出そうともしないだろう?」

「行くはずないでしょう、まだあいつが残ってるんですから。それにこの勝負は2人だけでやりたい。先生は邪魔なんですよ。」

幸い俺は『白金の腕輪』を持っているしな。教師がいなくても召喚は出来る

「言うじゃないか、長谷川。……まあい、この場はあいつに任せるとしようか。今のお前の点数じゃないそうにないがなせいぜい頑張れ」

「恩に着ます。西村先生……。さてと、もうそんな所で覗き見る必要はないんじゃないか……。久保利光」

西村先生がこの場を去ると俺は久保の名前を呼ぶ。すると奥の方からその姿は現れた。

「覗きなんて面白い真似しているじゃないか、長谷川君」

「はん、そつちこそアキが欲しいからって俺と雄二に脅迫文なんて味な真似するぜ」

「僕がやったつて分かってるんだ、さすが神童といったところだね。……だが、ここを通す気もないし、負ける気もない！」

「そうか……。行くぜ！アウェイクン！」

俺は腕輪を起動させる。科目は総合科目、さっきの戦車で7000点ほど使ってしまった所為で一科目ごとの点数がないに等しい状況になっている。そのため相手が4000以上でもこれしか俺に戦う教科はない

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

俺と久保と一対一の死闘が始まった。

Side out 芳樹 & Side in 愛子

「うーんと、突き当りの開かないドアのノブが外れてそれが鍵になつていて中に入る事が出来る……。ね。なんでこんな手の込んだ仕組みになつてるんだろ？」

僕は今ムツツリー二君から貰った紙を頼りにアッキーのところに行こうとしていた。先生たちもほとんどが覗き騒動の方に行つていて僕の周りには誰もいない。

「あ、あのドアだよな。……。 (ガチャン) 。。。。。。

本当だ、鍵になつてる。」

僕はそのノブの鍵を使つて中にはいる。……中はとっても薄気味悪く、地下へと続く階段だけがあった。奥に進むたび暗くなつていきカツン、カツンと歩きたびに足音が響く。お化け屋敷みたいでなんだか面白いと思いたいけどそれはできない、なんだかとても嫌な気がする。そんな時……

『おじようちゃん、こんなところで何しているんだい？』

「ひい！？」

僕しかいないこの場でおじいさんのような声が聞こえてきた。僕は当然驚き、声を上げてその場に蹲る。……怖い、……怖い

『おつ、声が聞こえるのかい。大丈夫じゃ、別に悪さをするわけじゃないからの。ちょっとこっちを向いておくれ』

「………？」

よく聞くとその声は秀吉君みたいな喋り方で面白い。僕は蹲ったまま、顔だけ上げて声がする方を向く。……そこには

『中々の別嬪さんじゃのお主。わしゃ、ぬらりひよんと言つ』
召喚獣ぐらいのおじいさんが……足もなく浮いていた。

「ひっ

」

『悲鳴を上げるのは止めとくれ。確かに人間から見ればわしら、妖怪はあれじゃがわしだつてここに突然吸い寄せられて驚いているのじゃぞ？』

そんな事言われたつて、もう何がなんだか……

『良く聞いておくれ、お主はこの奥にいる少年の所に来たのじゃろ
うっ。』

僕はその質問にコクンツとだけうなずく。

『なら、今行くのは危ない。あの少年は自身の心の迷い、陰の気で
わしらを吸い寄せ、あの部屋の中はもはや人間には立ち入る事の出
来ないところになっておる』

「　　っ!？」

僕はそれを聞いて飛び出す……けど、それはおじいさん
に止められてしまった。

『行くなっといつとるじゃろ。ついさっき、中の陰の気が急激に弱
まったんじゃ。何があったかは知らんが多分じゃが自分の中で答え
が見つかりそうなんじゃろう。そういう時は一人にしておくのが一
番なんじゃ。』

おじいさんが中でおきている事を説明してくれる。このおじいさ
ん、妖怪といってもなんだか優しい

『勘違いするでないぞ。本来ならわれらの地を奪った人間など苦し
めたいというのが本音じゃが、前に返り討ちにされての。無駄に逆
らって仲間が消えてくのが嫌なんじゃ。』

「?。」

『その顔は何がなんだかわからないという顔じゃな。……
あの少年が答えを出すまでこの老いばれ爺の話聞いてくれんかの
?。』

そのとおり、全く分からない。召喚獣の事から世の中にオカルト

が存在すると言つ事は分かつていても實際目の当たりになると、何
がなんだか分からなくなる。……今後のためにも話ぐらいは
聞いておこうかな？

「……………わかったよ、おじいさん」

『うむ、言い返事じゃ。……じゃが、おじいさんと言つのは
止めとくれ。ぬらりひよんでいい。』

第五十六話 強化合宿！三日目・夜 1！ (後書き)

かなりgdgdになってしまいましたがこの作品でのオカルトを出して見ました。

このおじいさんの話が実はオリ話に関わってくるので、次話は芳樹たちよりこつちを優先して見るのもいいかもですよ？

それではっ！

第五十七話 強化合宿！三日目・夜 2！ (前書き)

愛子 芳樹VS久保 愛子、という感じで進めます

よろしくお願いします

第五十七話 強化合宿！三日目・夜 2！

Side in 愛子

僕はアッキーの様子を見に行こうとする途中、ぬらりひよんさんといういわゆるオカルトと対面していた。優子とかに話したって多分信じてもらえないだろう。ぬらりひよんさんの話によると、僕には靈感があつて僕にしか見えなかったらしい。しかつて事はここにアッキーを連れてきた西村先生やムツツリー二君の事かな？

『わしの事よりまず……あの部屋について説明しておこうかの』

「あの部屋つて、アッキーのいる部屋の事？」

『そうじゃ。実はこの辺りにはの即身仏と言う生き仏が埋まっていたの。それがどうにも下級の妖怪を呼んでしまつらしい』

「即身仏つていうと昔、僧侶さんが土の中に埋まって瞑想をしてそのままミイラになったものだよな」

これは、前に授業でやつたから覚えてる。確か密教のあたりの話だつて。

『よく勉強しておるの、その通りじゃ。そのせいでこちら辺の妖怪が集まつて嫌な気がしておるのじゃ。じゃがお主ほどの靈感を持つていれば多少は楽じゃろ』

「？、普通は靈感を持つていれば持っているほど気分が悪くなるもんじゃないの？」

『下級の妖怪は見えない者にいたずらをするのが大好きじゃからの。見えるものにはそう寄って来ないんじゃない』

ふーん、と僕は軽くうなずく。

『話を戻すぞ。それであの部屋は元から下級の妖怪が溜まっておるのにそこにあの少年のように気に迷いのある者を放り込むから、その気に寄せられて中級の妖怪までも呼んでしまうんじゃない。しかもその妖怪が見えないから放り込まれたものはさらに気をおかしくする。普通の人間であれば一日で倒れるぞ』

それがあの拷問部屋の正体じゃと、説明してくれるぬらりひょんさん。……って拷問部屋!?

「待つて、拷問部屋ってどういうこと!？」

『ん?元からあの部屋はここを建てた者がそのためにつくったということじゃ。肉体ではなく精神に対する拷問としての、さっきそこから辺の妖怪から聞いたことじゃ。今入っている少年は凄いでい。今日で三日目だと言うのにまだ平気な顔でいられとる』

ここを建てた人と言うと……学園長先生。なんで、合宿所にこんな部屋をつくる必要があるの……?

『あの部屋については以上じゃ。次にわしの事なんじゃが……話してもいいかの?』

「……あつ、うん良いよ」

『そういつてもらえると嬉しいぞい。……わしは妖怪の総大将をしていたんじゃない』

「妖怪の総大将!?!?!?!?!へえーじゃあ、ぬらりひよんさんって
凄いんだね」

そういえば、最近読んだ漫画でそんなのがあった気がする。

『そうじゃ、わしは凄いんじゃ!?!?!?!?!じゃがの、さつき
人間に挑んで返り討ちにあったと言ったじゃる。仲間も次々とやら
れ実験対象にされ、今は部下など一人もないんじゃ。』

……でも、確かオカルトって解明できていないんだよね。
どうして返り討ちに出来たんだろ

『わしもほとんどの力を失って、体を維持するぐらいしかできんよ
うになった。それでも、いなくなった仲間たちよりはマシなのかも
知れんがの』

「ねえ、ぬらりひよんさん。どこに挑みに行ったの?」

『うむ、学校であった事は間違いないんじゃが………確
か霜月とかそんな名前じゃったの』

霜月って言うと確か超難関校だよね。坂本君が行く予定だったつ
ていう。……僕たちの学校じゃなくて良かったとホッとす
る僕。……でもオカルトを制御できるなんて文月学園だ
けなんじゃ……。

『お、中の少年も気が晴れたようじゃ。お譲ちゃん、礼を言っぞ。
老いぼれの話聞いてくれて』

「……ぬらりひよんさんはこれからどうするの?」

『わしか?……特に行く宛があるわけではないからの』

「だったらさ、僕と一緒に来てくれない？」

『おかしなことをいうものじゃ。なぜじゃ？』

「さっき聞いた霜月の事とか、オカルトの事……何も知らないでいるんじゃないと思うんだ。ぬらりひよんさんならいろいろ知っているだろうし、ぬらりひよんさんも僕たちの学校のシステムを見れば何か思う事もあるだろうし。……駄目かな？」

『かつかつか。自ら危ない事に突っ込もうとはの。……気に入った、お主の名は？』

「あ、そういえば自己紹介がまだだったね。工藤愛子だよ」

『愛子が、良い名じゃな。これからよろしく頼む。』

「よろしくね！ぬらりひよんさん。……待っててねアッキ

「僕はアッキーのいる部屋の扉に手をかける。とその時ぬらりひよんさんが声をかけてくる

『気になっていたのじゃが……お主、中の少年のがーるふれんどとかいう奴か？』

「ふえ！？／＼／＼／ま、まだそんな関係じゃ……／＼／

『そうかそうか、まだ、か。』

ぬらりひよんさんはまだのところを強調してくる。……
／＼／＼／

「もういいから。早く行くよ。」

僕は・・・・・・・・ぬらりひょんさんの声は無視して扉を開けた。
・・・・・・・・

Side out 愛子 & Side in 芳樹・・・・・・・・

「Aクラス 久保利光 総合科目 4631点

VS

Aクラス 長谷川芳樹 総合科目 527点」

俺と久保の点数が表示される。俺は初期装備の木刀で久保の召喚獣は日本刀。鏢迫り合いは危ないな。俺はさつき戦車でほとんどの点数を使ってしまったため1000点もない。それでも、負けるわけには行かない。こいつにだけは・・・・・・・・

「さすが学年次席といったところだな」

「そういう君はもう虫の息じゃないか、・・・・・・・・行くよ」

久保の召喚獣が突進してくる。俺はそれを横にかわし、がら空きになった背中に木刀で三発、蹴りを一発食らわし久保の召喚獣は倒れる。そこに突っ込んでいく。

「まだ終わらないぜ！」

「召喚獣の操作は負けるけど・・・・・・・・それでも！」

立ち直ってこちらを向く久保の召喚獣。この距離なら……いける！

「くらえっ!」

「甘い!……僕の腕輪の能力、忘れてたわけじゃないよね。そこだ!」

「しまっ　　っ!」

攻撃した俺の召喚獣は耐えて吹っ飛ばされなかった久保の一撃で吹っ飛ぶ。……腕輪のことを忘れていた。あいつの腕輪は『鉄壁』だったっけ、ダメージを極限まで減らす事の出来る。使われてたら俺の攻撃なんて1ずつしか喰らわないじゃないか!

「Aクラス 久保利光 総合科目 3987点

VS

Aクラス 長谷川芳樹 総合科目 16点」

「へえ、間一髪でよけられたんだ。」

「……お前は……アキが本当に好きなのか?」
俺が気になっていた事、それは久保はアキの事が好きだった。それならどうして愛子じゃなく、俺や雄二に手紙は送られた?

「……勘違いしている人が多いけど、僕は吉井君が好きだ。でもそれは、君や坂本君ように隣いるパートナーになりたかったんだ!」

「っ!??」

「僕は高校に上がるまで、ずっと一人で勉強だけをしてきた。でも初めて吉井君を見たとき思ったんだ。世の中勉強だけじゃない。僕が今まで掴めなかった物、吉井君といれば掴めるかもしれないって！……だから、僕は憎かった。望んでいたところにいる君や坂本君が！」

俺はこいつはアキの事が大好きで脅迫文を送ってきたのかと思っただ。それだとして疑問があがった。アキがすきなのは愛子であって、俺や雄二じゃない。でもその好きの方向が違った。だから俺や雄二の立ち位置にいたかったから脅迫文が送られた。……だったら

「……それなら、アキが自首したままで終わらせようとするのはなぜだ？」

「吉井君には悪いと思っている。でもここで犯罪のレッテルのはられた状態の吉井君に優しく声をかけてあげれば、僕の事も見てくれるかもしれない。そう思った、だから「ふざけるんじゃない！」？」

「結局お前はアキを自分の所有物にしたいだけじゃねえか！そりゃあそんな誰からも認められない中優しく声をかけられたら誰だって振り向くさ！けどなあ、俺だって、愛子達だって、雄二達だってアキからは離れない。アキがそんな事はしないって信じてるからだ！お前は人から信じて貰える、貰う、そんな関係があるからこそアキに惹かれたんだろ！隣にいたいと思ったんだろ！違うのか！？久保！」

「……」

召喚獣を久保の召喚獣に向けて突進させながら言う。久保の召喚獣は戦意がないのかも刀を構えてはいない。

「気づけ！こんな方法でアキの隣にいたってそれはお前が望んでた関係じゃないって事を！隣が空いてなけりゃその反対の隣にいりゃあ済む話じゃねえか！先の2人だけの思い出とかがあったとしても3人で新しい思い出をつくりゃいいだけだろ！いい加減に目を覚ませえ！！」

俺は召喚獣の持っていた木刀を前に向けて、久保の召喚獣の喉下に突き刺した。それと同時に久保の召喚獣は消える。人体でいう急に刺せばそれだけで点数は一気に削られる、というより戦死する。

「Aクラス 久保利光 総合科目 0点

VS

Aクラス 長谷川芳樹 総合科目 16点」

「すまないことをしてしまった、長谷川君。」

「ああ、脅迫状のことか？お前が自分の間違いに気づければそれでいいんだ。もう怒っちゃいねえよ。……それより、お前あの写真誰から買った？」

「本当は言っではいけないんだけどね……Dクラスの清水さんだよ」

アキのことを豚野郎とかいってくる奴か。……俺のあんな写真撮っておいてただで済むトオモウナヨ？

「僕はこれから坂本君に謝ってくるよ。．．．それと、なるべく吉井君には近づかないようにする」

「おい、そこまでする必要は．．．．．」

「そうでもしないと、僕の気が晴れないんだ。僕がやってきた事は許される事じゃない。．．．君達にも、吉井君にも。だからその分を僕は償わなければならぬ」

「だが　その代わりといつてはなんだけど」、「？」

「僕が自分を許せるようになったとき．．．．その、さっき言った隣に入れてもらって良いかな？」

「　　おうっ！しっかり予約して置いてやるよ！」

「ありがとう、長谷川君。僕に大切な事を教えてくれて、．．．．それじゃ」

久保はそれだけいってこの場から離れる。．．．まあこれで脅迫の方は解決だ！．．．後はどうやって清水を告白させるかな。もしかしたら、もう雄二がやってるかもな。

その後、清水が真犯人だと全員の前でいっていた。なんでも、雄二の前にスタンガンを持ってかかってきたところを上手く口車に乗せて言わせたらしい。雄二の奴、まさか本当に告白させるとは思いもしなかった。アキが戻ってくるんだからまあいつか。

Side out 芳樹 & Side in 愛子……………

僕は部屋のドアを開ける。そこには、向こうをむいて立っているアッキーがいた。

「アッキー!？」

「……………愛ちゃん、どうしてここに？」

アッキーはいつもと変わらない顔でそこにいた。普通なら変わらない表情に怖がってるけど、ぬらりひよんさんから聞いた話が頭の中にあつたためか無事でいた事が凄く嬉しい。アッキーとしては僕がどうしてここにいいのか知りたいらしい

「ムツツリー二君が教えてくれたんだよ。この部屋の来方を」

「そうなんだ……………。ムツツリー二には感謝しないとね。」

「感謝?、どうして?」

私は感謝するべきだけど、アッキーがする必要があるのでろうか?」

「ムツツリー二に叱られたんだ。お前が愛ちゃんに出した答えはお前自身の答えじゃないって」

「えっ……………」

ムツツリー二君、何で行き方なんて知ってるんだろと思ってたけど、どうしよう事の為に……………」

「一度しか言わないからね、よく聞いて、……愛ちゃん、いや工藤愛子さん」

「は、はいっ!?!」

「僕は君の事が大好きです!僕なんかでよかつたら付き合ってくださいー!」

……その瞬間、僕の目からは涙が溢れ出してきた。それがアッキーに見られないようにアッキーに抱きついて顔を隠す

「ど、どうしたの!?!愛ちゃん!」

「……嬉しいだけ」

僕は顔を隠しながらそれだけ呟く

「えっ!?!」

「ずっと前から、願ってた事が叶って嬉しいだけだよ」

「……そうだったんだ、今まで気づいて上げられなくてごめん」
アッキーの手が僕の背中に来て抱きしめてくれるのが分かる。その頃にはもう涙も出しきっていた。顔を上げてアッキーの方を見る

「……ねえ、今度っから愛子って呼んでくれない?」

「……分かったよ、愛子ノノノ」

名前が呼ばれたとき僕の心は嬉しいという気持ちに埋め尽くされた。

ガチャン

「へっ?」

こんななにいムードの時、扉が閉まる音なる。アッキーの顔を見ると少し青ざめていた。

「どうしたの?アッキー」

「どうしよう。ここのドアね、外からじゃないと開けられなくて・・・朝鉄人がご飯を届けてくれるまで開かないと思う」

さっきまで僕の後ろにあった手はいつの間にか離されアッキーは頭を抱え込んでいた。

「悪いんだけどさ、そこに布団が敷いてあるからここで寝てくれな
い?」

「いいけど・・・そうだ!アッキー、2人で寝ない?」

「えええっ!///だ、駄目だよそんな!」

「いいじゃん、折角付き合うようになったしさ。それに・・・
」

・・・で結局。

「アッキーと一緒に寝るなんて何年ぶりだろ」

「あ、愛子。布団の中でそんなに動かないで！／＼／＼腕を体に巻きつけないで（い、色々と当たってる／＼／＼）」

「……………すう……………すう」

「もう寝ちゃったの！？やばい、色々とやばい！」

「（そんな簡単に寝れるはずないじゃん、僕だって緊張してるんだよ／＼／＼／＼）」

それでも、この腕だけは絶対に放さないと誓いながら眠りに付いた……………

『良かったの愛子。じゃが、わしを無視してやるのだけは止めておくれよ』

そんなぬらりひょんさんの声が聞こえた。……………こんなところではるはずないじゃん／＼／＼／

第五十七話 強化合宿！三日目・夜 2！ (後書き)

ちよい、いつもより長めになりました。

感想お待ちしております

第五十八話 強化合宿！四日目・昼―（前書き）

出来そうなのでやります

昼といっても前のように朝から始まります

第五十八話 強化合宿！四日目・昼！

Side in 明久

「……………ふああ……………ん？」

僕はいつものようにまだ寝ていた。なんだろ、この感触？。なんだか柔らかい……………ハツ！昨日の夜、確か愛ちゃ……………愛子と寝たから、もしかして……………。

「もうっ、アッキーたら……………いくらなんでも手が早いよ……………」

「うわあああああああああああ！！！！！！！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

僕は思いっきり布団から飛び出し、そのままそこら辺の壁に頭をぶつける。こういう時ってまだ寝てるのが普通の展開じゃないの！？クソッ！夢なら覚める！

「ア、アッキーどうしたの！？そんなにやったら頭が……………」

「ほっといってくれ愛子！この変な夢から覚めないといけないんだ！」

「だから夢じゃないって!？」
 そんなやり取りをしていると、扉がバンツ！と開く

「吉井喜べ！、例の犯人が見つかったぞ？」

現れたのは鉄人だった。鉄人は僕らの格好を見たりして今の状況を把握しようとしている。ちなみに僕のパジャマも愛子のパジャマも2人で寝た事で暑かった所為か少しはだけていた。

「そ、そのなんだ　コホンッ、吉井、それに工藤。そういうのは
こういう所でやるもんじゃない。いいな？」

「補習でも何でも受けますので弁解をさせてください！！」
僕は愛子と気持ちを一つにして鉄人に訴えた。・・・鉄人の
事だから僕が夜にやっちゃってしまって、それを後悔してるとでも思い込
んでいるのだろう。・・・朝っぱらからついてないなあ

「へえ、そんなことがあったんだ。」

「だが昨日で脅迫の方も盗撮のほうもケリはついたからな。これが
らどうするか・・・。」

今はFクラスと勉強している。・・・というか他のクラスとの
補習時間なんて書く必要ないよね。せいぜい、女子たちが僕に謝っ
てきたぐらいだけだし。ちなみにいるのは僕、芳樹、聡、徹、雄二、
秀吉、ムツリーニの七人で勉強している。愛子は木下さんや霧島
さんに昨夜何があったのか搾られてる。・・・お願いだから
朝のことは言わないでよ・・・

「俺は出来たぞ。新しい目標」

「おつ、そうなのか坂本・・・どんな目標だ？」

「打倒、教師だな。」

「教師を倒すって事か？」

いくら雄二でもそれは強くすぎだろう。教師は点数も高いし、何より操作技術が半端じゃない。簡単に倒せるのなら、教師なんて必要ないだろう。

「ああ。実際、芳樹は布施先生を楽に倒していたし、俺だって竹中先生は倒せた。……だからそんなレベルはあえて狙わない」

「……高橋教諭ってことか。学年主任の……雄二、俺にもやらせる」

雄二の声に芳樹が重なる。高橋先生なんて言ったら学園最強とまで言われるほどの実力の持ち主だ。それこそ他の先生とですら差がありすぎる。

「いいぜ、元から俺も一人で勝てるとは思ってもいないからな。お前がいると心強い。」

なるほど、雄二と芳樹で高橋先生に挑むのか……だったら

「僕も……鉄人に勝ってみたいな。」

「だったらやるうぜ。……目標は、学園最強の称号の剥奪だ！」

芳樹のその言葉に僕、雄二、ムツツリー二のテンションが上がる。ムツツリー二が倒したいのは保健体育の大島先生かな？

「秀吉、河野、宮野。悪いがお前ら三人には全体の指揮を執って貰いたいんだが……」

「……ここまできたら付き合うしかないじゃろ、のう河野に宮野」

「もちろんそのつもりだ。それと坂本に木下、土屋、俺の事は今度から名前で呼んでくれ。俺もそうするから」

「あ、じゃあ俺の事も徹でよろしく」

「わかった、と意気統合する雄二たちと聡たち。」

「でもなあ……………」

「ん？どうかしたか、明久？」

「僕が少し不満げになっていると、雄二が尋ねてくる。鉄人を倒すのはいいんだけどさ、」

「それで……………覗きが成功したら……………いや、愛子の裸なんて誰にも見せたくないんだけど……………」

「なんだ、そんなことか。手は打ってある。」

「相変わらず仕事が速いな雄二。で、その方法は？」

「さっき、学園長を見かけた……………後は分かるよな？」

「ニヤリと笑う雄二。それってつまり……………」

「……………そういうことか」

「想像したら駄目じゃぞ。戦えなくなる。」

「だが先生としては生徒たちのために体を張ってもらわないとなあ。それに俺だって翔子を他の奴に見せる気はない……………」
「ここで明久、お前工藤の事を愛子って呼んでたよなあ？」

「ギクツ!？」

や、やばい。雄二にはやっぱり気づかれていたようだ。

「幸い、ここには俺たちしかいないんだ。……さあ、じっくり話してもらおうか。」

「……お、お手柔らかに」

僕も愛子同様、搾られるはめになった。最後の自分のセリフで朝のことを思い出してしまったことは言うまでもない

Side out 明久 & Side in 瑞希……

……ショックでした。まさか、もう明久君と工藤さんが付き合うことになったなんて……話を聞いた後は普通に勉強していただけなのに……それでもその場にいづらくなって、教室から出たところに私はいます。

「……ぐすつ、……ひつく」

出た途端に涙が止まりません。それほど、私が明久君のことを好きだったって言う事でしょうか。……どうしてこんなことになったんでしょう。

「姫路さん、どうしたんだい？」

「……久保君」

「泣いている様だけど、何か悲しい事があったのかな？僕なんかでよければ相談にのるよ」

「……ありがとうございます」

私は久保君にどうしたらいいのか相談する事にしました。自習ですしサボっても問題ありませんよね？

「ここならいいかな。人もいないし」

「はい、そうですね。……実は」

私は久保君に全てをぶちまけました。……少し言い方が悪かったかもしれませんが、それでも先ほどの工藤さんの話、私の思い、行動を話しました。

「……なるほどね。吉井君と工藤さんが付き合い始めたことで自分がどうしたらいいのか分からなくなっただね」

「……はい」

「僕が言えるのは吉井君のことを諦めて新しい恋を探すしかないってことだね。」

「そんな……」

「きつとね、姫路さんはやり方を間違えてしまったんだと思う。話を聞く限りだと、姫路さんは強引に吉井君を振り向かせようとしたそれじゃあ駄目なんだ。相手に自分をアピールして、他の人より自分を魅力的に見てもらえるようにしないと。特に吉井君みたいな人の場合は」

「……………」

私は、反論などせずに久保君の意見を聞きます。……………今思
い出すと、あんな暴力的な事ばかりしていて、本当に振り向いて
もらおうという気があったのでしょうか。

「姫路さん見たいな人には嫉妬なんて似合わないし、それにそうい
うことは誰にもしてほしくない。だから、新しい恋を見つけた事が
一番だと僕は思う。」

「……………そうですか」

「……………実は僕も吉井君の事が好きだったんだ」

「へっ?」

「あつ、君みたいな恋愛対象じゃなくて隣にいたい、パートナーと
かみたいなそういう意味だよ。今の吉井君で言うと長谷川君のよ
うな感じかな?」

「あつそういうことですか」

よかったあー、てつきり久保君もそういう趣味があるのかと思っ
ちやっただじゃないですか

「……………僕は長谷川君や坂本君に嫉妬してしまつて脅迫なんていう最低な事をしてしまつたんだ。姫路さんは坂本君が脅迫されてるなんて聞いたことない?……………それが僕なんだ」

「そうだったんですか……………」

「そういえば昨日の夜聞きました。それで理由が理由だから坂本君たちには手加減しろと言われましたっけ。」

「それで昨日の夜、長谷川君に叱られたよ。そんな方法で手に入れたつてそこに望んでいた吉井君はいないつて……………。その言葉で、僕は気づいたんだ。人との関わりで汚い事はしてはいけない。自分から当たりに行くことで初めて関係は出来上がっていくんだつてね。」

「このときの久保君の顔は普段と違う凛々しい顔でした。」

「……………」

「いつの間にか姫路さんの話から僕の話に変わってしまったね、聞かせてすまない。」

「い、いえむしろありがとうございます。話を聞いてくれたおかげで、少し楽になりました」

「そういつてくれると嬉しいよ……………おっと、そろそろ時間だね。教室に戻ろうか。」

「はいっ!」

教室に戻るとき、私の心は少しですが弾んでいました。

第五十八話 強化合宿！四日目・昼！ (後書き)

出来たので投稿しました。最後のは久保×姫路フラグですね。 . . .
. どうかしたら、芳樹と優子をかけるんだろう

Q どうしてこんなことになったんでしょうby瑞希

A それがこの作品だ。諦める

. 最低ですね

感想お待ちしております

第五十九話 強化合宿！四日目・夜 1！

Side in 明久……

女子がお風呂に入っている時間、僕らは恒例の？ブリーディングをやっている

「今日は俺、芳樹、明久、ムツツリー二の四人は高橋教諭、大島先生、そして鉄人に挑む。だから今日の指揮は秀吉、聡、徹の三人を中心に各クラスから一人か二人ぐらい出してもらおう。……本当ならBクラスだけでなくAクラスも仲間にしたかったんだが、中々首を縦に振ってくれなかった。それでも、最大の関門である鉄人を倒せる可能性を持つ明久が仲間に加わってくれた！今日がラストチャンスだ！心してかかれ！」

『『『おおっ！！』』』

FEDCBの男子全員の気持ちが一つになる。……いくら男のロマンと言えどここまで来るとなあ。しかも覗きが成功した時、待っているものが……。おえっ、気持ち悪くなってきた。

「アキ、そういう事は考えるな。勝負に支障が出るぞ」

「そうだね。……そういえば、木下さんたちには言ってるの？」

「ん、どういふことだ？」

「事件の方は一通り解決したんでしょ。それで僕らがまだ覗きに参加してるなんて言ったら殺されるんじゃないかな、僕たち」

「………芳樹がやってもうた、って言う顔をしている。雄二もみんなの前にいるから顔に出してないだけで内心では芳樹たちと同じ気持ちかな。………愛子にはメールで先に言っておいたけど、多分面白がって木下さん達に言う気はないだろう。」

「その場のノリ的なもので事情を説明できねえかな？」

「無理だと思うよ、木下さんや霧島さんも結構怒っていると話を聞いてくれないし」

「そんなことが出来たら、僕が今まで姫路さんや美波から受けてきたものは一体なんだったんだ」

「………はあ、まあ臨死体験ぐらいは覚悟しとくか」

「そのまま死なないようにね、芳樹」

「こんな感じで最後の覗き大作戦は始まる。………名前どころにかならないかなあ、別に覗くわけじゃないし」

『いたわっ！主犯格の面々よ！』

『長谷川先生、お願いします！………サモン試獣召喚！』

「女子生徒何人かと長谷川先生の召喚が展開された。女子の方はおもかく長谷川先生は………」

「数学なら俺が……」

「待てっ、俺とお前は辿り着くまで点数をキープしとかないといけないんだ！こういう時は……アウェイクン！」

雄二が芳樹の召喚を止めて腕輪を発動する。……なるほど、干渉を使ってその間に走り抜けるのか。全員は抜けれないかも知れないけれどその人達が足止めをしてくれれば

「くっ、干渉ですか。やりますね坂本君」

「今だっ！抜ける奴は一気に駆け抜ける！後続はそのままこいつらの足止めをしてくれ！」

『うおおおおっ！！！！』

こんなことをしばらく繰り返す……。その間に出てきた先生は竹中先生、布施先生、船越先生たちだ。ぶっちゃけ、僕らが通ればいいから負けてもいいんだよね。鉄人も参加してるから補習室には行かなくてすむし……。あれ？芳樹の方があまり点数を消費しないんだから、芳樹が中心に干渉すればいいのにとっして雄二が干渉してるんだろ？そんなことを考えていると前にまた新しい女子部隊が……。あれはっ！

「霧島さん達Aクラスに姫路さんに美波！？それに高橋先生まで！」

「あの部屋から出て早速このような事をするとは……」

「……雄二、そんなに私以外の裸が見たい？」

「はっせーがっわっくん、昨日来ないから安心してたのにやっぱ

りやるのね」

「聡達がないね。むこうで指揮とってるのかな。あーあ、向こう行けばよかつたな」

「明久君、工藤さんがいるのに他の人のなんて駄目ですっ！」

「そうよ、アキ！お仕置きされた……て瑞希何言ってるのよ！？」

高橋先生は僕にあきれ、霧島さんは雄二にお仕置き準備、木下さんは芳樹に同じような事を……。と感情があまりにバラバラすぎる。愛子に関しては……。ニヤニヤしてるだけだ。まるでこの事を楽しみにしていたかのように。

「翔子！それは誤解だ！俺は高橋教諭に……」

「俺もだ！だから優子、そこをどいてくれ！」

あーあ、2人とも言いたい事は最後まで言わなきゃ。そんなんだから……

「……雄二は高橋先生が見たいの？」

「そう、長谷川君も高橋先生みたいな巨乳がいいのね？」

「それは誤解だ！？」

誤解されるんだよ。……さてと、僕はそろそろ

「愛子、ここ通してくれない？」

「うん、いいよ。この先に大島先生もいるからムッツリーニ君も。・

「……………ムツツリー二君、そのまま僕とも勝負しない？」

「ありがとう」

「……………あのときの借りを返す！こい、工藤！」

僕はお礼を言っつてそのままムツツリー二と愛子と一緒に……………

「つて工藤さん！？なにそんな勝手に吉井君たちを奥に行かせるんですか！？」

高橋先生に止められた……………愛子は高橋先生にも報告してなかったのか

「先生、別にアッキーたちはお風呂を覗く為にこの騒動に参加してるわけじゃないんです。」

「？、どういうことですかそれは」

「アッキーには西村先生に、ムツツリー二君は僕と大島先生に……………それとその2人はあなたを倒すために来たつてことですよ……………それじゃあ、もう行きますね。アッキー行こつ」

「そ、それじゃあ……………」

それだけ行つてその場を後にした。

「あついた。大島先生だよ」

愛子がそういうと向こうもこちらに気づいたようだ。
ここはムツツリー二の出番だね。

「工藤、来たのか」

「はい。それで彼が先生と私に挑むと」
愛子はムツツリー二を見ながら大島先生に説明する。
もう僕はいる必要がないかな。

「愛子、また後で」

「あつ、うん分かった。彼は西村先生に」

どうやら僕の事は説明してなかったみたいだ。まさ
か西村先生にも説明してないってことはうん、愛
子を信じよう

「ムツツリー二、大変だけど頑張ってね。」

「任せろ、保健体育での最強を証明してや
る」

その言葉を聞いて安心したのか、僕はムツツリー二の突き出す拳
に拳を重ね、その場を後にした。

「……………鉄人」

「お前にその名で呼ばれるのは久しいな。……………だが、お前がなぜこんなことに参加する？根は変わってなかったか？」

「やっぱり愛子は言ってなかったみたいだ。でもいつもと違い話が通じているので説明は出来そうだ。」

「……………それは違います。……………鉄人！僕はあなたを倒すためにここに来たんだ！ここで勝つて僕はこの先の地獄をみんなに見せる！」

「なんだ、今入っているのは誰か知っているのか。……………そうか、俺を倒すためか……………いいだろう、吉井。越えられない壁というものをしっかり叩き込んでやる！」

「そう言つて、鉄人はフィールドを展開する。……………この人なら生身で戦つてくるとか言い出しそうだったけどそれはさすがにないか。」

「行くぞ鉄人！、これまでの成果を見せてやる！」

「「^{サモン}試獣召喚！！」」

Side out 明久 & Side in ムッツリーニ
……………

「さあ、ムッツリー二君。始めようか」

「いいのか、土屋。いくらお前でも現生徒最強の工藤と教師の俺を連続で倒せるわけがない」

「……俺の求めているのはそんなチャチなもんじゃない。いっぺんにかかってこい」

連続なんて意味がない。いっぺんにかかってこないと操作技術の向上が見られないかもしれぬ

「っ！言ってくれるじゃん、ムッツリー二君」

「後悔しても知らないぞ？」

そう言っつてフィールドを展開する大島先生。……別に俺は工口い部分だけが得意なわけじゃないっ！……鼻血が出そうに……我慢我慢

「……試^{サモン}獣召喚！」「」

保健体育最強の座を取り戻してみせる！！

Side out ムッツリー二 & Side in 芳樹・

「……………ねえ雄二、愛子が言ってた事は本当？」

「ああ、そうだ。明久は鉄人を、ムッツリー二は大島先生を、そして俺と芳樹は……………高橋教諭！あんたを倒すためにここまでやってきたんだ！」

雄二が高橋教諭を指差しながら声を上げる。……………俺の
出番は？

「ふうん、信じられないわね。いくらあなたたちでも力の差は歴然よ。……………さっさとやりましょうか。高橋先生、召喚許可を。
試獣^{サモーン}召喚」

「俺たちは高橋教諭を倒して学園最強の称号を勝ち取るんだ！！邪魔するつって言うなら、いくら女子が相手でも容赦はしねえぞ、試獣しょ。……………その必要はない！」「っ！」

なんだ？……………今の声ってまさか

「木下さん達、その勝負なら長谷川君を除く僕たちAクラスの男子全員で挑もう。」

「久保っ！お前……………どうして」

「僕は君に少しでも借りが返せたらいいなと思ってるだけさ。覗きを誘われたとき参加しないと云ったのは、Aクラスは参加しないと相手に油断させるためと……………ちよつと怖かったんだ」

「怖かった？」

「うん、もしかしたら本当に長谷川君たちは覗きのために動いてい
るんじゃないかってね。……………でも、さっきの君の言葉で確信

が持てた。それに……こつこつを信用するって言うんだ
る？……もう相手も待ってくれないだろうし……
・いくよ、みんな！」

・
・
・
Aクラスの奴らは久保のその言葉で動く。全員が俺たちのことを

「長谷川君！坂本君！……君たちなら、きつと倒せる」

「……久保、感謝する。さーと、熱い応援を受けたと
ころで……雄二行くぞ！」

「言われるまでもねえ！」

「「「^{サモン}試獣召喚！」「」」

俺たちのこの合宿最後の戦いが、それぞれの場で行われた

第五十九話 強化合宿！四日目・夜 1！ (後書き)

後1、2話で強化合宿も終わると思います

これからもよろしくお願いします

第六十話 強化合宿！四日目・夜、最終決戦！ムッツリーニside（前書き）

タイトルどおりムッツリーニだけやります

それと、メンドイので召喚獣という単語を省きます。

例：工藤の召喚獣が・・・ 工藤が・・・、というふうな感じ
です

それではございませ

第六十話 強化合宿！四日目・夜 最終決戦！ムツツリーニSide

Side in ムツツリーニ

「「「^{サモン}試獣召喚！」「」」

「二年Fクラス 土屋康太

保健体育 1013点

VS

二年Aクラス 工藤愛子&教師 大島武 保健体育 732点&
877点」

「……………え？ムツツリーニ君、その点数何？」

「単教科といえど1000を超える点数を取れる生徒があいつ以外にもいたのか!？」

……………?2人とも驚いているようだが俺は大島先生の言った言葉が気になる。あいつ以外?。1000は高橋教諭でも2、3教科しかないと聞くが……………そいつは誰だ?……………まあい

「……………来ないならこつちから行くぞ……………
・加速」

「おおっと、危ない危ない。あの点数だったら多分少なくとも半分
以上は食らうよね」

「後ろがから空きだぞ、土屋」

……………工藤が避けると同時に大島先生が飛び掛ってくる。

大島先生の装備は巨大なハンマー、そんなものを持っているとは思えない速さでこちらに向かってくる。……………だが、

「……………そう簡単には当たらない」

「なんだと!?!」

俺は避けると同時に工藤に向かう。……………工藤の召喚獣はそれに気づき避けられないと判断したのか俺の小太刀に斧を当てて防いでくる。俺は一步下がって再び戦闘態勢を整える

「でも、腕輪使っていないのにいきなり速くなったからビックリしたなあ」

「……………いい成績を取れなかった者は、腕輪の能力が普通の奴より性能がいい。」

「どういうこと?」

「……………例えば俺のは一度使えば自分がいいと思うまで効果は持続する。……………今までは操作が上手くいかず繰り返し使っていたがそんなことをする必要がなくなった」

「ほう、ではお前はずっとその速いままでいられるという事か」

「……………そういうこと?!」

大島先生の質問に答えるとともに再び動き出す。大島先生は当然のように避けるが……………狙いは、避けるために飛んだ瞬間!

「しまっ

「!」

「……もう遅い」

大島先生が避けた瞬間、俺は持っている小太刀を地面に突き刺し方向転換。大島先生が着地する前に……

「……これが操作の練習の成果だ」

一回首を切り飛ばしそのまま召喚獣を反転させ肩を、そして次は反対の肩を、その後付け根の部分を切り刻む。大島先生の召喚獣は見事に顔、胴体、両腕、両足と6つにバラバラとなった状態で消えていった

「二年Fクラス 土屋康太

保健体育 1003点

VS

二年Aクラス 工藤愛子&教師 大島武 保健体育 732点&0点」

「まさか工藤よりも先に負けるとは……」

「って、ムツツリー二君10点しか減ってないじゃん!?そんなに燃費がいいの、その腕輪!？」

「……Fクラスでは俺、雄二、島田の三人が腕輪を使えるようになり試したところ、一番強力だったのは島田の腕輪だった。雄二は元神童だった事も考えられている所為か俺や島田ほど強力ではなかった。」

「……ここであの時の屈辱を晴らす!」

「へえ、でも僕もまだ負けないよ『雷電』!」

「くっ!」

工藤に突っ込んだところ先ほどと同じように斧で止められる、た

ださつきと違うのは雷電により斧から電撃が伝わってくるからだ。
工藤はそのままのけぞった俺に突っ込んでくる

『まだまだ甘い、坊ちゃん』

「へっ?・・・ちよつと!何やってるの、ぬらりひよんさん。」

工藤が何か独り言をつぶやく。遠くにいるため俺には聞こえない

『まあいいじゃないか愛子よ。・・・それにしてもこの体。やはりわし等妖怪の体がベースになってるみたいじゃ』

「そ、そうなの?」

『ああ、妖怪のわしがいつとるのじゃから間違いない。それと・・・この体気に入った。しばらくこのままでもいいさしてくれ。』

「・・・まあいいけど。」

工藤のことが分からなくなってくる。何をあいつは言っているんだ?聞こえないだけじゃない。大島先生と話してるわけでもないから、独り言・・・?・・・とにかく俺はあいつを倒すだけだな。

「・・・何をやっている」

「ちょ、ムッツリーニ君」

『ほう、あいつはムッツリーニというのか。おもしろい名じゃの、こっちも行くとするかの』

「っ!?!?」

何回か小太刀と斧で鏝迫り合いになる。．．．．．さつきと霧圀気が違う。それに工藤が動かしてるとは思えないほどの動きだ、工藤の意思とは別に動いている。．．．．．確実に

「．．．．．それでも負けない。」

『ほう、中々粘るの。こちらの攻撃も当たらんのだが．．．．．愛子、わしもどちらかと言うと小太刀の方が使いやすいのじゃが．．．．．』

「それはしょうがないよ。試しに腕輪でも使ってみたら？」

『ふむ．．．．．これのことか？』

突然工藤の腕輪が光る。．．．．．なんだ？この腕輪の能力が変わっている。さつきまでは斧にまとわせるだけだったが、今はどうだ。雷がこちらに直線上に向かってくる、超電磁砲並みの速さで、というかこれは超電磁砲だ。．．．．．ギリギリで交わそうとしたがかすってしまった

「ぐっ！」

「二年Fクラス 土屋康太 保健体育 503点

VS

二年Aクラス 工藤愛子 保健体育 435点」

『ほう、結構面白いの。これも』

「．．．．．まだいける」

加速が今の攻撃でとかれてしまったので、再び腕輪を使う。．．．．．それにしてもかすっただけでこの威力か。

『もつと使ってみるかの、ほれ』

「っ!?!」

超電磁砲が……五発連続!?何とか全部避けられたが、まだ撃つてくる。……愛子はなぜこんなことをする?こんな無駄に打つたら点数を使うだけじゃ……。超電磁砲の連射が止まる……。今だ!

『なんじゃ、もう弾切れか?……ぎゃっ!?!』

「二年Fクラス 土屋康太 保健体育 493点

VS

二年Aクラス 工藤愛子 保健体育 0点」

なんかよく分からない感じで決着がついた。

「あははー、負けちゃったなー。」

「……工藤、あの戦い方はなんだ?…それに腕輪の応用は普通は一ヶ月二ヶ月では習得できない」

あの超電磁砲は腕輪の応用で作ったものだろう。俺の大島先生を倒したときの加速中の反転も応用であつてそんなに何回も使えない。集中力を半端なく使うからだ。……それを工藤は何発も出してた。何であんなことが出来たんだ?

・ ・ ・ ・ ・ぬらりひょん？工藤、お前は一体 ・ ・ ・ ・ ・意識が ・ ・ ・ ・ ・ガクッ

ここで俺の意識は途切れた。

第六十話 強化合宿！四日目・夜 最終決戦！ムツツリーニSide（後書き

読んで下さってありがとうございます

次は、雄二&芳樹VS高橋教諭です。

……夏期講習が始まるまでに強化合宿は終わらせておきたいです！

感想お待ちしております。

第六十一話、強化合宿！四日目・夜、最終決戦！芳樹Side（前書き）

芳樹&雄二です。Side inは芳樹となります

それではござい

第六十一話、強化合宿！四日目・夜、最終決戦！芳樹Side、

Side in 芳樹……

「……試^{サモン}獣召喚！」

「2年A、Fクラス 長谷川芳樹 & 坂本雄二 総合科目78
96点&4921点

VS

教師 高橋洋子

総合科目7816点

ふうん、80点差か。操作技術は向こうの方が上だから気はぬけないな。そんなことより、雄二の奴がこんな点数を取るなんて……もしかすると秀吉よりも……考えておくか

「って、お前はなに冷静に考え込んでんだ!？」

「ん?どうかしたか、雄二」

「どうしたもこうしたも、なんですかその点数は!生徒が取れるような点数ではありませんよ!？」

「あれ?雄二にも高橋教諭にも言ってありませんでしたっけ。俺も一応神童ですし、雄二みたいに一度も落ちぶれた事はありませんから、並の教師よりは点を取れる自信はありますよ」

読者には言っただけな。追加設定じゃないぜこれは。

「そんなことよりもお前の方がすげえよ雄二。その点数昨日戦った時の久保より高いぞ」

「そうか、まあ俺もこの日のために勉強してきたからな」

そんな嘘が俺に通用するか。高橋先生を倒すなんて昨日今日思いついたばっかじゃねえか。．．．どうせ、普段はアキをAクラスから取り戻すためと翔子に勝つため。最近だとアキの無実を証明するために勉強したんだろ。．．．このツンデレが。そういうのは翔子にだけやってやれ

「．．．．与太話もこれくらいにしてそろそろ始めるか！装備変換！」

俺の木刀が光る。．．．．大きさはほとんど変わらず中から一太刀の剣が出てくる

「おっ、R I V Eのテンコマンドメンツか？」

「好きだったからな。とりあえずまずは．．．．テンコマンドメンツ、ブルー・クリムソン！」

「．．．．双剣ですか。そちらの準備が整うまで待っていました。もう問題ないようですね。行きますよ！」

高橋教諭が鞭を持ちながら、俺と雄二の間に一発叩き込む。．．．これぐらいなら普通によけられる。．．．いや、よける事で俺たちをバラバラにする事が目的か。

「2人同時に相手するのも大変ですからね。．．．まずはあなたからですっ！」

「うおっ！あぶねえ」

動くの速っ！さつき着地したばっかじゃねえかおい。

「まだですよっ！．．．．っ！？足が動かない！？」

「俺の事、忘れられてちゃあ困りますね。まだ腕輪も出した事ないので」

「そうか、そういうえば雄二も4000点超えてるから腕輪使えるんだっけ。……高橋教諭が動けないという事を考えるとお前の腕輪は相手の行動不可か？」

「おいしい、考えとしてはあってるんだが……。正解は重力の操作だ。地面と接してる部分しか今はまだできねえし扱いが難しくくて正直当てられるか不安だったんだが、こっちに来なかつたおかげで無事成功だ。」

「……重力操作か。ってことは本当ならフィールドの指定した範囲内の重力操作が能力だが応用で高橋先生に絞れたって事か。俺には被害ないし。……今はってことは将来手だけの重力を変えるところができるようになるのか？……雄二なら出来そうで敵になったときが怖い」

「動けないなら鞭を振るう事しか出来ねえよな。……なら、こいつでっ！」

「俺も殴りに行くか。サンドバツク代わりだ！」

雄二がとんでもない事を言った様な……。俺は手にある双剣から炎と冷気を飛ばす。ルはあんまり使ってなかったけどこんな事も出来るんだよな。

「……生徒相手にこれを使うのもなんですが……バリア！」

高橋教諭の持っている腕輪と召喚獣に持っている腕輪両方が光る。……ってあの腕輪持ってたのか！？

「はっ？俺の炎を冷気がかき消された!?」

「鞭が二つになるだっ!?・・・クッ!」

高橋先生の召喚獣の周りに薄い膜が張られ鞭が二つになる。俺の炎と冷気は膜に触れた瞬間かき消され、雄二はふたつとなった鞭にぶつかり吹き飛ばされる。

「2年A、Fクラス 長谷川芳樹 & 坂本雄二 総合科目73
96点&2433点

VS

教師 高橋洋子 総合科目6716点」

「雄二！大丈夫か!？」

「これが大丈夫に見えるかダアホッ!」

突っ込みを返せるという事はまだ平気だな。

「私の持つ腕輪の効果はバリア。その名の通り相手の出す特殊な攻撃を膜で守れるというものです。・・・打撃などの直接攻撃からは守れませんし点数も500消費します。召喚獣のほうの能力は鞭の増量と伸縮自在などの追加効果ですね。動けなくとも鞭を伸ばせば済む話なので坂本君の腕輪も特に問題にはなりません」

「特殊系の攻撃は通用せず、近接でも遠距離でも鞭ではじき返すか・・・これぐらい難しくねえとラスボスじゃねえよな、芳樹!」

「当たり前だ!とりあえず・・・テンコマンドメンツ、シル
フアリオン!」

俺は武器を変える。特殊系が効かなくなるとブルー・クリームソ

ンは用済みだからな。ここは回避を中心にするためにこいつにしておくか。

「……………どんな武器に変わろうと私には届きませんよ！」

「げっ!?……………ふう、危なかった。」

高速で高橋教諭に飛びかかるうとすると、高橋教諭は2本の鞭を振り回す事で高橋教諭の半径1メートルにもぐりこむ事が出来なくなってしまうた。……………エクスプロージョンは爆発だから膜に防がれるし、……………テンコマンドメンツから斬馬刀に切り替えるのは……………これも駄目だ！さつき高橋教諭は伸縮などの追加効果といった。などってことは硬度とかを変えられて防がれる可能性が高い！

「（おい、雄二！策はねえのかよ！）」

「（そう簡単に思いつくかボケ！……………っ！……………确实とは言えんがやってみる価値がありそうなものはある）」

「（そうか！なら俺はなにをすればいい）」

「（高橋教諭をそつちに引き付けて置いてくれ！）」

「了解！……………こつちだこつち！そんなとろい鞭で追いつけるものならやってみやがれババア！！！」

そう俺が言った瞬間、その場は凍った。高橋先生本人からプチンツという音が聞こえる。別にブラのホックが外れたとかそんないやらしいものじゃない。

「……………長谷川君？イマアナタナントイイマシタ？」

「い、いえなにも」

やばい、優子以上に怖い……ガクガクブルブル。雄二、笑ってるな！やるべきことに集中してる！

「私は……まだ30ってないんですよ……それなのに」

ガクツと倒れる。……なるほど、年をとればとるほど気になるもんだが逆にまだ若いのにババアといわれ顔が老けてると周りに見られていると思うのか

「長谷川君……ユルシマセンヨ」

「ちょ、先生、ま、まっつて　へっ？」

迫ってくる鞭が怖い！確かに今改造征服にかすっただけ……
……なんで、鞭で服が切れるんだ？

「マダデスツ！シニナサイ！コウカイシナサイ！」

「それ生徒に言っちゃ駄目な事でしょ！？」

「アナタダツテワタシニイツテハナラナイコトライツタジャナイデスカ！ダカラオアイコデス！」

「カタカナで喋らないで下さい！いつそう恐怖が……」
まだかつ、まだなのかと俺は雄二の方を見る。そこには……

「ふわぁ、と眠いなおい」

「てめえなにのんきに欠伸かいてんだ！」

雄二はあくびをして退屈そうにしていた。俺は高橋教諭から逃げるのに精一杯だというのに！

「いやあ、とつくに準備できたのにお前が鞭と遊んでるからなあ、ついで。」

「ついじゃねえよ！？早くやってくれ！」

「……坂本君？（何かする気でしょうか）……ならっ！」

高橋先生は急に目標を俺から雄二へと変える。……にもかかわらず雄二はニヤニヤした立ったままだ。

「悪いが、高橋教諭。……あなたの攻撃は俺に当たらない」

「なっ！どうして腕が勝手に下に……そういうことですか」

多分雄二は重力操作の能力を罫のように設置したんだろう。雄二の方に狙いが行った時そこにちょうど召喚獣の手が引っかかるように。腕輪の応用って1、2ヶ月は練習しないと出来ないじゃなかったか？

「こういう使い方があって言うのはムツツリーニから聞いた。初めてだったんだけどな、上手くいってよかった。……この使い方をしていると、集中力が切れそうに動けないからな。芳樹とどめは任せた。」

「オツケー、……テンコマンドメンツ、グラビティ・コア！」

俺はシルフィアリオンの高速移動で高橋先生の頭上に移動しそこでグラビティ・コアにかえる。……するとどうなるか、とてつもない重量をもつグラビティ・コアは落ちていきそのまま高橋先

生の召喚獣を真つ二つにした。

「2年A、Fクラス 長谷川芳樹 & 坂本雄二 総合科目48
39点&1433点

VS

教師 高橋洋子

総合科目0点

点数を見ると、俺の点数はかなり減っていた。アキみたいに召喚獣の感覚を持っているわけじゃないから、高橋先生がじわじわ減らしていた事に気づかなかつた。雄二も最後当たらないとかほざいておきながら若干先の方がかすつたらしい。かするだけでこんな減るとは……。まあそんなことは置いといて

「「よっしゃあー！ー！」」

「あれ？でもお前、何でレイヴェルトとかでとどめを刺さなかつたんだ？動きを止めたんだから何でも出来ただろ」

雄二はハイタッチをした後、俺に問いかけてくる。

「俺はテンコマンドメンツに変換したんだ。レイヴェルトはル専用だろ？俺のが何になるかは知りたかつたがそんな暇なかつたしな。ちなみにルーン・セイブやミリオンサンズは使っても意味ないし、サクリフアーは操作が効かなくなる」

その答えにそりやそうだなと納得してくれる雄二。でも十の剣は本当にどうなるんだろうな？

「私が生徒相手に負けるなんて……しかも腕輪まで使ったのに」

「高橋教諭、感傷的になってるところ悪いが早くフィールドを解除してくれませんか、むこうではまだ久保たちと優子たちが戦ってま

すじ。」

そうですねといってフィールドを解除する高橋教諭。解除すると向こうから久保や優子がやってきた、奥の方にはさつきまで聡たちのまともていた奴らが見える。あいつらが勝ったのは意外だな

「勝ったのかい長谷川君！」

「おう、結構苦戦したけどな」

「それでも凄いよ、高橋先生に勝ったただなんて……とりあえずおめでとー」

「戦うことが出来たのはお前がうちのクラスをまとめて話を聞かないあいつらを止めてくれたからだ。本当に助かった」

「こんな感じで話をしているとその中に聡と徹、それに秀吉が入ってきた。」

「おう、お前らもご苦労だった」

「お主らが倒せたものじゃから、ほとんどの者は奥に行ってしまった。わしらはここで高みの見物とでも行くかの？」

「待つてください、もしかしてあなた方は今誰が入っているかを分かかってこの時間にこんなことを始めたんですか？」

その質問に久保以外の奴が目をそむける。……でも、女子が覗かれていなければそれでいんじゃないね？

「はぁ……とにかくあなた方にも停学処分、出して起きますからね」

「「「「「はあ（ええ）っ!?!」「」「」「」

「驚いているようですが当たり前ですよ。いくら私たちを倒すのが目的とはいえ、覗く行為が成立されたらあなた方も共犯なんですから」

「そういつてその場から抜ける高橋教諭。だったら、俺たちも覗きを止めねえといけなくなるじゃねえか！」

「冗談じゃねえ！今すぐ止めに行くぞ!！」

「おう、こんなふざけた事があるか！」

「絶対に間に合って見せる！」

「明久、鉄人とまだ戦っていてくれよ！」
数人が声を上げ走る。……だが、

『『『割に合わねー!!!』『』『』

「……遅かった。……そこで気絶したままとかやめてくれよ？何人でおこなったかが特定されちまうんだから。」

「まあ結局、俺たち全員が停学処分になったのは言っまでもない」

第六十一話、強化合宿！四日目・夜、最終決戦！芳樹Side（後書き）

最後の終わり方があれでしたが、まだ明久をやるので。それで出来たら結末も。似たようなものだけれどちょっと変える（ここのは変わらない）

感想お待ちしております

第六十二話、強化合宿！四日目・夜、最終決戦！明久Side

Side in 明久……

「「^{サモン}試獣召喚！」」

「2年Aクラス 吉井明久 総合科目 4251点

VS

教師 西村宗一 総合科目 7694点」

掛け声と同時に二体の召喚獣がフィールドに現れる。鉄人が展開したフィールドは総合科目だったようだ。……って、ええ！？

「鉄人！なんですかその点数は！？あなた人間ですか！？」

「これぐらいの点数はないと補習教師などやってられんわ、それに高橋先生やお前とよくいる長谷川の方が点数は高いぞ。」

「高橋先生ならともかく芳樹が！？」

「お前は知らないと思うがあいつは神童だ。あいつ曰く坂本のように落ちないで勉強していたから教師並の点数は取れるとの事らしい。」

教師を小ばかにしおつてと、鉄人。芳樹が神童だったなんて知りもしなかった。ていうか雄二以外の神童がいただなんてそんな話聞いたことがないんだけど。ただ鉄人の召喚獣を見ているとそれよりも気になる事が……

「あのー西村先生、」

「なんだ？」

「どうして何にも装備していないんですか？」

鉄人の召喚獣を見るとトライアスロンの選手が着るようなピチピチのウェアに手に持つものはなし、それでどうやって戦えと。僕だったらババアに訴えるか、戦争には絶対参加しないだろう。

「俺には武器などいらんのだ。生徒などほとんどの者は武器に慣れていないからな、……このように近づいて殴れば済む話なのだ！」

「クッ！」

鉄人は話しながら猛スピードで近づき僕を殴ろうとする。僕はそれを察知し拳を木刀で受け止め一歩下がる。

「木刀が折れそうなほどの強さですね」

「実際、お前ほどの点数と操作性がなかったら確実に折れてるぞ。上手く受け流しおって」

「ばれてましたか」

そうだ、今僕がやったのは鉄人の拳を木刀で止めるだけじゃない。木刀の面を上手に使うって木刀に対するダメージを極限にまで減らしたのだ。……鉄人なら愛子の斧や木下さんのランスでも簡単に壊せそうな気がする。

「まだ始まったばかりだ、手を休めるなよ吉井！！」

「当たり前です！先生こそ気を抜かないで下さいよ！」

「この状況で気を抜くバカがいるか！」

そう言いながら、こっちに向かってくる鉄人。突き出される拳に合わせるように木刀を使ったカウンターを……

「甘いぞ吉井！」

「っ！早　　グハッ！」

カウンターを入れようとしたのが分かったのか、途中で地面を思いつきりけて宙に浮く。宙に浮くといってもそこまで高く飛んだわけでもないのですそのまま着地したまた迫ってくる。この間、わずか1秒足らず。僕は防御をしてるまもなく吹き飛ばされ壁にぶつかる。僕にくるフィードバックは鉄人の拳の一撃と壁にぶつかったときの衝撃

「2年Aクラス　吉井明久　総合科目　3276点

VS

教師　　西村宗一　総合科目　7642点

「やはり、吉井となるとそう簡単には終わらないか。事あるごとにダメージを減らしおって」

「それぐらいはできないと……あなたには勝てま……ガハッ！」

僕は思わず嘔出してしまったものを見る。そこにあるのは……
……僕の血

「おい、大丈夫か吉井！」

「そういえば……こんなことがありましたね。清涼祭の時に

も」

「今すぐ・・・大丈夫です！」っ!？」

「どうして学園長が僕にまた観察処分者をつけたかが分かりました。この腕輪があるから・・・デイヴィジョン！」

「2年Aクラス 吉井明久 総合科目 364×9点

VS

教師 西村宗一 総合科目 7600点」

僕は腕輪を使って召喚獣を9体にまで増やす。1体の点数が低ければその召喚獣が消えるだけで僕へのフィードバックは持続しない。これならフィードバックを気にせず戦える！」

「腕輪か・・・学園長も厄介なものを吉井に渡してくれたもんだ」

「これなら先生が僕の体につける必要もありません！さあ、続けましょう！」

口ではそういつても9体もの召喚獣を出したのにはちょっと無理があった。これはかなり集中力を使う

「そうか、そこまでして俺と戦いたいか・・・いつ倒れても知らないぞ！」

そういつて先ほどのように向かってくる。さっきから単調な動きしかしてこないけど鉄人から見ればそれだけで十分なんだろう・・・ここはちょっと汚い手を使わせてもらう！」

「デイヴィジョン、解除！」

「なに!？」

ここで鉄人の動きが止まる。そりゃあそうだ、生徒自身に傷つけるわけにはいかないのだから。この隙を突いて……

「デイヴィジョン!……いつけええ!!」

「くっ!……ずいぶん汚い手を使ってくるじゃないか、吉井」

「2年Aクラス 吉井明久 総合科目 364×9点

VS

教師 西村宗一 総合科目 4122点」

僕が今した事は、一度デイヴィジョンを解除し鉄人の動きが止まったところでまたデイヴィジョンを起動。そしてガードをしていない8体で鉄人を囲み木刀をいつせいに頭にたたきつける。……もうちょっと減ると思ったんだけどなあ

「流石にさつきまでの点数差だと勝ち目がなかったんで……
・それにもうこの手は使えません。起動時にかなりの集中力を使いますから」

「……そうか。それならもうお前に気をつかず戦えるという事だな!」

鉄人は複数いる僕の召喚獣たちに殴りかかる。流石に9体もいればいくら鉄人でも倒せるかなあと思っていたけれど全然そんな事はなかった。1体を殴ろうとしたときに他の召喚獣で後ろから殴ろうとすると前にいる召喚獣を驚掴みにしそれを振り回す。……つて凄く頭がグラングランするんですけど!?!でも上手くよけられたおかげでその驚掴みにされた召喚獣以外は無傷ですんだ。でも流石毎日のようにFクラスのみみんなを相手にしてるだけあるなあ

「2年Aクラス 吉井明久 総合科目 364×8点

VS

教師 西村宗一 総合科目 4042点」

さつきから地道に鉄人の点数が減っているような……ま
さか!?

「?、どうかしたか吉井」

「……あなたは僕の1体を倒す事で僕にヒントをくれた。……
……この勝負、勝つのは僕だ!」

「やれるものならやってみろ!」

複数を相手にするといつても鉄人の武器は拳なのだから、一体ず
つにしか攻撃は出来ない。……だから、一体を犠牲にする事で
……

「くらえっ!吉井! つ!?!」

「今だああっ!」

僕が今したことは召喚獣の腕輪を発動させた事。僕の能力は自他
共に能力を無効にする!……やっぱりそうだ、鉄人は僕にハン
デとして腕輪を使っていなかったと思ってたけれどそんなことは鉄
人ならしない。だとすると鉄人は始まったとともに腕輪は起動させ
ていたんだ。

「2年Aクラス 吉井明久 総合科目 358×7点

VS

教師 西村宗一 総合科目 1966点」

「くっ！……いつ気づいた」

「さっき僕の一体を倒したときですよ。僕が鉄人にダメージを与えていないときでも点数は常に減っていた。だったら、鉄人の能力は召喚獣自体の能力の向上で点数が減っているのはその能力を使っているからじゃないかって思ったんですよ。それならあの超人的な速さも理解できますし。そしてそれなら腕輪を使っているときと使っていないときでは操作が変わってくるから、殴ったときにその能力を封じれば少しの動きは止められると考えたんですよ。」

殴る行為は止められなかったため僕の召喚獣も一体消え激痛が走るけど、それでも点数では鉄人を上回った。僕の能力も一秒ごとに2点減るから早めに決着をつけないと。

「……お前の言うとおりだ。俺の能力は召喚獣の身体能力の向上、それも腕輪の起動を必要とせず自動に発動されるものだ。それにしても……よく思いついたなこんな策。」

「半分ほど賭けだったんですけどね。それにゲームとかは大好きですから戦っている間に観察するのは結構得意なんです」

「そうか。……今の攻撃でお前の方が点数を上回り俺に勝ち目はほとんどないだろう。それでも俺は最後まで戦う！それが教師である俺がお前に見せる事の出来る姿だ！」

「行きますよ鉄人！」

今度は僕から鉄人に向かっていく。……そうして僕と鉄人の勝負はクライマックスへ

VS

教師 西村宗一 総合科目 654点

「はあ、はあ……まさかここまで自分が減らされるとは思いませんでしたよ」

「これが教師の意地というものだ……これで最後だ！ 吉井！」

一体に殴りかかってくる鉄人、確かにあと一体を倒されれば僕に操作を出来るほどの体力は残らないだろう。……さつき鉄人が言っていた事が正しければ……これに賭ける！

「デイヴィジョン解除！ さらに……」

「なにっ！？ くっ！」

腕輪の能力も解除。これにより鉄人はまた操作を変えなくてはならなくなる。……残った1体で……

「これで終わりだ！ 鉄人！！」

鉄人の喉下に木刀を突き刺す。……止めの刺し方がこればかりのような気もするけど、これが一番やりやすく強力だからね

「2年Aクラス 吉井明久 総合科目 648点

VS

教師 西村宗一 総合科目 0点

「よっしやあああああああ！！！！ えっ？」

叫ぶと同時に僕はドタッとその場に倒れる。……口からは血が流れ出てくる。……そっか、腕輪使った事でその消費分が毒みたいになつて僕を……

「おい、大丈夫か！しっかりしろ！吉井！」
そんな僕を心配する鉄人の声が最後に聞こえた・・・

第六十二話、強化合宿！四日目・夜、最終決戦！明久Side（後書き）

ちよつとgggggになってしまったような……

今日まではこのあとの終わりまで書きたいです

感想お待ちしております

第六十三話、強化合宿！終了！

Side in 芳樹……

「これからどうする？」

「まあこの場にずっといるのもあれだし、ムッツリーニとアキの様子でも見に行こうぜ」

「そうするか、……お前らは来るか？」

雄二はさっきまで久保たちと戦っていた女子にも声をかける

「……雄二と一緒にならどこにでも行く」

「私もそうするわ、もう特にやる事もない訳だし」

「それにしても、今女子全員が戦ってたわけだけど、今お風呂には誰が入ってるの？」

みんな来るようだった。……江崎が質問してくる、想像してしまふからあまり口に出したくないんだけどなあ

「ババアだ」

「ババアと言うと、学園長先生ですよね……。皆さんお気の毒です」

「まあ行くんだったら早く行こうぜ。終わってるかもしれないし」
そんな訳で俺、雄二、聡、徹、秀吉、久保、翔子、優子、江崎、姫路、島田とかなりの人数で先の方へ行く事になった

ムツツリー二が途中で鼻血を出しながら倒れていた。話を聞くと愛子たちには勝ったが話を勝負について聞こうとした時、スパッツを履いていない状態でパンチラをやられたためそれで倒れたとか。愛子は奥に行き大島先生はもう自室に戻ったらしい。……とりあえず、ムツツリー二と俺たちは倒したから後はアキが鉄人を倒したかどうかだな。

「それで、ムツツリーには愛子になにを聞こうとしたんだ？」

「………戦い方が途中から変わっていた。使えるはずのない腕輪の応用なども使っていた。それを聞こうとしたら………ブシャッ！」

「なるほどな、もう思い出さなくていい。ここで倒れると困る」
そんな感じで進んでいくと、奥の方に見えたのは………血を吐いて倒れているアキとそれを支えている鉄人、それにその状況で泣いている愛子の三人が見えた。

「っ！」

「おい、どうした芳樹！いきなり走る　！」

俺につられて雄二も走る。雄二も奥の状況に気づいたみたいだ。

他の奴らはまだ走っていない。気づいていないみたいだ

「鉄人っ！これはどういうことだ！？」

「清涼祭の決勝戦の時と同じ状況だ！治すことのできる学園長はまだ入浴中だし、とりあえずの応急処置をしているところだ！お前らも手伝え！」

「「分かりましたっ！」」

「愛子！、お前も今は泣いてないで、ババアにこの事を連絡しろ！こつちにも召喚サーバーがあるはずだから治療する事は十分可能はずだ！」

「………っ！わかった！」

愛子はそういつと一目散に駆け出す。さっきまで泣いていたのに復帰が早いもんだ……っ今は他の事を思ってる暇はねえ

「ちよつと、長谷川君いきなり走ら どうしたの吉井君！？」

「お前らはもう部屋に戻ってる！詳しい事は後で説明する！」

「………でも」

「いいからっ！」

こいつらが今できることは何も無い。召喚システムの事とかなんて何も分かっちゃいないんだから

「すまない、待たせたねガキども。西村教諭、あんたは奥にいる奴らの確認をしておくね。それで長谷川と坂本はあのバカを治療するから部屋まで持っていきな。長谷川はその手伝いもすること、いい

ね

「わかりました」

そういつて奥の方へ行く西村教諭、俺は雄二と一緒にアキを担いでババアの後をついて行った。

「やっぱり治療道具も持ってきておいて正解だったね。長谷川、手伝いな。」

治療といつても手術のようなことをするわけではない。ババアの言った道具というのは回復用のメモリの事だ。

「召喚獣のダメージによって傷つくのなら、逆に召喚獣を癒す事によってその傷をなくす……ですよね」

「無駄口叩いてる暇があるなら、キーボード打つてな。」

癒すといつても結構な作業が必要となる。召喚獣は本人の意思がないと召喚できないので、アキの頭にコードをつないで強制召喚させなくてはならない。それに回復用のメモリだつて必要以上点を与えたらパンクしてしまうので最後取った点数を確認して足りない分をそれに合わせないといけない。……観察処分者のサーバーのある学園なら簡単に出来るのだが、ここには普通のサーバーしかない。なので観察処分者のサーバーにハッキングしないとならない。だから一応召喚サーバーの知識のある俺が手伝わされている。

「ハツキング完了しました、アキの点数は4251点です」

「そうかい、なら必要なのは3603点だから3点作って後はコピーすればいいね。1201回足すんだからね、かけちゃならないよ。」

「わかってます……。」

こんな感じで3603点作り出し強制召喚させた後、回復させた事でアキの本体の傷も治った。……何とか成功した、危ねえ危ねえ。アキを寝かせて部屋を出ると雄二たちが外にいた。

「ん？どうしたお前らアキなら今寝てるぞ。」

「助かったのか？」

「ああ、今のところ命に別状はねえ。とりあえず絶対安静だ、そういうことだから解散解散」

「顔を見るだけでも……。」

「駄目だ、そんな事言っただけ騒いだ例が何件もあるのは西村教諭から聞いてるからな」

それでも納得のいかない顔でこっちを見てくる連中。

「というか何であなたがそんな事言えるのよ。先生たちならともかくあなたは私たちと同じ一般生徒でしょ」

「そうよ！あなたに言われる筋合いなんてないじゃない！」

「そういつて騒ぎ出す。……これが原因だという事を分かつ

ていないのか？

「絶対安静だつて言ったばっかだろ。そんなんだから行かせるわけにいかねえんだよ。それにお前らと俺は違うぞ、俺が特別観察者だつて事忘れてないか？こんな形の緊急時なんて滅多にある事じゃないんだ。分かったならとつと部屋に戻れ。……そうだ愛子、ババアが呼んでたぞ」

俺はそういつてその部屋の鍵を閉める。後で西村先生に渡しにいかないとな

「ん？僕だけが？どうして」

「なんだか知らんが、今日お前が召喚したとき召喚獣に異常が発生したんだとき。原因が不明だから急いできてほしいって。ほら、お前らはとつと寝ろ。」

ほとんどの者が納得できないまま帰っていく。愛子はババアの部屋の方に向かった。……そういえば帰ったら即停学処分なんだっけ……。まあ問題ないか、だって……

「そろそろ、だもんな……。……」

Side out 芳樹 & 愛子 Side ……

「失礼します」

「おつ、やつときたかね。まあどうせあのバカの部屋の前で長谷川と口論してたんだろうけどね……。……。それで、本題の方なんだが……。お前さんの召喚獣から設定されていない異常が発生

した。お前さん、何か知っている事はないかい？」

「うっ……（ぬらりひょんさんの事は言った方がいいのかな？）」

「ふん、どうせ科学では証明できないオカルトが関連している事は分かってるんだ。説明しても理解が出来ないと思われるのは仕方ないことさ」

「もう分かってましたか……実は……」

愛子は妖怪に拷問部屋であった妖怪のことについて話す。そして妖怪から教えてもらった事を逆に質問する。

「なんで学園長先生はあんな部屋を作ったんですか？それと科学では証明できないオカルトであるものを何で霜月では迎撃できたんですか？」

「そこまで知っているとはね……逆にこっちが驚いたよ。一つ目の質問に対してはこの建物を買ったのは私だけど作ったのは私じゃないから分からないってことさ。召喚獣を召喚できるように改造したときにあの部屋を見つけたのさ。二つ目の質問についてはね、日が来れば分かるさ（こいつも戦力のうちに入るね）」

「そうですね……」

「それと、あなたにも停学処分をくれてやるさ。男子たちとは違う三日間だけだね」

「ど、どうしてですか!？」

何も悪い事はしていないのにと、愛子は戸惑う

「どうしたもこうしたもないよ。どうやってだかは知らないが監禁中だったバカに会いに行っただる？まあそんなわけだね。お前も停学さ。」

「そうですか……」

「あのバカとでも一緒にデートにでも行ったらどうだい？あの部屋には監視カメラがついていたからね。なにをしていたかなんて丸分かりさ」

「が、学園長！？／／／／／」

あの部屋で一緒に寝ていた事が見られていた事に愛子は顔が真っ赤になる

「さあもう帰った帰った、明日は早いよ。もう寝るんだね」

妖怪がそういうと愛子は顔を真っ赤にしながら部屋を出て行った。その様子を後ろからみて学園長はつぶやく

「そろそろ、だねえ。……全くどうしてあんな娘まで巻き込まなきゃ……」

第六十三話〈強化合宿！終了！〉（後書き）

こんな感じで強化合宿は終わりとさせていただきます。

それと明日から、塾の夏期講習が始まるので更新が遅くなっています

次は余談を挟むか挟まないかしてからオリ話に入ろうと思います

感想お待ちしております

第六十四話、強化合宿、その後 ドキドキ!?!初デート!?! (前書き)

土日なら何とか更新できそうな感じですよ

第六十四話 強化合宿、その後 ドキドキ!? 初デート!

Side in 明久

強化合宿は良く分からない感じで終わりを迎えた。僕は鉄人を倒したときに腕輪のフィードバックにより血を吐いて倒れ、それを学園長と芳樹が治してくれたらしい。僕が目を覚めたのはちょうど次の日の朝で午前中、自習をして帰ってきた。……僕はつて何をしに合宿に行ったのかな? 3日間は監禁されていて次の日には覗き騒動、そして停学処分。……あれ? ……まあいいや、とにかくそんな感じで次の日、僕は停学中であるにもかかわらず学園にきていた。

「失礼します学園長、用ってなんですか?」

「来たかね、それじゃあちよつとそこいらにでも座ってな。すぐ終わるから」

「あの、午後はちよつと用事があるので早めに済ませてほしいのですが。」

「停学中にデートかい? 気楽なもんだね」

「ぶっ!??ど、どうして」

なぜ学園長に今日愛子とデートする事が知られているんだ!? 昨日帰ってから、メールで誘いが着たんだから他の人に知られてる事なんてあるはずがないのに!

「上手く引つかかるもんだね。それにしてもあのガキ、まさか本当

に誘うとは……。」

「もしかして……嵌められた？、僕」

「その話は置いて……出来た。ちょっとこっちにきな」
出来た？何が出来たんだろ、そう思いながら椅子から立ち上がった学園長の前にまで行く。そこにあっしたのは……」

「……腕輪？」

「そうさ。付けてるだけで召喚獣に物理干渉を加え、観察処分者のような使用になる腕輪さ」

「観察処分者のような？僕は観察処分者ですから僕に渡されても……」

「いや、お前さんはもう観察処分者じゃないのさ。お前さんのフールドバックが命にまで関わるとなっちゃあ、学園の評判どころの話じゃなくなるからね。観察処分者を称号を取り消す代わりにこの腕輪を渡すのさ」

「でも、観察処分者じゃなくなったらそれはそれで済む話じゃないんですか？」

別に観察処分者じゃなくなるなら無理やり物理干渉をつけるだなんて意味が……」

「だから、これは私からのプレゼントさ。観察処分者の召喚獣と一般性との召喚獣じゃ感覚が随分と変わってくるからね。せつかく西村を倒せるほどの操作能力を持つてるのにそれが失われるなんて嫌だろっ？」

「それは……まあ……」

「そういうとき、ありがたく受け取っておき」

「……わかりました、ありがとうございます。……
・それでは失礼します」

僕は腕輪を手に取り、学園長室から部屋を出る。それにしても……
・……フィードバックがないのか、今までと違って疲れがドツと減るだろうから嬉しい。……この間鉄人と戦ったときも血を吐いていなくても倒れたかもしれなかったし。……そんなことよりこれからデートだ！思いっきり楽しむぞ！

「はあ、どうして……。悔やんでたっしょうがないね、
長谷川が言うには……。明日……」

「はあ……はあ……。じゅめん、愛子。……遅くなっ
て」

「大丈夫？そんな全力で走らなくたってずっと待ってるのに、はいお茶」

「……ありがとう」

結論から言うと……遅刻した。よく考えてみたら制服のまま歩き回る訳にも行かないと思って一度家に帰って普段着に着替えてから駅に直行。それまでの間、1時間20分。学園を出た時間、11時40分。愛子のとの待ち合わせ時間、12時半。30分も遅刻をしてしまった。

「そつえばアッキーはお昼食べた？」

「彼女待たせておいて一人でお昼って訳にも行かないでしょ。それに待ち合わせ時間から考えて一緒に食べてから回ろって感じだし。」

「それもそうだね／＼そ、それじゃあどこで食べる？」

愛子の顔が赤くなった、どうしたんだろ？

「特に今食べたいものはないから、どこでも……いや、一応平日だからこんな昼間っから食べに行くのはおかしいと思われるし……」

「それなら良いお店があるよ。着いて来て」

「ん、分かった」

「ごちそうさまでした・・・／＼／＼／＼」

「ふー、お腹いっぱい。・・・どうしたの？アッキー」

愛子が紹介したお店は雰囲気の良い喫茶店だった。なんでもそこは江崎さん家らしく、愛子も顔をあわせた事があるので問題ないと
の事だった。美味しかったんだけど・・・

「愛子、良くあんな事をしておいて平気でいられるね／＼」

「えー、だってやってみたかったんだもん。はい、アーンって」

愛子の言ったとおり、僕がやらされたのはそれだ。ちなみにこの
の所を書かないのは作者が江崎の親を出すのは大変という事とこの
話でデートは済ませたいからという事らしい。アーンってされてる
とき周りの人見てたし、それに・・・

「江崎さんの家だってことは学校中にこの事が知れ渡るよ」

「あっ・・・」

「気づいてなかったのね・・・まあ良いよそのぐらい。両腕
もぎ取られるぐらいですむと思っし」

「誰に？」

「美波と姫路さんと姉さん」

「あー、美波ちゃん達ならともかく玲さんまで来ると僕にはちょっと無理かな」

なるほど、じゃあつまり片腕ですむという事だね。良かった良かった

「まあ先の事はっか考えてたっしょうがないし今日はたっぷり遊ぼう、愛子」

「そっだね！じゃあまずはどこいく？」

「この近くだと映画館とかゲームセンターとかかな。遊べるところというところ」

「カラオケも確かあるよ」

カラオケかあ、でもカラオケは大人数で行くのがいいんだよね。それに

「カラオケはね……。ほら、著作権に関わるから」

「そっか、じゃあやめた方がいいね。今は特に見たい映画もないしそうなるとゲームセンターかな？」

「そうしよっか、でも音ゲーは禁止ね。書かないところでやるなら問題ないけど」

「分かってるって」

そんな感じでゲームセンターに行くことになった

「い、いや別に〜（アッキーにもそんな気はあるんだ。．．．だつたら）そつだ、アッキー。あれとつてくれない？」
愛子が指をさした方向にあるのは．．．．．最近人気のある顔文字のぬいぐるみ。

「いいよ。顔はどれがいい？」

「うーんと、じゃあ（．．．） シャキーンで

「了解。．．．．．はい、とれたよ」

「わーい、ありがとつて嘘！？いくらなんでも早すぎじゃない！？」

「この位はまあ、．．．．．つてあの時の店員さん！今日はあれ1つだけなので．．．はい．．．．．ふー、なんとか分かってくれたよ」

「そういえば雄二と争うときつて大体がここだったつて．．．．．つてことは

『うわあああ！文月の帝王、吉井だ！』

『マジか！サイン貰いにいくぞ！』

『今日は王者坂本とは一緒じゃないのか！というかあれは彼女か！』
『？』

『帝王の彼女つてことはきつと余程の実力者だぞ！』
やばい、雄二との戦いを見ていた人達が．．．．．

「逃げるよ、愛子！」

「えっ、あ……………うん」

僕は愛子を連れて全力で外に逃げた……………

……………と見せかけて

「これである人達はしばらくは戻ってこないかな」

「アツキーって何者？本当に」

「いや、雄二との勝負を見ていた人達がね。どんどん増えていつの間にか帝王と呼ばれるはめに」

「ふーん、で戻ってきた理由は？」

うっ、口に出しにくいところを突いて来る。別にあれなんだけど

「い、いやまだプリクラとってないなと思って」

「は……………あー、なるほどね。」

「初デートの記念にもなるし……………嫌？」

「うっん、そんなことは全く。じゃあ、あの人達が戻ってくる前に撮らないと」

「そつだね、急ごうか」

そうして初デートの記念みたいな感じで撮る。結果、愛子に携帯の壁紙をチュープリにさせられた。姉さんにバレないように新しいロツクをかけておかないと。

こんな感じではっちゃけた事も何度かあつたけどとても楽しかった、・・・FFF団が途中で現れたときは本当に危なかった。そんなこんなで夜

「そつだ、アッキー最後に寄りたい所があるんだけど・・・」
「ん？いいよ。」

「ねえ愛子・・・ここは・・・」

「うん、見ての通りホテルだよ」
これは確実にだよ で済まされる話じゃないよね

「アッキー、ゲームセンターで言ってくれたよね。僕以外の人に見られるのは許さないって」

「い、いやそれは・・・そのいわゆる本音といか・・・」
あ

何を言ってるんだー！この状況から考えてそんな事言ったら相手

「……………なるほど、そういう事ですか。姉さんは悲しいです、
……………弟を失う事が」

「愛子おおおおお!!!!」

姉さんに足を持たれそのまま連れて行かれてしまつて……。でもいつもの姉さんならこのままホテルの方向へ行きそうだけど

「アッキー……！今日は楽しかったよ……！それとアッキーが早く入るうとしないからいけないんだよ……！」

「ええ！？それはあんまりだ……！！！」

「アキ君、近所迷惑ですよ。大声を出すのはやめなさい。それと覚悟は出来ていますよね」

ああ、僕に明日は来るのだろうか。でもまあ最後の日が愛子とのデートだったからそんな人生でよしとするかな

第六十四話、強化合宿、その後 ドキドキ!?!初デート!?! (後書き)

基本会話文です

明日?出来たら更新します

第六十五話〈呼び出しと戦争〉（前書き）

とつとつオリ話突入！……ただ、更新は遅くなります

第六十五話（呼び出しと戦争）

Side in 明久……

「……うん、ふわぁ……つと……つてあれ？」

おかしい、昨日のよるあれだけ姉さんにやられたというのに体がもう痛くない。どうしてだろ？もう耐性が付いて来ているのかな？体が丈夫なことはいい事だし気にしないでおくか

「さてと……早速、提出用の課題でもやりますかね。」

僕は課題を広げて始めようとするとピピピ、と電話が鳴る。メールじゃなくて電話か……。相手は誰だろ……。芳樹からか。いったいどうしたんだろ

「もしもし、芳樹。どうかしたの？」

『お、もう起きていてくれて助かる。悪いんだが、学校に来てくれ』

「学校？僕も早く課題を終わらせたいんだけどなあ」

『来てくれたら課題も無しにしてやる。観察者の特権で』

特別観察者ってそんなことも出来るの！？……って言う風に驚くと芳樹は学園長からの頼みのお礼との事だ。……ん？頼み？

「頼みってなに？また何かやらされるの？」

『……とにかく学校に来てくれ。そうしたら全部話す』

「ん、分かった。なるべく早く行くよ」

それじゃあとと言って電話を切る。すぐに準備でもするかな、とここで姉さんがドアを開けて僕を呼ぶ。

「アキ君、ちょっとお話があります。こちらに来てください」

「姉さん仕事じゃないの？もういつも姉さんが行く時間だよ」

「あれは、ちょっとした処理を行うのに行っただけですから本来はアキ君と同じぐらいでもかまわないですよ」

「そういえば中学校とかだと登校途中に先生とか見かけた覚えがある。姉さんは教頭だから早く行ってたわけじゃなかったのか」

「ふーん、じゃあ着替えたら行くからまってて」

「分かりましたと言って部屋から出て行く姉さん。……とりあえず準備をするか」

「で、姉さん。僕に話ってなに？」

「1つだけ聞きたいことがあったので単刀直入に聞きます、工藤さんが高瀬愛子さんと宜しいんですか？」

「そういえば姉さんには言ってなかったっけ。愛子だと知った日は色々あったからなあ。特に隠す必要もないよね？」

「……僕も初め知ったときは驚いたよ。まさか、愛子にま

「た会えるだなんてね」

「そうですか………はあ」

「僕がそう伝えると急に落ちこむ姉さん。どうしたんだろ？」

「なら………しょうがないですね。………アキ君、あなたに告げた異性ととの交遊の禁止を解除します。」

「本当！？でもどうして………」

「アキ君は小さい頃、愛子さんに会うために凄く頑張っていたではないですか。だから気になったんです。こんなに健気な弟が愛子さんと会う前に他の女に誑かされてしまうのではないかと。アキ君がこれまでにしてきた努力を無駄にさせたくない為に異性交遊を厳しく禁止したのです」

「アキ君はフラグメイカーですしね、と付け加える姉さん。付け足しは付け足しで気になったけど………」

「いいですか、アキ君。私はアキ君が大好きです。しかし、それはただ男性に向ける愛情より家族に対する愛情の方が強かったというだけに過ぎません。あなたはあなたの道を愛子さんと一緒に歩んでください。もう愛子さんを泣かせてはいけませんよ？」

「………姉さん、今までありがとう。姉さんがいなかったら愛子と会えなかったかもしれない。………僕も姉さんが好きだよ。家族としてね」

「………くすっ、当たり前ですよそんな事。」

その後、久々に2人で朝ご飯を食べ一緒に学校に向かった。どうやら姉さんは僕が芳樹に呼ばれていることを知っていたらしい。途

中禍々しいオーラが見えたけど気にしないことにした

「失礼します、学園長」

「ん、入りな。ガキンチョ」

本当に停学中に学園長室に入るってどうなんだろ？と思いつながら
もドアを開けて入る。ドアを開けると

「あ、やっとアッキーがきたよ」

「まったく、おせえぞ明久」

「坂本君の言うとおりですよ、明久君」

「それでも時間はまだあるようだからね。気にしないでくれ吉井君」
「

「……………全員そろった。」

「愛子に雄二たちに久保君まで！？……………もしかして僕と同じようにに呼ばれた？」

コクンと頷く一同、ちなみにいるのは愛子、坂本夫婦、久保君、
姫路さんの五人がそこに座っていた。

「ん、やっときたかアキ。．．．お前も顔を出せ、空」

「．．．．．うん」

奥にいた芳樹と空ちゃんがきた。．．あれ？空ちゃんに元気がないような．．．．．

「．．．．．どうしたの、空ちゃん？」

「．．．．．別に」

「おい、芳樹。さっさと呼んだわけを話しやがれ。」

ここで雄二が声を上げる。さっきみんなが言ったことから考えると芳樹は僕が来て全員が揃ってから話すといったらしい

「すまないな。だが、まず先にメンバーを確認させてもらう。俺と空。元観察処分者のアキ、学年主席でAクラス代表の翔子、学年次席のFクラス代表雄二、元学年次席の久保と姫路、そして．．．．．召喚獣にイレギュラーの発生する愛子。この八人と婆と玲さん。．．．いいか、これからお前たちに頼みたいことは学園の危機とか小さい問題じゃない。絶対口外にもしないでくれ」

「頼みたいこと？」

「それも学園の危機が小さく見えるほどの？」

僕の質問に愛子が付け加える。芳樹はその質問にコクンッ、と頷く。

「そうだ。．．．．．簡単に言うなら、召喚獣の危機と、ある意味で世界の危機だ」

「『世界の危機！？』」

僕らはいっせいに驚く、なぜか雄二は驚いていないようだ。驚くのは当たり前だ。世界の危機なんていつたら僕たち高校生で解決できる問題じゃない。それを僕らに頼むんだ。

「……ちょっとまってくれ、召喚獣の危機とも言ったよね長谷川君は。という事は……」

「おう、その通りだ久保。まだ良く分からないかもしれないがとりあえず婆に説明させる。聞いてくれ」

僕らはいっせいに婆の方を向く、婆にも元気がないようだ。多分、その問題のことに關してで悩んでいるのだろう

「順を追って説明するよ……まず、実は召喚獣を生み出したのは私じゃないのさ」

これが僕たちのいつもの試召戦争とは違つ、戦争の始まりだった……

第六十五話〈呼び出しと戦争〉（後書き）

こんな感じで第一話は終わりです。さあ何話で終わるのか。．．．
．．．お盆休みのときには終わらせたいなあ．．．

感想お待ちしております。

第六十六話 新しい危機と召喚獣

Side in 明久

「召喚獣を作ったのは学園長じゃない？ どういうことですか？」

今は芳樹に呼び出され学園長室にいる。芳樹が言うには今回の頼み事は何でも世界にまで関わってくるらしい。そして、今は愛子が学園長に問いかける

「ちよつと待て婆。神童のこととか知らない奴もいるんだぞ、・・・という訳で先に話す。神童と言うとこの辺りでなら雄二を指すんだが、神童と言うのは雄二だけじゃない。世界には結構な数がいるんだ。」

「・・・そんな話聞いたことがない」

「そりゃあそうだ。俺たちの代だと日本の神童は俺と雄二ぐらいだし、他の代でもいることはいるんだが普通は表立たないんだ。・・・まあそんな訳で神童は結構数がいて、その神童たちを養成する学校が日本にはあるんだ」

「そうなんだ・・・で、その学校とはどこなんだい？」

どんだん話を進める芳樹に久保君が質問をする

「霜月学園、中等部から大学まであつて雄二の行く予定だったところだ」

「っ！」

「俺は小学校の頃問題を起こして結局、近くの神無月に入ったんだがな」

「なんか今愛子の様子が……気のせいかな？」

「話を戻すぞ。いいか、神童はあくまで一般人より知能指数の高い子供の事を指す。雄二がいい例だ。頭の使い方や徹底適にまで練りこんだ策、それはお前らでも分かるはずだ。ただ……神童の中で一人、雄二や他の神童なんかとは格の違う奴がいてな、そいつはいつの間にか神童ではなく神とまで呼ばれるようになった。それが……」

「私の姉の孫、藤堂^{みづ}神子なのさ」

「ゴクツと息を呑む僕……って、え？それだけ？」

「……自慢したいがために呼び出したと言わないだろうね」

「その怒りは分かるが落ち着け明久。話はここからなんだ、それに俺は先に話を聞いてある。れっきとした頼みごとだ、俺たちにしか出来ない……な」

「僕は怒りそうになっただけど雄二がそれを止めた。さっきの話と組み合わせると……世界の危機を僕たちにしか止められないってこと!？」

「サンキュー雄二……。それで、婆が最初に言った話に戻る。婆、ここからはお前が説明しろ」

「分かってるよ。……召喚獣をつくったのは、私じゃない。……孫の神子さ」

「……ええっ!？」

「学園長がまだ働いていることから考えて、その孫ってまだきつと二十歳にもなってますよね……………」

「そうさ、姫路。神子はまだ15歳、召喚獣の作り出したのは今から7年前の8歳のときだね……………全く溜まったもんじゃないよ」

姫路さんがそう質問すると学園長が答える……………僕たちよりも年下でそんな子がいるんだ……………」

「神子が召喚獣をつくったとき、こんなものが世界に広まったら……………と考えたらね、身震いしたさ。」

「?、この教育システムが広まったら良い事なんじゃないの?」

「バカ言うなアキ、婆が言いたいのは戦争に使われたらってことだ。アキの召喚獣みたいに物理干渉できるものを何もないとこから出てきたらどうする?この技術を使えば核並みの威力を持つ爆弾とかだって簡単に大量生産できるぞ」

「だから、私はこれを教育システムとして発表したのさ。神子に危険な目にあわせたくなかったから、私が発表したのさ……………そのせいで神子には縁を切られたけどね」

そんな……………学園長はその娘を守りたかっただけじゃないか。それなのに……………どうして……………」

「神子は成長して、今は霜月学園の理事長をやってる。15という脅威の若さだね。」

「学園長のお孫さんが非常に優れていることは分かりました。それ

で、僕たちにはどうしろというんですか？しつかり経営できているなら良いことじゃないですか」

ここで久保君が学園長に質問する。・・・確かにそうだよ、その神子っていう子が優れていたって僕たちには関係のない話だし

「実はね・・・神子が、外国のバカどもに技術を売ろうとしてるっていう話を長谷川から聞いてね」

それって相手が軍事関係の人だったら危ないことなんじゃ・・・

「って、何で芳樹から？」

「俺はここに転入してくる前に霜月に通ってたんだ。理事長が何か危ないことを企てることに気づいた俺は召喚システムのことに詳しくて詳しい婆のところへ逃げたんだ。当時の俺は召喚獣のことなんて全く知らなかったからな。その事を阻止するためにも・・・な」

「へえー、そういうえば芳樹も神童だつてこの間、鉄人から聞いたよ」

「そうかい。・・・話を戻すよ、それであんた達に頼みたいのは神子の事なんだ。あの子はその才能の所為でまだ子供なのに子供の楽しさを知らない。大人じゃあ出来ないんだ、子供の楽しさは子供にしかわからないからねえ。それにこのままにしておいておいたらシステムの悪用化が世界で多発して第三次でも起こるんじゃないかねえ」

「ババア、俺たちに頼みたいことは神子を普通の子に戻してほしいってことで良いんだな」

「解釈はあんたらに任せるよ。もしかしたらだけど女子どもには怖

い思いをさせちまうかもしれないが、しっかり守ってやりなよ。「
そこら辺はしっかりしようよ……。いつものように仕置
きを雄二に食らわす霧島さんとかにとっては無意味な心配なんだと
思うけどね

「……………吉井、何か失礼なこと考えなかった？」

「い、いや別に、何でも……………アハハ」

何でこういつときの女子って考えてることが読まれるんだろう。

「それじゃあ、あんたらに任せてもらってもいいのかい？今なら普
通の学園生活に戻るが……………といってもそこまで驚異的な
ものはなさそうんだけどね」

「……………任せてください！」「……………」

「……………ありがとうね。……………それじゃあ今から霜月学
園に向かうが、霧島と姫路は先生にも連絡してあるから任せておい
てくれ。」

「今から？」

いくらなんでも早すぎではないだろうか。それに……………

「ああ、今からさ。今日は霜月学園に親御さんが来ても問題のない
日だからね。普段じゃあそこは入れないのさ」

「……………分かりました」

「行こうぜ、アキ」

僕たちは、姉さんが借りてきた車に乗り込んで霜月学園に向かっ

た
・
・
・
・
・
・

第六十六話、新しい危機と召喚獣（後書き）

今日はなんかぐだぐだ。いつか編集されるかも

感想お待ちしております

第六十七話、車の中での騒動（前書き）

ものすごく遅くなりました……………

待っていた方々すみません……………（さあ待っている人はいるのか？BY兄）うぜえ

第六十七話、車の中での騒動

Side in 明久……

学園長のお姉さんの孫である、藤堂神子と言う少女を説得？するために霜月学園に向かっている僕ら。姉さんが借りてきた車（Aクラスが使ったようなリムジンバス）の中で僕らがしていることは……

「先生！次のテストを下さい！」

「………私も」

「お前ら早すぎだろ！？どんなペースで問題解いてんだ!？」

「翔子も姫路も張り切り切りすぎるなよ。時間はたっぷりあるんだしな」

「そういう長谷川君はそのテストで何枚目だい？………先生、僕にも下さい」

「あははー、保健体育以外も頑張らないとね………（何で僕が選ばれたんだろ………この人達にはついていけないよ）」

なんか今、愛子の嘆きが聞こえた気がする。………こんな力オスな状況でやっている事はテストだった。なんでもこの間の強化合宿で点数がかなり消費されたので受けなおしているとの事。………僕は点数を回復させてもらったので、テストを受けずにすんでいる。………それにしてもテストはこんな騒がしくて出来るものなのだろうか。ちなみに監督は姉さんで運転は学園長がやっている。

ただ、それより気になっていることが……

「アキ兄ちゃん、アキ兄ちゃんはテスト受けなくていいの？」

「うん、一応点数は残っているからね。……それより、何で空ちゃんはここにいるの、空ちゃんもその藤堂さんに関わってるの？」

「っ!?!?……」

「……少し顔の表情が変わった。というかそれしかないよね、空ちゃんが僕たちと一緒に霜月に向かう理由なんて。」

「藤堂さんのこととか良く分からないからさ、知ってることがあったら教えてくれない？」

「……ちょっと長くなるけど良い？」

「全然構わないよ、みんなテストもまだまだ終わらないみたいだし」

「……分かった、アキ兄ちゃんは私たち兄弟が施設に入ったことは知ってるよね」

「……両親が事故で亡くなって親戚の経営している施設について芳樹から聞いたよ。」

「そこでの生活は結構楽しかったんだ、友達もすぐ出来たし。……それからすぐに兄ちゃん宛に手紙が届いたんだ。霜月学園から勧誘の手紙が……。兄ちゃん自身もそこで始めて自分が神童だって知ったんだよ」

「それで芳樹は霜月学園に？」

「うん、霜月は神童には特殊なカリキュラムみたいなものがあるらしくて外にも出してくれないって話を聞いて止めたんだけどね。それで私も必死に勉強して兄ちゃんに会いに行こうとしたんだ。それで、合格して兄ちゃんに会ったんだけど……」

「芳樹に何かあったの？」

「……入る前の兄ちゃんじゃなかった、勉強付けになつてるからかなつて思ったけど大体の人は普通な感じで話を聞いても今の人が感じてくれた。」

「それが凄く気になつて授業サボつて兄ちゃんの後を追つたんだ。ロックの掛かつてる理事長室にPASSみたいなもの使つて中に入ったから追えなくなつたんだけど、扉が開くときに中に見えたものが……」

「ここで空ちゃんの体が大きく震える。思い出したくなかつたのに、僕の所為で……」

「ごめん空ちゃん、僕が話を聞かせてなんていった所為で……」

「……も、もう大丈夫、じゃ、じゃあ続きをつて……え？
／／／」

無意識の内に僕は空ちゃんを抱きしめて話そうとするのを止める

「僕のためなんかは無理しないで、ほら体だつてまだこんなに震えてる。」

「い、いやちょっと離し／／／」

なぜか顔の赤くなる空ちゃん……後ろから殺気が！？振り向くとそこにはいつかの美波や姫路さんのようなオーラを放つ愛子がいた

「アツキー？ヨッシーの妹相手に何をやっているのかな？」

「あ、愛子、これは誤解だ！？」

愛子に続いて他のみんなも前の方に来る。

「明久君！愛子ちゃんがいるのに他の女の子にも手を出すつもりですか！」

「見損なつたよ吉井君！」

「吉井………覚悟は出来てる？」

「姫路さんに久保君、それに霧島さんまで！？芳樹も雄二も見てないで何とか言ってるよ！」

「いや、だって………なあ雄二」

「そつだよなあ、芳樹」

「「こんなに面白いこと滅多にないだろ」」

畜生っ！あんたらは本当に最高の悪友だよ！……と、みんなが詰め寄ろうとしたところで今まで黙っていた空ちゃんが声を上げる

「ねえ、アキ兄ちゃんってこの黄緑色の髪をした女の子と付き合ってるの？」

「へっ？そ、そうだけど……」

「ふーん、そうなんだ」

空ちゃんはそうつまらない様な口調で言つと愛子に近寄る。

「ねえ、名前教えてくれない？」

「えっ、く、工藤愛子」

「工藤さんね。（もうアキ兄ちゃんとキスとか自主規制とか自主規制はした？）」

「ふえっ！？／／／／い、いやそれは早いと言つか……／／／／」

空ちゃんが耳打ちで愛子に何か話しかけたと思うとは急に顔が真っ赤になる。愛子がもじもじしていると同時に空ちゃんがこっちに飛び乗ってきた……って、え？

「ふぎやつ！そ、空ちゃんいきなり何を……」

「アキ兄ちゃんの彼女がまだ早いつて言っている内にアキ兄ちゃんの童貞を頂いちゃおうかなって」カチャカチャ

「わああ！ズボンに手をかけないで！というかベルトを外さないで！？」

さっき倒れたときに上手く固められたみたいで体が動かない、なんとかして止めようと思つても体が動かないため何も出来ない

「そ、それは卑怯だよ！／／／なら僕だつて／／／」

「愛子まで一緒にやろうとしないで！……うわっ！」
車がいきなり急停止した。た、助かった……。

「ガキども、着いたから早く降りなって何をやってるんだい！？車の中で！」

「へっ？」

僕が改めて状況を確認すると、車が急停止した勢いで僕と空ちやんと愛子の体勢が入れ替わり僕の二つの手で二人を地面に押し付けているような形になっている。そして、僕はさっきベルトが外された所為でズボンがずり落ちトランクスが丸見えに……という状態だ……って

「ま、まさかの3P……？////」

「初めてだから優しくしてねアキ兄ちゃん……////」

「ちょ、2人共って学園長も見てるって……」

ここで僕はみんなの方に向いてしまう。……みんなは僕を軽蔑するかのように見てくる

「明久君、最低です！」

「見損なつたよ、吉井君！」

「……ガシッ」

「や、やめる翔子。こっちに来るなあああ！」

「玲さん、三人はあんな形でいいんですか？」

「とりあえず、空ちゃんや愛子さんとの不純異性交遊は認めていまずので問題ないかと」

「僕をそんな目で見ないでええええ!!」

雄二はいつものことだから良いとして、姫路さんたちに言われるより、芳樹たちに観察されているほうが恥ずかしい!

「そんなことはどうでも良いからさっさと降りるよバカガキども!」
そんなこととは何だババア長!こっちはいろいろ大変なんだぞ!

Side out 明久……

一方その頃……

霜月学園の内部にある一室に成人にも満たない若い女性とそれよりは年上だが若い男性がいた。その部屋はとても暗く、物という物が見えない状況である

「来るとしたら今日だよねえ。ねえ06番、学園の前に何か止まっ
てないか見にいった」

「……分りました」

高級そうな椅子に座る少女は一人の男に命令する。06番と呼ば

れた男は機械のような動きで部屋から出て行く。

「さてと、こつちも召喚サーバーを立ち上げて起きますか。久々に
楽しめそうだし」

暗い中、カチャカチャと手元にあるキーボードに入力していく。
すると、暗い部屋はポツポツと赤やら緑やら様々な色をした小さな
光に照らされる。小さな白い光に照らされ少女の青い髪がきれいに
光る。少女はキーボードを打ち終わると背もたれに寄りかかりこ
う言った

「・・・早く来ないかなあ検体番号08番、長谷川芳樹」

少女の顔には邪悪な笑みが浮かんでいた・・・

第六十七話、車の中での騒動（後書き）

遅くなって本当にすみません。ようやくの休みなんです、学校の宿題をやれとこのことで更新が中々出来ずにいます。しかも水曜日からはまた塾が始まるので・・・orz

感想お待ちしております

第六十八話 子供とテストと楽園 (前書き)

ぎりぎり投稿できました。明日からはまた塾なのでしばらく更新できなくなります

それではどうぞ

第六十八話　子供とテストと楽園

Side in 明久

「とりあえず着いたのは良いけど……」

「かなり広いですよね……この学校」

「高等部だけじゃなくて中等部や大学だってこの中に入ってんだから広いのは当たり前だろ」

あのバスの中で起こったことの結末は置いておくとして、僕らは霜月学園の校門の前に立ち止まる。……この学校は文月学園の何倍ぐらいの大きさなのだろうか。ここが唯一の校門らしくのだが、誰かが外へ出る様子も中へ入る様子も全くない。……と思っっていると中から僕らより少し上ぐらいの男の人が出てくる。男の人はこっちに気づくと近づいてきた。

「藤堂様一行で宜しいでしょうか。お待ちしております」

「へ？どうしてそんなこと……」

「なるほど、向こうとしてはこっちが来ることはお見通しだったって訳か」

「そうみたいだね、……まあこんなに広い校舎で探すのも大変そうだしここは話を聞くのが良いんじゃないかな」

雄二はつまらなそうに舌打ちをしながら言う。その後、久保君が入手した情報から適切な判断を言う。

「そうじゃあ、貴方の名前は何て言っんですか」

「……私は06、それ以外の何者でもありません。私を呼ぶときも06でお願いします。……あなた方を神子様のところにもまでお連れいたします。……着いてきてください」

そういつて中へと誘導する。僕たちが入った後、姉さんと学園長が入ろうとするけど……

「……申し訳ありません、ここから先は子供たちだけのものです。大人は立ち入らないようお願いします。」

「へ？どうして姉さんたちは駄目なのさ！」

「吉井様、たつた今言いましたがこの学園は子供たちだけのものです。大人をこの中へと入れるわけにはいきません。」

「っ！？……どうして僕の名前を知っているんですか？」

「神子様からあなた方の情報を教えていただきました。その赤い髪の方は神童である坂本雄二様、眼鏡をかけている方が久保利光様、桃色の髪と紫色の髪をした方が姫路様と霧島様。それで……おや？貴女のような人が来るとは言われておりませんが……」

06っていう男の人は次々とみんなの名前を当てていくが愛子のところで止まる。……あれ？そういえば愛子って何で選ばれたんだっけ、姫路さんや久保君みたいに学年で5位以内に入るわけでもないのに（ちなみに一位霧島さん、二位雄二、三、四位が久保君と姫路さん、五位芳樹？らしい）

「僕？……僕は工藤愛子だよ。特技は保健体育の実技だよ。あ、でも実技はアッキーにしかやらないから。」

「ちよ、こんなところで何いつてるの!？」

「ふつ、……面白い方々です。工藤さんですね、よろしくお願います。……さて時間も無限にあるわけでもないので行きましようか。着いてきてください」

06さんは着いてくるように言う。……あれ？芳樹と空ちやんは説明したっけ？ああ、2人は元はこの学園の生徒だからいう必要がないのか。自分なりに納得して姉さんたちに一言かけてから06さんについていく。

「……おい、神子は何を企んでる？」

「企んでるとは何の事でしょう、0は……いや、長谷川様」

「そついえば06、この学園はどうして大人は立ち入り禁止なんだ？」

芳樹が言った後に雄二が質問する。……そついえば、大人は立ち入り禁止って言うってるけど中で働いてる人もいるだろうしする理由ってなんなんだろう？

「……言っておりませんでしたね。ここは子供たちだけの学園、言うなれば勉強を教えるのも規則を決めるのも、またその規則を破ったものに制裁を加える者もみな子供なのです。子供というより未成年といった方が正しいでしょうか」

「……ええっ!？」

「話を続けますよ。……神子様は理事長になられたと同時にこの学園から大人を排除しました。ここは神童を養育する学校で

ですので、馬鹿な大人に任せるより自分達で学び教える方が効果的なのです。規則に関してもそうです。大人の作った勝手な規則に従うより、子供たちに自由な発想を持たせる事を神子様はお選びになられたのです。入ってくる大人は確実にこの学園を批判するでしょう。批判が重なり騒動がおきないように大人を完全に立ち入り禁止にしているのです。」

06さんの説明に皆が沈黙をする。確かに子供は大人に縛られている、それは可笑しいのかも知れない。……。それでも、大人から学ぶ事も大切で多いんじゃないだろうか

「……さて、この学園の話をしてるうちに着きましたね。どうぞお入りください」

「この先に学園長のお孫さんが……」

「やっぱりここまで来ると緊張するね」

「……」

みんなが入るのをためらう中、芳樹は何か考え事をしている。何かあるんだろうか

「おいお前ら、止まってないで早く入ろうぜ」

「……っ！待て雄二！扉を開けるな！」

雄二が扉を開けたと同時に芳樹が叫ぶ。中に何かあるんだろうか？……

「さあ、お入りください。ここであなた方が神子様にご会うほどの価値があるのかテストします」

僕らは06さんに押され、全員が中に入れられ扉が閉められる。

『簡単です、あなたがたに召喚獣を使つてもらいこの残骸たちを倒せるか。それだけです。それとこの場で形成されるフィールドには召喚獣すべてがそちらで言う観察処分者用となるのでご注意ください。』

「ふざけるな！ここにあるのって皆元々は人なんだから！そんなこと……」

『どちらにしろ、この残骸らは培養液から取り出すので。倒すか飲まれこの者たちと同じ道を辿るかその判断はご自由に。では……』

『そう06さんが言うとまた首は垂れ下がり、紐にぶら下がっていた中の人達は液から取り出され捨てるかのように紐が外され地面に叩き付けられた。』

『……うづうづ、痛いよう』

「ひい！？」

「大丈夫！？愛子（かい姫路さん）！」

ここで愛子と姫路さんが恐怖で倒れそうになり僕と久保君が体を支える。……霧島さんも耐えているようだけど、雄二に心配かけたくないのかこらえている

「アウェイクン！……試獣サモン召喚！……どりゃあ！！」

「芳樹！何やってるのさ！その人達は……」

「バカ野郎、今は女子たちを守るのが先だ！雄二も久保も女を守り

たかつたら戦え！」

「くっつ！………サモン試獣召喚！」

「長谷川芳樹 総合科目 7283点

&吉井明久 4251点

&坂本雄二 4757点

&久保利光 4266点

「………私毛」

「無理するな翔子！それより、倒れた奴らの看護を頼む！」

「………わかった」

僕たちに続いて霧島さんも召喚をしようとするが雄二に止められ愛子たちを寝かせた方にいった………やるしかないのか！？

『痛いよう………助けて………』

「くっ！………まだまだああ!!」

召喚獣から来る痛みから色々な感情が伝わってくる。………
………痛い、苦しい、熱い、寒い、嫌だ、帰りたい………
痛みから伝わるその気持ちに僕らが攻撃をする阻害になる。芳樹は何も感じず倒れているようだけど……。それより問題なのは雄二と久保君だ。処分者用の召喚獣になれてないだろうから、ろくに攻撃があたらず痛みだけを受ける。

「長谷川芳樹 総合科目 6848点

&吉井明久 4023点

&坂本雄二
&久保利光

3991点
3570点
」

『ほう、何とか耐えていますか……それならこういうのは……?』

「……?……っ!しまった!」

襲ってくる人達が攻撃してこないと思ったら、いつの間にか狙いが僕たちから女子のみんなに変わっていた。……もう何体かがそっちの方に向かっていて。僕らの召喚獣は巻き込まないように遠くで戦っていたため間に合いそうにない!

「……私が守らないと」

倒れている女子を霧島さんが一人で守っていた。ただ、足もガクガクに振るえていて戦えるような感じじゃない。ここで一体が霧島さんに飛び掛る

「……助けて、……雄二!」

『……ガッ!』

「……つと、大丈夫か翔子」

たぶんその場にいるみんなが驚いただろう。雄二は召喚獣を無視して飛び掛る人を殴った。……培養液に触れた所為か雄二の手が少し赤くなる。

「06よお、翔子に手え出そうたあ良い度胸じゃねえか。残骸だらうがなんだろうが全部ぶちのめしてやるよお!」

『ほう、召喚獣を使わず素手で戦おうとは……面白い』

雄二は近づく敵を殴ったり、その間に向かわせた召喚獣で倒したりしていた。……これが悪鬼羅刹のときの雄二か……

第六十八話 子供とテストと楽園 (後書き)

なんか最後が微妙……………

感想お待ちしております

第六十九話〈合格と神と愛子キャラ？〉(前書き)

出来そうにないとか言いながら出来てしまった現実……
宿題終わってないですけど別にいいよね！ いや駄目だろ……失礼

それよりこのタイトルってなんだろう……ふふふ、誰でもいいです。こういうのが得意になれる才能下さい

それではどうぞ

とあるが出て来るのは気にせずに……

第六十九話〈合格と神と愛子キャラ〉

Side in 明久……

あの実験台となつてしまった人たちとの戦いで勝利した僕らは無事にその部屋から出ることが出来た。……途中からは雄二の活躍がほとんどだった。お得意の拳と召喚獣を巧みに利用し暴れまわった。その暴れっぷりはまさに悪鬼羅刹と恐れられるに値するものだった

「……お疲れ様でした、皆様。テストは無事合格です。」

「……てめえ、覚悟はできてるんだろつなあおい」

「ふっ、ここで学習すること自体覚悟はいるのですよ。……それより少々腕を拝借します」

雄二の脅しに笑いながら06さんは雄二の腕を取る。何をするのかと思いきや06さんはポケットの中から塗り薬のようなものを取り出し、それを赤くなつた雄二の手に塗る。

「ああ？なんだこりゃあ、」

「塗り薬ですよ。坂本様は先ほどの残骸を体を使って倒しましたね。残骸の漬かっていた培養液は健康体であるあなた方には危ないものでしかありません。我々の目的はあなた方を殺すことではありませんので。」

「……雄二、大丈夫？」

「おう、これが薬だつて言うのは分かる。さつきまで麻痺してた感覚がもう戻つてきやがった」

雄二は手を握つたりして感覚が戻ることを確かめる。……さっきの06さんの話からするに僕らの命は保障されていない。それなのに、どうしてこんなことをするんだらう？また何かするつもりなのかな？

「さて、皆様はテストに合格いたしましたので、これから神子様のところへ連れて行きます。……安心してください、先ほどのように騙して恐怖を感じさせるようなことはしません。」

「本当だろうね。坂本君ほどじゃないが僕だつて怒ってるんだ、おそらくここにいるみんなが……次はないよ」

「ふつ、承知しました。……それでは着いてきてください」
「またも笑いながら僕らを誘導する06さん。……誘導するといっても部屋が近かつた関係でさほど時間はかからなかった」

「こちらの部屋で神子様が待つております。……ご武運を」

「おい芳樹、神子の部屋はこの部屋で間違いねえか？」

「ああ、さつき俺ですら騙されたんだ。同じ形、感じのするこの部屋で間違いない」

「分かった。じゃあ入るよみんな」

こうして僕らは部屋へと踏み入れた……。

『……神子様のご退屈のきになられるよう、願っております』

す
』

「おい芳樹、この部屋暗くてなんも見えねえぞ」

「騒ぐな……お前らに言っておく。あの婆は子供の楽しさを教えるとか調子乗った事言ってたが本気でかかれ。じゃないと……
……本気で世界は破滅する」

「……それほど深刻なことなんだね。」

久保君にああと返す芳樹。……それにしても、早く愛子たちも起きてくれないかなあ

『……なんなら、女の子達を起こしてあげようか？』

「えっ？ うわっ！」

僕の心の中に反応したかのように部屋に女の子の音が響くと一瞬、辺りが眩しい光に照らされる。僕たちは思わず目を瞑ってしまう。目を開けると周りが明るくなっただけかと思っただけけど異変が起きたのはその後だった。

「……う、ううん」

「……………」は、どこでしょうか」

「ってあれ？何で私はアッキーにおぶさってるの？」

今まで眠っていた彼女たちがいつせいに起き出したのだ。とりあえず目を覚ましたことを確認した僕らは下へおろす

「久々の再開だったからちょっと凝ってみただけだろうか？芳樹君？」

「よう、その眠そうな顔はいつになっても変わらねえな。……神子」

声が聞こえたのは前の上空から、……そこにいたのはさまざまに機械が壁に貼り付けられその中央部に座っている一人の女の子。髪はつつすらと長い藍色（濃い青？）で服とかにはあまりこだわらないのかよれよれの白衣を着ている。ただ、その顔は一見するとどこにでもいるやんちゃな感じの女の子だ。

「あれが……………藤堂神子」

「はいはいその吉井君、ご指名ありがとうございます アタシがこの学園の理事長の藤堂神子どえーす」

「なんか想像していたのは全然違うんですけど……………」

「……………意外」

起き上がった姫路さんと霧島さんは藤堂さんの態度を見て少し驚いている。……………僕も結構驚いている方だけど、結構仲良く慣れそうな感じだ

「……気をつける、アキ。そう思ったところにあいつはどんな攻め込んでくるぞ」

「攻め込んでくる？侵害だなあ、むしろそつちから攻めてくるんじゃないの？ベットのうえでさ」

「なんか昔の愛子みたいな感じのノリだこれ……」

「へえ、そつかそつか。アタシが来ると思わなかった工藤愛子ちゃんってこんな感じの人なんだあ」

「……っ！？」

「え！？今誰も口にも出してないよね！そつえばさつきもこんなことが……でもどうしてそんなことが……？」

「え、こんなの慣れれば誰にだって出来るよあ。相手を見るだけなんだからさ」

「アキ……言うのを忘れてた、あいつは初対面の奴でも顔に流れる電流の動きから考えてることが読み取れる。」

「……ええっ！？」

「世の中『観察力』『暗算力』『記憶力』、この三つさえあれば生きていけるもんねえ。……アタシの場合それが人の数十倍、いや数百倍優れてるだけだよ……それだけでもないけどね」

「凄いな……出会った全ての人の考えが読めるだなんて……あれ？そつえば僕たちがここに来ることって相手に読まれてたんだよねえ、だったら向こうの目的って何なんだろ？」

「おつ、さつきからいいとこ突くねえ吉井君は。吉井明久だから、」

アッキーでいいかな？そっちの方が呼びやすいし。」

「駄目っ！アッキーのことをそう呼んでいいのは私だけなの！」

ここで愛子が張り合おうとしているのか、僕の腕を引っ張ってそう主張する

「うーん、ちょっと残念だな。ま、いいや……。で、なんでアタシが君たちの此処にこさせたのかって？簡単だよ、アタシの暇つぶしさ」

そういつて、彼女は手元にあるキーボードを操作する。すると彼女の下のほうの機械から何やら人の形をしたものが浮かび上がりそこから人が出てくる。さつきみたいなのドロドロした人じゃないからいいけど……。ちなみに出て来たのは三人、一人は女性で茶色の短髪に手には一枚のコインを持っている。二人目は僕らと同じぐらいの男性でボサボサの黒髪にダルそうな目。それ以外特に特徴はない。三人目は……。真っ白な髪に赤い目をしたアルビノ。白と黒のボーダーのようなシャツとズボンを着ている。三人目って……

「……一方（君）！？」「……」

「おい、あれはどうみてもとあるに出て来る一方通行アクセラレータだろ！それに他の2人だって御坂美琴に上条当麻じゃねえか！」

「ああ、05番ことアクセラレータには文月に行ってもらったんだ。名前を一方通行ひとかたみちゆきでね……。それで07番が美琴、09番が当麻ね。本当は01番とかに任せただけ、01番は大学を、02番は高等部を、03番には中等部を任せてるからね。そう言うわけにもいかないんだ、平日だし。それでもここにいるみんなもアタシの自信作だよ。さつき見せた残骸の成功例…….と云っ

第六十九話〈合格と神と愛子キャララ?〉(後書き)

神子のキャララに関しては意外だったでしょうか

感想お待ちしております

第七十話 神とあると実験台

Side in 明久……

「「「サモン 試獣召喚！」」」

「長谷川芳樹	総合科目	6548点
&吉井明久		4003点
&坂本雄二		3691点
&久保利光		3561点
&霧島翔子		4887点
&姫路瑞希		4812点
&工藤愛子		3200点

「うんうん、みんな中々点数持つてるねー、それじゃあこつちも」

「「「サモン 試獣召喚！」」」

「一方通行	総合科目	14893点
&御坂美琴		12699点
&上条当麻		1284点

「「「はあ（ええ）っ!？」」」

相手の出てきた点数に僕らはいっせいに驚く。そりゃあそつだ、高橋先生や芳樹で8000点近くがギリギリなのに100000を超えらるだなんて溜まったもんじゃない。

「あれ?どうしたのよあんた達、」

「どう考えたっておかしいだろその点数は！一人は一人でおかしいが……」

「ふん、どうせ上条さんは勉強できないですよ……」

「当麻君も落ち込まない落ち込まない。……いやー、ラノベ見て作ったもんだからこつちと学園都市を比較してみると、学力もかなり差があるんだよねー。だって学園都市の中ってその世界の学園都市以外のところと科学力が10年以上違うんだよ。そこから暗算してって……」

理解が追いつかない。僕も禁書目録は読んだことあるけどそれをこつちと向こうで学力を比較してって……どうやってたらそういう計算が出来るのかすら思いつかない。

「だからさあ、君たちとは脳内構造が違うって言うてるじゃん。そんなんだから召喚獣使ってるくせにオカルト分野のことを少しも理解できないんだよ。」

「おおオイ！そんなことオでも良いから早く戦わせるオ！……
……こつちはうずうずしてんだよ！」

言い終わると同時に一方君はこつちに飛び掛ってくる。みんな辛うじて避けられたけどその所為で雄二、久保君、霧島さん、愛子と僕、芳樹、姫路さんの半分に分かれてしまった。

「吉井明久と長谷川芳樹だっけか。……お前らの相手は俺だ。点数低いからって甘く見てると酷い目にあうぜ！」

「……しょうがないか、行くぞアキ！」

「了解！姫路さんは後ろからの援護をお願い！」

「はいつ！分かりました！」

こっちは、僕と芳樹、姫路さんで上条当麻を討つことにした。．．．
．．．ただ気になるのは前に上がってこない御坂美琴だけど．．．
今は気にしないで上条だけを相手にしよう。

Side out 明久 & Side in 雄二

くそっ！芳樹たちと別にさせられた！．．．．．だが、こっちの方が人数も上だし合計の点数だって負けてない。．．．．．気になるのは当麻が芳樹たちの方に行ったあと、御坂だけあそこを動いてない。何をするのかはわからねえが気をつけねえと．．．．．

「おせエぞ！」

「っ！？．．．．．危ねえな、考える時間ぐらいよこせや」

「考えるだア？ここは戦場だぞ。そんなもん、動きながらやりやあ
いいじゃねエかよオ。まあでもテメエには骨入りそうだな。．．．
．．．だったら」

ハイスピードで俺の隣を横切り、俺の後ろにいた久保のところに向かう。

「くっ！？」

久保は腕輪を使って飛びつくダメージを減らそうとしたが一方通行は、久保に攻撃などせずただやさしく触れるだけだった。．．．
．．．なぜだ？．．．．．っ！

「久保！そいつから離れる！」

「……………もうおせエよ」

「な、なんだこれは……………うわあああ！」

「久保利光 総合科目 0点

VS

一方通行 14264点」

久保の叫び声と同時に召喚獣が消えていく……………そうだ、あいつの能力を忘れてた。たぶん能力は腕輪の効果として使用されているんだろう。少しだけだが点数が減っている。

「おい、どうした？俺様の能力忘れたわけじゃねエだろうな。俺の能力は『一方通行』、言うなりやベクトル変換だ」

「あーあ、最初に死んじゃったのは久保君か……………ま、とりあえず罰ゲームね」

一方通行の後に神子がおかしなことを言う。罰ゲーム？そんな話聞いちゃいねえぞ。

「だってほら、罰ゲームの話したらみんなやらなくなるじゃん坂本君。そんなのアタシがここに呼んだ目的が出来ないから。そんなわけでポチツとな」

「え？……………特に何も変わった様子は……………っ！う、うわああああああ！」

神子の手元にあるキーボードをいじると久保は、急に頭を抱えその場に倒れこんだ。一体どうしたんだ？

「まあ簡単に説明すると、今まで生きている内にあつた嫌なこと、忘れたいことを頭の中で見せてるんだ。それも、とびっきりの恐怖みたいなものを加えてね。・・・別にそれを見せるのは難しいことじゃないよ。後ろの機械から脳に直接『今までにあつた恐怖を見せる』みたいな命令を下すような特殊な波を送り込むだけなんだから。」

「おい、そんなこと出来るんだつたらお前とつくに世界征服とか出来るんじゃないか？」

「出来るよ。そのぐらい出来ないと神って称号剥奪されちゃうもん。・・・でもさ、そんなことしたら面白くないじゃん。」

「・・・面白くない？」

「そう、面白くない。だってはつきり言ってさ。アタシに勝てる人間なんてこの世にいないもん。だからさアタシが君たちを呼んだのだってアタシにとってはその遊びだよ、上を目指す必要がなくなつたからそのずっと下にいる君たち、一般人がどれだけ上つてこれるか。それをこうやって上から眺めることしか出来なくなつちゃったんだよ。ま、今話せるのはこのくらいかな、まだ話したいけど隠していることはあるけど。それは後でって事で。引き続き一方ちゃんとの勝負頑張つてね。」

そう言つてまたキーボードをいじり出す神子。上から見ることしか出来なくなつた？ふざけるんじゃないぞ

「おおおい！暴れるぞオ！」

とりあえずこいつを何とかするのが先だな・・・俺の腕輪は重力操作だから使えるとしたらちよつとの間動きを止められるぐらいだろうな。ベクトル変換で重力変換すりゃあ元に戻るだろうし。

・・・そういえば翔子の腕輪ってなんだ？まともな戦争してねえから、一度も見たことがねえが・・・それにかけるしかねえだろうな。俺の腕輪で動きを止めて翔子と工藤にダメージを与えさせるのが一番だろうな。・・・隙さえあればな。

第七十話 神とあると実験台 (後書き)

感想お待ちしております

第七十一話、妖怪と最凶とエレクトロマスター（前書き）

最近暴走気味（笑）

それではどごぞ

第七十一話〈妖怪と最凶とエレクトロマスター〉

Side in 雄二……

「どうしたどうした、こんなもんですかア？」

「くっ！……うっせえな、こんな点差で策無しにやってられつかよー！」

「まアそうだろうなア……だが、テメエにそんな考えさせる暇与えるかっての」

翔子と工藤にはなるべく前に出ずに俺が合図したところで叩く様言っというてある。だが早く動くコイツに対して俺の重力操作をまともに浴びせられるのが不安だ。こいつ位の奴を止めるにはかなりの点数を消費するだろう。操作で言えばこちらの方が上なので攻撃に当たることはないとしても出来るのは一回。……それにしても神子はめんどくせえ奴を作り上げるもんだ

「おらよー！」

「ちっ！」

「坂本雄二	総合科目	3691点
&霧島翔子		4887点
&工藤愛子		3200点

VS

一方通行	14094点
------	--------

「テメエの相手もそろそろ飽きてきたなア。あつちの女二人のほうを先に潰して置くとするか。さつきからチヨロチヨロ目障りだしな。」

「なっ!? しまった!」

「俺に飽きたのか、一方通行は翔子と工藤のほうへ向かう。……
……かかった」

「っ!? ……どオいうことだ? 坂本、テメエの仕業か」

「まあ、そんなところだな。動きを封じるのに使おうとしたんだが、お前が速くてまともに使えなかったからな。翔子たちを狙ったタイミングで仕掛けたのさ」

「だが、こんなもんで俺を……」

「今だ!」

「……わかった」

「オツケーだよ」

俺は一方通行が俺の重力操作にベクトルを合わせようとしたところで合図をする。普段、反射の壁があつたとしても今みたいに俺の重力操作に合わせようとするればその壁は崩れる! 俺の合図に合わせて二人は腕輪を使って攻撃する。……余談だが翔子の能力は冰雪関係だったらしい。普段は刀に纏わせたりする位だが、応用が使えるようになれば地面を張って相手の動きを止めたり出来そうだな。……俺に使われそうなのは気のせいとしておこう

「ガアアアアアア! ……坂本、やるじゃねえか」

「坂本雄二 総合科目 1289点
&霧島翔子 4887点
&工藤愛子 3200点

VS

一方通行 6402点」

「それでもなア。お前の重力操作は見切った。もう切り替えなんざに1秒もかからねエよ」

とりあえず、次の問題はそこだ。もうちよい減らせるとは思ってたんだが……それでもこれからあいつに攻撃できる手段はねえ。……どうすれば

「ねえ一方通行、何時になったらあたしの出番が来るのよ！あんたが待つてろって言うから待つてたのに！」

「……ハハハ、そうだ。コイツを忘れてた……坂本オてめえらはもう終わりだ」

何をする気だ？、と俺は御坂美琴の方を見る。すると御坂は一方通行に超電磁砲レールガンを打ち出す！？その超電磁砲は一方通行が反射し俺等の方へ……って

「やべえ！？」

「ほう、あれを避けたか……ならこれならどうだあ！」

再び御坂が超電磁砲を撃つ……それを今度はただ反射して俺達の方に移すのではなく上に溜め込んでプラズマを作り出した。そのプラズマから何本もの、雷の矢が飛んでくる。……もう駄目か……？俺は思わず目を閉じる、閉じているときこんな声を耳にした

『情けないの、この小童は』

「……はア!？」

「なんだ?今の声は」

俺はやられた訳でもなさそうだと思いつつ目を開ける。俺の召喚獣の目の前にいたのは……工藤の召喚獣だった。

「坂本雄二 総合科目 1289点

&霧島翔子 4887点

&工藤愛子 6296点

VS

一方通行 6199点

『予想通りじゃな。体に力が湧き出るの』

工藤の召喚獣は秀吉のような翁言葉でしゃべる……って

「おい、工藤!どうしてお前の召喚獣はしゃべるんだ!？」

「えっ!?!坂本君ぬらりひょんさんの声が聞こえるの!？」

『ほう、愛子以外にわしの声が聞ける奴がいるとは。おい小童、名をなんと言う?』

「坂本雄二だ」

『なら、雄二でよいの。これからよろしく頼む』

「オオオイ!俺を無視するなあ!と言うか teme 誰と喋ってやが

るんだあ！」

ここで、一方通行が無視されていることに苛立ったのかプラスマからまた雷の矢を飛ばす。

『こんな物は効かんのじゃ』

「坂本雄二	総合科目	1289点
&霧島翔子		4887点
&工藤愛子		9296点

VS

一方通行	6052点
------	-------

「おい、ぬらりひょん。それは一体どうやってんだ？食らうどころか点数が上がってやがる」

『簡単じゃよ。自分の周りに電気を纏わせておいて相手の雷が触れた瞬間に調和して取り込むんじゃ。まあ、簡単といっても愛子には出来んがの』

なるほど、工藤は操作技術もテストの点数もずば抜けてる訳でもなのにここに呼ばれたのはこいつが原因か。明久が知ったらキレるだろうな

『さてと、こっちもそろそろ行くかの。のう愛子』

「そんな事いっても僕はただ見てるだけなんだけどね」

『それもそうじゃな』

「（もう、プラスマは無意味だな）御坂ア、あのバカの方を援護してやれ、こっちだともうてめえは役立たずだ！」

「うるさいわね！そんなこと分かってるわよ！……って、ちょっと。なにをするのよいきなり！」

向こうで、明久が御坂の召喚獣に攻撃していた。ということはもう上条は倒したんだな

「本当にあのバカは使えなかったなア。とにかくこれで最後だあ、坂本！それにその女子2人！」

「ちょっと、モブ扱いしないでよ。ぬらりひよんさんやっちゃって！」

『人使いの荒い主人じゃのう……』

「お前はもう人じゃないだろ。……これからが、本当の勝負だ！氣イ抜くんじゃねえぞ！」

第七十一話、妖怪と最凶とエレクトロマスター（後書き）

読者の皆様。今まで読んで下さってまことにありがとうございます
た！

実は作者の都合で小説の投稿を止めなくてはならなく……

なんてことはありません。なんか最後がそんな感じだったのでついやってみたくなりました。本当にすみません ならやるな

感想お待ちしております（まだ終わりません！）

第七十二話 雑魚と芳樹と幻想殺し

Side in 明久

「アキツ！相手は取るに足らない点数だ、気を付ける必要も特にな
い！」

「これでも上条さんも頑張ったんですよ！取るに足らないとか言う
な！」

「うん、つい最近までは僕もあれぐらいだったな……。頭
のいい人に囲まれるとかなりへこむんだよね、操作が上手くても」

「武装変換！……いくぜっ！」

一方君に二つに分けられてから僕ら（僕、芳樹、姫路さん）は上
条君と戦うことになった。……ただ上条君てかなり点数が
低めだからこんな1対3の状況にしくても勝てるんだと思うんだ
けど……そんな事より芳樹がいつものように武器を変え
る。今回変えたものは一振りの太刀、相手が相手だから、特殊なも
のを使わずになるべく点数を減らさないようにしてるんだろ。と
ここで藤堂さんが割り込んでくる

「うーん、腕輪に点数を使わないのは芳樹君らしくないかな？……
……でも」

「熱線！ え？」

「くらえっ！……は？」

「今回はそれが正解だったんじゃない？」

姫路さんが遠くから熱線を、芳樹が上条君を太刀で切りつけようとする。上条君は物凄く速く襲い掛かる熱線を右手で打ち消し太刀を右手で掴み取ると同時に太刀から光みたいなものがはじけ元の木刀へと戻る。いったい何が起こったの！？

「まあこの世界だとあるってかなりマイナーなラノベだし知らなくともしょうがないのかな？ 実際読んだ事ありそうなのは坂本君と吉井君ぐらいだけど吉井君は忘れちゃったのかな？ ……ま、いつか。えーとね、原作だと上条君の右手には『幻想殺し』という物がありますね。異能の力が右手に触れると打ち消されちゃうんだな。こっちだと異能の力なんてないから腕輪の能力ってことにしてあるけどね」

「つまり腕輪の能力は全部あの右手に消されちゃうってこと！？」

「吉井君大正解」 まあそれでも点数低いし楽に勝てると思うよ。それじゃあね、坂本君たちのほうに行こうかなって」

藤堂さんは鼻歌を歌いながら雄二たちの方へ向かう。雄二たちの相手は一方君だっけ、どんな能力なんだろう？ …… 芳樹が僕と同じところまで下がって来た

「芳樹、腕輪の能力が使えないって。 …… どうする？」

「どうするも何も倒すだけだろ。上条は操作は以上に上手かったがそれでもアキがちっこくなくなったってだけじゃねえか。姫路は上手く向こうの霧島とかと合流できたらそのまま御坂って奴を狙え。さっき雄二から聞いた話だと御坂は電気使いらしい。愛子と組んで叩くのがいいと思うから行けそうだったらそれをやってくれ」

「分かりましたっ！」

そう言って、少し僕らから離れ雄二たちの様子を見に行く姫路さん。それにしても僕が小さくなっただけか……。能力を消せるって言うから驚いたけど冷静に考えれば僕の腕輪の能力もそうだしね。

「まあ、特に恐れなくていいってことだ。……。常夏るときみたいな2人で攻めるぞ！」

「オツケー！」

「2人で掛かって来るか……。いいぜっ！来い！」

ここからは作者の下手糞な戦闘描写のターン。まずは僕が木刀で頭に攻撃する、上条君は手でそれを受け流してから掴み取る。そこに芳樹がから空きな腹に決めようとするが、主導権を取られた僕の木刀を下に持っていくことでそれをガード。その木刀で芳樹の木刀を弾き、僕は木刀ごと飛ばされてしまった。その後上条君は飛ばしてる間に突き刺そうとする芳樹の木刀をサラリと受け流し芳樹の背中に一撃を加える。芳樹も僕ほどではないが吹き飛ばされる

「長谷川芳樹 総合科目 5784点

&吉井明久 3611点

VS

上条当麻 1284点

「どうした？上条さんははまだ一点もダメージ食らってないですよ？」

「くっ……。集団戦になれてやがる。」

「そりゃあ能力者と戦ってはかりですから……。集団戦が得意と言うより動きに付いていけるんですよ。あっちにいる一方通行とかビリビリとかに比べると……。うおっ！何すんだビリビリ！」

上条君が説明してると思いも寄らぬ方向から、物凄い速さの電撃が上条君に当たろうとする、それを上条君は右手で受け止める

「ビリビリ言うなっつてんでしょっが！……。次言ったら芳樹たちの方に回ってあんたの頭がち割るわよ？」

「ひい！……。と、まあこんな感じにですね。上条さんは不幸な訳でして動体視力がめちゃくちゃ上がってるんですわ」

当たり前のように電撃を受け止めてサラリと凄いことを言う上条君。……。あれ？美坂さん今……。。

「芳樹、あの美坂さんって人と知り合い？」

「っ！……。いや、アイツと会うのは初めてだ」

なんかあいつのところが強調されたような……。『うわあああ！』っ！今の声は……。久保君？

「……。向こうで芳樹たちの仲間が負けたみたいですわ」

「？、どういうことだ、上条」

「神子様の罰ゲームですよ。何でも負けた者には今までにあった思い出したくもない過去の記憶をより恐怖感を強くなるよう編集して見せるとか……。負けたくないですねえ」

罰ゲーム？そんなものは聞いてないけど……。それと今上条君がまた芳樹って言ったような……。。

「まあそれは後でということ……続けましょうか」

と言い切る前に上条君は僕らのところに接近してくる。またまた作者の下手糞な戦闘描写のターン。僕と芳樹の間に割って入る上条君。僕と芳樹が反射的に木刀を自分のみを守るように構えると、構えを無視して両手で2人を攻撃。当然それは木刀で防げ訳だけど、上条君は2人の木刀をそのまま掴み自分を円の中心になるように芳樹の木刀を持った手を回して僕にぶつける。当てる瞬間に手を離されたことにより2人で吹き飛ば僕ら。

「長谷川芳樹 総合科目 5132点

& 吉井明久 2998点

VS

上条当麻 1284点」

「くっ……動きが速い、それに無駄もないから攻めに移れない」

「……っ！そうだ、上条君は僕らの動きが見えてるから攻撃を返せるんだ……だったら……もし、上条君が見えなかったら……」

「芳樹！ちよつと考えがあるんだ！」

「なんだ？」

「……ってことなんだけど」

「試してみるか！」

僕は芳樹とアイコンタクトで話す。芳樹の考えに乗ってくれるみたいだ

「まあお2人さんもこの程度だったってことで。」

「そうと決まったらっ!」

「それぐらいじゃあ上条さんはびびらないですよ」

僕と芳樹は上条君を挟むように回りこんで攻めようとする。もちろん、上条君は受け流して僕らを衝突させる気満々だ。……ここぞ

「デイヴィジョン!」

「へ?何で後ろに　グッ!」

僕は一体召喚獣を増やし、上条君の後ろに置く。上条君は呆気に取られたような顔をして分身からの攻撃を受ける。分身の攻撃だからそれだけでは倒せないけど、

「っっつけええええ!」

僕と芳樹の攻撃が上条君に当たる。分身の方に気を取られてれば受け流されることもない!

「しま　グホッ!」

「長谷川芳樹　総合科目　5132点

&吉井明久　1499×2点

VS

上条当麻　0点

「「よっしゃああ!」」

「負けましたね……っ!っ!っ!わああああ!……インデ・

「・・・」

「どうしたの上条君！」

「そつちでもこつちでも負けたものには罰ゲームだよん、そうじゃないと不公平じゃん。」

雄二たちの方から藤堂さんが戻ってくる。

「神子・・・罰ゲームとはなんだ？」

「たぶん当麻君が言ったと思うけど、思い出したくないようなことをもっと嫌になるよう修正して見せるんだよ」

それじゃあ、上条君も久保君も嫌なことを無理やり見せられてるってこと？・・・何でそんなことをする必要があるの？

「そんな悲しい顔しないでよ吉井君。君たちは勝ったんだからさ。・・・そろそろ頃合いかな、えいつ」

藤堂さんが手元にあるキーボードを操作する。・・・特に何も無いようだけど

「何をするつもりだろうね、芳樹」

「・・・」

「芳樹？」

僕の言ったことに返答もなく芳樹はその場に倒れた。

「芳樹！しっかりして、芳樹」

「兄ちゃん！」

「ここで僕らの戦いを見ていた空ちゃん、
芳樹のところへ駆け寄る。
もしかしてさっきの

「藤堂さん、芳樹に何をしたの？」

「何って言われるとなあ……簡単に言えば洗脳かな？」

第七十二話、雑魚と芳樹と幻想殺し（後書き）

ここで区切ります、変な区切り方ですみません

感想お待ちしております

第七十三話 神の心情と妖怪たちの真実

Side in 明久

「……………洗脳？」

「そう、洗脳。でも今そういう催眠をかけたわけじゃないよ。……………さつき当麻君や美琴ちゃんが芳樹君のことを名前で呼んでたには気づいたかな？」

「……………気になってはいたけど、芳樹本人が否定していたから……………」

「教えてあげるよ。……………君たちを連れてた06番や戦ってもらった当麻くん、09番とか番号がついてる人はみんなアタシのお気に入りの子なんだ。同じお気に入りの子の番号は知っていても当麻君たちはアタシが最近作ったものだから。今の当麻君たちにはあつてなくても番号で昔どんな人だったかは覚えてる。それで芳樹君は……………08番」

「っ!？」

つまり……………芳樹も上条君たちのような実験を受けさせられてたって事？

「まあそういうことだね。文月学園には興味があったから一方ちゃんとは別に芳樹君を送り込んだんだ……………まず芳樹君の脳にアタシに対しての畏怖の念を抱かせて文月学園に送る、すると芳樹君は学園長にアタシのことを話しお婆ちゃんはアタシを止めるために君たちの力を借りる。そうして君たちはここに連れて来

られる。」

「……じゃあ、今芳樹が倒れているのは？」

「そこなんだよねえ、本当ならここでこっちに寝返るって言う風に考えてたのに倒れちゃった。……予想の範囲でしかないけど、多分捨てがたいんじゃないかな？」

「捨てがたい？ いったい芳樹は何を捨てなきゃいけないのさ」

「君たちといた文月学園での記憶をだよ。今さっきアタシが芳樹君の脳に送り込んだのはアタシに対して畏怖の念がある時の記憶を消去する信号みたいなもの。つまり芳樹君は文月学園でいた時間を忘れたくないと反抗してるんじゃないかな？ 手間掛けさせてくれるよねえ、駒の癖に」

「ぶざけるなっ！！……芳樹は君の駒なんかじゃない！」

人は誰のものでもない！それはたとえ神様だろうと代わりは……

「あるんだよ、吉井君。今思ってた事だって全部こっちは読めてるんだよ。」

「っ！！??？」

藤堂さんの顔が真正面まで迫ってくる、……説明忘れてたけど、藤堂さんの座っているところは動く。例えるなら空飛ぶ円盤みたいな感じかな、それで僕らのところと雄二の方を行ったりきたりしている

「あのね、確かにアタシは最初暇つぶしって言ったけどさ。まず暇

つぶしの意味って分かる？特にやることがないからするものだよ、
．．．．君たちみたいなただの普通な子供は暇な時は勉強や友達
と遊ぶってことも出来るけどさ、．．．．アタシはそういう訳
にもいかないんだよ」

「どうしてさ？やりたいことがあるならやればいいじゃないか」

「昔は常にやりたいほうだいやる馬鹿な大人たちの駒だったからね
え。今は特に縛られているわけじゃないんだけどさ．．．．こ
こを出るのが嫌なんだよ、だから今みたいにここに君たちを連れて
くるようにしないと暇をつぶせないんだ」

「ここを出るのが嫌？．．．．どうしてさ？ここに何かあるの
？」

「はあ．．．．本当に馬鹿だね吉井君は、サンプルにしたいぐ
らいだよ．．．．もし、残りの美琴ちゃんと一方ちゃんに勝
てたなら倒れてる久保君や芳樹君も元に戻してあげるよ．．．．
．それじゃあ頑張つてね」

そういつてまた雄二の方に向かう藤堂さん。．．．学園長がい
つてた子供の楽しさを知らないってこういう事なんじゃ．．．．
とにかく今は芳樹たちを救うのが先だ、今の話によれば御坂さんた
ちを倒せばいいらしいし。．．．今は一方君より御坂さんの方が
先かな？．．．．向こうと何か口論してるから今がチャンス
だ！

「．．．．くらえっ！」

「．．．．ちょっと。なにするのよいきなり！」

ギリギリのところまで避けられた、ていうか確か美坂さんってとん

でもない点数だったよね。一人で戦えるかなあ？

「明久君、手伝います」

「ありがとう、姫路さん」

「吉井明久 総合科目 2998点
姫路瑞希 4431点

VS

御坂美琴 11694点

やっぱり点数高いなあ。……ええと、とあるはうる覚え
でしかないから確証はないけど確か御坂さんは電撃使いだったけ？

「……明久君、」

「何？姫路さん」

「さっきの話、聞きました。絶対倒して久保君たちを救いませう
！」

「もちろんだよ！」

「それと藤堂さんのことなんですが……彼女、根は凄くい
い子そうですね……」

「姫路さんもやっぱり思ったよね……それに、雄二たちの
方に行くときのあの表情は……」

「僕たちがやることは変わらないよ」

「えっ？」

「学園長に頼まれたじゃないか、あの子に子供の楽しさを教えるつて。．．．．．僕にはあの子があやつて残酷なことをやりながら明るい表情をしているのは頭がイカレてるからだと思ってたけどそうじゃなかった。振舞ってるだけなんだ。だから．．．．あの子も救ってあげたい」

「．．．．．」

「確かに藤堂さんのやっつてることは許されることじゃない。でも、楽しい物を知ればこういうものからも手を洗うかもしれない。．．．．断言できる、あの子は神なんかじゃない。正真正銘、どこにでもいる女の子だよ。．．．．つてなんか辛気臭くなっちゃったけど、今は御坂さんを倒すのが先だ！行こう！姫路さんっ！」

「はいっ！」

Side out 明久 & Side in 雄二

「おらアっ！おせエぞ！」

「くっ！」

畜生っ！さつきから防戦一方だ、こんなんじゃ勝てるわけがねえ。工藤の方はぬらりひょんがついてるからいいが問題は翔子だ。あいつは点数だけでここに来たようなもんだから操作に慣れてない。それもAクラスの代表だから使う機会もさらに少なくなるだろう。

『ほっ、はっ……あやつ、中々素早い。』

「素早いだけじゃないんだなあ、ぬらりひよんちゃん」

『っ！……貴様は……あの時のっ！』

「へえー覚えてくれてたんだあ。ま、あんなにやられた相手を忘れるはずがないよねえー。逃げたはずなのにわざわざ戻ってきてちゃって、仲間が恋しくなったのかな？」

『ぐっ……！』

神子の野郎が、ぬらりひよんと話している。……こいつら会ったことがあるのか？

「おい、ぬらりひよん。お前と神子はどんな関係だ？」

『……愛子には話したじやろうが前に人間を懲らしめに行こうとしたとき、連れて行った仲間がみな殺されたのじゃ、あやつにの』

「「「！」」」

「やっぱり、藤堂さんが……？」

「まあ、殺したわけじゃないけどねー。立派な研究材料だよ、例えばここにいる一方ちゃんとか」

「？、どういう意味だ神子。詳しく説明しろ」

「まあ君たちにも分かるように説明すると、ラノベの世界のキャラを連れてくるなんて現代の科学だけでは無理なわけですよ。中途半端な情報の羅列でしかないわけであって、人の脳には入りきらないからオカルト、つまり妖怪のデータを脳に上書きしてやることで記憶容量その他もろもろが増え、キャラの実現が可能となったって訳だ。だって妖怪とかって軽く二、三百年は生きてるしね。入ってるデータを消して人間の方に送れば増えるだけなんだ」

『……わしの仲間が、こやつらになったと言う事か』

「まあそういうことだね、実験に失敗して人間と一緒に死んでいった妖怪もいるけど」

『っ！……許せんっ！』

切れたのか、神子の方に突っ込もうとするぬらりひょん。……馬鹿やろうっ！今のタイミングでそんなことしたら……

「ほオ！俺に背中向けるとはなア！いい度胸だ！」

「しまっ……グハッ！……許せ、愛……」

一方通行に背中を向けたぬらりひょんが後ろから久保が受けた攻撃と同じものを食らう。倒れたぬらりひょんは0点になりフィールドから消えていった。

「あーあ、工藤さんも罰ゲームか……えいつ！」

少しためらうような言葉とは裏腹に先ほどと変わらないスピードでキーボードを打ち、工藤が倒れこんだ。……やばいこのままだと、一方通行とか言う前にまず明久に殺される。……そうだ、翔子はどこに……？

「探しもんはこれですかア？ヒヤハハっ！」

「坂本雄二 総合科目 1289点

&霧島翔子 0点

&工藤愛子 0点

VS

一方通行 5322点」

「あーあ、坂本君のせいだ。すっかり周りを見ないからそうなるんだよ全く……、これで霧島さんも罰ゲームっ」と

「………雄二」

その言葉を最後に翔子も倒れていった。くそっ！俺には何もできねえのか！？

「大丈夫だア、俺がすぐに地獄に送ってやつからよオ」

「くっ、」

結局その後も避け続けることしか出来ず、ついに俺の集中力にも限界が来たように目元がくらむ。………どうして、俺には力が………

第七十三話く神の心情と妖怪たちの真実く（後書き）

ここで切ります

理由は単純、眠いからです。

感想お待ちしております、それではっ！

第七十四話 神の過去と記憶の差し替え (前書き)

今回は過去ものを書きます

神子の過去を書いてから、翔子たちの悪夢を書こうと思います

第七十四話 神の過去と記憶の差し替え

No side . . .

藤堂神子。誰もが認めた神と呼ばれる15歳の少女

9歳でハーバード大学に飛び級しそこでの全過程を1年で終了。その後は霜月学園の理事長となりさまざまな研究をしながら今に至る。している研究は道德など関係なく、人体に関する研究をしている。政府もしている事は黙認していていわばやりたい放題である。

それと同時にさまざまな結果も出している。今まで不治の病と言われてきた病気をいとも簡単に治療したり召喚システムを作り上げたりと人が知ってはいけないことまで知っていると周りからは言われる。今まで研究のためだけに多くの命を落とし続けてきた藤堂神子。失敗したときにその命を落とした人に対して流した涙のことなどに関しては誰も知らない。そのため彼女を知るものは皆こうい

．．．．．神に手を出せば殺される．．．．と。

彼女がこうなったのには理由があった．．．．それは今から7年前、召喚システムを生み出したと同時に彼女に悲劇の連鎖が起こった

8年前．．．

彼女はまだ神童であった、そのために彼女のことを嫌っている者もいれば普通に話せる友達もいた。

「ねー、神子ちゃんってさ、将来何になりたいの？」

「アタシはね．．．．．医者になりたいんだ。動物も人間も関係なく全てを救ってあげられる医者だね。」

神子と話す少女の名前はAとしておこう。Aは神子のことを良く分かってくれる年上の．．．．．言うなれば神子の先輩というやつだ。たまたまAは隣の家に越してきて学校に行くのが一緒になったりして、るうちに2人は仲良くなった。2人は学力などに差があっても気軽に何でも話せる仲であった。

「へー、流石神子ちゃん。スケールが違うよねえ、．．．神子ちゃんならなれるよ、絶対に。」

「．．．．．ありがとう、Aおねえちゃん。．．．．．Aおねえちゃん、ほつぺのところ大丈夫？」

Aのほおには引つ叩かれた後があつた。．．．．．Aの親は離婚して母親の方に来たのだが母親が最近ストレスが立っている所為なのかAに当たってしまうのだという

「．．．．．もう慣れっこだよ。．．．このぐらい」

「Aおねえちゃん．．．．．」

2人の登校中の話は小学校に着くと同時に終わってしまい、それから2人とも学校で話すことはない。精々廊下であつた時に軽く挨拶するぐらいだ。学校での神子はいったて普通の子供だ。普通に友達と話し、弄られることはあつてもやり返せる力も持っているし特にそういうのは気にしていない

この日、神子のいつも通りの学校生活が終わり一人で学校に帰る途中、黒いスーツを着た大人の人に呼び止められる。

「お譲ちゃんが藤堂神子さんかい？」

「えっ？あ、はい。そうですね・・・」

当時、人を疑うことを知らない神子は自分の名前を言われ答えてしまう

「実はね、今叔父さんたちがやっている医学の研究で召喚システムというものがあってね。」

「召喚システム？」

「そう、召喚システム。この技術が成功すると、例えば人の生死に関わる臓器のガンでもいったん臓器の変わりになるものを召喚することによって患者さんを危険にすることなくガンを取り除くことが出来るんだ。君は神童の中でも特に医学に関するものを知っていると聞いてこの召喚システムの製作を手伝ってもらいたいんだ。君を遅くまで連れ込む気もないから安心してほしい、・・・協力してくれるかな？」

「はいっ！任せてください」

医学に関する知識を持つている神子は今の話だけで成功すればより多くの生物が助かると悟り協力に応じた。・・・召喚システムが戦争に使うシステムだとは知らずに・・・

数日後、召喚システムは完成した。親にそのことを話すと親は喜んでくれた、より多くの人を救えると満面の笑みをしてる神子に対して言えるはずがなかった。・・・その研究が戦争に使われる可能性がある。そのことを恐れた両親は、レポートを神子に見せてもらいそれを科学者の藤堂薫に託し、どこかとの戦争が始まる前にそれを教育システムとして発表した。戦争の計画は表立っていないか

つたので藤堂薫を訴えることが出来ずそのまま召喚システムは教育システムとして使われるようになった。……藤堂薫が召喚システムを発表した事を神子は知り両親に訴えると両親はお前のためだということ話を話してくれた。神子はそれでもそのことを信用しなかった。

その翌日、神子が学校から帰ると家で待っているのは無残な姿で色々な所に肉片が飛び散り顔だけがテーブルの上に乗っている両親の死体だった。……犯人はその例の企業の一員だった。理由は神子の両親の所為で戦争の計画がパアになったのだから。溜まっていた涙が神子の目からあふれ出た。自分の所為で……自分の所為でと自分を嫌いになった。

神童という肩書きがあるので国が保護することとなった神子はその町から離れた。国が保護するといっても、面倒を見てくれるのは自分の地位や権力を上げたがるような醜い政治家たちであった。そして転入した学校では今までのような友達というものは作らなくなった。自分に関わる人は殺されてしまいかもしれない。当時小学生だった神子にはそのことしか頭になかった……

それから一年、人と関わらなくなったことにより勉強する分野も増え小学校を卒業する前からハーバード大学からの知らせが届いた。当時神子はたった9歳。もちろん神子はそこへ行くことにした。……ただ、その前に1つだけやることがあった。

Aや友達のいた町に戻ってきた神子はAや友達の記憶から自分に関することを消した。脳に関する知識やオカルトのことまで理解していた神子にとってそれは容易であった。願うことはただひとつ、知り合った者たちを殺されたくはなかった。特にAは神子のことをよく理解してくれるお姉さんのような存在であった。自分との記憶

を消すことは神子本人が辛い事であったが、死んでほしくないから。
．．．．．こうして藤堂神子のことを知るものはその町にはいなくなつた。

それからまた1年、ハーバードでの全過程を1年で終了する。この頃から神子は神と呼ばれるようになった。元々、学習しているところもあつたためかそこで学習は簡単だったという。日本に戻つてきて国から霜月学園を任されるようになった。そう指名した政治家は今の霜月学園は神童を養育するに値しない。だからこそ、神童である君に任せたいとの事。実際に霜月に行つて神子が見たものは酷いものだった。ちよつと教えれば簡単に生徒に抜かれそうな教師、自分の利権しか考えてなさそうな大人たち。．．．．．だからこそ、神子は大人を霜月学園から排除した。

その後、来年度この学校に入れる生徒や自分を神童と知らない者を調べているうちに一人、自分と似たような境遇の子がいた。両親が殺され、遠い親戚の保護施設に連れて行かれたその子供の名前は．．．．．長谷川芳樹。この子はきつと自分と同じような目にあつてしまつたろう、そんな事はさせたくないと言ふ長谷川芳樹に霜月学園の推薦状を送る。きつと長谷川芳樹という少年は自分のように裏の企業に目をつけられている。そんな事は絶対させない。ここに大人を入れてはいけない

長谷川芳樹も霜月に入り心のそこでホツとする神子。この頃、神子の心の中で何かが変わつていた。自分の将来の夢、Aが背中を押してくれた夢。それを目指せなくなつている。．．．．．誰の所為だ、．．．．．あの無能な大人たちの所為だ。．．．．．あいつらは何をした。．．．．．アタシにここを押し付けた。．．．．．なんでアタシはここにいる。．．．．．ならアタシはここでいるんな研究をしていいんだ。夢を壊された、その分を償わなければあ

いつらはいけない。アタシがここにいる神童や頭のいい子供たちをさらに知能レベルを上げアタシの言うことを聞くようにしてあの無能どもに叩き付けてやる。

心の中でひそかな復讐をたくらむ神子、しかしその復讐心も神童を改造したりしているうちに消えていった。・・・復讐をしてなんになる、自分が医者になれるのか？答えは否。よく漫画などで復讐しても意味がないと言われないと分からない者がいるがそれに神子は自分で気づいた。・・・ならアタシは何をすればいいんだ、復讐しても意味がない。・・・ただここにいるだけ、・・・。退屈だ、・・・出来るならあの頃に戻りたい、楽しかったあの頃に・・・。会いたい、自分を分かってくれるあの人に・・・。でも、それはできない。ここを任されたから、・・・逃げ出せるけどそれでは実験の材料扱いしてしまった同じ神童たちに申し訳ない。もう後は負の連鎖だ。

・・・どうしたらいいの？・・・どうしたら・・・
ここから抜け出せる？・・・誰か、助けて・・・この牢獄から・・・連れ出してっ！

そうして神子は暇つぶしをするようになった。・・・ここから連れ出してくれる人を求めて・・・

「こじは……?」

『じゃ、邪魔なんだよ!』

この子達は……あの時の……? 藤堂は思い出させたくない夢を見させるといつていた……ならこれは? 雄二が助けてくれた私の大切な思い出、思い出したくないはずがない。私が雄二をよりに好きになった思い出なのだから……

「ダメ……っ! 雄二が可哀想……っ!」

私もあの時の様に抵抗している。ならどうして……?

「おい、もう止める!」

「雄二……?」

そう、今のように雄二は助けに来てくれた……でも、こんなに早かったかな?

『……坂本』

「ありがとうな、お前ら。学校の前で待っていてくれ」

『お、おう……』

……? ……おかしいこの子達は雄二をいじめようとしていた。なのにどうしてありがとうなんて言つの?

「翔子、俺はお前が大っ嫌いだ」

「……え？」

「あの6年生も俺が頼んだんだ、俺のものを標的にすればお前が守りに来るからって」

「……どういこと？」

「わかってねえな、お前。お前が苛められたらお前の爺さんはどう思うよ？」

「……っ！……転校」

まさか……記憶の書きかえってこついうこと？

「ああ、そつだ。そうすりゃあお前がもう纏わりつかなくなるんだ。いい話聞かせてくれてありがとよ、それともう一回言つてやる……」

……翔子、俺は……」

……やめて、大切な思い出をボロボロにしないでっ！……
……お願いだから、……とめて……

『お前が、大っ嫌いなんだよ。』

私に向かつて放たれたその言葉は私の心を打ち抜く凶弾そのものだった。

「ここは……？確か藤堂さんの話によると記憶の中……

「へ、……さす……ちゃん。ス……え、
……んなら……るよ……」

「……とう、……えちゃん。……
、おねえ……大丈夫？」

「何この記憶は？ノイズが混じってて良く聞き取れない。これは僕の記憶……？……よく分からないけどそのまま頭の中で切り変わる。……これは、引越しのときの……」

「……アッキー……実は……私……」

「あー、泣いちゃってるよ僕。それにしてもこんなに昔のアッキーってかわいかったんだねえ。何でか記憶がいつも曖昧なんだよねえ」

「……」

「……引越し……しなくちゃ……ヒク」

「アッキーも流石にこんなんじゃないよねえ。芳樹君がこの頃を後悔しているって言ってたからもう気にしないでいいよって言ってあげないとねえ」

「……」

「……やだよ、……離れたく……ないよ」

「そうかな？、僕は清々してるけど」

え？あの時アッキーってこんな事いってないよね

「……………え？」

「あー、良かった。そっかあ愛ちゃん引っ越しちゃうんだー。」

「……………あ、アッキー」

恐る恐る、声をかける。まさか記憶の書きかえって……………

「もうその名前で呼ばないで。家が近いから遊んでただけであってちっとも楽しくなかったし、……………お前のこと」

これは本当の記憶じゃないんだと否定していても、僕は記憶が曖昧だから怖くなる。好きだったのに……………そんなこと言われたら……………

「大嫌いだから」

アッキーはいつもの無邪気は笑顔でそういった、僕はもう昔の何を信じればいいのか分からなくなった。……………好きだったのに、今付き合ってくれてるのってただの……………同情？……………それとも……………

「じゃーねー、もう会うこともきつとないよ」

僕の中の何かははじけとんだ

第七十四話 神の過去と記憶の差し替え (後書き)

順番としては愛子が先のはずなのに先に翔子を書いてしまった。・
・・・まあいいですよ、このぐらい

第七十五話とあるとの決着！〜（前書き）

昨日は更新できずにすみません

先に雄二書きます

第七十五話とあるとの決着！

「……………神子ちゃん、両親の話聞いたよ。その上手くいえな
いけど……………元気出して」

「……………う……………う……………アタシの所為で…………
パパとママが……………」

「あ、そーだ。神子ちゃん……………これあげる、引越し来る
前に大好きな人がくれたものなんだけど。」

Aが差し出したのは星の形をしている可愛いブローチ。

「えっ？」

「さすがに僕じゃあ、両親の代わりになれないけど……………た
ぶん神子ちゃんここから離れちゃうと思う……………。だから、これ
を僕だと思って……………」

「でもこれって……………大切なものなんでしょ？」

「僕はもうそれからーくさんの元気もらったから大丈夫だよ。だ
から……………受け取って、神子ちゃん」

「ありがとう……………Aおねえちゃん……………グスツ」
記憶を消した次の日以来、神子がこれをつけていない日はないと
いう。

Side in 雄二……

……どうして、俺には力が……

「どオした坂本、もう終わりか？……つまんねエな、とつととやられて寝ちまいな！」

……わりい明久、芳樹、……翔子

「いやああああ！！！」

「ッ！」

「……ちっ、辛うじて避けやがったか。」

今のは工藤と……翔子？二人が倒れている方に、顔を向けると二人は気絶していながらもブルブルと体が震えていた。……そうだ、俺はどんな事があるうとも翔子を守ると決めたんだ。そう言っておきながらこんなところで寝てるわけにはだろっがよ！

「ん？まだやるのか。……そうこなくちヤ面白くねエよなア！」

「……俺自身がどうなるうと、絶対にお前を倒し翔子を救ってやる！」

「やってみなっ！」

とりあえず突っ込んできたものはよけておく、もし当たったらそれで負けた。あの能力は正直なところ反則過ぎる、……ん？能力？……使ったびに点数が減ってるっつう事はあの能力は腕輪の能力だということ。……それなら

「明久っ！聞こえるかっ！」

『えっ？うん、聞こえるけど……』

「俺が合図すると同時に腕輪を使ってくれ！頼む！」

『っ！うん。わかった』

よしっ！これで準備は整った。後は……

「どオした、お仲間にも助けてもらうのか？そりゃあ、お前の今の点数で俺に敵う筈ねエもんなア」

「ああ、そうだよ。ほら、俺は仲間が来るまで無防備だぞ。攻撃しなくていいのか？」

「言われなくても……そうするに決まってるんだろ！」

「そうだ、それでいい。一方通行が能力を使って迫ってくる……」

「今だ明久っ！」

『了解！』

「あん？なんだあ……クケッ!？」

明久の腕輪の能力によつて、動きが止まる一方通行。俺は一方通行に拳を構えながら近くによる。

「……翔子を助けることにしかもう頭が回ってねえからなあ。手加減なんて期待すんじゃねえぞ」

「グハッ！」

「坂本雄二 総合科目 1289点

VS

一方通行 3712点」

やっと4000点を切ったか。……タイムリミットは明久が倒れるまで。……こいつ自身は能力に頼りきって大して強くないからそれまでには倒せると思うが、それでも油断したら負けそうだな。

「さあ、翔子に早く目覚めてもらおうようにちゃっちやとやるか」

Side out 雄二 & Side in 明久

「いやああああ!!」

「っ! 愛子!？」

今愛子と霧島さんの叫び声が聞こえた。2人とも負けちゃったんだ……。あれから僕と姫路さんは御坂さんと戦っている。御坂さんの武器は能力で磁力で砂鉄を集め棒のような形をした剣だ。

伸縮も出来るらしく中々相手に近寄れない。そんな時遠くから雄二の声が聞こえる

『明久っ！聞こえるかっ！』

「えっ？うん、聞こえるけど……」

『俺が合図すると同時に腕輪を使ってくれ！頼む！』

「っ！うん。わかった。……姫路さん、チャンスがあっても絶対に攻撃に移ろうとしないで回避に専念して！……時間がたてば……僕らの勝ちだ！」

「えっ！？……っ！分かりました」

姫路さんも僕がやろうとしていることに気づき答えてくれる。……もう少し、……もうす『今だ明久っ！』っ！来た！

「了解っ！」

「させないわっ！……っ、え？どうして剣が消えるのよ！？」

「姫路さん行くよー！」

「はいっー！」

「ちっ！……厄介な腕輪ね」

自分の武器が消え動揺してるところに僕と姫路さんで攻撃する。僕が攻撃して怯んだところに姫路さんが大剣を振り下ろうとするが避けられて美坂さんは一端距離をとる。自分の武器の消えた理由が

僕の腕輪の能力であることは理解したようだ。

「吉井明久 総合科目	2888点
姫路瑞希	4431点
VS	
御坂美琴	7682点

「明久君、一気に畳み掛けましょう!」

「もちろんだよ! 絶対に救うんだ。久保君を、愛子を、霧島さんを、芳樹を そして藤堂さんを!」

絶対に助けてみせる! どんなことがあるうとも 今の僕の言葉を聞いた藤堂さんがこっちに近寄ってくる。

「 助ける? このアタシを? ぷっ、アハハハハハハ!! 本当、面白い事言うねえ吉井君は助ける?、吉井君は一体何を勘違いしているんだい? アタシはこの生活が結構気に入ってるんだよ、それに助けるって何からさ。まさかアタシが美琴ちゃんたちに罪悪感を感じているとでも言うのかい? ぷっ、くっく 」

「明久君 」

姫路さんが心配そうな表情でこっちを見てくる あれは彼女の本心なんかじゃない、少なくともここから出られないというの自分を実験の材料として使ってしまった人達を置いていくことなんて出来ないから。

「変なこと考えてるねえ、モルモットに罪悪感? 感じるはずがないでしょ でもまあ、このままじゃあ美琴ちゃんたちが勝てる訳がないし まだ完全に倒したわけじゃないけど、

そつちに倒れてるみんなを元に戻してあげるよ。特別にね。ただ、ちよつと芳樹君だけ破損した記憶を直さなくちゃいけないからちよつと待っててね。美琴ちゃんも一方ちゃんも戻っていいよ……・おつとつと、ブローチが」

「……へ？……あのブローチ」

「明久君？どうかしたんですか？」

「……ん、いやなんでもないよ。それより……」

「はいっ！これで久保君たちが元に戻るんですね……勝負としては中途半端に終わっちゃいましたけど……」

この提案を出したとき、藤堂さんが自分の奥の気持ちから逃げた気がした。……あのブローチ、どこかで見たことがあるような……？まあいいや。とりあえず僕は愛子のもとへ、姫路さんは久保君のもとへ、雄二は霧島さんのもとへと行く。藤堂さんのポチツとなという声とともにみんなの目が開いていく

『大丈夫か、翔子？』

『……雄二……凄く怖かった』

『……そうか、けどもう大丈夫だ。俺が守ってやる』

『……雄二……』

雄二と霧島さんはいつも通り。雄二が震える霧島さんをしっかりと抱きしめている。雄二ってこういう時は男らしいよなあ。……それで、あちらでは……

『……う、うん。……ここは』

『目が覚めたんですね！……良かったです』

『ひ、ひひ姫路さん／＼／＼！？』

久保君の目が覚めるとともに姫路さんが抱きしめる。久保君は起き上がったただけなので久保君の顔には姫路さんの胸が当たっている。そういうことに関心がなかったのか久保君は赤面になりながら姫路さんをはがそうとしていた。……愛子の目が開いてきた

「愛子、体は大丈夫？」

「う、うーん　っ！」

ペシンッ

起き上がった愛子に僕ははたかれた。……物理的にはそんなに痛くないけど、その手からはいろいろな感情がこもっていた。愛子の目には少量の涙が浮かんでいた

「……同情なんかで好きなんて言われても……嬉しくな
いっ……」

第七十五話とあるとの決着——（後書き）

明日ちょっと早いので「」で切らうと思います

感想お待ちしております

第七十六話 記憶の混同とAおねえちゃん (前書き)

超展開(;。)!

……でもないかな? 気づいてる人多そうだし

それではどうぞ

第七十六話 記憶の混同とAおねえちゃん

Side in 明久

「……………同情なんかで好きなんて言われても……………嬉しくな
いっ……………」

愛子が起きたと思ったたら急にはたかれた。どうしたんだろう？い
つもと少し様子が違う。目には涙が少しだけ溜まってるし、そん
なに酷い夢でも見たのかな？

「……………もしかして、愛子も？」

「どづいつことだ翔子？」

「……………私は、凄く大事にしていた思い出を変えられてた。……………
……………でも、それが夢だと分かってたから……………雄二が助け
てくれるって信じてたから大丈夫だった」

凄く恥ずかしいようなセリフをサラリと言つ霧島さん。……………
つて事は、愛子の場合それが夢じゃなくて昔あったことだと勘違い
してるってこと？……………僕がはたかれるって事はそのときの記
憶かな？

「ありがとう、霧島さん。……………愛子今見てたのは夢なんだ。
僕は「うるさいっ！」「っ!？」」

「嘘だっ！……………って今のが夢？あれ？……………夢って？何……………
……………」

ドサッ

「っ！？愛子！すっかりしてっ！」

頭を抱え込んだと思っただけなら今度は気を失った。愛子の頭の中で何が起こってるの！？

「藤堂さんっ！」

「んー、なにー吉井君」

「今、愛子がまた倒れたんだ！何か知ってることない！？」

「んー、アタシがやったのは電波の送信を解除しただけだよ。実際霧島翔子ちゃんと久保利光君は無事なわけだし。……もしあるとすれば、前に一度アタシに記憶を消去されたか……っ、え？」

藤堂さんが考え込んだと思ったら座っているところから降り、こっちに駆け寄ってきた。……いきなりどうしたんだろう……
……それより

「藤堂さん、芳樹の方はほっいたらかしていいの？」

「そんなことより吉井君っ！！この女の子の名前って！！」

「今芳樹の方をそんなことよりって言わなかった！？……愛子だよ、……工藤愛子だよ」

「っ！？」

僕は愛子の名前を答える。すると……突然、藤堂さんが震えだした。そして顔の方から雫が愛子の顔に落ちる。……

泣いてる？

「どっしたの、藤堂さん？」

「……………どっして……………どっして？」

「藤堂さん？」

「……………どっして気が付かなかったんだろっ。……………
めんなさいっ！愛子おねえちゃんっ！……………うっ、うわああああ
ん！……………ごめんなさいっ！！……………ごめんなさいっ
！」

藤堂さんが泣き叫んだ。……………ごめんなさい？……………そ
れに愛子おねえちゃん？……………とりあえず僕は藤堂さんが泣
き止むのを待った

「ふわあ、っ……………どっした？」

「……………で、お前と愛子はどんな関係なんだ？神子」

すっかり回復した芳樹。どうやら僕らの方に来たときには後は時

間だけだったという。しかし僕たちとの関わりを戻すということは自分に対する服従心を消し、嫌悪感を出すということ。あの人達に勝った褒美だと藤堂さんは言った。今はところかわって霜月学園の医務室にきている。愛子をベットに寝かせ藤堂さんは、今まで溜めていた物が全部出たような顔をしている

「愛子おねえちゃんは愛子おねえちゃんだよ……アタシの家の隣に住んできた。」

「そういえば、藤堂さんって家には帰らないの？両親とか心配しない？」

「……殺されたよ、二人とも。……アタシの所為で」

「……っ！？」

僕が質問すると驚きの言葉が返ってきた、……殺された？

「こつちは常に命が狙われてるからねえ、ここから出ない理由のひとつだよ。……あーあ、何である時召喚システムなんてバカな研究に力を貸したんだろう」

「召喚システムとお前の両親が殺されたことと関係あんのか？」

雄二が質問する、

「今こんな話してる時点で気づこうよ。……まあ坂本君みたいに世間に知られてる神童には分からないか。……世間に知られてない神童は常に自身や周りに危険があるんだよ。そんなわけでアタシは愛子おねえちゃんや小学校の友達の記事を全部操作した。関わらなければ問題ない、つまりアタシと関わった記憶を全部消したわけ。……吉井君は良かったね、今まで芳樹君を狙

つてた人達に殺されないで」

「っ！、おい！それってまさか……………」

芳樹が何かに気づき藤堂さんに尋ねようとする、僕が殺されなくて良かった？……………今までの話から察すると……………もしかして

「吉井君も気づいたみたいだね……………そう。芳樹君も狙われてたんだよ、どんな企業かは分からないけど……………二の舞は起こしたくなかったな。」

「俺の両親は……………そんな理由で……………」

「でもね、そうなると空ちゃんが凄く狙われる可能性が高くなるんだ……………だから空ちゃんは成績関係なくここに入学させる気だった。結局は実力では入れるぐらいまで成長したけどね」

「私も危なかったんだ……………」

芳樹と空ちゃんは少し落ち込む。それはそうだろう、両親を殺された理由があまりにもくだらなく、しかもそれが自分が神童だったからなのだから

「ここにいてアタシがいじった神童なんかまだ良い方だよ。雄二君みたいに知られていなければ拉致や関係のある者の殺害なんて当たり前なんだから。それも表に出ることなく親が訴えても政府は何も対処してくれない……………というかアタシの過去なんて関係ないのに論点がずれちゃったな。」

「おっと、そうだった……………神子、愛子は治るのか？」

「今の科学技術じゃ無理だね、仮に何か弄っちゃえば治るところか

記憶をすべて失っちゃう」

「……ええっ!?!?」「」「」

「どうにかならないんですか!?!?」

「落ち着け久保、それに他の奴らも。……神子、科学技術と言ったな。ならオカルトは……」

「出来るよ、……でも愛子おねえちゃんの脳に入れるためのオカルトがない。」

藤堂さんはあっさりと答えるが、それも状況的に出来ないらしい

『……わしがその依り代になってやるのじゃ』

「ん?ああそうか、お前は愛子に憑いてるんだったな。おい神子、助けられるかもしれないぞ」

「ぬらちゃんさあ、愛子おねえちゃんに罰ゲーム押し付けといてどこ行ってたの?」

『愛子の体の中じゃ、何か償いが出るか探しておいたらおぬしたちの話が聞こえてのっ』

「ふーん、そうなんだ……やったね吉井君っ!愛子おねえちゃん助かるよ」

雄二と藤堂さんが何もないとところで誰かと話をしている。

「……芳樹、……見える?」

「いや、全く」

神童なら見れるということではないらしい

「えっと、藤堂さん。詳しく説明して」

藤堂さんが良く分からない僕たちに詳しく説明してくれる。なんでも愛子にはぬらりひよんと言う妖怪がいてその妖怪をデータ化し愛子の脳に入れると言う事らしい。それと別に妖怪が脳に加わったからって人間じゃなくなるなんて事は安心してと言っていた。・・・やっぱり藤堂さんは自分と対等に話せるような人が欲しかったんだ。研究していたのは多分普通に教育しても自分に届かないのは分かってるから無理やりこんな方法で・・・。。愛子は多分藤堂さんを頭が良いことを関係なしに話したりしていたから、藤堂さんにこんなにかかれていたんだろう。

「じゃあ、ちよつとぬらちゃん来てくれない？芳樹君は愛子おねえちゃんを運んで。それで君たちは・・・。。06を呼ぶから、06と一緒に応接室で待っていてくれない？」

「ちよつと待って、僕らにも何か・・・。」

「駄目だアキ、オカルトに関してお前らは無知だろ。それとも愛子が苦しむ姿を見たいか？助かるとは言ったがその仮定には何かあってもおかしくないんだぞ？」

「うっ・・・。。それはそうかもしれないけど・・・。。それでもっ！」

「少し黙ってるバカ久、お前がいると話が進まねえんだよ」

「クペッ!？」

雄二の後ろからの不意打ちにより倒れ、久保君と姫路さんが心配そうに近寄ってくる。とりあえず僕の意識はここで途切れたのでこの後の地の文は作者に任せよう

「サンキュー雄二助かった、・・・・・・・・こつでもしないと絶対に引き下がらないよな、アキの場合」

「こいつは工藤のことしか考えてなかったからな。・・・・折角記憶を戻してくれるって言うのにあつちの方に失礼だろ？」

「なんだ、気づいてたのか。・・・・・・・・じゃあ06を神子が呼ぶだろうからここで待ってる」

芳樹がそういうと神子と愛子を背負う芳樹が医務室から出る。・・・・その数分後に06はやってきた

S i d e o u t

第七十六話 記憶の混同とAおねえちゃん (後書き)

ここで切ります。明日?も投稿しますんでよろしくお願いします

感想お待ちしております

第七十七話〈愛子への決意と神子の真実〉（前書き）

予告通り投稿します

第七十七話、愛子への決意と神子の真実

No Side

「じゃあぬらちゃん、このカプセルの中に入っておいで。この中は通り抜けとかも出来ないようにしてあるから入ったらもう出られずに愛子おねえちゃんの脳に取り込まれるけど。」

『む……わかったのじゃ、これも愛子を助けるためだからのう』

泣きやんだ神子はぬらりひよんを1つのカプセルに入るよう言う。ぬらりひよんも覚悟は決まっていたようでそこまで悩んだりはしなかった。……ここは霜月学園にあるトップシークレット級の実験室、ここには世界が知らない色々な秘密が潜んでいるといわれる。普段はオカルトを使ったただの実験のために立ち入るのだが今回は違う、ただの実験などではなく一人の少女を救うために。神子はこの部屋には実験体以外の人を連れ込んだりはしないのだが実験体ではない長谷川芳樹を連れてきている

「このぬらりひよんとか言う奴が入っているカプセルはこの装置につなげる？」

「あー、それはその右から二番目の奴に差し込んで……待つててね、愛子おねえちゃん。……絶対に助けて見せるから」
そもそも神子の夢は人を助けるのが仕事の医者であった、その目は愛子を手にかけてしまったという絶望とそれに対する償い。助け出すという決意の三つが混ざったような目をしている。しかしその全ての先は1つにつながっていた。

「……じゃあ始めるよ、芳樹君も教えたことがあるから少しは手伝えるよね」

「じゃなかったら、アキたちと一緒に向こうに行ってるはずだろうが。……それで取り戻す記憶はどうするんだ？」

「生まれた頃からの記憶でアタシが消去しなかったところを全部」

「おい、せっかく再開できたのにお前との記憶は残さないでいいのか？」

「いいよ、消したのはアタシ自身だしアタシの所為でこんなことになっちゃったんだもん。これ以上の無理は言わないよ。」

「そうか……じゃあ、お前の罰ゲームを受けた前に戻せばいいんだな。どんな感じになってたんだ？」

「よく記憶を例えるのにタンヌみたいな入れ物があって引き出す回数が少しずつ減っていくから覚えていられなくなるって言うじゃん。記憶の消去といってもアタシが前にやったのはその入れ物に嚴重に鍵をかけて思い出させなくするもの。さっき罰ゲームを受けたときにそれが入れ物をこじ開けようとして人間の防衛本能が始末しようとして入れ物自身に傷が付いたって感じになってる。だから入れ物の修復をオカルトでやればそれで終わりだよ」

「……面倒くさい説明を簡単そうに話すな。」

「まあ早く始めよ、ぬらちゃんにも変な時間を待たせたくないしさ」

「はいはい……っつと」

神子が自分から目を離したとたん、芳樹は考える。．．．．婆
が言つてた神子に楽しさを教えてやることについて。もしここで完
全に愛子が神子のことを思い出さなくなつたらこいつは二度と俺
たちみたいな奴らも呼ばないで一人でいるだけなんじゃないのか．
．．．。確かにこいつがやつてたことは世界的にも許されることじ
やない、それでもこいつは世界のために世界と立ち向かつてた．
．．．なら、俺は．．．．

2人の愛子を救うための実験が始められる。．．．．一人は成
功と諦めを、もう一人は成功と可能性を思い求めながら．．．．

数時間後．．．．

「．．．．手術？は成功したね。じゃあ、アタシは吉井君たちを
呼んでくるから芳樹君は愛子おねえちゃんをさっきの医務室に連れ
て行って」

それだけ言うと、神子は部屋から出て行く。．．．．芳樹が横か

ら見た彼女の顔は諦めと後悔、絶望の混ざったような顔をしていた。
……芳樹は彼女が戻ってこないことを確認すると、再び席に
着く

「……………俺もあいつに助けられたんだ。……………だったら
俺が助け返してやる」

S i d e i n 明久……………

「……………うーん、……………はっ！？愛子は！？」

「今手術中だ、とりあえず俺たちに出来ることは何も無い。ほら、
これでも食っとけ」

僕が起き上がって愛子の事を確認すると、雄二が簡潔に答えてく
れた。それと同時に僕に1つテーブルの上に載ってたお菓子を放り
投げる。ここは応接室って確か言ってたよね……………

「……………Aクラスの設備より凄くない？……………あっ、美

味しい」

「……それでは、吉井様も起きた事なので先ほどのことについて話しましょう」

「06さん？それに上条君に御坂さん、一方君まで！？」

よく周りを見ると僕たちだけでなく、先ほど戦った人達もいた。

「ああ、別にもう戦おうなんて考えちゃあいないから安心していいわよ」

「え、えっとこれは一体どういう……」

「吉井が起きたら俺たちが神子様に従っている理由みたいなもんを話すって事だ」

「っ！？」

上条君が簡単に今起きていることを教えてくれた。……藤堂さんに従っている理由？……っというか従っている？操られてるんじゃないの？

「……私こと06以外の番号の皆様は操られておりません。私も操られていると言いましたもこの口調だけです。相手を招くのに口調が丁寧でなかったら申し訳ないでしょう？」

「そもそもね、私たちはみんな神子様に創られたのよ」

「「「「っ！？」」」」

「それだと藤堂さん自身が君たちをお気に入りの神童って言った

けど、それも嘘ってことになるよね。」

「いいや、それは本当だ。俺たちはその神童の遺伝子を元に創られたいわばクローンなんだ。」

僕が質問すると上条君が答えてくれる、先ほどから話をするのは上条君と御坂さん、それに06さんの三人だけだ。じゃあ、一方君は2人に連れてこられたという感じなのか

「私たちだけじゃない、神子様の部屋の前にあんたたちが見たあの残骸もみんなクローンで戸籍に残っているような私たちの元の人達には何も手をだしてないわ。皮膚からちよつと細胞を取りはしたけど」

「そ、それじゃあ藤堂さんは誰も実験で殺したりしたことはないんですか？」

姫路さんが質問すると、上条さんと御坂さんは少し戸惑う。しかし06さんが何のためらいもなくこう告げた。

「殺しましたよ……私たちクローンと猫を一匹、それにご両親を。ご両親は神子様自身が手を出したわけではありませんがきっかけを作ってしまった」

「それは聞いたけど……猫かい？」

「はい、私たちクローンを創ったきっかけも猫です……私たちも詳しくは知りませんが神子様が持っていた将来の夢というものが医者だったそうです。人だけでなく他の動物も同様に救う医者にしかし、ここでやらされた実験によりモルモットに選ばれた猫を殺めてしまったのです。その猫の墓はこの学園の庭にしっかりと残っております。神子様への遺産として……」

「ちょっと待ってください。．．．やらされた？」

「はい。少し前まではクローンを創るによりさまざまな実験を自分からなさっていますが、昔は大人に強制的にやらされていたそうです。クローンを創りモルモットに困らないと最初は思ったのですが、今ではクローンにも意思があり命があると思いはじめクローンを創る段階で色々な手を施していると聞きます。」

「．．．．．最初は藤堂さんは他の命なんてどうとも思っていないように見えたけど、その仮面の一つで．．．．命の尊さを誰よりも知っている人なんだ。．．．多分創ったクローンに対しても実験に失敗してそのクローンを殺めたとき凄く悲しんだんだろう」

「．．．．．それで？そんな話を聞かせて俺たちに何をやらせたいんだ？」

「．．．．．率直に言います、神子様を外へ連れ出してください。私たちを生み出した所為で神様はさらにその重みを感じるようになりました。創ってくださいました神様が苦しむことが私たちにとても苦しいことなのです。」

「だから私たちのことはもう大丈夫だから、私たちもしっかり人間として自立していくから神子様にも人生というものを楽しんでもらいたいのよ」

「．．．．．創って貰った例もあるしなア」

「俺たちは．．．．．神子様の縛る鎖を解いてやりたいんだ」

四人が思いが伝わってきた。．．．この人達は藤堂さんの近くに自分たちいるから藤堂さんの思いが嫌と言うほど伝わってくる

んだ……。僕は自然と口が開く

「……………大丈夫ですよ」

「え？」

「芳樹は藤堂さんが起こそうとしている戦争を止めると言ってますけど、ここまで命の大切さを知る人がそんな事するはずないですもん。それなら僕たちがここに来た理由はひとつ、……………学園長が言ったとおり藤堂さんに子供の楽しさを教えることです。……………楽しさを教えるために、ここから出してみせます。」

「……………っ！……………ありがとうございます、私たちに出来ることがあれば何でも申ししてください」

「よ、吉井様だなんて改めないでいいよ。それより僕はそうするけどみんなは……………？」

皆の意見を聞かないで話を進めちゃったんだ、

「……………まあ、ここまで来たんだから最後までは付き合ってやる
よ」

「……………雄二がそういうなら私も」

「酷い目にはあわされたけどね、でもそんなあの子の持っているものに比べれば断然と軽い。僕も協力するよ」

「じゃあ決定ですね！みんなで藤堂さんを無理やりにも外に連れ出しましょうー！」

「みんな……ありがとう」

僕が振り向くと全員が協力してくれるといつてくれた。……
本当にいい友達を持ったなあ。藤堂さんにもこういう楽しさもある
って事を教えればいいんだよね。なんとしてでもやってやるうじや
ないか！

「……本当にありがとうございます、……神子様が戻
ってまいりました。私たちもそろそろ行くとします。行きますよ
5、07、09」

三人はそれぞれ「今度メアド教えなさいよ！」「またどつかで会
おうな」「また学園に戻ったら司会やらしてもらうからな！」と
いって06さんの後を付いて言った

「……06たちが何言ったかは分からないけどさ。とりあえ
ず愛子おねえちゃんの手術？は終わったよ。芳樹君に医務室の方に
運ばせてるから着いて来て」

むちゃくちやに走って道に困ることになりそうなので着いて行く
事になっていた。……愛子が無事になったら皆で手を差し伸べ
るんだ。……なんとしてもこの子を外へ連れて行くんだ。

第七十七話、愛子への決意と神子の真実（後書き）

こんな感じでしょうか

愛子、次回復活

感想お待ちしております

第七十八話、クローンとピンタと愛子の目覚め（前書き）

塾が始まって中々更新できません・・・待っていただいた皆様
お待たせしました

オリストもそろそろラストパートです

時間ぎりぎりで更新しているので話もぐだぐだ感が強くなっている
と思いますが気にしないで下さい。気にしたら負けです・・・
私の

それではごっご

第七十八話 くローンとピンタと愛子の目覚め

Side in 明久……………

僕たちが来たのは先ほどまでいた医務室。ここに先に芳樹が待っているはずだったのだが……………

「……………芳樹君遅いっ！一体どこで何やってんのよ、まさか迷ったとかなんて事はないでしょうね……………」

「藤堂さんもさ、落ち着いて……………ね？」

「落ち着いてなんかいられないよ……………これから、実験の最終段階に入るんだ……………そもそも君たちが帰るのが遅くても3時ぐらいだと思ってたのにさ。もう8時だよ！」

「全員集合っ！」

僕がそういうと一瞬にして沈黙が場を制する……………あれ？少しでもこの重い空気をなくそうと思っただけ……………逆効果？

「……………明久、場を和ませるのにももうちょいマシなネタはないのか？」

「……………なんかごめん」

僕が謝ると同時に部屋の扉が開く……………芳樹が愛子を背負って

「いやー、遅くなって悪い。ちょっと色々あってな」

「それでも遅すぎるでしょっ！……もしかして芳樹君……まさか愛子おねえちゃんを……」

「……まさかな」

「芳樹……やってないよね？」スッ

「違えよ！っていうかアキはさりげなく上げた拳を下ろせっ！俺は何もやってないっ！」

「じゃあ……何してたの？」

「……ここに来る途中に友達にあっただよ。ここにいた時間の」

「そういえば芳樹もこの生徒だったんだっけ……っ！……藤堂さんに操られてたっけ……」

「……芳樹も……その……クローンだったりする？」

「「っ!?!」」

「僕が尋ねると芳樹と藤堂さんが驚く。もしかして話しちゃいけないことだった？」

「……そっか、さっき06たちがいた時にそのことを聞いたんだね」

「……アキ、俺は……」
「……クローンじゃない」

「誰もそんなことやらないよ!! / / / / /」

「というか僕以外の奴がやるとか言ったらそいつは生殺しだし・
・
・」

「へえー、吉井君って結構独占欲が強いんだあー。」

「げっ!?!? 藤堂さん、もしかして読まれちゃった?」

「うんと頷く藤堂さん。 お願いだから何も言わないでよ。
・」

「ん? 神子、アキは何を考えてたんだ?」

「何でも『僕以外の奴がやるとか言ったらそいつは生殺し』だって
さ」

「いやあああああ!! / / / / /」

「何さらっと言ってんの!? ほら、ニヤニヤしてるのが芳樹と雄二
だけじゃなくて霧島さんとか姫路さんとか久保君まで
って久保君!?!? 久保君までこういう時悪乗りするよう
な
ったと言うか」

「アキも言うようになったな」ニヤニヤ

「まあ明久だしバカだから神子がいることを忘れて 翔
子、どうして俺の腕をつかむ!」ニヤニヤ (; . . .) !

「 雄二も吉井みたいに、」ググググ 雄二を引っ張る音

「明久君 愛子ちゃんをお大事に ぷっ、くくく」ニヤ

ニヤ

「こういう状況じゃしょうがないんじゃないかな……」「ニヤニヤ
みんなー！ー！信じてたのに！」

「それじゃあ吉井君 アタシたちは向こうに言ってるから愛子おね
えちゃんのことをよろしくねー」

「ちょ、ちよつとまってー！ー！……何これ？キス
しないと先に進まない状況？」

とりあえず僕はキョロキョロと周りを見渡す。よし、雄二たちの
気配はない！……でも本当にこんな形でいいのかな？僕の体はそ
う迷いながらも愛子の顔に近づいていく……後5センチ……

4……3……2……1

パッ

「^へ？」

あと1センチのところで愛子の目が開く。目がきょんとしてい
る事から察するに目の前に僕の顔があったことに驚いているのだろう

「……………ツ！！！！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／」

バッチー！

寝ている状態での愛子から強烈なビンタを食らう。先ほど受けたものより、物理的には痛かった

「くっくっく……アハハハッ!!!」

「……………それにしても災難だったなあ、アキ……………ぶっ」
今の僕の顔には、しっかりと愛子のビンタの跡が残っている。……………
・ビンタの音が響くとともに芳樹たちが入ってきたのだが、なんでも藤堂さんが持っていた医務室についているカメラで僕らの状況を見ていたのだという。

「……………つたく、アッキは……………もうっ」

「……………ごめん愛子……………」

それにしても、藤堂さんはどこに行ったのだろう。今この場にいるのは僕、雄二、芳樹、久保君、姫路さん、霧島さん、それに今目覚めたばかりの愛子。もしかして罪悪感でも感じているんじゃないか……………
……………さっきまで笑っていた芳樹が口を開く

「さて……………笑い疲れてきたしそろそろ出てきたらどうだ……………神子」

「・・・・・・・・」

「まあお前が今のままに逃げ続けようが、少なくとも会ってみる価値はあるんじゃないか？」

芳樹がそういうと藤堂さんが出てくる。下を向いて少しずつだがこっちに近づいてくる。・・・・・・・・愛子の方を見ると愛子はいつもの明るい表情で藤堂さんに言った

「久しぶり、・・・・・・・・神子ちゃん」

第七十八話、クローンとピンタと麗子の目覚め（後書き）

ここで切ります

感想お待ちしております

第七十九話〈記憶の再生とそれぞれの和解〉(前書き)

とりあえず連続更新です

第七十九話 記憶の再生とそれぞれの和解

「久しぶり、……神子ちゃん」

藤堂さんが愛子の方へ寄ろうとすると愛子から藤堂さんに声がかける。……神子ちゃん？もしかして愛子……記憶が……

「……え？…何でっ！どうしてっ！？…アタシは確かに……っ！まさか芳樹君！」

「ご名答、愛子の記憶は俺が戻してやったのさ。遅れた本当の原因もそれだ」

「いやー、神子ちゃんが学園長のお孫さんだったとはね。ぬらりひよんさんを通して芳樹君に聞いたときは驚いたよ」

なるほど、芳樹が藤堂さんがこっちに來てる間に藤堂さんがした手術？の上からまた手術？をやったんだ

「神子には借りがついさつき出来たからな。しっかり返して……どうしてこんな事したの！？」

「どうして……？…死ぬかもしれないんだよ！いくらオカルトの容量を使っつて言っつてそれには限界がある。もしそれで愛子おねえちゃんが死んじゃったらどうするつもりだったのさ！ただでさえここで会う前にアタシの事は知ってたんだから、絶対に記憶と脳の解析が追いつかないんだよ！……だから……だからアタシは希望を捨てても愛子おねえちゃんを確実に

助けるようにしたのに……」

「……そうだ。藤堂さんにとって何よりも命を失う事はこの世で一番嫌なことだったんだ。目の前で命がなくなる位なら自分を捨てても助けてあげようとする。……あれ？」

「どうして芳樹は笑ってるのさ」

「ん？ニヤついてたか。悪い悪い、いやー初めて神子に勝ったと思っただけな」

「……なに？そのアタシが出来なかったことが出来たから勝ったつもりでいるの？」

「そうじゃねえよ。……俺のやり方なら、愛子が助かる確率は100%だったからな。やり方と言うか神子が気づかなかったことがあるって言った方がいいのか？」

「ん？藤堂さんのやった記憶を諦める事以外にしっかりと助けられる方法があつてそれを芳樹がやったって事？」

「……どういう意味さ」

「お前、愛子の記憶を治すのにぬらりひよんのデータを全部使ったと思ってるだろ？……お前が出た後な、俺はどうやって愛子を手助けしようか迷ってたんだが画面上にぬらりひよんの使っていないデータが残ってたな。そのデータの中にぬらりひよんの意思や記憶が残ってたんだよ」

「……まさか、それをもう一度愛子おねえちゃんの脳に送ったって事？」

「そうだよ、そもそもぬらりひよんは妖怪の中じゃかなり上位クラスだからそんな簡単にデータ全部使い切るはずがないし画面上でならぬらりひよんと会話も出来たからな。愛子を助けるために必要な事を伝えて愛子の脳に送ったんだ。愛子の脳はぬらりひよんのデータで外部からの接触にも強くなってたからな」

「それで僕が眠ってる間にぬらりひよんさんが僕の頭の中で起こってることを教えてくれたって訳」

芳樹の説明に愛子が付け加える。．．．．．なるほど、さっぱり分からない。愛子がベッドから降りて藤堂さんの方に向かい．．．

「．．．昔みたいにもたあそぼっ」

そういつて手を差し伸べる。．．．．．これは僕たちがやってもだめなんだ。藤堂さんの事を分かった愛子だから出来る事。

「．．．．．無理だよ」

「えっ、どうして？」

「アタシはここから離れられない、いや離れちゃいけないんだ。さっきの06とかはアタシが創った、だから創った責任も含めてアタシは全部背負わなくちゃいけない。．．．．．それに」

「それに？」

「．．．．．殺されちゃう、ここから出たら．．．アタシを狙う大人達が．．．．．怖い．．．怖い」

「『っっっっ』」

「……どうして今まで気づかなかつたんだろう。藤堂さんはその才能ゆえに両親を亡くし、友達との記憶も消し、大人の入れないここ（霜月学園）を作り上げた。……全部の原点はここにあるんだ、上にいる者に対する恐怖。神となって上に目指すものがないというのも、あくまでこの中だけの話なんだ。いくら頭が良くて藤堂さんの関わる大人たちには権力と言うものがある。酷い話だけど権力がある限り上には逆らえない。……藤堂さんの体が今まで以上に大きく震える」

「……怖い、……外を歩くとみんなアタシを狙ってるんじゃないかって言う錯覚に惑わされる。……だからここに呼ぶ人もアタシが自分で決めてきた。みんな死んで欲しくない……芳樹君も……吉井君も……空ちゃんも……愛子おねえちゃんも」

「……大丈夫だよ」

「……え？」

「僕も死なないし神子ちゃんだって死なない、それにここにいるみんなだって。そんな簡単に死んで溜まるもんか、僕だってまだアツキーとだって付き合い始めたばかり出しそれに……せっかく昔の友達に会えたのに」

「……でも、……「コーラッ」？」

「おねえさんの言う事は聞くもんだぞっ……なんてね。僕たちだって死ぬために神子ちゃんと関わりようとしてるわけじゃないんだよ。……神子ちゃんと遊ぶために、関わりようとしてるんだよ」

「……………うう……………うわああああああああんっ
！」

藤堂さんは泣きながら愛子に抱きつく。愛子は少し笑い藤堂さんの頭を撫でて上げる……………なんだか、本当に姉妹みたいだな……………。それにしても……………さっきの藤堂さんの言った事を考えると……………どうするべきか……………。

「失礼します……………神子様」

「あ、06さんどうかしたんですか？」

「はい、神子様を外へお連れするための準備の話を……………」

「準備かい？」

「そうです……………準備と言っても少し手続きをするだけなのですが……………」

「ちょっと待ってくれ、まだ神子も承諾してないし勝手に話を進められても困るから神子が泣き止んだらその説明をみんなにしてくれ」

「承知いたしました」

藤堂さんはまだ愛子に抱きついたままている……………。僕は藤堂さんが泣き止むのを待った。

「大丈夫神子ちゃん？もう落ち着いた？」

「………うん」

藤堂さんの顔にはしっかりと涙の後がある。………研究をしているとき、いったい藤堂さんはどれだけの涙を流したんだろう………

「まあこれで、神子が泣き止んだことだし詳しく聞かせてくれ06。」

「承知いたしました。………では、まず神子様が外に出たがらない理由の1つには周りの大人から狙われるという恐怖です。恐怖心は自分で取り除かなければなりません。神子様がずっとこの霜月学園にいますと言っ事にしてしまえば狙われる事はなくなります」

06さんが言った事を簡約すると、藤堂さんは外に出ているけれど狙う人達は外に出ていないと思っているため狙われる事はないと言っことらしい

「………06、あんた達はどっするの？」

「もちろん時が来るまでこの学校に居続けます」

「そんなのアタシが許すわけ「神子様」………何？」

いつもと変わらぬ表情でいう06さん。その言葉に藤堂さんが少

し怒ろうとするが06さんに止められてしまう

「……私どもクローンはあなたに創られました。確かに合法でない手段で創られた私どもにはこの国の民とは認められないでしょう。……しかし、私どもは創造主であるあなたにすべてを背負わせたくないのです。」

「でも……あなたが自由になれると言うのならこの命、今ここで絶つても構いません。私だけでなく他のクローンも皆同じ気持ちです」……本当にいいの？」

藤堂さんの言葉をふさぐように06さんが話す。……なんと言うか凄いい気迫だった。それほどまでに……

「何がでしょうか」

「アタシは多くの罪を犯してきた。06たちクローンの事だっとうだし……。みんなが思うような人でもないし、そんなアタシが何の罪も償わずに自由になつていいの？」

……この言葉には流石の06さんも沈黙する。……犯した罪は償う、それが当たり前だ。僕は自然と口が開く

「……確かに罪は償わなくちゃいけないものだけど……僕は藤堂さんに罪なんて感じない」

「はあ？吉井君は何を考えてるの？今まで法に触れる色んな事をしなくてそれで罪がないだなんて……」

「罪はしっかりと償ってから外へはでるべきだと思つ。でも藤堂さんはきつと色々な罪を犯すと同時に償ってきたんだよ。……クローンたちに対しても、殺してしまった猫に対しても……」

じゃなかったらここまで精神的に追い詰められないだろうし、僕たちだって無理やり外に出そうとしない。」

「……………」

僕の考えが届いてくれたのか少し悩む。……………ここで愛子が藤堂さんに声をかける

「ねえ……………外に出たいと思わないの？。僕たちも一緒に行くから怖くはないし、神子ちゃんはずっとここに居たわけだけど自分で体感しないと分からないこともきつとたくさんある。何より……………楽しいよ」

「っ！……………」

「もう一度聞くよ……………外に出たくない？」

「……………出たい」

「うーん？聞こえないなあ……………」

「出たいっ！」

……………うーん、流石愛子は昔一緒だけあって藤堂さんの扱いが上手だなあ

「じゃあ、早く行こっ！」

「……………あ、ちょっとまって……………みんなにお礼を言わないと」
「ここでいうみんなと言うのはクローンの事だろう。2人の馴れ合いは見ていただけで微笑ましい」

「早くしないと行っちゃうからねー」

「あ、待っててよー、愛子お姉ちゃん。．．．．．って愛子お姉ちゃん医務室から出ちゃったけど絶対道に迷うって!．．．．．06に吉井君たちも愛子お姉ちゃんの所に行つてそのまま校門の前で待ってて!」

「．．．．．うん、でもどうして校門の前で?」

「．．．．．お婆ちゃんにも謝らないといけないから。．．．それじゃっ」

藤堂さんは行つてしまった。表情はきたときのような色々な感情が混じつてるようではなく、嬉しさに満ち溢れているなんとも見た目にぴったりの表情だった。．．．．．さてと、僕も愛子を追いかけるとするかな。．．．

第七十九話〈記憶の再生とそれぞれの和解〉（後書き）

ここできつて、次回で完全に終わると思います

ただ……その後どうしよう

とりあえず余談集を入れる予定ですがどれからやったもんか……

？木下双子の入れ替わり 芳樹×優子のフラグ立ち

？ムツツリー二の新！日常 ムツツリーニ×？のフラグ立ち

？バカと本音と召喚獣編 芳樹×優子のフラグ大、もしくは確定

この三つからアンケートをとりたいと思います。期間は土曜日が終わるまでの間です……これで見ると？の後に？は確定だと思っ
と思います、別にどっちからやっても変わりはないんで。ただ原
作沿いにしているだけです

で、それが終わったらテスト編（新装備のための）で召喚野球とな
って行くと思います

感想& a m p : アンケートお待ちしております

第八十話 神子と遊びと後日談 (前書き)

はい、タイトルの通り最後は後日談で締めくくろうと思います

それではどうぞ

第八十話 神子と遊びと後日談

Side in 明久

あの後、藤堂さんは学園長に今までのことを謝り僕たちの説得によつて学園長のところで住むことになった。中学をどうするかは決まっていらない。どこにするにしても高校は文月学園でシテムの手伝いをさせられるらしい。不快に感じた藤堂さんだったが、成績さえ良ければどんなところの推薦でも出してくれるという話を聞き承諾した。……あの上限のないテストを藤堂さんが受けたらどんな驚異的な数値になるんだろう……？

その事件から数日たち、今日が最後の停学日……

「あ、アッキーツ！こつちこつちっ！」

「遅れてごめん、僕が……最後かな？」

「……そうだ、こんな日ぐらいは送れずに来いよまったく……」

「ごめんごめん」

……にもかかわらず僕らは普通に町を出歩く。学園長が約束通り停学中の課題を無しにしてくれたため、ただの休みのように遊びまくっていた。……もちろん少しは勉強もしたけど。今ここにいるのは僕、愛子、芳樹、空ちゃん、それに……

「……………って、あれ？藤堂さんは？」

「……………神子ちゃんね……………アハハ」

「アキ、下をしてみる」

藤堂さんのことを言つと愛子は苦笑いし芳樹がなにか言ってくる。
下？

「……………ちやお」

「……………」

言葉が出ない……………僕が下を向くとそこには白い布に包まれた何かがあった。中からの声から察するにこれが藤堂さんでいいの？

「ねえ、どうしてこんなことになってるの？」

「霜月抜けてからは今までずっと婆の家に行きたる？実際のところ、本当に外に出るのは今日が初めてなんだ」

「それで急に……………本人が言つには緊張と恐怖が混ざってるような感じなんだってさ」

「なるほどね、どつりで周りから視線が集まっているわけだよ」
「ちなみに通りすぎる人みんなが必ずこっちを見てくる……………」
「この状況って僕たちがいじめてるのか思われてない？」

「……………じゃあ、よしっ！このままどっか行こうっ！」

「……………ええっ（はあぁ）！？」

「だってじゃないと集まった意味ないじゃん。じゃ、行こうか」
藤堂さんを放置したまま空ちゃんを引っ張ってどこかに行こうとする愛子……ってこのままで良いの!？」

「……うう……アタシが悪かったよ、だから行かないでええ!」

「うわっ!？」

「……流石愛子といったところが、神子の使い方を熟知してやがる」

愛子が行こうとすると、白い布から藤堂さんが飛び出し愛子の元に行こうとする。白い布は僕にかかる……って、これ白衣! ?しかもでかつ!

「そっぴやあいつはまともな服も持ってないって婆が愚痴ってたな」

「……うう」

「おー、よしよし。……アッキーにヨッシー、とりあえず神子ちゃんの服買いたいんだけど良い?」

半分泣き目状態の藤堂さんを撫でながら愛子が僕たちに言う……僕はそれで良いと告げると芳樹も同じ事を言った。……ただ、女の子たちだけでいるのはちょっと心配だなあ。愛子と空ちゃんはかなり可愛い部類に入るし、藤堂さんだって十分可愛い。ナンプアされたっておかしくはないだろう

「ん、ありがと二人とも。そっぴや、空ちゃんも来て一緒に神子ちゃ

んを可愛くしようよ」

「うん、勿論」

愛子は二人を連れて行く。……藤堂さんはかなり背が低いので親子にも見えなくはない

「じゃあ女子の準備が済むまで俺らはどうする？」

「……愛子たちの近く」

「わかった、でもなるべく面倒は避けるよ」

この後、愛子たちに近寄ろうとした輩を片っ端から潰していったのは言うまでもない

「お待たせー、いやーたくさん買ったよ……」

「……はあ……はあ……それは良かったね」

「アキ……お前結構大変な女捕まえたな」

片っ端と言うのには流石に疲れた。……幸いこっちは外見に損傷が無かった為、愛子たちには何していたかが気づかれてい

ない。

「はぁ……だから明久おにいちゃん……見えてるって」

「アキの馬鹿……何のために付きやっただよ俺は……
つて明久おにいちゃん？」

芳樹がそう質問すると、藤堂さんは少し顔を赤らめて顔をプイッと横にむける。藤堂さんは今買ってきたものを着ている。黒いパーカーを羽織り、中には白いシャツが見える。パーカーの黒が上手く藤堂さんの光沢のある青色の髪を強調させていてまさに何とも言えない。

「……何とも言えないならじろじろ見ないでよ……
ずかしいから」

「わっ！ごめん……べ、別にそんなつもりじゃ……」

「落ち着け、それとこいつの前では何も考えないのが得策だ」

「神子ちゃんの服も買えたし次どこ行く？」

愛子がここでその話題を切ろうと次行くところがあるかをみんなにたずねる。……折角だから藤堂さんの行きたいところに行けば良いんじゃないかな？

「じゃあ、私クレープ食べたいっ！」

「空は黙つとけ、……神子は何かやってみたいものとかあるか？」

芳樹が空ちゃんの意見を軽くスルーし藤堂さんに何がしてみたいかを聞く

「うーんとね・・・っ！・・・それじゃあ」

それからは本当に遊んで遊んで遊びまくった。どこに行っても
凄いと思ったのは藤堂さんの才能だった。

例えばゲームセンターだと僕と芳樹が一回やったのを見て、
それだけで未経験のはずなのに僕は負けてしまった。周りの人達が
『帝王吉井が負けたっ!?!』 『なんなんだあの女は!』 見たいな事
になったのでプリクラだけ撮ってすぐさま逃げた。

その後お昼を済ませてからカラオケに行った。この人数で3時間
は短いかなと思ったけれどその後他のもので遊ぶ予定だったので
結局3時間でやった。ビリが一位の言う事を3つまでなんでも聞く
形式でやったのだが、藤堂さんも知っている曲を歌いそれを全て1
00点という1位確定の点数を取り続け僕は罰ゲームを受けること
になってしまった。僕も正直そこまで歌は下手糞ではないと思うん
だけど90点後半を出し続けるみんなに敵う筈がなかった。

・・・その後もう遊んだり買い物したりし続け夜になった。

藤堂さんはまだ遊ぼうというのだがそれはさすがに学園長が心配す
ると思い今は帰路。

「ふー、結構遊んだね・・・」

「もう夜だしね、集まったのが・・・午前中の9時ごろだった？」

「一日がこんなに早いだなんて思ってもみなかったよ」

女子三人は今日やったことの話をしたりしている。・・・僕は
らはもちろん

「・・・荷物もちなんだよね。いいよね芳樹は、空ちゃんの
分だけで」

「まあお前に比べればましだよな・・・そういえば神子は神無
月中に入るって聞いたぞ」

「そうなの？空ちゃんもいるんだし良いんじゃない？」

「そうか、空が神無月中生徒だったことすっかり忘れてた・・・
って、あれは　　優子？」

「あつ、本当だ。おーい、優子ーっ！」

木下さんとはあるお店の前できよきよきよしていた。優子が叫ぶ
とビクリと跳ねこちらに気づく。・・・とあるところは・・・
・木下さんの名誉のためにも言わない方が良かったろう

「なんだ優子？また新作のBL同人誌か小説でも・・・ってぎゃあ
あああああああ！・・・」

「あんたはいちいちそういう事を言うなって言うてるでしょ！・・・

・・・ってどうして長谷川君？それに吉井君まで・・・。課題は終わらせたの？というか後ろの中学生と小学生は・・・？中学生の方は見たことあるけど・・・。」

小学生というのは藤堂さんのことだろう。確かに背もそれぐらいしかないし初めて見る人はそう思うのが当然だろう

「アタシそんな背ちっちゃい！？・・・小学生っていわれたあ・・・しかも明久おにいちゃんにまで・・・。」ぐすん

「わああっ！ごめん神子ちゃん」

僕がこう呼んでいるのは先ほどのカラオケのときの命令。一つ目荷物もちで二つ目がこれ。最後のはまだ言われてないけど・・・何されるんだろう？

「ああ、優子は神子ちゃんのこととは知らなかったね。背が高い方はヨツシーの妹の空ちゃん。・・・あの背でも一応来年高考生なんだけど、そっちが藤堂神子って言って私の友達。」

「あら、そうだったの？ごめんね、えーと藤堂さん？・・・とりあえず、あたしの名前は木下優子。愛子や吉井君たちと同じ文月学園の生徒よ。また会った時はよろしくね、それじゃあ」

僕が撫でている神子ちゃんに向かってそういったらすぐに立ち去ってしまう木下さん。その後には見事に全ての関節を曲げられた芳樹の死体が置いてあった。それを見て空ちゃんが言う

「ふーん、兄ちゃん。あの女の子の事が好きなんだ。」

「？、どうして？」

「だって兄ちゃんって悪ふざけ出来る異性の友達が少ないし。あの

感じだといつもやられてそうだから、それであれだけされて縁切らないって事は……ね？」

さすがは妹と言ったところなのだろうか。そういえば芳樹って彼女ほしいとか言っておきながら全くと言って良いほど女子と2人で話してるところを見たことがない。

「あ、そうだっ！……明久おにいちゃん……最後の命令。」

「ビグッ！……なんで御座いましょうか」

「ちょっとみんなの前では言いにくいから……こっちに来てくれない？……あ、愛子おねえちゃんたちは先に言っていていいよ。2人で話したいから」

少し不安な顔になりながらも復活した芳樹と空ちゃんと一緒に先に言ってくれた

「……それで、最後の命令って言うのは？」

「……うん、……明久おにいちゃんは愛子おねえちゃんと付き合ってるんだよね」

「そうだよ」

「即答できるのは凄いな……。それで最後の命令は……ずっと愛子おねえちゃんだけを見ていてあげて」

？、どういう意味で言っているんだろう。

「アタシの隣の家に愛子おねえちゃんが引っ越して来たって言うのは知ってるよね」

「うん、．．．あ、いつもしてるブローチどこかで見覚えあるなと思っただけが愛子に昔あげた．．．．」

「そうだよ、アタシの両親死んじゃった時にくれたんだ．．．．今はどうか知らないんだけどそのとき、愛子おねえちゃんは親から暴力を受けてた。」

「っ!？」

「そんな時でもアタシの為に何時でもニコニコしていてくれた、でもそのままにいるといつかは爆発する。もつしたのかも知れないけど．．．．」

「．．．．」

「もしかしたら、まだ溜まっているのかもしれない。だから．．．．愛子おねえちゃんのことを見ていてあげて。きっといつでも支えになれるのは明久おにいちゃんだけだから」

「．．．．分かった、いつでも愛子の支えに慣れるよう．．．．」

「愛子が．．．．親から暴力を受けていたなんて初めて知った。それでも愛子はそんな中で神子ちゃんの支えになり続けた．．．．きっと僕だからこんなお願いをしたんだろう。絶対に愛子は守ってみせる」

「．．．．このとき、僕の心の中がまた．．．．前のようにな

った気がした。

第八十話 神子と遊びと後日談 (後書き)

はい、これでオリストーリーはこれで終わりです。

途中途中でgdgd展開が多くなってしまいましたでしたがそれでも読んでくださった皆様、まことにありがとうございます！

次は余談集に入ります、ムツツリー二のフラグを造ってから芳樹のフラグを作っていく形でいこうと思います

感想等、お待ちしております

第八十一話、余談その5ー？ムツツリーニ曰く、土屋康太（前書き）

久々ですみません。・・・色々ありまして

とにかくどうぞ

第八十一話 余談その5ー？ムツツリーニ曰く、土屋康太

N O s i d e

「これで全部だな」

「・・・・・・・・はい」

「それにしても・・・・・・・・良くこれだけのカメラを仕掛けたもんだ」

「・・・・・・・・企業秘密」

とある放課後、鉄人と康太の職員室の会話である。・・・強化合宿で男子全員が受けた停学処分を受けた初日、康太はある約束を鉄人としていた

「・・・・・・・・こちらとしては大いに嬉しいことだが・・・・・・・・お前としては良かったのか？」

「・・・・・・・・こんな事よりも大事なことはたくさんある」

「そうか・・・・・・・・とにかく、これは預かっておく・・・・・・・・数日後に中のデータを消して返却するが二度とやるなよ？」

「・・・・・・・・そもそもそういう約束・・・・・・・・失礼しました」

そういつて職員室から出る康太。・・・そう、これは強化合宿中に明久に会わせてもらう代わりに康太の出した提案である。康太

の盗撮や盗聴技術は教師にも手が終えなく困っていた。それが向こうから取り外すといったのだ、断るわけにもいかないだろう

「……………これから、どうするか……………」

『ああ、おい土屋。後で商會に寄らせてくれ』

『土屋君、アキちゃんの新作でてる？あつたら買いたいんだけど』
康太は歩いているだけでこうやって人が近寄る。それほど商會は生徒に人気があるのだ。……………しかし

「……………商會は無期限の延期。……………新作もない」

『『『ええっ（はああ）！？』』』

『どうということだよっ！』

『この間の写真を売ってくれよ！』

『アキちゃんっ！アキちゃんっ！』

「……………五月蠅いつ！一人にしてくれっ！」

周りからの不満を払い除けそこから駆け出す康太。康太は運動神経がかなり高いので見事、振り切ることが出来た。そしてFクラスに戻る、中では……………

『秀吉が今着ているメイド服のリボン、一万からっ！』

『一万五千っ！』 『二万っ！』

「何を勝手に人の衣装を売買しておるのじゃ!? これは演劇用じゃから、おぬしらには渡せんと言って　　とにかく放すのじゃー!」
オークションが行われていた、ここではしつかり考えられないと思ひ部屋をまた出ようとする。・・・しかしそれは中からの声により止められる

「おい、ムツツリーニ」

「・・・どうした雄二」

「ムツツリ商会をもつやらないんだって聞いた。噂つてのは流れるのは早いもんだな」

「・・・それがどうした、お前には関係ない」

「いや、何がお前をそこまでさせるのかが気になってな。まあいい、早く逃げる」

「?」

・
・
康太が何を言ってるかが理解できず先ほどの方に顔を向けると・

『ムツツリ商会がおしまい!?!』

『どうしたんだ!ムツツリーニは!?!』

『とにかく止めるべきだ。ムツツリーニイイ!!?!』

さつきまで秀吉の衣服に盛り上がっていた連中がいつせいに康太に襲い掛かる。もちろんそれを見た康太はそこから逃げ出した。

「……色々変えさせてくれるなあ、……芳樹も、……
神子も」

……ほとんどのものが出て行った中でニヤリと口の端をあげて雄二は呟いた。

「……全くあいつらは」

逃げている途中、Fクラスの人は鉄人に捕まり補習を受けさせられている。康太もいつの間にか二年の校舎とは別のところに来ていた

「（……それにしても1年の校舎か、懐かしいな。……
ここで、あの三人とあつたんだ）」

それからバカ四人組ができ、色々な事をやらかして。2年になって四人でFクラスに入り、戦争をやって……

「（……工藤に会った。だが……工藤は）」

二期期になり、明久が突然Aクラスに入るこ「パシャ」とになって清涼祭をやつて、愛子と明久の関係を知つて……そして……

「パシャ」

「（……………なんだかバカらしいな）……………？……………この音は……………シャッター音、それも市販の中でも性能のあまり良くないもの」

「うう、上手く撮れないよお……………」

シャッター音の聞こえる方を見ると、そこには一人の少女が一輪の花を一生懸命とっていた。髪は綺麗な栗色で肩に少しかかるぐらいの長さ。たぶん背丈からして一年だろう。……………康太は無意識のうちにその女の子に近づいていく

「……………その花を撮っているのか？」

「ひゃい！？……………あ、はい。そうなんですけど……………上手く撮れなくて」

「……………まず、撮ろうとする角度が違う。もう少し花から離れて下の角度から。」

「えっ？」

「……………花を撮りたいんだらう？、それで次は光を調節。」

「あつ、は、はい分かりました」

「……………違う、絞りすぎてる。もう少し戻していい……………」

貸せ」

「……いつの間にか、康太はその少女のカメラを持つ上から手を置き自身は後ろにいきしっかり指導する。そして……」

「パシヤ」

その写真には一輪の花が綺麗に写っていた。光の浴び具合から撮る角度、どれをとっても最良と言っている

「と、撮れましたあ。……はっ／＼／＼……あ、ありがとうございます。私、一年B組で新聞部に所属している新田結衣にった ゆいと言いますっ!」

「……」

「……先輩ですよね……同じ学年で見たことないですし」

ダッ!!

「……つて先輩!?……あれ、何か落ちてる。」

結衣がその紙を拾い上げる、するとそこには今書いたような荒い文字で一人の名前が書いてある。

「……土屋……康太先輩」

第八十一話〱余談その5ー？ムツツリーニ曰く、土屋康太〱（後書き）

久々更新ですがこのぐらいの量で大丈夫かな？

感想お待ちしております

第八十二話、余談その51？ 悩みと家族と新聞部（前書き）

今日はV模擬がありました……。朝飯食べないで、一時半までってかなりきつい

与太話はともかく、どうぞ

第八十二話 余談その51? 悩みと家族と新聞部

No Side

康太はベッドの上で横になっていた。いつもなら使ったカメラの整備などをおこなっているのだが、今日は一枚も写真を撮っていないためにカメラを調整する必要もなく商会もやらないのでネタの準備も必要なく特にやることがないのだ

「 」

今日の放課後のことを考えていた もちろん、新田結衣と会ったところの話だ。しかし 考えていることは結衣の事ではなかった

「 あんな写真、撮ったのは久々だな 」

「 康兄入るよー、ご飯できたから降りてきてだつて 」

「 わかった、すぐに行く 」

了解と言って部屋から出て行く妹 名前は勝手に決めないほうがいいだろう。妹がその場からいなくなると、康太は独り言をつぶやく

「 考えてもしょうがないことなのか? 」

「…………お前、今日何かあった？」

「……………何の事だかさっぱり分からない」

借りた漫画を読みながら話をする康太。しかしそのことが同様に繋がっていると陽太は見通していた

「とぼけるなって、少なくとも父さん以外は分かってたぜ。俺がその代表って訳」

「……………」

「まあ俺たちが聞いて何かしてあげられるって訳でもないけどな、つーかそんななら話さねえか。普通」

「……………陽兄は今と昔は違うって考えたことある？」

「おっ、話す気になってくれたか？……………今と昔ねえ、俺や颯兄はスポーツ一筋だったからそんなの考えたことなかったな」

「……………そうか、ならいい」

「連れないこと言うなよー、おっ、お前よく、こんな辞書とか辞典とか買えるよなー。勉強しないでくせに」

「……………わかってやってるだろ」

ちよいと不機嫌になる康太。それはその辞典の中身について触れてくるのだから当然といえば当然だろう

「へっへー、冗談だって……………ま、明日には元気でいてくれよ。それじゃ」

そういつて部屋から出る陽太。そんな兄を気にせず、またベッドに倒れ考えこむ

「……………俺はいつたい何がやりたかったんだろっな」

翌日……………

『ムツツリー二だあああ!!』

『なんとしても捕まえて、商会を営業させるぞー!!』

『土屋君っ！お願いだからっ！』

「……………しつこいつ！……………俺にそのことに関わるなっ！」
放課後、康太は全力で校内を駆け巡る。本来ならすぐに帰るべきなのだが敵にはFFF団もいて校門は見事に封鎖されている。そのためギリギリまで逃げ続けFFF団の気が切れたところで校舎から逃げるといふ作戦を実行中である

「それにしても……………かなり疲れる……………」

こういう時は……Aクラスは駄目だ……突破口は」

「土屋先輩、こっちです！」

「っ！」

突き当たり角を曲がると、昨日あった新田結衣が部室のドアを開けて手招きするのが見えた。康太はそれを信じ、新聞部の部室へ入ると結衣がドアを閉め外からは自分が本来向かっていく予定だった方向に人の群れが走っていくのが感じられた

「大丈夫ですか？土屋先輩」

「……助かった、礼を言う。……それと、お前はまだ諦めてないのか？……新野すみれ」

康太は息を整えると、結衣に礼を言ってから奥にいる女性に向かって言った。新野すみれと呼ばれたその女性はニヤリとした顔をしながら康太を見つめる

（注：新野すみれとはアニメのおまけ映像の女装コンテストに出てきた生徒である。3年かも知れませんがここでは2年と言う事で通しておきます。それと詳しい情報は後で）

「いやあー、こんなにいい機会を見逃すわけにはいかないからね」

「……入部の件なら断るの一卓だが」

「君はその情報収集能力をもっと上手く活用するべきだよ、康太君。それに話は最後まで聞いて」

「・・・・・・・・・・？」

「今、私が康太君に頼みたい事なんてないよ。昨日、その結衣が世話になったつて聞いたからね。・・・・・・・・今日のところはここに隠れてるといいよ」

康太が結衣の方をむくと結衣は少し硬くなりながらもお辞儀をする

「・・・・・・・・・・今回だけは感謝する」

「もう行つたんじゃない？」

すみれがそう言うと、康太はスクツと立ち上がる。康太も何もしないのは悪いと思つたらしく、レイアウトのところを手伝っていた

「・・・・・・・・・・そこからはもう一人でできるだろ、俺は帰る」

「あ、はいっ。・・・・・・・・先輩、先輩と土屋先輩ってどんな関係なんですか？」

結衣は康太が出て行つたのを確認すると、すみれに関係を探ねる。ここであつた時からちよつと嫌悪感のようなものを感じられたためそれが気になっているのだろう

「うーんとね、情報に対する価値観からちょっとだけ敵対しちゃってる」

「価値観？」

「そう、康太君は自分の情報を人に売ってるでしょ。自分が必死で集めた情報を何の見返りも無しに上げたりはしたくないんだってさ」
あくまで私はその情報を多くの人に伝えたいだけだから、と言って記事の書き上げに向かうすみね。

「……情報って怖いよね。その情報にはその情報に適合する人がいてそこを間違えると全部がなくなったりする。昔の結衣ちゃんみたいにな」

「っ！……どうしてその事を」

「康太君並じゃないけど私だってそれぐらいの情報収集能力はあるのよ。」

またここですみねはニヤリと口先を上げた……

第八十二話 余談その51? 悩みと家族と新聞部 (後書き)

ムツリーニの話も長くなりそうです、終わりが見えない……

感想お待ちしております

第八十三話、余談その51？ そのまた余談のAクラス（前書き）

久々に前に書いた始めの所や清涼祭ぐらいのところを読み返してみました

・・・・・・・・酷かったです。一体どうなったらそうなったのか自分で聞きたいぐらいでした

・・・・・・・・少しずつでも書き直していくべきかなあ、

あ、失礼しました。それではどうぞ

第八十三話く余談その5ー？ そのまた余談のAクラスく

NO Side・・・Aクラス

明久たちはいつも通りのんきに備え付けのお菓子を食べながら話していた。

「はぁー、やっぱりAクラスのお菓子も美味しいよねえ。」

「も？、このレベルのお菓子ってそうそうないわよ。吉井君どこで食べたの？」

「バカッ！その話をここでするなっ！」

「あそこでの話は・・・優子？」

芳樹が明久を殴り愛子も何か言おうとすると優子は少し不機嫌そうになる。手元にある紅茶を少し飲むとこういった

「なに三人でこそこそしているのかしら？ねえ、私にも話してくれないかしら」

「え、えーとね、この間神子ちゃんに優子も会ったよね。あの後神子ちゃんの家に行ったんだけど、神子ちゃんの家って結構お金持ちらしくて呼ばれたときに食べたんだ。・・・あはは」

「・・・ふーん、その割には動きが少しギクシャクしてるけど・・・まあ良いわ。その代わり仲間はすれにはしないでね」

「もちろんだよ……っていつか何か外が騒がしくない？」

明久ドアの方を向きながらそう言うと芳樹以外の2人が同じように顔をドアへ向ける。確かにドタバタ足の音が聞こえ騒がしい

「本当ね、何かまたFクラスがやらかしたのかしら」

「Fクラスがやらかしたというより今回はムツツリーニがだな。商會をやめたことで全クラスの利用者が追いかけてる」

「ふうん、……ってムツツリーニが商會をやめた！？？どういうこと芳樹！？」

「なんだ、ムツツリーニの奴言っただけか？……まあ自分から言うことでもないか、それにアキは彼女が出来てるくせにまだ商會を頼ろうとしているのか？リア充め」

「アッキー？」

「う、誤解だよ。それに買おうとするんだったら愛子のしか買わないよ」

「そこがおかしいんだよ！ムツツリーに君になんか頼まなくてアッキーにならどんな格好だろうとしてあげるんだからさ！」

「……あなたたち良く平気でそんなこと言えるわね」

「この二人だからこそだろ」

おかしいな喧嘩になる二人を見ながら呆れる二人。明久に関しては何を芳樹に聞こうとしたかも忘れていようだ。

「それでアキ、俺に何か聞きたいんじゃないのか？」

「あ、そうだ。ムツツリーニが商会をやめた理由だよ」

「そんなもんお前と愛子が一番良く分かってるはずだろ」

「え？、僕も何か関係あるの？」

愛子がそう質問すると芳樹は頷き、話を続ける

「……強化合宿のとき、ムツツリーニだけがアキのいる所に行かせてもらってた。どうしてムツツリーニだけが行かせてもらえたと思ってる」

「？……っ！それって芳樹、もしかして……」

「そうだ、ムツツリーニはお前に会いに行くために商会をやめた。商会をやめたというより、教諭たちが今まで見つけれなかったカメラを差し出したんじゃないか？カメラがなくなれば必然的に商会もやめなくちゃなくなる」

明久が気づくと、芳樹はその細かいところまで説明する。芳樹は強化合宿中にこの事に気づいていたため他の三人ほど驚きはしていない

「／／／／……はっ！……ならどうして土屋君はアクラスにこないのよ。クラスの利用者が追いかけていて、私たちもいるんだから少しは安全でしょ？」

「……優子、言い方が悪かったな。とはいえずぐにトリップするのはいかなものか……いただだっ！、……放せ優子！」

「あんたはっ！ー！そう言うことに気づいてないでさっさと説明しなさい！」

「・・・あー、いって。・・・そんでムツツリーニがここに来ない理由だっけか、それこそ一番簡単じゃねえか。・・・アキと愛子がいるからだよ」

「「「「「「「」」」」」」」」

「え？、また三人で話を進めないでよ。どういうことなの？」

「ムツツリーニが何でアキのところに行ったか分かるか？愛子の見方を改めるためだ、俺と優子は愛子を慰めに行っただる。ムツツリーニはアキの方に行ったんだ」

「・・・あれ？それはちょっとおかしいんじゃない？土屋君は愛子のことを好きだったんでしょ、吉井君が愛子を振ったと知ったら普通タイミングを狙って愛子を手に入れようとするんじゃないの？」

「・・・お前はムツツリーニの内情を知らなすぎる。あいつはああ見えて物凄く紳士だぞ、表に出さないだけで。久保といい勝負するんじゃないのか？愛子のことだつてアキと愛子の真柄を知った瞬間に未練なしにあきらめたんだ、自分では愛子の中のアキには追いつけないし代われない。そのことが分かったんだろ。・・・俺やアキだったらそんなこと絶対無理だ、少なからず未練は社会に出ても残る」

優子は康太を含め、Fクラスのほとんどはそう言う連中だと思っているため、芳樹の言葉に疑問が出てくる。それに対して芳樹はムツツリーニに対する考え方を訂正させる

「……その話だけ聞くと、土屋君のイメージがガラツと変わるわね。」

「まあ今回のことで変態的なものもあまりなくなってくるだろうし、勉強をも少し頑張ればもてたりするんじゃないのか。FFF団とか言う団体を辞めればな」

「……ってそうだ芳樹。こんな事話してないで早くムツツリー二を助けに……」

「助け？何言ってるんだアキ。そんなのする必要ないだろ。向こうから求めてこないなら助ける義理もない」

「でも……でもじゃねえよ」！？」

「お前は良いさ、ムツツリー二を助けられて満足するだろうよ。だがムツツリー二はどうなんだ？自分が好きだった相手を手中にしているお前が助けに行ったところであいつ自身の問題は解決しない。……友達が大事なら、あえて放って置くことも必要なんだ。……一人で解決しなきゃならない問題もあるんだよ」

「……そうだね、……それにしても今日の芳樹、いつもと違うくない？どうしたのさ」

「いやあ、昨日の帰りムツツリー二が一年の女子と話してるのを見てな、もしかするとフラグが立つんじゃないかと思って。だったら邪魔はしない方が良いだろ？それに向こうから助けを求めるような協力はするさ。一人では出来ない事と自覚して助けを求めるんだからな。……それと優子」

「……？、何よ」

「お前、さっき仲間外れにしないでって言ってたよなあ。なら、今度から俺とアキのことを名前か愛子みたいなあだ名で呼べ」

「今までの話とは全く無関係な話を優子に振る芳樹。優子は何でそう言う話が出てきたのかも分からず思わず声上がる」

「な、何でそう言う話にいきなりなるのよ！」

「だってなあ、俺はアキと愛子って呼んでアキは愛子と芳樹。愛子に至ってはアッキーとヨッシーだ。後から知り合った江崎でさえ芳樹君と明久君だぞ。仲間外れから抜けるにはそこからだろ」

「うっ……それは確かにそうだけど……」

「いいじゃん、別にそのぐらい（あれれ）、清纯派の木下さんは男子を名前で呼ぶのが恥ずかしいのかな」

「少しもじもじする優子に愛子が（）のところを優子にだけ聞こえるように言う。それがきつかけとなったのか」

「わかったわよ！芳樹に明久で良いんでしょ！その代わり吉井君も私のことは優子で呼ぶことっ！良いわね！」

「ん、了解。……なんか優子って女子を下で呼ぶのは新鮮だな……」

「ほーっ、じゃあ愛子と島田は女子じゃないと言うわけだな。……だ、そっだ愛子」

「へえー、アッキーって僕のことそう言う風に見てたんだ。……」

「とりあえず美波ちゃんにも連絡だね」

「ご、誤解だっ！別に愛子も美波も胸がないから女に見えないというわけじゃ・・・ぎゃあああああああ！！！！」

「誰の胸がないですってええええ！！」

「お、ナイスタイミング美波ちゃん。さーてとアッキー。覚悟はできてるよね？」

「流石アキ、頭が良くなってもバカは変わらないな。・・・つて優子はなぜ俺の腕をつかむ？」

「ちよつとね、・・・芳樹も胸は大きい方が好き？」

「胸だけが女の魅力な訳がないだろ。胸がでかくない美人もかなりいるし。お前とか、あそこでアキを拷問してる島田とか」

「・・・そう／＼／＼／＼。・・・とりあえず、貧乳をバカにした明久と一緒にやってきていい？」

「・・・構わねえよ「ちよ、芳樹これ以上増やさな」うるさい。・・・行ってこい」

その後優子はすぐ帰ってくると芳樹の隣に座り、優雅に紅茶を飲みながら明久が愛子と美波に拷問される様を眺めていた。・・・その拷問は最終下校時刻まで行われていたという

第八十三話、余談その51？ そのまた余談のAクラス（後書き）

地の分が少なくなりどうもすみません、・・・・眠いんです

感想お待ちしております

康太は一種の気持ちを感じ取る。……決して諦めずに、何回も何回も撮り直したのが目に浮かぶようだった。とここで部屋をノックする音が聞こえ返事をするまもなくそのままドアを開けられる

「……………父さん、……………どうしたの？」

「……………康太、今文月学園からあるものが届いた。……………
・小型カメラと盗聴器だ」

「っ!?!……………それが？」

「お前が学校で何をしていたかしっかり聞かせてもらうぞ、下で待ってる」

そういつて下に行く父親。康太は忘れていたのだ、鉄人が『返却すると』、あれは直接の手渡しでなく後日郵送されるということだったらしい

「……………だが、そのぐらいはどうでもいい。やりたかったことは成し遂げたんだ。……………?、俺が……………元々一番やりたかった事はなんだったんだ？」

その答えを教えてくれる者は……………彼の周りにはいなかった

翌日……

『ムツツリー二を追えええ!!』

『絶対に逃がすなよ!』

『土屋っ!見損なつたぞ!』

康太が放課後に追われるのは当たり前のようになってきた、昨日みたいに新聞部に世話になるか・Aクラス……とにかく今は逃げるのが先らしい。

「……………連中がしつこ過ぎる、……………ん?紙飛行機」
紙を開くと中にはこう書いてあった

『人気者は大変だなあ。ま、頑張れ by雄二』

「っ!……………あの野郎、今度前に霧島に言ってもらったことを聞かせてやる。……………しょうがない、今は新聞部に行くのが得策か?」

「……邪魔する」

「あつ、来ましたよ。すみれ先輩」

「やっぱりここに来るしか今はないよねー、坂本君たちは観戦だし？あの2人がいる所には顔を出しにくいもんだし？」

「くつ………解決案を探すまでここに匿ってくれ、特ダネになるようなネタを教えてやる」

もちろんわざと挑発するようにすみれは言った。康太は反応した後すみれに頼みごとをする。………当たり前のように情報を差し出そうとする

「と、特ダネですかっ!？」

「ふうーん、どんなネタ？」

「………明久が二学期、Aクラスに上がった理由。」

「「っ!？」」

「………それは確かに特ダネだねえ。でもさ康太君、その情報は確かであったとしても扱えないよ」

「………なぜだ」

「もちろん学校側からストップをかけられるからさ。何でだか分かる?………学園のルールを変えてまでの繰上げ。そのことが知

れ渡つたら誰もが訴えるよ、ほぼ間違いなく」

「……………それがどうした？少なくともお前の中にある疑問が解決されるのは間違いないだろう？それだけでも十分「甘いよ」っ！？」

「私がほしい情報はみんなの役に立つ情報だ。私自身だけ知ってたって何の意味もない。……………結局さ、人間は情報に踊らされてるだけなんだよ。今回の事だつてそうでしょ、康太君が商會をやめたという情報があるから。それを必死に止めようとする」

「……………それもそうだな、……………っ！情報の上書き……………その手があった」

「どうかしましたか、土屋先輩？」

「……………見つかった」

康太が何か閃くと、結衣は康太に話しかける。康太が結衣の肩に手を置きすみれに要求をする

「すみれ……………屋上にある放送機材を使用させてくれ……………問題を解決する方法を見つけた」

「それこそ、条件があるよ……………もちろん「わかってる」」

「……………嫌でも、やらなきゃならない事はたくさんあるからな……………ただし俺の基本行動はあくまでこいつの指導にしろ。徹底的に育て上げる」

「……………へ？わ、私ですか!？」

結衣は康太が指導をしてくれるという事に驚く、そして康太のその眼からは信念のようなものが感じられた

「あはは、……いいよ。交渉成立、」

「……………それともう一つ頼みごとが……………」

康太はすみれにしか聞こえによう近づき耳元で話す

「それぐらいなら余裕でOKだよ。っていつかそれも部費になるでしょ？」

「……………もちろん」

「じゃあ決定。先生の方には放送が流れても止めに行かないよう言つとくから。……………頑張つてね」

その声は伝わることなく、すでに康太は部室から飛び出していた……………康太が出て行くと先日と同じように結衣がすみれに質問をする

「……………何気に土屋先輩も先輩のことをすみれって呼んでましたよね……………」

「あつ、昨日言つてなかったっけ。康太君とは同じ中学で同じ部活にいたんだよ。」

「そうなんですか、初めて知りました」

「……………だけど、途中から全くこなくなつて……………理由を聞いてもまともに話そうとしてくれないし。そこから今の関係に当たるね」

「……それにしても、帰って来ませんね皆さん。」

「当たり前だよ、康太君が入部してくれることになったただなんて知る由もないんだから」

他の部員はみな康太を追っかけるためにいないのだと言う、……
・まあ、ネタにはなるだろう。

『くそっ！ムツツリーニはどこだ！？』

『Fクラスの奴らが校門にいる限り外へは出ていない！……隠れてる可能性が高い、各部屋などもしっかり見て回れ！』

『了解っ！』

ムツツリーニを探す連中は部屋にまで乗り込もうとする。……
・……ここで1つの放送が流れてくる、そこから聞こえてくる声に全員が声を傾ける

『………ただいま俺を追いかけている諸君、………商
会をやめた理由について話したいと思う』

『奴は放送室だっ！いそげっ！』

……すみれが言うには、後始末が大変だったらしい

……その頃、職員室

「……終わりました、西村先生」

「そうか、……確かにお前はカメラなどの技術は長けてるがここまでの生徒を巻き込んだとは思いついもなかったぞ」

康太は職員室で先ほどの放送を流していた。いつものように鉄人と言わず西村教諭と言ったのもそのためである

「……お陰で大儲け」

「それが駄目だと言ってるんだバカ者、全く……しかしこれで本当にあの騒動が治まるのか？」

「……大丈夫、放送室にはトラップを設置してある。バカどもも少しは懲りる」

「お前もそのバカの一人だろうが」

「……そんな事実はない」

いつものようにブンブンと首を横に振り言い訳をしようとする康太、それもまあ無駄なのだが

「……新野の話によるとお前、新聞部に入ることになったらしいな」

「……（コクンッ）」

「……お前が決めたのならかまわないが、問題だけは起こすなよ」

「……分かりました、……失礼します」

そう鉄人に言って職員室から康太は出て行った

「……バカ四人が離れることになったか、……それで少しでも前に進めるのならそれがいいのかもしれない……」

第八十四話、余談その51？ 情報と部活と解決案（後書き）

.....gggggだなぁ

感想お待ちしております

第八十五話、余談その51？ 紹介と入部とまたまた後日談（前書き）

遅くなつてすみません、

第八十五話 余談その51? 紹介と入部とまたまた後日談

NO Side

あれから数日

「 違う、そこで使うのは

「 あっ、はい それで こういう場合だと
「

「 それも違う、この場合なら」

「 あう、すみません」
康太は正式に新聞部への入部が決まった。康太の入部を他の部員が知ったとき、泣いた者もいたらしい。しかし、すみれとの約束で自分は情報収集には回らず主な仕事は写真の担当である結衣の指導である。

今日は撮り方について教えていた。被写体との距離や背景をどうするかなどその状況による最高の撮り方というのを指導している

「 土屋先輩」

「 ?、どうした」

「どうしてこんなに丁寧に教えてくれるんですか？あつ、いや迷惑とかじゃなくて……入部する時に言ってたじゃないですか、入部したら私の面倒を見るって……どうしてですか？」

「……似ていたから」

「はい？」

「……お前と初めて会った時、一瞬昔の俺がそこにいたかのように思えた。……それに、プロのカメラマンになりたいんだろ？そこも俺と同じだった」

「……」

「……俺は今何がしたいのかが分からない、……だったら、カメラマンになろうとしていたあの頃の技術、それが役に立てる場所にいれればいいと思った。お前がカメラマンに成りたいと言ったからその技術を教えてるだけ。……それだけだ」

「っ！……」

「うーす。おーおー、精が出てるねえ。お二人さん」

康太の発言で結衣が少しへこんでいるとき、部室のドアが開く。入ってきたのはすみれだった

「あ、すみれ先輩。放送の方に行ってたんじゃないんですか？」

「なんかマイクがイカれちゃってさ。ちょっと休憩みたいなもんかな？全く体育祭も近いのに……」

「……少し席を外す。新田……それ戻ってくるまでに調節してみる」

すみれのが来て少したつと康太はそう言つて部屋から出て行く。結衣は少し不思議そうな表情ですみれにある質問をする

「土屋先輩つて、すみれ先輩の事嫌つてますよね……。。。。理由は前にも聞きましたがあれだけのことで……」

「ん？、別に康太君は私のこと嫌つてないよ？」

「へっ？……あの態度からしてそうは見えないんですが」

「ありやあ、ちよつと照れ臭いだけだよ。康太君つてスカートの中が見えたぐらいで鼻血噴出しちゃうような子だし」

すみれの言葉にますます意味の分からなくなつてくる結衣。そんな結衣を見てすみれは康太と自分の関係を説明をしようとする

「この間さ、情報の見方の違いで敵対してるつて言つたじゃん。あれ実は嘘なんだ、ちよつと本当のことを言うのが恥ずかしかつただけで」

「????、ちよつと待つてください。どこからが本当でどこからが嘘ですか？なんだかよく分からなくなつてきました」

「……簡単に説明するとだね。私は康太君と中学のときにやっちゃつたんだ、康太君は私を見るたびにそのときの事思い出しちゃうんじゃない？」

「……やっちゃつたつて……あれですよ……？/ / / /」

結衣は顔を赤くしながらすみれに問う、すみれは何のはじりもなく結衣に過去の話をする

「ん、結衣ちゃんの考えてることであってると思う。ちなみに私から押し倒したんだよ、康太君を」

「っ！~~~~／／／／／／」

「それから康太君部活も辞めちゃってさ、それからかな。すぐに鼻血を出すようになったのも」

さらに顔が真っ赤になる結衣、その反応が面白いのかすみれはさらに話を続けようとする

「……………何の話をしている」

「っ、土屋先輩！？／／／／／」

「……………？、それより終わったか？調整」

「いやー、この娘全く手えつけてないよ。今私と康太君の昔話聞かせてたところだしね」

「……………昔話？……………っ！まさかお前……………／／／／……………ブシャアアアアアアッ！！」

「わっ！大丈夫ですか！？しっかりしてくださいっ！」

康太はそのときのことを思い出したのか、その場に倒れ鼻血を勢いよく噴射する。最近出していなかった所為か、それはまるでアンモニアの噴水実験のようだった

「そついえば康太君、先生たちからもあれの許可もらったよ。とりあえず明日の新聞に載せておくけど良い？」

「そんな事いつてないですみれ先輩も手伝ってくださいっ！．．．ええとこの場合．．．って何でカメラの準備してるの私！？」

新聞部は前よりも活発になったそうな．．．．．

翌日．．．．．

《文月新聞》

ムツツリ商会復活！？

土屋康太氏の経営していたムツツリ商会が新聞部の活動として再開することが決まった。基本販売するものを写真とすることで教師にも認められることとなった。教師に認められている分いかかわしい物は販売できなくなったが、本人の了承を得た写真なら大丈夫との事だ

お求めは新聞部部室まで

第八十五話、余談その51？ 紹介と入部とまたまた後日談（後書き）

・・・オチが微妙、

まあ完全に商会を終わらせるのも勿体無いのでいかがわしい物を無しとすることで表向きにそのような販売をすることにしてみました

次回はやっと芳樹に花咲きますがそれもどうなるか・・・

感想お待ちしています

オリキャラ紹介その3（前書き）

えー、芳樹の話に入る前に康太の話までに出てきたキャラの紹介を
したいと思います

オリキャラ紹介その3

藤堂 神子

誰もが認めた神と呼ばれる15歳の少女、現在は神無月中学に通う。髪はツヤある青色（長め）で外に出ず成長してないためか背はかなり小さい。愛子とは昔のお隣さん
幼い頃両親をなくす、なお芳樹の両親も同じような理由で亡くなっ
たもよう

9歳でハーバード大学に飛び級しそこでの全過程を1年で終了。その後は霜月学園の理事長となりさまざまな研究をしていた。召喚システムを作成した張本人。

両親の死後、神子の周りには金や権力などに群がる大人ばかりを見
てきたので大人を嫌う。

つい最近まで霜月学園に引きこもっていたが、原作キャラ数名＋芳
樹により社会復帰。

研究では新薬を作り多くの人々を救ったりしている、他にもクロー
ンを作ったり、持っているラノベのキャラをつくったりとやりたい
放題。

将来の夢は医者だとか

意外にもエロ関連の話は苦手らしい。本人曰く、そんなの気にして
なかったから。普通の少女として更生したときに意識するようにな
ったらしい

新田^{にった} 結衣^{ゆい}

文月学園1年B組、新聞部所属。天然

髪は綺麗な栗色で肩に少しかかるぐらいの長さ。容姿は……
妹キャラ系だと言うことで（浮かび上がりませんでした）

部活内では写真などを主に担当しているが、その腕は康太曰くひどすぎる。カメラに関する技術、知識なども全くない。しかし頼まれた写真は最終的には誰もが認められるようなものに仕上がる。

写真に対する意義ごみが康太の昔の頃に似ているらしく、康太から指導を受けることとなった

将来の夢はプロのカメラマン

何か過去を持っているらしいが………？

新野^{にいの} すみれ

2年B組所属。新聞部、放送部を掛け持ちしている。

容姿はアニメの第1期Blu-ray、DVD第3巻の映像特典「
バカ限定女装コンテスト」にて

新聞部では部長、放送部では副部長で変わったものが大好き（
など）。

特技は康太同様の情報収集、しかしそれは販売ではなく新聞で学園
中に伝えている

康太の鼻血を噴出すようになった張本人。康太と中学は同じで二人
が新聞部に入っているときすみれから康太を押し倒して行為に浸っ
たとか

からかったりするのも好きで結衣がたじたじになるところが見たく
て の康太との関係も話したとか。

ちなみに放送の部長は一方通行

オリキャラ紹介その3（後書き）

とりあえずこの三人だけの紹介を

次は木下姉弟の入れ替わりの話となります

感想お待ちしております

第八十六話 余談その61？ PV作成と姉弟とクラス交換！？

「 というワケで、Aクラスを使って文月学園のプロモーションムービーを製作しようと思うんだよ。いいかい、高橋先生？」

「はい学園長。私からは反対する理由は何もありません」

「やれやれ助かるよ。最近は良くなったと思うんだがねえ。こないだの・・・商会だったかね？その停止がどうたらこうたらで2学年のほとんどが騒いでたじゃないか」

「心中、お察しします」

「それで、Aクラスの生徒たちうちの何人かにも出演してもらおうと思うんだけどどうだい？誰を出演させたら良いかねえ？」

「そうですね・・・。主席の霧島翔子や久保利光君などを中心にするのが妥当と思われませんが、あの二人は残念ながら愛想に欠ける部分がありますので」

「くくくつ、アンタがそれを言うとはね」

「客観的な意見を述べただけです、私自身も愛想欠けることは重々承知の上ですから。・・・そうになると、成績優秀で勤勉、且つ明るい性格で 木下優子さんを中心に製作するのが宜しいかと思えます」

「ふむふむ、候補は一人だけかい？他にはいないかい？」

「・・・・・・・・考えられるのは長谷川君などでしょうか。あの子は一学期に他のクラスよりは重い空気だったAクラスを今のようにしてくれた生徒でもありますし、そういう面ではしっかりやってくれそうです。成績もAクラストップレベルですし」

「あいつの場合アンタに点数で勝ってる時もあったしね。・・・・・・・・他に？」

「いない事ありませんが若干リスクが伴うかと」

「リスク？」

「例えば、工藤愛子さん。彼女も成績優秀で明るい性格の生徒なのですが・・・・・・・・彼女を中心にする場合、流れによっては放送禁止用語の検閲やモザイク等の処理が必要になるかと。他だと吉井明久君、ここ最近で成績が上がってきているということは良いのですが・・・・・・・・」

「工藤の方はともかく、あのバカは確かに学力の上がり半端じゃなかったからね。その場合のリスクは？」

「他人に説明するのが苦手なんです。この間試しに中学生のやる証明問題をやらせたところ、しっかり書けてるのに何故か私が理解するのに30分はかかりました」

「・・・・・・・・・・・・・・・・Aクラスだけは・・・・・・・・まともだと思っただけだね」

「学園長、今のは私の冗談です」

「アンタの冗談は全く笑えないさね!？」

「冗談を言ったのは工藤さんの方だけです。ただ、彼女は少々性に関して奔放なところがあります。勤勉な学び舎をイメージさせるには不適切かと。……吉井君のほうは事実です」

「……そうかい。それじゃあ木下優子って子と長谷川を中心に作るうか。本人たちに伝えてくれないかい？長谷川はめんどくさがるだろうがポイントを1000くれてやるって言えば多分大丈夫さね。……ところで長谷川はともかく木下優子の方は歌も達者かい？」

「と、仰いますと?」

「うちの合唱部は人数が少ないだろう?出来れば校歌斉唱もその子を中心にAクラスの生徒と合唱部でやってもらいたいのだ」

「それはわかりませんが、恐らく彼女であれば問題ないでしょう。双子の木下秀吉君は演劇部でオペラをこなせるほどですので、姉である彼女も素質はあるかと」

「それは何でも出来る素晴らしい生徒さね」

「ええ。彼女ほど品行方正で見目麗しく、成績優秀で且つ社交性に富んだ模範的な生徒は中々いません。長谷川君も木下さんと並んでいてもおかしくないほど顔立ち等も良いのでこの二人でちょうどいいかと」

「じゃあ決定さね」

Side in 芳樹

「……それで、ばば……学園長は俺たちにそのPV作成に協力してほしいと」

「はい、そういうことです長谷川君。宜しいでしょうか？」

「自分は構いませんが……優子、お前は大丈夫か？」

「……ふえ！？あ、はい大丈夫です！任せてください！」

「そう言って貰えると助かります」

そういつて高橋先生が少し微笑む。……放課後、俺と優子

だけが高橋先生に何故か呼び出された。理由を聞くと何でも婆が学園を紹介するPVを作るからそれに協力してくれということらしい。・・・少し、優子が気まずそうな顔をしてたが・・・大丈夫なのか？

「なお二人には1000分ポイントが後から渡されるので・・・」

「ポイント？・・・ああ、あれのことですか。あんなの本当に役立つてるんですか？」

「・・・少なくとも、一年生は来年の試召戦争で勝とうとする人が頑張っていたり、図書カードや食券目当てで頑張っている人が増加しています。三年生だと参考書が買うより安く手に入ったりしますので・・・マイナスがいるのは二年生だけかと」

「・・・そうですか。少なくとも自分たち男子はこの間の覗きで-1000ぐらいされてますかね」

「いえ、-2500です。・・・それでも、テストなどで点数が良かったら自動的に更新されますのでこの1000点が入れば長谷川君もプラスになるかと」

「プラスになればそれに応じた景品等と交換できるから・・・なるほど、雄二たちがまたAクラスに仕掛けてきた時のことを考えるとかなり良いな。優子の場合は元からポイントも溜まってるだろうし、これで1000ポイント入れば戦力もかなり強化できる。」

「・・・そうですか、それなら自分もしっかりやります。・・・それじゃあ友達が待ってるので行っても良いでしょうか？」

「あっ、はい。もう話す事もないので結構です。」

「なら行きますね。．．．．．優子、行くうぜ」

「ん、わかったわ芳樹。．．．愛子たちはAクラスにいると思う？」

「いや、流石にこんな時間だし校門じゃないか？」

そういった話をして俺と優子は職員室から出て行った．．．．．この後、アキたちはまだAクラスにいた、．．．．．しかもいちやついていた。．．．．．Fクラスの奴らじゃないけど．．．．．やっぱり彼女って言うのは羨ましいよなあ。

Side Out 芳樹

「はあ．．．．．」

「姉上、どつしたのじゃ？似合わぬ溜息なぞついてから」

「ちょっと学校でね．．．．．」

「？、芳樹関連じゃの」

「何でいきなりそうなるのよ！．．．．．そりゃあ、関係無くはないけど．．．．．」

「して何があつたのじゃ？何か頼まれごとでもしたのかの？」

「高橋先生にね……………そういえばアンタ歌とか得意よね」

「歌？まあ得意というほどでもないが、姉上に比べれば幾分マシなのは確かじゃな」

「言ってくれるわね……………。ハア、どうしてアンタの出来る事がアタシにはできないんだろ……………」

「姉上に出来る事は、わしは出来ないんじゃないかの。勉学など」

「今は勉強より歌の才能が欲しいわ……………。アンタ、物真似とか得意よね」

「……………演技といって欲しいのじゃが……………。わしに姉上の演技をしると？」

「そういうことよ、明日の放課後にね」

「……………ならばわしの代わりに補修をやってくれんかの。明日の放課後なのじゃが、それをサボると留年の階段をまた一段上ってしまふのじゃ。」

「アンタどれだけ成績が悪いの……………じゃあ、よろしくね」

「わかつたのじゃ」

第八十六話、余談その61？ PV作成と姉弟とクラス交換！？（後書き）

会話多すぎ・・・というか地の文を入れられない。

感想お待ちしております

第八十七話、余談その61？ 変装と合唱とMK5（マジで恋する5秒前）

結局朝更新出来ずにすみません。まあ活動報告でも言ったとおり中間テストが近づいてきているんですよ、とりあえずギリギリまでは粘ります

それと、他の作者さまへの感想もできなくなってきました

それではござ

Side in 優子

あれから結構時が過ぎて翌日の放課後……周囲の目がないことを確認してから体育用具室に入ったアタシと秀吉はすばやくお互いの服を取り替えていた

「ホントにアンタアタシにそっくりよね」

「双子じゃからな。似ておっても不思議ではあるまい」

「二卵性なんだからここまで似なくてもいいと思うんだけど……」
とは言っても今回は似た容姿のお陰で入れ替わりが出来るんだから、少しは感謝してもいいかもしれない……。なんだか嫌な予感はあるけど……

「では、行ってくるのじゃ」

「あ、待って。コレをつけて行きなさい」

「これは盗聴器？ 姉上、こんな物何処で手に入れたのじゃ？」

「アンタの友達に頼んだら貸してくれたわ」

アンタの寝顔写真と引き換えに……ね。

「ムツッリーニじゃな。あやつにも困ったものじゃ」

「アタシはそれでアンタの行動をチェックするからね」

「監視などせずつもワシは姉上の代役をきちんと務めて見せるのじや」

「アンタの『きちんと』は全然信用できないのよ」

「まあ、良いじゃろう。コレを持っているだけで姉上が安心するといふのなら、そうしよう」

秀吉はタイの裏に盗聴器をつけて、体育用具室から出て行った。
・・・さてと、アタシもFクラスに行かなくちゃ。・・・もし
バレるとしたら坂本君とかかしら。・・・その場合は代表絡みの
事を言えば大丈夫ね。

『しまった！ 須川が窓をつたって隣の教室に逃げたぞ！』

『あのブタ野郎・・・！！ 異端審問会の血の掟に背いて、D
クラスの玉野さんにケータイの番号交換を迫っていたと言う噂は本

当たったのか……！　いいか！　今この時より奴は会長ではなく反逆者だ！　見つけ出して始末するんだ！」

『『『了解！　指示を！』』』』

『A～E部隊は奴を捕らえ次第異端審問会にかける！　携帯電話のメモリー削除を忘れるな！　番号交換に成功していた可能性もある！　F～G部隊はあらゆる手段を用いてヤツの悪評を流せ！　特にDクラスには念入りにだ！　H部隊は船越先生（46歳　独身）のところへ向かえ！　あの裏切り者に人生の墓場という物を教えてやるんだ！』

『『『了解ッ！』』』』

………思わず冷や汗が出る、………確か今は自習の間じゃなかったかしら。回れ右をして帰りたくなる気持ちをぐつとこらえ教室の扉を開ける。中では　鞭や蠟燭を持った覆面の集団が忙しなく駆け回っていた。

「ホントに何やってるのよーっ!？」

何なの、こいつら!？、どうして補習中だっけ言うのに授業の準備すらしていないの!？

って言うか授業云々以前にその装備は何!？、どこの武闘派宗教団体!？………そんなにモテる男子が憎いのかしら。吉井く………明久と愛子のことは言わないほうが良さそうね、バシてないみただし

「あれ？木下いつの間に戻ってたのよ」

「ん、島田か。ついさっき じゃ」

島田さんが声をかけてくる、声質は似てるからどうとでもなるわね。……とりあえず秀吉の翁言葉になれるのが先決だね。

「ふーん、……あれ？」

「な、なにごとじゃ、島田？」

「いつもと違うような……」

いきなりピンチ到来！？、身内ですら間違えられるのにどうしてこんな簡単に気づかれるのよ！

「き、気のせいじゃ！ それより補習はどうなったのじゃ？」

「あ、さっき西村先生がプリントを置いて行ったわ。それをやった後、解説授業するんだって」

「それで自由に動き回っているのじゃな」

「そついうことね。……本当に馬鹿ばかりね、……まあそついう訳で今は自習みたいな感じよ」

吉井君のことになるとあなたもその一人に、いやもっと酷くなるのによくそんな事が言えたものね。……とにかく、自習というのなら秀吉の今の様子でも確認しておこうかしら。えーと確かこれをこうして……出来た、少しずつだが音もクリアになってきてる

『それにしてもさー、優子もよくやるよね。弟君をこう利用するのは』

『困ったもんじゃがわしも姉上に補習を受けてもらっておるからの』

『秀吉、とりあえず自分の口調で話すのはやめておけ。今は俺たちだけだから良いが後で面倒になるのも嫌だろ?』

「……あの馬鹿、何でいきなりバレてるのよ!入れ替わった意味がないじゃない!……それにしても、誰が気づいたのかしら?今聞こえたのは愛子と芳樹の声ね、ってことは後は明久が確実として代表がいるかどうかね」

『それにしてもさ、本当にそっくりだよね弟君と優子って。全く気づかなかったよ』

『そう?、少しは違和感あったよ。確証まではなかったけどさ、……こう、可愛らしさが出てたし』

『アキ、優子が今の言葉聞いたらぶち切れるぞ』
芳樹の言う通りね、とりあえず明久は後で潰すわ

『い、今の間違えたというか言葉のあやと言っか……何というか優子の場合にはさ、可愛らしいじゃなくて綺麗とか眉目秀丽とかそういう言葉の方がぴったり来るんだよね。』

前言撤回、そういう意味で言ったのなら見逃すわ。というかアタシと秀吉のことばっか言ってたら愛子がやきもち焼くんじゃない?

『珍しいの、眉目秀丽なんて言葉が明久の口から出るなど』

『だからお前はその口調を止めろって、……おい秀吉、スカ―トめくれてるぞ』

『目があああああああ!?!?』

『ふんっ、だ。』

・・・なんだかその場で起きてることが良く分かるわ。スカートがめくれたって言う言葉に明久が反応して愛子が目潰ししたのね。っていうか秀吉は何やってるのよ！！ スカートのときどれだけ気を配っているかが分かってないんだから！

『一応スパッツをはいているから大丈夫なんだけどね・・・』

『全く・・・、俺の好きな優子ならそんなへましないっての』

・・・え？
・・・
ちよ、ちよっと待って。秀吉の言ったことは置いとくとして・・・

そんな声が後ると耳から聞こえるのなんて今のアタシにはどうでも良かった

第八十七話、余談その61？ 変装と合唱とMK5（マジで恋する5秒前）

次の更新は、今週中に出来ればします。

感想お待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3115r/>

バカとAクラスと試験召喚

2011年10月3日14時31分発行